

日本国召喚×テラフォーマーズ

BOMBデライオン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「全く見た事のないものと出会う時、人間は人間ではいられない。」

タイトルの通り、日本国召喚の世界にテラフォーマーズの要素をぶち込みました。「人為変態」の掛け声と共に、自衛隊員が様々な国の軍をボコボコにする二次創作です。本作品は基本的に原作通りに進む予定なので、自衛隊が単純にパワーアップしたと考えてください。

※原作の雰囲気似るように努力します。

※Gは出てきません（その予定）。

※変身後の身体能力はテラフォーマーズの原作に依存します。

※好評であれば作者の執筆速度も上がります（多分）。

※（追記）諸事情により「第52話」とある情報局員の現実逃避」の内容を大幅に変更しました。変更後の話はグラ・バルカス帝国の今後に大きく関わって来るため、御手数ですが読む事をおすすめします。

目次

詳細説明

裏設定：日本国に関して

1

ロデニウス大陸編

1話：接触Ⅰ

6

2話：接触Ⅱ

13

3話：動乱前夜

22

4話：ロデニウス沖大海戦Ⅰ

26

5話：ロデニウス沖大海戦Ⅱ

36

6話：ロデニウス沖大海戦後

43

7話：エルフ疎開民救出作戦

48

8話：エジエイ攻防戦

56

9話：ギム本陣の凶報

63

10話：王都ジン・ハーク上空制圧戦

70

11話：ロウリア王捕獲作戦Ⅰ

80

12話：ロウリア王捕獲作戦Ⅱ

87

13話：ロウリア王捕獲作戦Ⅲ

96

パーパルディア皇国編Ⅰ

14話：更なる動乱の幕開け

103

15話：フェン沖海戦

113

16話：とある外務局員の憂鬱／亡国の王女Ⅰ

119

17話：亡国の王女Ⅱ

127

辺境の魔王編

18話：魔王復活

133

19話：魔王の側近マラストラス

141

20話：ミナイサ地区生存者救出作戦

149

21話：知的害獣『魔王』討伐戦

159

パーパルディア皇国編Ⅱ

22話：諜報員達の憂鬱

169

23話：安寧の瓦解

177

24話：ニシノミヤコ非戦闘員退避作戦Ⅰ

184

25話：ニシノミヤコ非戦闘員退避作戦Ⅱ

191

26話：我が上の星は見えぬ

197

27話：アルタラス王国再独立支援作戦

205

28話：過ちては改むるに憚ること勿れ

212

29話：皇国海軍殲滅作戦

218

30話：エストシラント北側基地懐柔作戦

227

31話：窮鼠リヴァイアサンを噛む

235

32話：デユロ工場地帯爆撃作戦

241

33話：鳥取砂丘非正規上陸阻止戦

249

34話：四面日本歌

259

35話：皇都制圧作戦

264

36話：悪役の末路

273

先進11ヶ国会議編

37話：列強の使者達

279

38話：先進11ヶ国会議

287

39話：最終手段の画策

294

40話：フオーク海峡海戦Ⅰ

301

41話：フオーク海峡海戦Ⅱ

309

42話：フオーク海峡海戦Ⅲ

318

| | |
|----------------------|-----|
| 43話：フオーク海峡海戦Ⅳ | 324 |
| 44話：フオーク海峡海戦Ⅴ | 331 |
| 45話：フオーク海峡海戦Ⅵ | 337 |
| 46話：フオーク海峡海戦Ⅶ | 345 |
| 47話：戦勝国の戦後処理 | 355 |
| グラ・バルカス帝国編Ⅰ | |
| 48話：敗戦国の戦後処理 | 363 |
| 49話：旧太平洋武力衝突事件 | 369 |
| 50話：シエリアの訪日記録 | 377 |
| 51話：日本国緊急閣僚会議 | 382 |
| 52話：小さくて大きな「歴史のif」 | 387 |
| 53話：バルチスタ沖大海戦 | 399 |
| 54話：ムー国オタハイト防衛戦 | 404 |
| 55話：日本国マイカル沖防衛戦 | 411 |
| 56話：伝播する恐怖 | 418 |
| 57話：迫り来るは戦火の足音 | 425 |
| 58話：民間船舶の防人 | 435 |
| 59話：終わりの始まり | 443 |
| 60話：地獄の釜が蓋を開く | 450 |
| 61話：絶対防衛線アルⅠ | 454 |
| 62話：絶対防衛線アルⅡ | 463 |
| 63話：絶対防衛線アルⅢ | 470 |
| 64話：絶対防衛線アルⅣ | 480 |
| 65話：馬鹿皇太子 棺桶に片足を突っ込む | 490 |
| 66話：馬鹿皇太子 土に帰す | 497 |

各国の報告書

【ムー国】最重要友好国である日本国についての簡潔な報告書

506

【神聖ミリシアル帝国】新興国日本について

513

【グラ・バルカス帝国】最大警戒対象国日本

516

グラ・バルカス帝国編Ⅱ

67話：最悪の序章

520

詳細説明

裏設定：日本国に関して

この世界線の日本国は『テラフォーマーズ』の世界から異世界に転移して来ました。

『テラフォーマーズ』を知らない人のためにザッと説明すると、火星のテラフォーマーミング用に放たれたことで人型へと進化したゴキブリ「テラフォーマー」と、それを駆除するために特殊な手術を施された人間との戦いを描いた作品です。（[wiki参照](#)）

作中の「人為変態」や「バグズ手術」モザイクオーガン・オペレーション「M・O・手術」なる単語はこちらから来ています。

そして『日本国召喚』を知らない人（多分いないと思うけど）のために説明すると、この作品は我々が住んでいる日本国がそのまま異世界に転移する作品です。

そして私が書いたこの作品は『日本国召喚』と『テラフォーマーズ』のクロスオーバー作品、二次創作となっています。

まず主役である日本国の説明から入る前に、日本国が存在していた世界を説明しましょう。

この世界線の日本国がいた地球は『テラフォーマーズ』の原作の数十年後、西暦2650年頃〜2700頃年となっています。

これは『テラフォーマーズ』におけるゴチャゴチャ（火星での戦いとか、地球での戦いとか）が全て解決し、その本編に登場する技術「バグズ手術」「M・O・手術」「キマイラブラッド手術」とかが改良され、ほぼ一般的に普及されている時代という設定です。

一般的に普及されているとは、どういうことかを説明します。

まず一般的にと言っても、誰しもがこの手術を受けられる訳ではありません。火星での戦利品の^{エイリアンエンジンウィルス}おかげで手術の成功率はほぼ100%

となりましたが、この手術は非常に高価なのです。

特にこの手術に必要である「テラフォーマーの内臓」を得るには、テラフォーマー（略してゴキブリ）のクローンを嚴重な研究施設の中で孵化させ、ただでさえ危険なゴキブリをある程度成長するまで管理してから採取する必要があるためです。

そのためこの手術は非常にコストが高いのですが、一部の国では、この手術を「治療」か「職業上の理由」という目的で受けるのならば、国から莫大な保険金が出されます。（当然誓約もありますが、詳細は後ほど）

そのため手術を受けられるのは必然的に「軍人」「警察官」「消防士」「その他の一部の職業の者」もしくは、「従来の医療では完治が難しい怪我や病気に侵された者」か、「金持ち」「裏で違法手術を受ける者」に限られます。

ぶつちやけ『テラフォーマーズ』の原作と変わらないですね。

まあ対立はあるものの、平和な時代になったと考えてください。

そして次に主役である日本国の説明をしましょう。

大前提として、この世界線の日本国も「火星生物の襲撃」を受けています。こちらへんは原作と同じです。

そして上記のように、「手術」の普及率も海外とほぼ同じです。むしろ海外より少しだけ誓約が厳しいかもしれませんが。

ちなみに自衛隊や海上保安庁の連中は「職業上の理由」、33話の「タコじいさん」は「従来の医療では完治が難しい怪我や病気に侵された者」となります。

でもまあよく考えたら、数百年経ってればあの人の病気も治りそうな気がするけどね。

あと、新世界に転移した日本国では「新世界技術流出防止法」により、外国人（旧世界の外国人はこれに含めない）は手術を受けられません。

次に自衛隊の説明です。

『日本国召喚』の主役と言っても過言ではない自衛隊も、当然ながらその強さ（技術力？）を『テラフォーマーズ』の年代に合わせているため、現実には存在しない、存在し得ない架空兵器が大量に存在します。（ほとんど作者のオリジナルです）

特にSFチック、ファンタジーチックなのがこの作品の目玉でもある「バグズ手術」「M・O・手術」系統であり、『テラフォーマーズ』のように各国の軍隊の人間は「手術」を受けて大幅に強化されています。彼らは主に「被手術兵」と呼ばれます。

（自衛隊はともかく、海上保安庁などは兵士ではないため、手術を受けた一般人として扱われます）

当然ながら「被手術兵」に従来の戦略、戦術は通用しません。

従来の戦車を素手で破壊する『蟻』や、従来のどんな戦闘機にも無敗の『蜻蛉』や『鳥類』。銃弾よりも速く戦う『蜘蛛』や、潜水艦に肉薄できる『水性生物類』、はては『不死身の生物』とかが相手だと生身の人間は勝ち目がありません。

そこで目には目を、歯には歯を、「被手術兵」には「被手術兵」を、という精神で出来上がったのがこの作品の自衛隊です。

というより、地球の先進国と呼ばれる国の軍隊はほとんど「被手術兵」を採用しています（という設定）。

だって：ねえ？ 素手で戦車を壊す奴を相手に生身の人間がどうやって戦えば良いんだよ？

俺は歩兵携行用小型核兵器を持ってても戦いたくないですね。

話がズレましたが、この作品に出てくる架空兵器は、本当に「被手術兵」や「テラフォーマー」がいたら、こんな武器、兵器が作られるだろうなと思って登場させました。

護衛艦にレーザーやら『電子レンジもどき』やらが搭載されているのは、大量のドローンやミサイルや、それに混じって移乗攻撃を仕掛けてくる「被手術兵」を撃ち落とすため。

AI搭載の戦闘ドローンの武装がレーザー砲なのは、機関銃では『トンボ』に避けられるから。

ミサイルの弾頭が『電子レンジもどき』なのは「テラフォーマー」や

「被手術兵」や「電子機器まみれのミサイルやドローン」を落とすため。戦闘機が有人、無人で別けられていて、無人の方が数が多い（そういう設定）のは、その方が高性能で安いのが大量に作れるから。

人工衛星？ そいつは知らん。

強いて言うならロマンだ。

とまあこんな感じに、私が想像しうるだけの架空兵器を登場させています。

ぶっちゃけ最近はやけにネタ切れ感がハンパないですが。

あー…まあ、これからムー大陸編で陸自が多く出るから、専用武器みたいなのも登場させるかも？

まあ期待してください。

ここから下はQ & A方式で説明（こっちの方がやりやすい）

Q. 日本国の国防はどうなっている？

A. 領海、領空に大量のドローンを哨戒させています。特に専守防衛を謳う日本国はその哨戒機の量や密度が高く、これを突破するには国レベルでのハッキング等が必要となるため、民間レベルでの密輸入国は不可能となっております。

そのため原作のようにワイバーンがヤクザの事務所を焼くなんて事態は発生していません。

Q. 憲法はどうなっている？

A. テラフォーマーの存在があるため、ある程度は変わっています。少なくとも自衛隊はリアルより動けます。

Q. 新世界生物をベースに手術とかはしないの？

A. 出来れば地球の生物だけで戦いたいと言う作者のこだわりと、新世界生物のほとんどは魔法を行使して生きているため魔力を持たない日本人が手術をしてその能力を万全に発揮出来ないという理

由でしません。

Q. 『テラフォーマーズ』の登場人物は出てこないの？

A. あくまで『日本国召喚』がメインであるため、出すつもりはありません。ゴキブリは…多分出てきません

Q. 日本にニュートン一族の者はいる？

A. 登場しないだけで、存在すると思われれます。

Q. S A Tや海上保安庁の人員は手術を受けているのに、最精鋭とも言える第一空挺団がなぜ受けないのはなぜ？

A. 手術を受けてしまったては、空挺団の一員に留めてしまったてはもったいないから（費用だとかの問題も含めて）です。確かに彼らは人間の中では最精鋭ですが、あくまで「生身の人間」との戦闘を主任務としているので、戦闘力は他の部隊のほうが強かったりします。

Q. 日本に諜報部隊とかあるの？

A. 分かりませんが、おそらく存在はしているでしょう。というか公にしちゃったら売国奴がうるさいでしょうし。

まだまだ質問は受け付けています。

ロデニウス大陸編

1話：接触I

中央暦1639年1月24日午前8時――

クワ・トイネ公国軍第六飛龍隊

その日は快晴な空が広がっていた。ワイバーンと呼ばれる飛龍を操り、竜騎士であるマールパティマは、公国北東方向の警戒任務に就いていた。

公国北東方向には国や陸地はなく、東に行っても海が広がるばかりであり、幾多の冒険者が東方向へ新天地を求めて出港していったが今まで帰ってきた者はいない。

そんな海域でも哨戒する必要がある。それは最近隣国であるロウリア王国と緊張状態が続いているため、軍船による迂回、奇襲をされるかもしれないからだ。

「――!?!」

しばらく飛んでいると、彼は何かを見つけた。

「なんだ?! あれは――」

正面から見た形状はワイバーンのようだが、どう見たって小さすぎる。

粒のように見えた飛行物体は、どんどんこちらに近付いていた。

彼はすぐさま通信用魔法具を取り出し、司令部に報告をする。

「我、未確認騎を確認。これより要撃し、確認を行う。現在地……」

未確認騎と高度差はほとんど無く、彼は一度すれ違ってから距離を詰めるつもりだった。

「……………」

お互いの距離はさらに縮み、最初は小さな粒のように見えた飛行物体の大きさは、違和感と共にますます大きくなる。

しかもワイバーンより小さいはずのそれは、とんでもない速度で飛行、接近しているのだった。

「…速い！」

彼が見た限りでは、未確認騎は彼の知るどのワイバーンよりも速かった。ワイバーンよりも速い飛行物体となると第3文明圏のワイバーンロードくらいしか思いつかず、彼は文明圏の強国（自国より強いという意味で）による侵略を警戒する。

だが、とてもではないが文明圏内国がこんな辺境にある田舎国家を侵略するとは思えなかった。

何より、あの飛行物体は最小のワイバーンと比較しても、あまりにも小さすぎる！

未知との遭遇に、彼は真昼間だと言うのにガタガタと震え上がった。

鬼が出るか蛇が出るか。

それとも、それ以上にヤバイやつが出てくるか。

そしていよいよ、未確認騎とすれ違った。

「——ッ?!?!」

その者の顔を見た時、彼は驚愕と絶望の入り混じった表情を浮かべた。

「人…間…?!?!」

空の青に紛れるような模様の服を着ており、胴体部分は分からなかったが、頭部と脚部は完全に人間のものだった。

少なくとも、人間と同じ形をしていた。

だが彼女には翼が生えていた！

彼は自らの脳をフル回転させて全ての可能性を模索し、結論が出る前に通信用魔法具に叫んだ。

「司令部!!… 司令部ッ!!… 我、光翼人を確認！ 繰り返す！ 我、光翼人を確認!!」

これが彼が出した結論であった。

伝承に聞いていた姿と違い、彼女の翼は光り輝いておらず、その見た目はどちらかと言えばアニムンリール皇国の有翼人のようだったが、「空を飛ぶほどの魔力を持つのなら、それはもう光翼人だ！」と彼の常識がそう結論づけたのだ。

その1報は司令部どころか、周辺国の全てに蜂の巣をつついたような騒ぎを引き起こさせ、後の歴史書にも載るだろう大パニックを引き起こした。

そして、故郷から遠く離れた洋上でマールパティマは絶望した。それと同時に悲しくもあつた。

軍人をやっているのだから、祖国を守れるのならば喜んで死ぬ。だが、戦う相手が『古の魔法帝国』など聞いていない！

「ごめんな相棒、俺の不幸に付き合わせてしまつて…」

ポンポンと相棒の背中を撫で、彼は手綱をグツと握りしめた。

「どうせ死ぬなら…一矢報いてやる!!」

「あゝ…」

「ツ!!」

彼は絶句した。

例の光翼人が話しかけてきたのだ！ しかも相棒の隣を並行して！

「えええつ、なななんでしょうか…」

決めゼリフを誰かに聞かれた時のような恥ずかしさと、他種族を人として見ていないはずの光翼人が話しかけてきた驚きが混ざり、彼は情けない返事をしてしまった。

「あゝ！ 日本語が通じるんですね！ 良かったあゝ！」

「あはは…」

彼は笑ふことしか出来なかった。と言うより、あまりの衝撃に思考が完全に停止していたのだ。

目の前で飛ぶ彼女は光翼人とは思えないほどフレンドリーな顔で笑うため、彼の緊張はほぐれ、脳は徐々に息を吹き返していった。

「あ…！ 司令部！ 我、例の光翼人とコンタクトす！ 司令部応答せよ！」

騒ぎが起こっているのか、返信は少し経ってからだった。

『こちら司令部！ 光翼人とコンタクトとはどういう事か？ 説明せよ』

司令部が困惑するのも無理はなかった。当の本人ですら困惑して

いるのだから。

この世界の常識では、光翼人相手では話し合いの機会もなく攻撃されたって不思議ではなかったのだ。

「そのまんまだ！ ていうか、よく見たら光翼人というより有翼人に近い！ 人間で言う腕の部分が翼になっていて、腕に該当する器官が見られない！」

司令部は再び困惑する。

『…少し待て』

通信はそこで一旦中断された。

「あのー…自己紹介よろしいですか？」

「あッ?! はい！ どうぞー！」

ん？ 自己紹介？

光翼人（仮にこう呼称する）が人間の俺に？

「紹介が遅れました！ 私、日本国海上自衛隊の島上^{しまがみ} 夏燕子^{かえこ}と申します！ 好きな食べ物はラーメンです！ 以後お見知り置きを！」

彼女は相棒のワイバーンと同じ速度で飛行しながら片方の翼でビシツと敬礼し、少し失速した。

そして失速した彼女は相棒の後方でパタパタと羽ばたいてから速度を取り戻し、再び隣で並行する。

「は、はあ…：自分はクワ・トイネ公国第6飛竜隊所属の竜騎士マールパティマです」

「マールパティマさんですか！ よろしくお願いしますー！」

一瞬彼女のことを可愛いと思ってしまうが、それ以上に訳が分からなかった。

まさか自分が光翼人と交流（？）するなんて…。

「…あの、カエコさんはどこからいらしたのです？」

まずは情報収集が先だった。

未確認騎（？）と接触してしまった以上、自分が相手の目的や、敵意の有無を確認しなければならなかったのだ。

「はい！ 私は日本という国から来まし…あ、はい！ 了解です！ その旨を伝えますー！」

マールパティマは彼女が誰と話しているのか理解出来なかつたが、風で揺れる髪から垣間見えた彼女の耳に、小型の魔信機らしき物を発見し、通信を行っているのだろうと判断する。

相手は恐らく彼女の上官か、司令部だろう。

そして彼女は続けた。

「これは私の国の外交部の言葉になります。どうか貴国の外交部に伝えて下さい、時間が無いので」

「しよ…承知した！ 司令部！ 例の光翼人は日本国という国から来たとのこと！ これから彼の国の外交部の声明文を伝えるとのことです！」

『了解、一字一句聞き漏らすな』

その時の司令部の緊張感は凄まじいものだったらしい。

自分達が歴史の当事者になるかもしれないという期待、そして不安が入り交じり、耳が痛くなるほどの静寂さに耐えきれず、気絶した者もいたとマールパティマは後から聞いたのだった。

『司令部、こちらマールパティマ。これより日本国の声明文を読み上げる』

彼は続けた。

『日本国政府は貴国と交流を持ちたいと考えています。状況によつては、国交締結まで視野に入れております。つきましては3日後、この海域に白地に赤丸の旗を掲げた船を派遣する』…との事です！ 相手国に敵意無し！』

その時の極度の緊張から解放された司令部の騒ぎようは誰にも想像出来ないだろう。

そんな事はつゆ知らず、2人は同級生のような距離感で別れを告げた。

「ではマールパティマさん、ごきげんよう！」

「ごっつ…！ ごきげんよう！」

そして彼女はスィーと飛び去り、どこまでも続く青空へと消えて行った。

「……………何だったんだ今のは…」

後に彼は、まるで夢を見ているようだったと話し、極度の緊張による疲労からか、2日ほど自室に引きこもったという。

3日後――

クワ・トイネ公国 経済都市マイハーク

ここから少し離れた港に駐屯するクワ・トイネ公国海軍第2艦隊はにわかに騒々しくなっていた。その原因は、言うまでもなく3日前の「光翼人騒動」である。

隣国どころか強大な列強が支配する文明圏をも騒がした今回の事件は、詳細が伝わらずに誤報という情報だけが広まり、各国からの興味は瞬時にして失われたが、この御時世なだけに、公国にとっては一大事件だった。

すなわち、ロウリア王国の脅威に対抗しうる国が現れたのである。知つての通り、ロデニウス大陸には3つの国がある。

肥沃な土地を有し、広大な穀倉地帯を持つ『クワ・トイネ公国』、砂漠地帯が広がり、作物の育たない貧しい国『クイラ王国』、人間のみの国であつて、エルフ、ドワーフ、獣人などを迫害し続け、ロデニウス統一を目論む『ロウリア王国』。

クイラ王国とクワ・トイネ公国は両国ともに住民の3分の1をエルフ、ドワーフ、獣人などの亜人が占めている。

そのため亜人の殲滅を謳うロウリアとは政策的にどうやっても友好を保てず、両国はお互いに助け合い、ロウリア王国の脅威に対抗してきたのであつた。

しかし最近のロウリア王国の軍拡は目を見張るものがあり、クワ・トイネ公国からすれば弱かろうが1国でも多くの味方が欲しかった。そんな時に降って湧いた「光翼人のような者」との接触。

最初は古の魔法帝国が復活したと絶望したが、どうやらそうでは無いらしい。なら、この機会を逃す訳にはいかない。

この国の政府は強かであった。

「カナタ首相！ 第2艦隊のノウカ司令より入電です！」

「…読み上げてください」

『日本国を名乗る大型船を確認。同船には彼の国の外務担当者も乗っており、国交締結を視野に入れた会談を希望している』とのことです！」

「やはり来ましたね。会談の希望を受け入れましょう」

「…決断するのがあまりにも速すぎます。相手は『古の魔法帝国』かもしれないんですよ。」

「我が国には悩む時間すら残されていないのです。それに話を聞く限り、彼らは礼節を弁えています」

カナタはスーツと息を吸い、次の指示を出す。

「日本国の外交官をここに招致して下さい。それと外務卿の招集も」

その日、世界の運命を大きく変える会談が行われた。

2話：接触Ⅱ

クワ・トイネ公国と日本国の会談から遡ること数時間前——
マイハーク防衛司令室

「ノウカ司令は何だと思えますか？ 例の光翼人の正体」

若手の幹部が司令に問う。

「うむ：俺は見えていないから言いようがないな。そもそも接触した事自体が嘘なのかもしれないのだから」

原作の世界線では「P-3C」という大型の哨戒機をマールパティマだけでなく第6飛竜隊の全員、そしてマイハークの住民や騎士団が目撃しているため、与太話ではなく真実として周知されていたが、この世界線ではそうにも行かなかった。

「その接触した竜騎士が、とても会話を出来そうにない精神状態ですからね…。一部では彼が実績欲しさに虚偽の報告をしたとも…」

「そもそも我が国より東に国はないし、北東方向には群島と集落があったはずだが、有翼人の類は確認されていないからな」

ノウカは自分の考えを整理するように、推論を続ける。

「本当に光翼人なら国交締結などするはずがないし、俺は嘘だと考えている」

「ですよね…」

経験の浅い若手幹部も、この時ばかりは司令と同意見だった。

「ところで例の竜騎士、マールパティマの処遇はどうするつもりですか？」

彼が問う。

するとノウカ司令はバツが悪そうにお茶を濁した。

「…それは真実かどうかを見極めてからで良いだろう」

実際に軍内部でマールパティマは「狼少年」だの「世界を揺るがした詐欺師」だのさんざんな言われようであり、良くて降格、悪くて除隊等の処置を受けるはずだった。

それでも彼が処罰を受けていないのは、ノウカ司令の勘にも似た何

かがそれを許さなかったからである。

ノウカ司令は何を考えているんだ…？

若手幹部は不安を隠しきれずに肩を落とす。

次の瞬間、その不安に呼応したように通信員が金切り声をあげた。

「司令！ 司令！！」

「何事だ？」

「軍船ピーマから報告！ 『白地に赤丸の旗を掲げた大型船を発見。現在地、マイハーク港から北へ60km。これより接触をはかる』とのことです！」

「やはり来たか…日本国…！」

ノウカ司令はどこか嬉しそうに武者震いをする。

若手幹部はさつきと言っている事が矛盾している司令に怪訝な面持ちになった。

「軍船ピーマと言えばミドリ船長の船か？ 相手は何者か分からない以上、不用意に刺激したくない。接触にあたっては受傷事故防止に十分配慮するように指示せよ」

「了解」

指示は通信員から軍船ピーマへ、適切に伝達された。

クワ・トイネ公国海軍第2艦隊所属の軍船ピーマは、帆をいっぱい張り、船から突き出たオールを太鼓の音に合わせて漕ぎ、謎の大型船へと向かって行った。

報告によれば相手の目的は外交だが、付近にある全ての軍船は戦闘態勢へと移行している。

それは相手が「光翼人」の可能性があり、場合によっては即交戦という事態も大いに有り得たからだ。

なぜ私がこんな貧乏くじを…！

軍船ピーマの船長ミドリは心の中で悪態をついた。

相手がロウリア王国海軍なら、ある程度は立ち回れるかもしれない

い。

だが相手が光翼人であれば、どうやっても勝ち目はない。

しかも――

「副船長、あれは船…か？」

「私には小島が浮いているようにしか見えません…」

目標との距離が正しければ、その船の全長は200mを優に超えている。

ミドリだけでなく、船に乗る全員があまりの大きさに絶句し、顔の色を失った。

「ツ…?! ミドリ船長！ 羽虫が飛んできますツ!!」

突然、見張り台の監視員が叫ぶ。

ミドリと副船長は望遠鏡を覗き、監視員の報告にあつた例の物体を確認した。

「副船長、何だねあれは？」

「私に聞かないでください。あの大型船から飛来したとしか答えられません…」

「それは私も分かっている」

2人は自分でも驚くほど冷静になり、しばらく観察を続ける。

確かに、見れば見るほど羽虫にしか見えなかった。

「全乗員に告ぐ。攻撃を受けない限り、あの羽虫に攻撃を加えるな。恐らくは日本国が使役する魔獣であろう」

船長ミドリはひどく冷静であった。

何か未知の「物」を見たのは確かなのだが、口から感想が出てこなかったのだ。

「例の竜騎士も同じ思いをしたのだろうか…」

彼はマールパティマを「稀代の嘘吐き」と野次ったことを心の中で謝罪する。

そして、険しい顔を崩さずに乗組員に伝えた。

「これより超大型船と接触する。諸君は私の指示、もしくは攻撃を受けない限り、決してこちらから攻撃してはならない。また、相手の正体は不明だが、もしかすると新興国かもしれん。国と国とのやり取り

になるため、不用意に高圧的な態度をとることを禁ずる。わかったな」

「はい!!」

船長ミドリは超大型船の乗組員の誘導に従い、同船に移った。

日本国海上自衛隊 護衛艦『いずも』

「艦長、見てください。タイムスリップしたような気分ですよ」

薄暗いCICの中で、偵察用に飛ばしたドローンからの映像が画面に映る。

画面の帆船は、軍船ピーマであった。

「…我々は本当に異世界に来てしまったのだな…」

突然他国との通信が途絶し、人工衛星の信号すら探知不能となり、まったく別の星に移ってしまったことを知った日本国政府は、海上自衛隊、海上保安庁の無人、有人哨戒機、及び長距離の飛行が可能な手術ベースの自衛隊員を各方面に飛ばしていた。

日本国は一国では生きていけない。早急に文明のある国々と国交を結び、食料を確保することが絶対に必要であると判断した日本国政府の行動は、かつてないほど迅速であった。

そして各方面に飛ばした自衛隊員のうちの1人が、謎の生物に搭乗する人間と接触、コンタクトを図り、政府の声明文を伝えることに成功。

国交締結の可能性を見出すため、海上自衛隊最大の護衛艦『いずも』に外交官を乗せて派遣することに決めた。

軍備に疎い者が見たなら、一見して空母に見えるこの艦。

名目上は護衛艦であるが、その実質はやはり空母であった。

何が起こるか分からない異世界開拓にこの艦が選定されたのは、有人のヘリコプターや戦闘機だけでなく、様々な種類、大きさの無人機、そして多人数を収容できると言った、即応力・汎用性の高さが理由だ。

多人数を収容出来るという事は、手術済みの自衛隊員を多く乗せられるという強みでもある。

制空戦闘は戦闘機、無人機、飛行可能な者。

海中、海上の相手には無人哨戒機、無人攻撃機、水中戦闘が可能な者。

そして艦内に侵入した不審者の制圧には、手術を受けた戦闘員が対処する。

特に改造を施された人間の戦闘力は生身のそれとは一線を画すものがあり、被手術済みの人間の多さはそのまま組織の戦闘力に直結する。

この世界線に存在する地球の空母は、まさに洋上に浮かぶ要塞であつた。

「地球と同じであれば、あの船は矢の打ち合いの後、乗員同士の斬り合いによつて勝敗が決するのだろうか。原始的だが、我々と同じじゃないか」

「戦闘状態に突入した場合、隊員の心のケアが大変そうですね…」
何から心のケアをするのかと言うと、この場合はあまりにも一方的な戦いによつて起きる大虐殺の事を示す。

「おいおい滅多な事を言うんじゃないよ。我々は自衛隊だぞ？」

そう、我々は自衛隊である。

相手に敵意が無い限り、こちらから攻撃することはない。特に、この世界の構造がどうなっているのか全く不明の状況で、現地の人々を傷付ける訳にはいかない。

『いずも』は細心の注意を払つて減速し、舷梯を下ろす搭乗口を開いた。

「すごいな。歴史の教科書を見てみたいだ」

相手の装備を見た隊員が呟く。

その場にいる全隊員も同意見だった。

随伴艦がいなかったため、武器を持たない隊員達が誘導し、舷梯から現地人数人を招き入れる。

隊員達が現地人を『いずも』の甲板へと案内させ、甲板で待ってい

た外交官が彼らと話をすることになった。

ミドリは困惑していた。ここは本当に船の上だろうか、と。

騎馬戦が出来てしまうではないか…！

甲板に他に人はいないようだが、これほどの大きさの船であれば、乗組員は想像もつかぬほどいるのだろう。

仮に彼らのうちの誰かを斬ってしまったら、自分たちは生きては帰れない。

しかしこの場合、乗組員の数は関係なかった。

何故ならミドリの率いる船団の乗組員全員が武装して乗り込んでこようが、場合によっては数名の隊員でも対処出来るからである。

そして彼は、もう1つ間違いを犯している。

目の前にいる隊員達は体が硬すぎるため、ただの鉄剣では斬るどころか、傷をつけるのも困難だからだ。

『鱗船霊貝』

ウロココフネタママガイ

海底火山付近に生息する巻貝の1種。体表に硫化鉄を含んだ鱗を持つっており、鉄の鎧を持つ生物として注目された。

『鉄刀木身無貝』

タガヤサンミナシガイ

イモガイの1種。歯舌が特化した神経毒の毒腺が付いた鋸で他の動物を刺し、麻痺させて餌とする。この種の場合、その毒銛は連射可能。

『將軍海老』

シヨウグンエビ

ザリガニ類の酷似する。第1脚は強大で鋏をもち、各体節に多数の棘が列生する。

『沢蟹』

サワガニ

純淡水性のカニ。これ以上の説明は不要とする。

『源五郎』

ゲンゴロウ

鋭い嗅覚と遊泳力を持つ昆虫。特筆すべき戦闘力は無いが飛翔可能。甲殻類ほどの防御力は無くとも、甲虫類であるため、防刃性を持

つ服と組み合わせれば、刃物類に対する防御力は十分なものとなる。等など…。

ちなみに彼らは正規の戦闘員ではなく、戦闘支援要員であるため、実力は中の下ほどである。

それをミドリ船長が知る由はないが、ひとまず彼は勇気を振り絞り、口を開いた。

「私はクワ・トイネ公国第2艦隊所属、軍船ピーマ船長ミドリです。貴船の国籍と、航行目的を教えてください」

とは言ったものの、国籍と航行目的は予想通りだった。

「私は日本国外務省の田中と申します。我が国、日本国政府は、貴国と交流を持ちたいと考えています。状況によっては、国交締結まで視野に入れております。貴国の担当者にお取次ぎいただけると、幸いなのですが」

やはり事前の報告にあった通りだ、と彼は思う。

同時に、マールパティマに2度目の謝罪をした。

「分かりました。その旨を本国に伝えますので、しばらくお待ちください」

このようにして日本国とクワ・トイネ公国の2度目の接触は特に何事もなく終わる。

——はずだった！

「ところで、もし可能であれば貴国の光翼人に会わせては頂けないだろうか？」

当然、日本側の面々は困惑した。

光翼人という単語を知らないからだ。

「はて…光翼人とは何でしょうか？」

「知らないとは言わせませんよ。先日、我が国の竜騎士が接触した空を飛ぶ女性です」

竜騎士…？ ああ、報告にあったあれか。

となると、あいつだな…。

全員が顔を見合わせた。

「島上 夏燕子さんですね？ お呼びしましょうか？」

「おおー！ そうだ！ そのカエコとやらに会いたい！」

しばらくすると、例の人物が甲板に上がってきた。

短く切られた黒髪が特徴の、天真爛漫な女性だった。

「初めましてー！ 島上 夏燕子と申しますー！」

ビシツと敬礼をする彼女。

しかし、何かがおかしい。

「えっと…本当に同一人物なのだろうか？ 報告には腕がなく、代わりに翼があつたと聞いていたが…」

そう、彼女の手は普通の人間の手^{もの}だったのだ。

「ああ、その事ですね。隊長、変態許可を」

「許可する」

変態…？ 若い女性がムサイ男どもに囲まれた場でいったい何を
するつもりなのか。

ミドリはこれから起こることを直視して良いのかを迷う。

そして彼女が上着を脱いだ時は、本当に自分の想像通りのことが起きるのではないかと懸念した。

「…なんだねそれは？」

「変身薬の入ったアンプルです。鳥類型はこれなんですよ」

「はあ…？」

何から何までが分からない。しかし、目隠しをする必要は無さそう
だ。

彼女はミドリ船長から見たら異常に透き通った透明なガラス容器
内の薬液を飲み干し、こう呟いたのであった。

「人為変態…！」

『ツバメ
燕』

スズメ目ツバメ科ツバメ属に分類される鳥類。喉と額が赤く、腹は
白い。

翼が大きく、飛行に適した体型であり、人類がその形を真似た物に
ジェット機がある。

「なツ…?! なんだ?! 腕が…翼に…?!」

ミドリを含め、クワ・トイネ公国の人間達は目の前の出来事に腰を

抜かし、自らの目を疑った。

彼女が怪しい薬を飲んだと思ったら、彼女の腕が段々と鳥の翼のように変化していったのだ。

「よし、飛べ」

「了解！」

彼女が羽ばたくと強風が巻き起こり、ミドリ達が呆気に取られている間にも、彼女の姿は大空へと遠く消えて行く。

「彼女は獣人か?! それとも魔物か?!」

彼らの常識からすれば、彼女は獣人か魔物のどちらかだった。だが獣人にも空を飛ぶやつはいないし、あの娘が魔物のような感じはしない。

あまりの衝撃に腰を抜かし、歩けなくなったたミドリ達は隊員達によつて安全な場所へと運ばれた。

「さて…彼女が戻ってきますよ。最高時速で甲板を通過するよう伝えておりますので、衝撃に備えて下さい」

「へ？」

ビュゴオ!!!!

突如発生した強烈な陣風^{かぜ}。

目にも留まらない速度であつたが、ミドリの目にも黒い何かが通過するのだけは見えた。

「い、今のは…！」

基本的にサイズが大きい物ほど速く飛ぶ事になるため、僅か20cmで350km/hをはじき出すこの鳥が、人間大だったなら。

「…また速くなったな、あいつ」

その水平移動速度はあらゆる生物の中で――

最速である

後日、ミドリ船長含めその他の人間はこう語った。

「日本には魔人がいる」と。

3話：動乱前夜

日本という国と国交を結んでから、クワ・トイネ公国には歴史上、最も変化のあつただろう1ヶ月が経とうとしていた。

日本からの食料の買い付け量はとてつもない規模であつたが、そこは大地の神に祝福されたクワ・トイネ公国。家畜さえも上手い飯を食えるという国の食糧生産量は日本国の1億を越える人口すらも支えることが可能だつた。

そしてクイラ王国。

ここは元々作物の育たない貧しい国であつたが、日本国の調査によれば地下資源の宝庫らしく、日本の技術供与を受けて採掘を開始していた。

莫大な量の食料と、地下資源。これらを輸入する代わりに、日本はインフラを輸出する。

両国には都市間を結ぶ継ぎ目のない道路、そして鉄道と呼ばれる大規模運輸機能、さらに大規模な港湾施設が築かれようとしていた。

「うくん…日本ではこれでさえも800年も前の骨董品なのか…」

現地の技術者は唸りを上げて走る蒸気機関車を前に、ボヤいた。自分達だけでは800年かかろうと、これを造れる自信がなかったのだ。

「ですが、これで我が国の流通は各段に良くなりますよ。これからクワ・トイネは今までとは比較にならないくらいの発展を遂げるでしょうね」

一方で、経済部の人間は顔を輝かせた。

他にも日本から入ってくる便利な物は、第3文明圏の外に位置する両国の生活様式を根底から変えるようなものばかりであつたからだ。

「余らせていた資源と引き換えにするには十分すぎる対価ですね」

「…日本という国は明らかに3大文明圏を超えている。我が国の生活水準も文明圏内国以上になるかもしれないぞ」

次々と売れる商品、それと引き換えに入ってくるのは豊かさ。

クワ・トイネ公国とクイラ王国の住人は一気に親日ムードへと傾

き、日本もバブル期を越えると言われる好景気を迎え始めた。

「しかし…彼らが平和主義で助かりましたよ。彼らの技術で覇を唱えられたらと思うと…ゾツとしますね」

「そうだな。しかし、武器を輸出してくれないのは残念だ。彼らの武器があればロウリア王国軍も屁でもないのだがな」

「ああ、例の魔人化の武器ですかね？」

「そう、それだ」

日本の兵士は魔人化出来る。

とある軍船の船長が伝えたこの情報は、曲がり曲がって結果的に、魔人化の武器という誤情報となり、両国の人間に広まっていたのだった。

クワ・トイネ公国 日本大使館

クワ・トイネの朝は早い。

どれだけ生活が豊かになろうが、彼らは農家である。日の出と共に寝覚め、朝早くから外に出て作業をする。

それでも車や工場、航空機がないため、日本の都会では考えられないほど寝起きが良い。

「…今日は忙しくなりそうだ」

田中大使のそんな予言は、すぐに的中した。

職員が彼の部屋の扉をドンドンと叩き、寝るにはうってつけの静かな大使館がにわかに騒がしくなった。

「おはようございます。朝早くからどうしたのですか？」

「それが…クワ・トイネの外交担当者が、火急の要件があるとアポなしで訪ねてこられました」

それを聞いた田中は早急に洗面、着替えを済ませ、朝食も取らずに応接室の扉を開いた。

室内にはクワ・トイネ公国の外務局員のヤゴウが焦燥の顔で待つて

いた。やはり何かがあったのだろう。

「お久しぶりですヤゴウさん。火急の要件とは何でしょうか」

「田中殿、早朝の急な訪問、無礼をお許し下さい。お伝えすべき事態が発生いたしました」

なぜこうも自分の嫌な予感当たったのか、田中は自分で自分を呪いつつ、立ち上がって深々と頭を下げるヤゴウを制した。

「我が国の西側にロウリア王国があるのはすでにご存知かと思いません。情報を精査した結果、そのロウリア王国が我が国に侵略してくることがほぼ確実となりました」

「せ…戦争ですか?!」

田中は絶句した。戦闘が始まり、クワ・トイネからの輸入が途絶えた場合、1年以内に何百万人もの餓死者が出る恐れがあるのだ。

ロウリア王国はロデニウス大陸では最大の武力を持っていることを日本は事前に知っている。

そして、もしロウリア王国とクワ・トイネ、クイラ王国が戦争になった場合、2国が勝つのは不可能だとも知っていた。

「援軍があると助かるのですが…」

田中の顔を窺うように、ヤゴウはちらりと上目で見上げた。

その脳裏には、日本国に使節団として派遣されたときに見た、大地を掛ける鉄の象、大空を飛翔する鉄竜の姿が浮かんでいたのだった。

日本国の援軍さえ来てくれれば、この戦いで国が消滅することを避けられると判断したのである。

「残念ながら、軍事的支援は…」

田中は齒痒い思いをしながら、最も言いたくない言葉を捻り出した。

「——出来ませんッ!!」

もちろん、ヤゴウは訪日した際に憲法九条の存在を聞いている。ダメ元で尋ねたものの、彼は分かっているにしてもガツクリと項垂れた。

「では残念ですが、食料輸出は困難になるでしょう」

憲法を守って万単位の餓死者を出すか、憲法を『超拡大解釈』して、国民及び友好国を救うのか。

日本大使館への食料輸出に関する勧告後、日本国政府は3週間という異例のスピードで、約700年前の大戦後初の海外派兵を決定することとなった。

4話：ロデニウス沖大海戦I

中央歴1639年4月22日――

日本国 東京 国会議事堂

「いったい自衛隊は何をしていたのでしょうか？ 総理、詳しい説明をしてください」

相手に怒りの感情を憶えさせるような口調で、野党議員が問う。

いつも自衛隊が何かをする度に尽く糾弾していた彼らだが、何もしなくとも非難する彼らに、視聴者は違和感を憶えた。

事の発端は10日前、新世界における数少ない日本の友好国、クワ・トイネ公国西部に位置するギムの町がロウリア王国の侵略を受けて陥落した。

そこで行われた一般市民に対する略奪、強姦殺人など、ありとあらゆる暴行はたちまち日本国民の知るところとなっている。

「我が国は平和を愛する国家です。我々はクワ・トイネ公国の都市ギムで発生した武装勢力による非人道的な行為を、とても見過ごすことはできません」

「総理、返答になっていませんッ！」

野党議員が首相の言葉を遮るように発言する。

首相はそれを意に介さず、続けた。

「そのため、クワ・トイネ政府からの要望があれば、我が国はクワ・トイネ公国に対し、武装勢力排除のための自衛隊を派遣する用意があります」

「自衛隊を外国に派遣するのですかッ?! それは違憲ではありませんか?!」

…視聴者達はそつとチャンネルを変えた。

一方こちらは、日本の国会とは打って変わった様子のクワ・トイネの政治部会。

ギムの町が敵の手に落ち、しかも町の住人のほとんどが虐殺されるという大事件。政治部会はこれまでになく重苦しい雰囲気に含まれていた。

「現状を報告してください」

首相カナタの命令に、軍務卿は弱々しく答える。

「はっ：現在ギムの町はロウリア王国の勢力圏となっています。先遣隊だけで3万の兵士がおり、諜報部によると作戦兵力は50万に達する模様です」

他にも第3文明圏の覇者、パールディア皇国が秘密裏に軍事支援を出しているという未確認情報もあり、ワイバーンの数が桁違いに多いという現状も付け加えた。

絶句。

どうやつても勝てない。

「また先頃、4000隻以上の艦隊が港を出港したとの報告が入りました」

再び一同は絶句する。

ロウリア王国軍はクワ・トイネ公国の予備兵力も入れた総兵力の10倍もの兵力を有しているのだ。

「首相、よろしいですか?」

すると外務卿が手を挙げた。

「実は政治部会が始まる直前に日本大使館から連絡がありましたて…」

「内容は何でしょうか?」

「はい、簡潔に申しますと『貴国からの要望があれば、日本国政府は武装勢力排除のための自衛隊を派遣する用意がある』とのことですよ」

「つまりは援軍ということですね?」

「そうなります」

絶望の淵に追いやられた彼らに、静かに朝日が昇ろうとしていた。

「よし! ではすぐに日本国政府に武装勢力排除のための要望を出し

てくださいい！」

「はっ！ 了解しました！」

「いい景色だ。美しい」

美しい帆船が帆をいっぱいに広げて進む。その数4400隻。

大量の水夫と揚陸部隊を乗せ、ロウリア王国東方征伐海軍はマイハークへと向かっていった。

見渡す限り、船ばかり。いや、海が見えないと言ったほうが良いなと感想を漏らしたのはこの軍団の海将シャークンである。

「…なんだあれは？ 小島か？」

ふと彼は、水平線に浮かぶ灰色の何かを見つけた。

「海将！ 白地に日の丸の旗を確認しました！ 恐らく日…」

『こちらは日本国海上自衛隊です。貴船はクワ・トイネ公国の領海を侵犯している。直ちに回頭し、引き返しなさい。繰り返す——』

突如、爆音のように大きい声が鳴り響き、部下の言葉は遮られる。

小島と思われた船は警告を発しながら、すさまじい速度で艦隊最前列の帆船に接近し、進路を遮るように航行した。

『ただちに回頭して引き返せ！ さもなくば攻撃する！』

大音量に怖気づき、何人かの水夫はへなへなと座り込んだ。

海将シャークンも少しは緊張したが、いくら大きかろうと、相手はたったの1隻。対して、こちらは4400隻もいる。

負けることなど、絶対に有り得ない。

「火矢、大型弩弓^{バリスタ}を用意しろ！ 距離200で一斉射だ！」

相手がどれだけ大きかろうが、この量の火矢を受けて無事で済むはずがない。シャークンは勝ちを確信する。

そして、敵船との距離が200mを切った。

「放てえい!!」

軍船から一斉に火矢が放たれる。太陽の光すらも遮りそうな量の矢は、敵船の外壁の突き刺さり、船を燃やす。

——はずだった。

「海将！ 火矢、大型弩弓ともに効果を認めず！ 敵船離れていきま
す！」

「バカな?! まさか船体が金属で出来ているのか?!」

そんな船は列強の上位2国しか持っていないはずだ。

自分達が戦っている国とはいったい…?

「…デカイ凶体をしているくせになんて速さだ。間違えて海魔を攻撃
してしまったのではないか？」

海将シャークンは「未知なる敵」の登場に恐怖を感じながらも、列
強上位2国の艦船を相手にする時の対抗策を必死に考えた。

海上自衛隊の護衛艦隊郡は、武装勢力から明確な武力攻撃を受けた
ため、反撃を決定していた。

「攻撃を受けた。これより反撃する」

攻撃と言っても被害は全くと言って良い程なく、乗組員達は苦笑い
をする。

『みようこう』の甲板前方に設置された『155mm電磁加速砲』が旋
回し、敵船にその砲口を向けた。

「全電圧線、異常なし」

「電気伝導体、絶縁体、異常なし」

「次弾装填準備よし」

「ターゲットロック。主砲付近に金属体なし、いつでも撃てます」

『レールガン』

弾体を電磁誘導（ローレンツ力）により加速して撃ち出す兵器。約
500年前にアメリカ軍が世界で初めて実用化した艦砲である。

「主砲、打ち方はじめ」

目のいい海将シャークンは、3 km先の敵船の僅かな変化に気付いた。

「あの棒は何だ？」

何か嫌な予感がする。

そして、次の瞬間であった。

「敵艦が攻撃を開始しました！」と誰かが言う前に最前方を走る船と、その後ろに続く数隻の船体に大きな破孔が発生する。

破孔付近にいた人間は音の数倍の速度で飛翔する物体の衝撃波に体が耐えきれず、爆散して中身をぶちまけた。

そんな現象が連続して引き起こされる。

「報告！ 敵の攻撃は超速度の砲弾らしく、被弾した船に貫通孔が出来ています！」

「何だ?! あの距離から当てやがったのか?! 通信士！ 司令部に航空攻撃を要請しろ！」

至近距離で放った複数の砲弾が木製の柔らかい船体を貫通したことを『みようこう』の乗務員は確認した。

「これじゃあ過剰防衛だな。驚いて逃げ帰ってくれるといいが…」

『みようこう』艦長の海原は、無用な殺傷は避けたかった。従って、こちらの戦力の一部を見せることで、勝てないと判断させて相手を引き返させようと考えていた。

「艦長、敵艦隊停船しました。それと…」

「なんだ？」

「レーダーに500匹のテラフオーマー^{火 星 生 物}が…真っ直ぐこちらに向かって来ます」

「はあ？」

すぐにレーダーを確認する。

確かにそこには、「TF」と右上に表示された大量の飛行物体が表示されていた。

実はこの現象、初めてワイバーンをレーダーに捉えた艦も同様の報告をしていたのだ。

人間より大きい体、そして同じくらいの飛行速度の物体をAIが「火星ゴキブリ」だと誤認したからである。

「ちよつと待て」

海原艦長はそう言い、館内のスピーカーを使ってとある乗務員を呼び出した。

『鳥江2等海尉、聞こえるか？ 甲板に出て変態し、南西方向から接近する500匹の飛行物体を見て欲しい』

スピーカーから海原の声が流れ、鳥江2等海尉は大きめの声で金属の壁へと話しかけた。

「了解です。変態後はそのまま待機でよろしいですか？」

『そうしてくれ。なるべく早めに頼む』

通信が終わると彼は駆け足で甲板に出て、鳥類型の変身薬を取り出した。

「人為変態……！」

『イヌワシ』

タカ目タカ科イヌワシ属に分類される鳥類。その最大の特徴は、人間よりも遥かに良い視力である。

ヒトの目には約20万個の視細胞があると言われているが、イヌワシはその7.5倍、約150万個の視細胞を持つと言われている。

「あく空飛ぶトカゲですね。背中に人間が乗っていますが」

『了解。そのまま待機せよ』

艦長海原の手術ベースは『ネズミイルカ』。

名前の通り小型のイルカであり、イルカ類の中では最も耳が良いとされている。

「聞こえたか？ TFではなく敵WVNだ」

「聞こえないわ!」

CICにいる誰かがツツコミをいれる。

それはさておき、海原艦長は次の指示を出した。

「準備でき次第迎撃を行う! 対空戦闘用意!」

「なんだツ?!」

ロデニウス沖、洋上でロウリア王国の飛竜隊長アグラメウスは未知の現象に恐怖していた。

「団長! 前方の味方が次々に落とされています!」

それは自分も目視で確認している。

だが、その落とされ方が明らかにおかしいのだ!

「何なんだこれは?! なぜ竜騎士だけが死ぬ?!」

まるで見えない力に弾き飛ばされるように、ワイバーンに乗った竜騎士だけが大海原へと落ちていく。

その正体は護衛艦『みようこう』に搭載された複数の『高出力光線砲』。いわゆるレーザー砲である。

レーザーと言ってもSF映画のような色鮮やかで人間の目に見えるような物ではなく、見えないという点では太陽光に近い。

これに狙い撃ちにされた竜騎士達は、無色透明の見えない攻撃に呆気なく倒されていくのだ。

そして従うべき騎士を失ったワイバーンは各方面に離散し、逃げて行く。

「あ、待て! 逃げるな!」

「無駄です隊長! それより前方から大量の虫が!!」

「はあ?!」

『全自動 対空自爆型 小型無人機』

いわゆるAI搭載の無人戦闘機であり、これも『みようこう』に搭載されている兵器の1つである。

これらは艦の迎撃能力を大幅に越えた飽和攻撃時の時間稼ぎや予備の迎撃手段、技術レベルが低い相手への攻撃手段として使われるが、レーザーと同様にミサイル1発より遥かに安い値段で目標を排除出来るということに主眼が置かれている。

青空に黒い華が咲き乱れ、ワイバーンが次々と堕ちていく。

虫よりも大きく、人間より小さいその飛行物体は、まるで意思を持っていくかのようには騎士が乗っているワイバーンだけに肉薄し、大量の破片を撒き散らしながら爆発する。

「クソツたれ！ 導力火炎弾で叩き落とせ！」

「無理だ！ こいつら小さいくせに、ワイバーン以上の速度で飛びやがる！」

騎士のいなくなったワイバーンが邪魔で前には進めず、それらを縫うようにして突撃してくる虫の群れを前に竜騎士達は引くことも出来ず、みるみるうちに数を減らしていく。

このままでは攻撃をする前に全滅してしまう。

そう考えたアグラメウスは魔信器を握り、思い切った行動に出た。

「総員！ 急降下した後、海面を這うようにして前方の灰色の船に突撃せよ！ ここに留まっていたは何も出来ん！ ロウリア王国軍の意地を見せてやれ！」

「ウオオオおお!!!」

ここで帰っては、何も出来ずに部下を死なせたとして無能の烙印を押されてしまう。何より、死んで逝った部下達に顔向けが出来ない。

彼は1人の漢^{おとこ}として、戦場^{竜騎}の花形として、そして皆の命を預かる隊長として、少しでも勝率のある方に賭けることにしたのだ。

「これは不味いな……」

『みょうこう』のCICでは急降下によって速度を増し、海面スレスレで突撃してくるワイバーンに危機感を募らせていた。

「おい見ろよ！ 変則軌道をとっているやつもいるぞ！」

「低高度&変則軌道か…。敵の指揮官に有能なやつがいるぞ」

危機感を憶えているのは、海原艦長も同じであった。

効率よく数を減らしているとは言え、敵の数は未だ300以上。このままでは敵の攻撃が届く距離まで接近される恐れもあり、値段が張るとは言え、彼は艦対空ミサイルを使うつもりだったのだ。

しかしこの時代の艦対空ミサイルにも、ある程度は改善されているとは言え、500年前と変わらない弱点があったのだ。

「艦長、このままでは艦対空ミサイルが使えなくなる距離まで接近される恐れがあります」

それは低高度の目標と、変則軌道をとるような目標には命中率が低いと言うことだ。

ミサイルと比べて目標の速度が圧倒的に遅いため、後者は特に問題ないのだが、海面スレスレのまま一定距離以内に入られると、ミサイルでは対処のしようがなくなってしまふのだ。

「仕方ない。電力を大幅に消費するが、『H・A^ハD^デS』を使用せよ」
「了解」

『H・A D S』とは正式名称ハイパーアクティブダイナミクステムの略称であり、離れた目標を電子レンジのようなマイクロ波で攻撃する対ドローン用の兵器である。

Q. 中に電子機器を入れた状態で、電子レンジを稼働させたらどうなるか？

A. 電子部品が壊れ、二度と使えなくなる。

Q. …では、中に生物を入れたらどうなるか？

「隊長!!」

「今度は何だ?!」

「前方の竜騎士がワイバーンごと一斉に落ちました！ これまでとは

違うタイプの不可視攻撃のようです！」

A. 体内の水分が一気に沸騰し、外傷の無い焼死体が出来上がる。

「ぬうう…仕方ない！ 全騎散開せよ！ お互いに距離を取れ！」

「ワイバーン約30匹の撃墜を確認。続けて攻撃に移ります」

「有効射程距離内に敵を確認。主砲、対空砲弾に切り替え、対空迎撃開始」

C I C内で淡々と操作が行われ、効率よく堕ちていく敵達。画面に次々と表示される？^{バツ}を見て、海原艦長はとりあえずの所は大丈夫そうだと安堵した。

後方に味方艦も待機しているが、彼らの支援は必要なさそうである。

「艦長、敵が散開し始めました。『H・ADS』の対費用効果が低くなると思われます」

「敵の隊長は有能だな…。止むを得ん、『H・ADS』の電力供給カット。停止していたレーザー砲に電力に回し、稼働させろ。敵が射程距離に差し掛かり次第、CIWSもだ」

戦闘可能な竜騎士、約250人。

5話：ロデニウス沖大海戦Ⅱ

「クソー！ またこれか！」

再びワイバーンに騎乗する竜騎士だけが死ぬ攻撃が行われる。散開しているため、攻撃の間隔は先程よりかは遅く感じるものの、このままでは敵船に近づく前に全滅は必至であった。

それだけでなく、味方船に巨大な貫通孔を開けた攻撃も行われているのか、敵船から見て体が重なったワイバーンは纏めて、見えない何かに風穴グチャグチャにされてを開けられていた。

こんな魔導兵器は聞いたことがない！

我々は古の魔法帝国か、それ以上の敵と戦っているのではないか？！

「…副隊長、ここにいる竜騎士に魔法を使えるやつはいるか？」

隊長は何かを思いついたようだ。

「いますね。私を含めて片手で数えられるほどですが」

「では全魔法使いに告ぐ、各騎の前方に蜃気楼を発生させる準備をしろ。これから作戦を伝える」

彼らが長年海を哨戒し続けた経験を活かし、独自に編み出した魔法。

アグラメウスの計画の成否は彼らに託された。

護衛艦『みようこう』艦内 CIC

「艦長、敵ワイバーン群が引き返していきます」

「ようやく撤退したか…。攻撃や…め？」

刹那、海原艦長は何か違和感を感じた。

人間の目ではなく、『ネズミイルカ』の鋭い聴覚が彼に警告を発しているのだった。

なんだ…？

…まあいいか

「すみません、間違えました。何匹かはこちらに向かって来ます。殿しんがりが何かでしようか？」

「…様子を見る。レーザー砲で迎撃せよ」
「了解」

命令通りにレーザー砲が目標へと向けられる。

しかし画面には撃墜を意味する？が表示されず、目標は尚も向かってくる。

「ん？」

「あれ？」

「…外したのか？ 珍しいこともあるもんだ。再度迎撃せよ」

しかし状況は変わらなかった。

「艦長！ なんかこれおかしいですよ!」

今までは1回のレーザー発射でワイバーンが落ちて行った。だが、今回は何かがおかしい。

攻撃をしても墮ちないという無敵の目標が現れたため、CIC内は緊張に包まれた。

「主砲だ！ レールガンを撃て!」

「全機構問題なく作動！ レールガン撃ちます!」

状況は未だ変わらない。

「ならば『H・ADS』だ！ ハデスへ電力回せ!」

「了解、準備でき次第攻撃します」

CICにいる全て乗員の顔に焦燥の色が浮かぶ。

この世界に魔法があるのは知っていたが、もし手の付けようのない魔法があつたらどうしようという不安の表れであつた。

「…敵の撃墜を確認。どうやら位置情報がおかしかったようです」

撃墜の報を受け、一同の顔が明るくなる。

とりあえずの危機は去つたのだ。

「位置情報だと?」

「はい、攻撃後に敵の位置が僅かに変わったのです。ほら、見て下さい。微妙に位置が違うでしょう?」

確かに、画面を比較してみると表示されていた位置と撃墜された場

所が微妙に違うことに気付く。

敵は何らかの手段を使って、レーダーを騙したのだ。

しかし、いったいどうやって…？

「……蜃気楼か！」

レーダーは対象に向けて電波を発射し、その反射波を測定することにより、対象物までの距離や方向を測る装置だ。しかしこれにも弱点はあり、電波を反射しにくい物体や、蜃気楼などが起こると途端にポンコツとなる。

ただのワイバーンがステルス機能や電波妨害機能を持っていると考えるにいく、必然的に人為的な何かで^{魔法}蜃気楼が発生したと考えられる。

これなら、レーダー照準＋完璧に計算された弾道計算で飛来する砲弾も避けることが出来るはずだ。

「CIWSを手動操作にして、目標の周りにばら撒いてみてくれ。あの程度は誤差の検討がつかはずだ」

そして彼は続ける。

「それと、蜃気楼を発生させれば回避率が上がるという情報をこれ以上知られたくない。敵には魔力通信という物があるはずだ。すでに報告されているかもしれないが後方で待機しているワイバーンの殲滅を急げ」

「了解！ 全艦に伝達、対空ミサイルの発射急げ！」

「飛行可能なものも全員上がれ！ 何としてでも通信を阻止しろ！」

「通信妨害も試せ！ 何が何でも通信をさせるな！」

CIIC内はにわか騒がしくなり、『みようこう』の後方で待機している艦も騒然とした。

「隊長…！ 成功しましたね！ 後はこれを本国に伝えれば、後の対日本戦に大いに役立てられるはずです！」

「そうだな、だが俺達の魔信機ではここから本国へは届かない。何人

か撤退させよ…」

彼が言い終わるや否や、誰かが叫んだ。

「隊長！ 敵船から煙が上がっています！」

「あの光の矢は何だッ?!」

敵の大型船から次々と煙が上がり、何かが光の尾を引きながらロウリア艦隊の上空を通過してくる。

「…未知の攻撃をしてくる敵だ！こけおどしとは思えない！全騎回避行動をとれ！」

彼が叫んだ瞬間、前方で隊列を組んでいたワイバーンが轟音とともに爆炎に飲み込まれる。

先程の虫とは比較にならない大きさの黒い華が咲き乱れ、仲間の残骸が大小様々な肉塊となつて海へと落ちて行つた。

「…クソッ！ 誘導魔光弾か?!」

それはまるで、話に伝え聞く『古の魔法帝国』の兵器のようだった。ある者は避ける間もなく撃墜され、またある者は類まれなる動体視力をもつて回避行動を取つたが、光の矢に狙われた全員に等しく死が訪れる。

高威力の爆炎は周囲の味方をも飲み込み、広範囲に撒き散らされる破片がワイバーンの翼を引き裂いた。

「隊長！ 低空より何かが来ます！」

「はあ?!」

まさか敵のワイバーンか?! とも思ったが、目で見る限り、ワイバーン大の影はない。

いや、人間大の何かが迫ってきている…?!

「何だこいつは——」

突然、視界が真つ逆さまになる。体の感覚はなく、貧血を起こしたような感じだ。

「敵将の殺害完了、これより後方の敵への攻撃を開始します」

薄れていく意識の中で彼が最後に見たのは、刀のような武器を持つた、4本の羽が生えた人間だった。

ロウリア王国軍飛竜隊隊長アグラメウスは頭部を切断され、永遠に

気を失った。

『オニヤンマ
鬼蜻蜓』

トンボ目オニヤンマ科に分類される日本最大、そして日本原産のトンボである。

その特徴は何と言ってもやはり、虫の中では「空の王者」と呼ばれるほど強く、『オオスズメバチ』をも捕らえて捕食してしまう事だ。

「なんだこいつら?! 魔人か?!」

「敵船から飛んできているようだ! 数は少ない! 応戦しろ!」

Q. 全ての生物の大きさを同じにして戦わせた場合、最強はどれか?

A. 様々な条件によってこの疑問の答えは変わってくるが、最有力候補によく上がってくるのは、蜘蛛クモか蟻アリである。

しかし陸で勝てなくとも、空戦では唯一無二の最強がいる。

「包围して一斉に導力火炎弾を——」

「よし! 背後を取ったぞ! 火炎弾をくら——」

トンボだ。

複眼があるため死角はほぼ皆無であり、動体視力も非常に高く、人間の造る物では再現が不可能な異常な空戦能力を持つ怪物である。

急停止、急加速、バツク、ホバリングと無限の飛行能力を誇る彼らに、鈍足で前方にしか飛べないワイバーンが勝つなど不可能。

何より忘れてはならないのは:

『こいつら連携を取ってくるぞ! 気を付けろ!』

先程とはまた別種の地獄が上空に出現し、竜騎士が乱れ飛ぶ。1太刀でワイバーンの翼が切断され、海面に次々と水の柱が上がった。

『ダメだ! 勝て——』

彼らは一律化され、訓練された軍隊であることだ。

護衛艦『みよこう』のCIC

「戦闘員より連絡、『戦闘可能なワイバーンは全滅』との事です。現在、人間が乗ったワイバーンは確認されていません」

その吉報を聞き、とりあえず危機が去ったことに全員が安堵した。

「さて、いよいよ大詰めだ。敵艦隊の迎撃を行おう」

勝って兜の緒を締めよ。

海原艦長は、帽子を被り直した。

「……………」

静寂が大海原を支配する。

誰もが目の前で起きたことを信じられず、誰一人として声が出せずにいた。

ワイバーンは1騎落とすだけでも、文明圏外の船にとっては至難の技。それをあの船は、恐らく単艦で500騎全てを撃墜したのだ。

しかも、その後方から似たような船が6隻も出現したのだ。

夢ならば、どれほど良かったでしょう。

敵の圧倒的な強さを前に、シャークンの足はガクガクと震え始める。1番近い敵船までの距離は約3kmだが、どうやってもその3kmの壁を生きて越えられる気がしない。

しかし、ここで本国に帰っては死刑は免れられない。帰ったら無能の提督の烙印を押され、末代までの恥となってしまおうだろう。

何よりギムの大虐殺を行ったロウリア人を、敵が許してくれるとは思えなかった。

「全船に伝達、これより敵船に突撃し、移乗攻撃を行う」

しかし、結果は火を見るより明らかだった。

前方の帆船は見えない力によって帆を焼かれ、移動不能となった船体は後方の船の障壁となる。

オールを出して船を漕ごうにも、魔人のような敵兵が船を占拠しているため、艦隊は一向に前に進まない。

敵兵の占拠した船を奪い返そうと移乗攻撃を行うも、これまた失敗。ワイバーンを倒したと思いき敵の魔人は陸でも異常に強いのだ。

「ちくしょう！ 化け物どもめ、あんなのに勝てるわけがねえ！」

マストに延焼した炎は船体にも燃え広がり、半ばパニックとなった船員達の消火作業はおぼつかない。

死傷者数は増える一方だった。

しばらくすると敵も趣向を変えたのか、船の占拠を辞め、その砲口をこちらへと向ける。

1隻、また1隻と信じられない速度で船が海中に引きずり込まれ、船の残骸が波間に漂う。

「……だめか」

海将シャークンは迷った末に、全艦に撤退命令を下す。

ロデニウス大陸の歴史上最大の艦隊の3分の1以上を失っての大潰走であった。

6話：ロデニウス沖大海戦後

後にロデニウス沖大海戦と呼ばれる海戦が集結した後、ロウリア王国軍ではとある噂が広がっていた。

曰く「4400隻の大艦隊とワイバーン500騎が、日本国の魔導兵器の前に為す術もなく敗北した」と。

下士官から一兵卒にまでこの噂は広がり、特に上層部が受けた衝撃は大きかった。

「海軍は何をしていたのだ?! 箝かんこう口令を敷いたのでは無いのか?!」

そう、ロデニウス沖における海戦での大敗北は、軍内部の士気低下を懸念して、一部の高級幹部を除いて誰にも知らせていなかったのだ。

なのに、何故か情報が漏れている。

今はまだ噂程度にしか受け止められていないものの、本当だと知られた時には何が起るか想像もしたくない。

「聞き取り調査の結果、どの陣地も現在行方不明の兵士が噂を広めたようです」

「行方不明だと?」

「ええ。何件かそれらしき遺体が発見されたのですが…その…」

「何だ?」

「ええと遺体を調べた結果、中身が無かったのです」

「…なんだそれは」

そんな変死体はさておき、ここにいる全員はこれをクワ・トイネかクイラの作業員による妨害工作が原因だと考えたが、海を挟んだ日本国の可能性であるとは考えもしなかった。

実際は変死体も含めて日本の仕業なのだが。

ここで日本が実際にやったトリックの種明かしをしよう。まずは飛行可能かつ人間も運搬できる者と、手術ベースが『ロイコクロリデイウム』という寄生虫である者を用意する。

そして彼らに変身薬を持たせ、前者に後者を運んでもらい、寄生虫を敵の陣地に投下するといった具合だ。

『ロイコクロリディウム』

普通はカタツムリに寄生する寄生虫。この種の最大の特徴は、寄生した宿主を操れることである。(画像検索はオススメしません)

この生物を手術ベースにした人間が同族に寄生するのは長い訓練と精神的な克服が必要となるが、日本の諜報部はすでにその人員を実用化するレベルまで育てることに成功していた。

「とにかく、これ以上変な噂を流されないよう、陣地周りの警備を更に嚴重なものにせよ」

「はっー」

寄生虫の魔の手がすぐ傍まで差し迫っていても、気付く者は誰一人としていないのだ。

中央歴1639年4月30日――

クワ・トイネ公国 政治部会

「では何だね？ 日本国はたった8隻でワイバーン500騎を全て撃墜し、ロウリア王国海軍4400隻を打ち負かしたのか？」

「目立った被害もなく？ そんなの嘘に決まっておる。私達は正確な情報が知りたいのだよ」

観戦武官として『いずも』に乗船したブルーアイに野次が飛ぶ。彼自身も理解されないのは分かっていたつもりだが、自分の言う事が理解されないだけでなく、野次を飛ばされるのは不愉快だった。

「いえ、火矢と大型弩弓を受けて塗装に傷が…」

「ごもつともである。しかし何かしらの被害を受けたと説明しない限り、信じては貰えないだろうと彼は考えたのだった。

どちらにせよ、信じて貰えないのには変わりは無かったが。

「報告書には人的被害も無しと書かれていたが、これも本当なのかね？ 1人も怪我をしなかったと？」

「はい、私自身も信じられないのです。気付いたら戦闘が終わっていませんから」

クワ・トイネ海軍軍だけであれば絶望的な量の軍勢を、自国の損害無しに退けられたのだから本来はもっと喜ぶべきところなのだが、あまりにも現実離れした戦果に誰も頭が追いついていなかったのである。

他にも疑問は多く、軍務卿が手を挙げた。

「報告書にある、この『魔人』というものの詳細を知りたい。これは日本軍が使役する魔獣か何かかね？」

ここにいる全員が、日本軍に『魔人化できる武器』があると風の噂程度には聞いていたが、それがどのような代物なのか、誰も何も知らなかったのだ。

「ええと…戦闘中に説明を受けましたが、私も全容を理解できておりません。ただ一つ言えるのは、人間が飛翔能力や遊泳力、並外れた怪力などの能力を得るらしいです」

「???'」

そんな魔法は聞いた事も見た事もない。会場にいる誰もが思った。

「…待て、日本に魔法は無いんじゃないのか？」

当然の疑問である。国交を樹立したばかりの時、魔法後進国の日本に魔法の技術を輸出し、大儲け出来ないかと考えた輩もいたぐらいなのだから。

「それが科学の産物らしくて…。簡単に説明すると、人間をとある病気に感染させ、その治療後に人間以外の生物の臓器を移植させるとか何とか…」

「?????」

聞けば聞くほど、魔法の1種では無いのかと言う疑問が生まれる。まさに『十分に発展した科学は魔法と見分けがつかない』だった。

「まあ日本の魔人はさておき、今回の海からの侵攻は防げました。たった8隻にここまでやられては、当分海からの侵攻は出来なんでしょう」

「ロウリアの軍船も大量に鹵獲出来ましたしね」

首相カナタが会場を落ち着かせ、ひとまずのところ魔人の話は終わった。

鹵獲した船は無傷のくせに、帆のストックが全て無くなっていたのには誰も触れなかった。捕虜に話を聞くと、「帆を交換する度にマストに火災が起こった」と証言していたからである。

どう考えても日本が列強以上の魔法先進国のように感じるが、この話を蒸し返すのは野暮だったのだ。

「陸の方はどうなっていますか？ 軍務卿」

「はい、現在ロウリア王国軍はギム周辺を陣地化しております…これは日本からの情報ですが」

また日本か！ と一同が同じことを思う。

こちらの作業員は嚴重に警備された陣地に侵入することすら出来ないのに、とことん不気味で謎な国だ。

「海からの進撃が失敗に終わり、陸の方は万全を期して侵攻するつもりなのでしよう。我が方では電撃作戦は無くなったと解しております」

軍務卿は続ける。

「それと日本国がダイタル平野の貸出許可を求めています。詳細は資料に…」

全員が資料を見る。

「ギムと首都の直線上だな。陣地を構築するつもりなのか？」

「恐らくは」

「あそこは何もない平野でしたね。軍務卿、日本国に貸出許可を与えてください」

政治部会内では多少の反発もあったが、誰もが心の底から反対をした訳では無かった。

日本の力なくしてロウリアの撃退は不可能と誰もが理解していたからである。

それ以上に、万が一日本が牙を剥いてきたら、それこそ一巻の終わりであることが明白であったのが最たる理由であったのだ。

第3文明圏 パーパルディア王国

薄暗い部屋、ガラスの玉がオレンジ色にほのかに輝き、その光は2つの影を映し出していた。

「…日本？ 聞いた事のない名前だが…」

「ロデニウス大陸の北東方向にある島国です」

「いや、それは報告書を見れば解る。しかし…今までこのような国はあったか？ 大体、ロデニウスから1000km程はなれた場所にある国なら、我々が今まで一度も気がつかなかった事が考えられない」
「どうやら彼らは、転移国家を自称しているようです」

「…バカバカしい。それよりも問題は、ロウリアの大艦隊がたった8隻の船に敗北したと言う事だ」

「いえ、話を聞いた限りでは、日本国は魔法先進国であるようで…」

「蛮族の4400隻もの船がたった8隻に負けるほど、と？ そんなバカな話があるか！ そんなことが出来るのは列強の上位2国くらいで、我が国でも不可能だぞ?!」

「どうやら日本は大砲を実用化しているようで…」

「それは分かっている！ 問題なのは大砲の命中率だ！ 文明圏外の蛮族がそんな技術力を持っている訳がない！ これは全て誤情報だ！」

「この魔人の報告もですか？」

「当たり前だろ?! 文明圏外の蛮族だぞ?!」

クワ・トイネのそれとは打って変わり、こちらは会議が紛糾していた。

7話：エルフ疎開民救出作戦

中央歴1639年5月21日――

クワ・トイネ公国 国境付近

「はあっ……！ はあっ……！」

「頑張れ！ あと25km進めば、クワ・トイネ公国軍の基地があるぞ！」

息を切らし、東へ向かうエルフの集団。彼らはロウリア軍の魔の手から逃れるため、村を放棄して自主疎開を敢行していた。

その数約200名。集団の後方で若者たちが警戒にあたっているが数が少なく、ろくな武器も持っていないため、今ロウリア軍の追撃を受けたらひとたまりもない。

小さな子供や老人もいるため進行速度はなかなか速くならず、全員が焦りを募らせていた。

「…ああ!!」

「ロウリアの騎馬隊だ!!」

突如、後方から悲鳴のような叫び声があがる。彼らの指さす方向を見ると、集団の約3km後方からロウリアの騎兵隊約100人が迫っていた。

ここは平原で遮蔽物がなく、隠れることは出来ない。かと言って騎馬相手に走って逃げるのも無謀だった。

どこへ逃げても5分もすれば追いつかれ、鬨って殺されるのがオチだろう。

「亜人どもを皆殺しにするぞ！ 突撃!!」

「ひゃっはああ――ツツ!!」

ロウリア王国軍第15騎馬隊、元山賊、海賊によつて編成された荒くれ者の集団である。

彼らはエルフの集団に向かって馬を駆け、獲物の品定めをしながら舌なめずりをする。

「おらしつかり逃げろ!! もたもたしていると殺しちまうぞお!!」

「いい女も交じってんなあ！ あいつは俺がやるぞ！」

すでに距離は500mを切っており、村人の中には諦めてへたり込む者達も出てきた。

野蛮な声も聞こえ始め、エルフの少年パルンは小さな妹を連れ、走りながら祈る。

死が刻一刻と近づく中、彼は母が夜話に聞かせてくれた『太陽神の使い』の話を思い出していた。

遠い昔、太陽神が危機に瀕したエルフ達の祈りに応え、自らの使者をこの世に遣わしたという話だ。

パルンはその話を信じていた。実際に「神の使い」が乗っていたという『神の船』を見たことがあるからだ。

「お兄ちゃん…もうダメ…」

妹はこれ以上は走れないと膝から崩れ落ち、パルンはもう逃げ切れないことを悟る。

彼は最後の望みをかけて胸いっぱい空気を吸い込み、天に向かって叫んだ。

「カミサマアア—— ツツ!!! 助けてええええええ!!!」

大量の砂埃を撒き散らして疾駆する騎馬隊。

獲物との距離はますます縮まっており、彼らは武器を抜いて獰猛な笑みを浮かべる。

「ん…?!」

不意に、その中で最も目の良い隊員が空を指さして叫んだ。

「ジョーヴ！ 空から何か来るぞー！」

「な、なんだありやあ?!」

荒くれ者達の隊長 “ 赤目のジョーヴ ” は自分の目を疑った。

彼の視界に写ったのは、4本の透明な羽が生えた、空飛ぶ人型の生物。それらは空に溶け込むような色の服を着ていたため、発見するが遅れたのだ。

「まさか…ッ?!」

エルフ達だけでなく、ロウリア軍の人間もそれを光翼人だと誤認したが、ジョーヴを含めて数人はその正体をすぐに見破ることができた。そのような存在の噂をそれとなく聞いたことがあるからだ。

「てめえら気を付けろ！ 日本国の魔人だ！」

荒くれ者の集まりとは言え、東方討伐軍の中でも精鋭と名高いホーク騎士団第15騎馬隊。彼らは未知の敵であろうと、瞬時に手綱を握りしめ、マニュアル通りに敵ワイバーンによる航空攻撃に対しての回避行動を取った。

パルンは夢を見ているようだった。

天に向かって叫んだ直後、上空から羽の生えた人間(?)が助けに来たのだ。

数は少ないが、彼らの持つ「何か」がポンツと軽快な音を出す度にロウリア兵の足元が弾け、爆音を轟かす。

『回転弾倉式 対地攻撃用 擲弾投射機』

長い名前が付けられているが、いわゆる、ただのグレネードランチャーである。

補足しておくが、2020年現在自衛隊は回転弾倉式のグレネードランチャーは持つておらず、銃口にそのまま差し込んで弾薬で発射できるライフルグレネードしか持つていない。

その理由は色々とあるが、両方とも精度が悪いくせに反動も大きく、正確な即応性に欠けるためである。

擲弾投射機はアサルトライフルの副次的な補助に過ぎず、敵を倒すためだけにわざわざ金銭的にも重量的にも重たい装備を持つていく必要はないからだ。

にも関わらず、なぜこれがあるのか。

理由は至極単純で、いくら手術で様々な身体能力が向上しようと

も、空中から人間大の地上目標に小銃を撃っても当たらないからである。

手術を受け、飛翔が可能となった兵士の対地攻撃能力の低さは当初、各国でも問題となっていた。性能が大幅に向上した対空兵器が蔓延るこの時代の戦場ではヘリコプターは「ただのカカシ」の「被手術兵」はそれに代わる支援攻撃手段として期待されていたからである。

しかしこの問題はすぐに解決した。とある軍関係者が倉庫でホコリを被っていたある物を持ち出し、こう言ったのだ。

「これは普通の人間に持たせるには重量過多だが、手術を受けた人間ならば問題ないだろう」

そして各国で改良に改良を重ねられ、ある程度の軽量化、小型化、高威力化を実現したグレネードランチャーは各軍における飛翔可能な被手術兵の対地攻撃作戦における標準装備となったのだ。

「ちくしょう！ ワイバーンなんてあれの足元にも及ばないぞ！」

「逃げる！ とにかく逃げる！」

ロウリア兵はすっかり恐れ慄き、隊列が乱れていた。

騎兵らは蜘蛛の子を散らすよう逃げるが、それを逃がさんと言わんばかりの爆撃。

ブブブという羽虫のそれに似た音が耳を掠める度に、ロウリア軍の隊員達は死を覚悟する。

彼らに等しく訪れるのは、ミンチになる運命だけであった。

「こんな……！ こんな所で死に——」

「ダメだ！ 撤退！」

平和だった草原はあっという間に地獄の様相を呈し、青々とした新芽は血溜まりへと沈む。

人だったものがばら撒かれ、次は自分達の番かと恐れるエルフもいた。

そんな中、目の前で起こる惨劇を前に、パルン少年はひどく感激していた。

「すごい……！ 本当に来てくれた！」

疑っていた訳ではないが、神話の存在が本当に来てくれたのだ。

これに感激しないはずがない。

するとポンと頭に手を置かれ、パルンは後ろを振り向いた。

振り向くと、空を飛ぶ太陽神の使い達と似たような服を着ているおじさんがニカツと笑っていた。

その笑顔は太陽のように明るく、頼もしい。

「助けてくれてありがとう。おじちゃんたちは太陽神の使いですか？」

少年の純粋な質問に、おじちゃんは戸惑う。

（ああ、日本の国旗が太陽だから勘違いしたのかな？ 子供の言う事だし、そういうことにおいた方が面倒が少なくていいか）

「そうだよ。君の声が、私達を呼んだんだ」

これが更なる誤解を生むとは露知らず、自衛隊員による熾烈な攻撃は続いていた。

「——まいった！ 降参だ！」

最後の生き残り、赤目のジョーヴは馬から降り、両手を挙げて降参した。

彼の降伏によって戦闘は終わり、何回か改良を加えられ、未だに現役である『チヌーク』が音もなく平野に降り立つ。

（あれが日本軍のワイバーンか？ 生物には見えないな……）

だが、赤目のジョーヴがそんな簡単に降伏する訳がない。

彼の降参は、当然方便である。

（まあいいか。へっへっへ……こいつらは逃げ遅れた亜人どもをわざわざ助けに来るようなあまちゃんだ。とりあえず、あのガキを人質にとって逃げるか……）

『赤目のジョーヴ』 44歳。

元山賊であり、ロウリア王国拡大期に幾つもの戦場で降参して捕虜

となり、人道に反した方法で何度も逃げ延びた伝説の男。
隠し持っていた短剣を抜き、彼はパルンに急接近する。

「こつちに來いガキイイイイ!!!」

しかし彼のその策略は、パルンの傍に立っていた自衛隊員の二太刀
によって斬り伏せられた。

「おお…!!」

見事な居合斬りに村人たちは顔を見合わせ、どよめく。

「さすが太陽神の使者様だ！ お強い！」

「おお…太陽神よ！ 強大なる使者様を遣わし、我らを助けていただ
きありがとうございます！」

「た…太陽神？」

誤解に誤解重ねてしまった結果、彼らを助けに來た自衛隊員達は、
彼らの誤解を解くために相当な時間を要することとなった。

城塞都市エジエイ

ロウリア王国との緊張がまだ高まりつつあった頃。クワ・トイネ公
国は戦争に備え、国境から首都への侵攻ルートを食い止めるべく、要
所として城塞都市エジエイを設置した。

公国の絶対防衛ラインに位置づき、高さ25mにも達する堅牢な城
壁はあらゆる敵地上部隊の侵攻を弾き返し、城内に湧き出る泉や平時
における膨大な量の食料備蓄は兵糧攻めを困難にする。

ここにはクワ・トイネ公国軍西部方面師団約3万人が駐屯してお
り、師団を束ねる將軍ノウは、ここでロウリア軍の侵攻を防げると絶
対的な自信を持っていた。

「ノウ將軍、日本国陸上自衛隊の方々が來られました」

「來たか、我が国に土足でのり込んで來た野蛮人め…！ 通せ！」

彼は日本が好きではなかった。むしろ嫌いでさえもある。

クワ・トイネとロウリアの戦いに首を突っ込んで來た拳句、さらに

戦闘報告結果にとんでもない脚色を加えたと考えていたからだ。

政府からは自衛隊に協力するよう言われているが、彼はそれも気に食わなかった。まるで自分達が信用されていないようだと感じたからである。

「日本軍がいくら強いとは言え、8隻が4400隻に勝ったなど有り得ん。どうしても自分達を強く見せたいのだな：パールディア皇国のような奴らめ！」

「將軍、外交問題になりかねませんのでお辞めください」

「分かっている！ ワシもそこまでバカじゃないわい！」

ノウを含めて数人が嘘だフェイクと信じてやまない情報が真実だと彼らは知る由もない。

そもそも知ろうともしなかったのである。

「はじめまして、日本国陸上自衛隊、第7師団長の大内田です」

「これはこれは、よくぞおいでくださいました。私はクワ・トイネ公国西部方面師団將軍ノウと申します。このたびの援軍に感謝いたします」

とりあえずは社交辞令から入るものの、彼の日本嫌いはますます深まった。

目の前にいる3人とも、緑と茶の斑模様の服を着ており、どう見ても山賊の類にしか見えなかったからだ。

「日本の師団長殿、ロウリア王国軍はギムを落とし、まもなくこちらへ向かってくるでしょう」

さつきとは雰囲気が一変し、高圧的に彼は続ける。

「しかし、見ておわかりと思うが、ここエジエイは鉄壁の城塞都市。これを抜くのはどんな大軍をもってしても不可能でしょう」

きっぱり不可能と言い切る彼に、大内田含め3人は「司令官として大丈夫か？」と思った。

「甚だ心外ながら、公国はロウリアに侵略されている真っ最中です。我が国は彼の国に一矢を報いようと立ち向かっておりますので、日本の方々はどうぞ安心して、あなた方が作った基地から出ることなく後方支援していただき——」

「お断りします」

ノウが言い終わるや否や、大内田の声が部屋に響いた。

「我々はかけがえのない友好国を救いに来たのです。断じて海外旅行をしに来たのではない」

ドスの効いた声と、無表情の顔から発せられる威圧感にノウは少し怖気付いたが、さらなる反感を憶え、相手の怒りを煽るような口調で抵抗した。

「で、何か？ 我々だけでロウリアを撃退出来ると言っているのに、日本の方々はどうしても戦果が欲しいようですね？」

「さっきも言った通り、我々は友好国の人々を武装勢力から護るためにここに居る。その中には当然、兵士も含まれる。私が欲しいのは戦果ではなく、人々の安全なのです」

「…で、何だね？ そこまで言い張るのならば、5 km先に陣取るロウリア王国軍先遣隊を日本軍だけで撃退してみせよ。ま、たった6000人しかいないあなた方には無理でしょうけど」

「わかりました。では、あなた方は城から出ることなく、我々の戦いを見ていてください」

こうして日本とクワ・トイネの会談は交渉決裂にも近い最悪の形となって終了し、大内田達は退室した。

「…どう思います？ ノウ將軍」

「ふん！ 敵は先遣隊だけで2万もいるのだぞ！ たった6000の兵で何とか出来るわけがない！」

しかし会談から24時間も経っていない翌朝、ノウ將軍は自衛隊の実力を思い知ることとなる。

8話：エジエイ攻防戦

翌日 明朝――

ジューンフィルア伯爵が取りまとめるロウリア王国東部諸侯団クワ・トイネ先遣隊約2万人は、特に敵対勢力と遭遇することもなく、城塞都市エジエイの西側約5kmのところ陣を置いていた。

当初の予定ではあと2km先まで軍を進めるはずだったが、ジューンフィルアは兵らの間でまことしやかに噂される未知の「何か」を警戒し、深入りを避けて野営することに決定していたのだ。この判断が吉と出るか凶と出るかは神のみぞ知るが、結論から言おう。この戦争に日本国が介入している時点で、彼らの「死」は避けられないものとなっている。

サイコロをいくら転がそうが、出る目は全てハズレなのだ。

「…何だあれは？」

何人かの兵士が、はるか上空を飛ぶ未知の物体を発見した。大きさはワイバーンよりも小さいが、速さはそれ以上のように見える。

「新種の竜か？」

「おい！ 何かを落としてるぞー！」

朝の訓練に取り掛かろうとしていた者達も何事かと空を見上げ、野営地はにわかに騒がしくなる。

ヒラヒラと空から舞い落ちる白い物を拾った兵士達は、見たことも無い真っ白で上質な紙に驚いた。

そこには大陸共通語でこう書かれている。

『2時間以内に陣地を撤収し、この地から退却せよ。さもなければ攻撃する。 日本国陸上自衛隊』

当然、この紙はジューンフィルアも拾っていた。

「来たか…。攻撃を教えてくれるとは律儀な国だな？」

噂に聞くほど強いのであれば、わざわざ敵に塩を送らずとも、奇襲して攻撃すれば被害も少ないのにと彼は思う。

しかしこれが敵の降伏勧告（形式上）であるとともに、罠であると

は誰も考えもしなかった。

「戦闘用意！ 2時間後に日本軍が来るぞ！ 隊列を組め！」

練度が高く、精鋭揃いの先遣隊2万人。彼らはすぐさま隊列を組むが、それが仇となるのはこちらもまた、誰も思いもしなかったのである。

陸上自衛隊 クワ・トイネ公国救援基地

「敵に動きはないのか？」

大内田陸将は側近の幹部に問う。彼は日本だけでロウリアを退けるのは十分可能だと思っていたが、敵とは言え、無用な虐殺は恐れていた。

「はい、それどころか敵は陣形を組んでいます。これはまあ予想通りと言うか、予定通りと言うか……」

「密集している所に爆弾1発か……。お前もなかなかエグいことを考えるもんだな？」

「こちらの方が費用対効果は大きいでしょう。それに、彼らを逃がして困るのは我々ですよ？」

この時代の地球では、大同士の戦争は経済の削り合いであり、先に経済が立ちいかなくなった方が実質的な負けであると考えられている。

第二次世界大戦の国家総動員体制が示しているように、工場、インフラ、商店、人口の全てが数値化され、経済に組み込まれる狂気の世界。

この地獄のような世界で軍に求められるのは、敵国を滅ぼす最適解、若しくは費用対効果。つまり、どれだけ安い値段で相手に大きな損害を与えられるかが重視されている。

人間を超人に改造する『Mモサイク・オーガン・Oオーガン手術』もこれの一環とされており、多大な手術費用を無視すれば、変身薬と少しの物資を買うだけの

金額で敵の基地を壊滅させる兵士というものは、軍隊からすれば非常に魅力的な話であったのだ。

「そうだな…費用対効果はそっちの方が大きい」

自国を守るためならば、倫理観や道徳など無駄な足枷でしかない。

この世界における理想の軍というのは『火星生物の軍団』に近い。

テラフォーマー

「…これも日本国民を救うためだ。攻撃を開始するように伝える。特科連隊もいつでも攻撃出来るようにしておけ」

「了解！」

彼の命令と共に、破壊の蟲が飛び立つ。

古くから天災の1つとされる蝗害を、人類は進歩した技術によって人災へと変えてしまった。

ロウリア王国東方討伐軍 東部諸侯団

ジューンフィルアが立つ丘の下の平野部に、整然と並ぶ東部諸侯団2万人。練度の高い彼らなら、日本国が相手でも大丈夫だろう。

しかし、彼は何故か不安を隠しきれなかった。

もちろん、練度の高い2万人の兵が簡単にやられるとは思っていない。

だが、何か妙な胸騒ぎがするのだ。

「いかんいかん…深呼吸、深呼吸…ん？」

空から人間が落ちてくる——??!?

「魔人だ!!! 上から来るぞ!!!」

気付いた時には全てが遅すぎた。

その者の口が微かに動いたかと思うと、首筋に何かを打ち込むのが見え、それはみるみるうちに異形へと姿を変えていく。

西欧では『復活』や『再生』の象徴とされるその虫は、東部諸侯団の目にどう映ったであろうか。

「——悪魔だ…!!!」

『ブレヴィサナ・ブレヴィス』

世界1うるさいとされている蝉^{セミン}。

緑、赤、黒の色が斑状に配色されており、他の同種とは違って非常に鮮やか。

しかし、その正体はとんでもない害虫である。

Q. 『大きな音』で人間の耳と平衡感覚は損傷出来るか？

A. 『一瞬だけなら140〜160dB^{デシベル}』で可能。鼓膜が破れ、内部の耳石器にまでダメージが行き、めまい等の症状を起こす。

しかしこのセミは原寸大でそれに届くか届かないか、というレベルでうるさいのだ。

その鳴き声、実に120dB。400mまでその騒音は届き、車のクラクションが100dBというのを考えると、いかにこの生物が害虫なのか分かるだろう。

想像したくもないが、それが人間大になったらどうなるか——

『スクリーム、やれ』

通信器から指示が出され、彼は大きく息を吸い込んだ。

「みんな離れてろよ…!!」

!!!!!!
!!!!!!

まるで空中で破裂し続ける爆弾。

もはや言葉では表現することのできない強烈な空気の振動は、人間の耳が感知できる音量をはるかに超え、衝撃波となって伝わった。

真下にいた生物は例外なく内臓が破裂し、眼球が赤く染まり、身体が押し潰されて地面の赤いシミとなっていく。

空中のある1点から発生し続ける衝撃波は地面に反射した衝撃波と合わさり、融合^{マッハシステム}波面となつてさらに広範囲に被害を拡大する。

隊列の真ん中にいた者は果物の絞りカスのようになって死亡し、端に展開していた兵士は重大な損傷を受けながらも何とか生存してい

た。

「何だ?! 何が起こった?!」

辛うじて重大な被害を受ける範囲には居なかったものの、ジューンファイルアは未だにキーンと痛む耳を押さえながら、状況の確認をする。

彼の視界には、たった1回の攻撃で戦闘不能となった兵士達が大勢倒れている光景が映っていた。

「××××の××」

「何だ! 何××言っているのだ?!」

「×本×の××す!!」

近くにいた部下が彼に状況を伝えるも、ジューンファイルアは耳をやられているせいで、何を言っているのか全く聞き取れていなかった。

それから何度かのやり取りを経て伯爵の耳がやられている事に気付いた部下は、何も言わずに上空を指差し、それを見たジューンファイルアはヘナヘナと力なく座り込んだ。

「敵の……増……援?!」

彼の目線の先には、先程と同じように、空から大量の敵が舞い降りていた。

朝日に照らされて神々しく地獄に降り立つ彼らの姿は、伯爵の目にはどう映っただろう。

あまりにも絶望的で、現実離れをした光景に、ジューンファイルアは錯乱し始めた。

「あはッ! あははははは! 魔帝だ! 魔帝様が君臨なさったぞ!

あはははははッは!」

「伯爵! お気を確かに!」

「誰か! ワツシユーナ大魔導師様を連れて来い! 近くにいるはずだ!」

「もう手遅れよお! 全ての人間は再び奴隷となるのだ! あハッ!

あはハはははは!!」

ゾクリ、彼らの背中を嫌な汗が流れる。

半ば狂乱的な状態であるジューンファイルアが発したその言葉は、何

とも嫌な気配を含んでいたのだ。

だが、彼らの恐怖の源はそれだけではなかった。

「こちらアサシン、敵司令部を確認。排除する」

背後の森から漂う、虫のように冷たい殺気が彼らの後ろ髪を引っ掴んだのだ。

『シオヤアブ
塩屋蛇』

ハエ目ムシヒキアブ科に属するアブ。普段彼らは木の枝や葉の裏側でじつと獲物が通りかかるとを待ち続け、獲物が飛んでくると、こっそり背後から近寄り、狙いを定め、槍のように鋭い口吻で獲物の神経節を切断し即死させる。

『空の王者』がトンボならば、その王を殺すのは『昆虫会の暗殺者』と呼び名の高いこの虫である。

「抜刀!! 伯爵様を守れッ!!」

しかし、伯爵を護衛する味方は音も無く次々に倒れていく。

羽の生えた敵は異様な速度で地上を動き回り、短ショートスピア槍で首の真ん中を一突き、骨を断ち切つて即死させ、位置取りが不利となれば即座に飛んで剣の間合いから退避する。

数人が相手でも互角以上に立ち回り、味方を容易く全滅させて見せるその槍術はまさに「人間離れ」していた。

「クソッ……化け物め——」

1分も経たないうちに、丘の上にはジューンフィルア以外のロウリア兵はいなくなる。

すでに精神が破綻していた彼にとって唯一の幸運だったのは、後に戦闘能力のない捕虜として捕縛されたことであろう。

その先の人生が幸か不幸かは、神のみぞ知る。

自分の守る城の目と鼻の先で振り下ろされた圧倒的な暴力を目に、

ノウ將軍は胸の奥底から込み上げてくる感情を何と形容していいのかわからなかった。

「…」

それは近くにいる彼の部下達も同じであった。

突然轟音がしたと思つたら、脅威であるはずのロウリア軍が壊滅していたのだから。

誰も口を開けず、沈黙が破られるには、しばらくの時間が必要だった。

「えつと……日本軍より連絡です。『武装勢力は排除した。300名程の捕虜がいるので、そちらは任せる。他は手遅れ』だそうです…」

「…」

彼らに「手遅れ」の意味は分からなかった。いや、考えたくなかったのだ。

2万人がものの数秒で300人になるという、あまりにも現実離れた現実、思考が停止していた。

「彼らは騎士として死ぬことさえ出来なかったのか…」

やつとの思いで絞り出した言葉も、彼の感情の全てを物語るにはほど遠い。

もし敵の先遣隊の数が2倍、3倍であろうと、似たような結果になつていたのでろう。

「捕虜を受け入れるぞ。敵国からの侵略者とは言え、彼らも我らと同じ人間だ。彼らが最大限の魔法治療を受けられるようにしておけ」

「りよ…了解！」

ここにいるクワ・トイネの兵はまだ1人もロウリア軍と戦っていない。

当たり前のことだが、死者どころか怪我人すら出ておらず、普段と何ら変わらない日常が城内には広がっていた。

公国の民の命が救われ、喜ぶべき状況の中、ノウ將軍を含め数人は敵に同情の念を抱いていた。

9話：ギム本陣の凶報

エジエイ防衛戦 同日夜——
クワ・トイネ公国政治部会

軍務卿からの要請で、首相カナタは緊急の政治部会を開くことに決めた。議題はもちろん対ロウリアの防衛戦争である。

今回は戦況報告が行われる予定で、特に城塞都市エジエイ付近で行われたという戦いに関しては、参加者間でも関心が高かった。

もし同都市が陥落した場合、クワ・トイネ公国は絶望的な戦いを強いられることになるからだ。

「ナウシ殿、戦況は何か聞いておられますか？ 間もなく発表されるとは言え、国の存続に関わることなので、状況が気になって仕方がないのです」

東方貴族のミルカンは、横に座る中央貴族のナウシに話しかける。

しかし、ナウシは困ったような顔で答えた。

「…ミルカン殿、私の口からお伝えするより、間もなく発表される軍部の正式発表を待った方がよろしいでしょう。私はその方が確実だと思います」

「と、言いますと？」

「私のもとに入ってくる情報はどれも現実離れしてしまっていて…まあ口デニウス沖の海戦もそんな感じでしたが」

「ああ…また日本が関わっているのですね」

貴族の間でも日本の異常な強さは広まっており、ミルカンもまた、ナウシの顔から「また日本が何かをやってくれたのだろうか」と察する。しばらくすると陸軍幹部が壇上上がり、こちらも彼らと同じように、困った顔をしながら戦況報告を始めた。

「まずはエジエイ防衛戦です。すでにご存知の通り、数日前にロウリア軍の先遣隊がエジエイ西側約5kmの地点に野営地を築きました。ここまではご存知の方も多いと思いますが…」

彼は一息入れ、続けた。

「実は昨日、西部方面師団のノウ將軍と、増援として派遣された陸上自衛隊師団長である大内田様が口論を始めたらしく…何やかんやあつて自衛隊だけで敵を撃退することとなったようです」

「!?!」

ぞんなことは寝耳に水である。いや熱湯をぶっかけられたと表現してもいい。

外交問題になりかねない上に、彼の国の食糧事情からして考えにくいだが、最悪、軍事的支援を止められる可能性すら有り得るのだ。

「そ、そんな?! そんなバカな事をしたやつがいるのか?!」

「我らの頼みの綱だぞ! それを邪険に扱う者など…!」

当然、参加者達は怒り狂う。

日本国による支援を失ったら最後、公国はロウリア王国に蹂躪される他ないのだ。

特に会議に参加するドワーフやエルフ、獣人等の亜人達の声は大きかった。

彼らのこのような反応を予想していたのか、陸軍幹部は特に目立つた動揺を見せず、咳払いをしてから続ける。

「えー、続けます。そして今朝方、日本国はロウリア王国軍に降伏勧告を発令し、2時間後、それに従わなかったロウリア軍2万人を壊滅させました。同戦いで捕虜は300名ほどおりますが、全員が難聴等の症状を訴えているようです。中には内臓に損傷が見られる者も」

「……………」

「あと肝心の日本軍の損害ですが…驚くべきことに全くありません。彼らは誰も死なず、負傷せずに2万の敵を壊滅させたのです。以上がエージェイ防衛戦の概要となります」

ミルカンはこういう事だったのかと納得した。

なるほど、確かに現実離れし過ぎている。

「…ちよつと質問があるのだが、日本軍はどのような攻撃を行ったのだ?」

「詳細は不明です。城の者に聞くと、いきなり轟音がしたとのことです」

「それは高威力の魔法攻撃か何かかね？」

「それも不明です。城にいる魔導師達はそのような魔力反応は感知していないと証言しています」

「……………」

絶句である。もはや何から聞けば良いのかすら分からない。

それは会場にいる誰もが「新手の神話か御伽噺を聞かされたのかな？」と疑問を持つほど、有り得ない戦闘結果だったのだ。

「話は変わりますが…皆さん、お手元の資料をご覧ください」

この調子では話が進まないため、カナタ首相が無理やり話を進ませ、日本から輸入した異常に安く、そのくせ非常に上質な紙に一同は舌を巻いた。

が、彼らが驚いたのは紙の質だけではなかった。

「ロウリア首都鎮圧計画…?!」

「日本はロウリアの首都を強襲し、武装勢力の長…つまりロウリア王を大量殺人罪で逮捕したいと提案してきています。これに反対のもの？」

ここにいる者達の中にも、少なからず日本を毛嫌いする者もいたが、これに反対する者は当然いない。

自分達の代わりに日本がやってくれるのなら、多少勝手でも良いという意見が大半だったためである。

そもそも相手は、クワ・トイネだけでは到底太刀打ちできないようなロウリア王国。それを代わりに倒してくれるなんて、まるで夢のような話であった。

「別にいいのではないか？ 我々に損はないし…」

「まあ日本がどうしても言うなら…」

政治部会では全会一致で日本軍の国内及びロウリア領での全域における戦闘の許可が決議された。

「東部諸侯団とはまだ連絡が取れないのかあッ?!」

副将アデムが通信隊を怒鳴りつける。普段から彼は粗暴で嫌な奴だったが、今はそれに拍車がかけられていた。

「はい。魔信を送っていますが、返事ありません」

「飛竜偵察隊はッ?!」

「間もなく現場に着きます」

先遣隊とは言え、2万人もの精鋭で構成される彼らが戦況報告を送る間もなく全滅したとは考えられない。

例え列強の軍が相手であれど、それをする時間くらいはあるはずなのだ。

「…敵は何なのだ?!」

軍内部で流れている噂が真実だとすると、敵に日本という非常に強い国がいるようだが、あんな国が存在する訳がなかった。日本が存在すると言われている場所は、小さな群島しか無かったのだから。

今回の戦争は何かがおかしい。アデムは奇妙な感覚に囚われていた。

「なんだこれは…?!」

エジエイ周辺の偵察を任せられた竜騎士12人は、眼前に地獄が広がっているのを確認する。

すぐさまワイバーンを付近に着陸させ、自分の足でその場所へと向かう。

そこに近付くにつれ、嫌な臭いが辺りを漂った。

「これは…例の先遣隊だよな…?」

「はは…まさかな…」

彼らが見たのは、まるで陣形の真ん中で大爆発が起きたような戦場の跡地であった。

原型を留めている遺体の防具を見ると、それは間違いなくロウリア軍の物である。

腐敗状況から見ると、戦闘は昨日の朝方に行われたのだろう。中にはまだ熱を持っている物もあった。

「…おい、なんだこの損傷の仕方は？」

確かによく見ると、爆発とは一口で言っても、それとは明らかに違う原因で死亡している者が大半だ。

複数の大魔導師による魔法攻撃の可能性もあるが、爆発を伴う攻撃ならもつと遺体が離散していても良いはずである。

「なんだ…?! これは…!!」

ほぼ全ての遺体が上から押し潰されたような損傷の仕方をしていたのだ。

「こんな攻撃魔法…俺は知らないぞ…?」

おかしいのはそれだけではなかった。

「なあ、敵の死体は？ お前ら見たか？」

探しても探しても、敵のと思われる物体が見つからないのだ。

それは死体だけでなく、装備や物資でもある。

「……………まずは報告だ。帰るぞ」

報告するためと言うより、実際は怖いから早く帰りたいというのが本音であった。

しかし誰もそれを言わない。言ったら何か大変な事が起きるような気がしたのだ。

そして彼らは振り返り、立ち止まった。

「はい、止まってください。動かないで下さいね」

「…誰だお前!？」

誰もいなかったはずなのに、彼らの目の前には「誰か」がいた。

その不審な人物の周囲にはこれと言った遮蔽物はなく、この人物が突如としてこの場に現れたのは明確であった。

「えっと…誰だお前は？」

その人物は緑と茶色の斑模様の服を着ており、背中からは透明な羽が4本生えていた。

これには少なからず驚いたが、恐らくは日本国の「魔人」だろう。手には見慣れない素材で出来た槍斧を持っており、どうやら1人だけのようだ。

「私は日本国陸上自衛隊の者です。レーダーに貴方達が映ったそうなので、拘束しに参りました」

「え、はあ…？」

まず彼らが思ったのは、「訳が分からない」だ。

ワイバーンから降りているとは言え、こちらは竜騎士12人。装備は劣るが、全員が短刀で武装している。

もしこの場で戦えば、多少の死人は出るだろうが、疑問の余地なく、絶対に負けようがない。

仮に彼が飛べたとしても、こんな人間大の生き物がワイバーン相手に空戦で勝てるとは思えなかった。

この人数を相手に勝てると思うなら、真性の「バカ」か「化け物」だ。「あのなあ坊主？ここは戦場で、俺達は敵同士だ。戦力を良く見極めろよ？ 勝ち目が無い敵に挑むのは、ただの蛮勇だぞ？」

「見極めた上で拘束しに来たのです。今の言葉をそっくりそのままお返しします」

どうやら目の前の敵は本当に頭がイカれているらしく、見逃してくれそうに無いと竜騎士達は判断した。どちらにしろ始末するつもりではあったが。

こちらは短刀しかないが、1人が囷となれば十分な対処ができる数の人員がいる。

「お前ら分かっているな？ 俺が囷になる。その間に奴を囷め」
獰猛な竜騎を従える勇猛な竜騎士達。

そんな彼らを束ねる隊長は、人一倍肝が据わっていた。

「了解…！」

「いくぞ？ 3、2、1…今だ！」

勢い良く隊長が飛び出す。

その隙に他の人達は回り込み——
バチュン!!

「は…ッ？」

敵が武器を振るった瞬間、血と思しき温い液体が顔にかかる。隊長は胸から上が無くなって、というより文字通り消滅しており、残された方の体は数歩走った後に転び、停止した。

「で、次の囷は誰ですか？」

足は自然と止まり、手から武器が落ちる。

空には敵の増援と思しき魔人が多数飛来しており、ブンブンと耳に心地よくない羽音を出していた。

なんて怪力だ。なんて武器だ。

こんなの勝てっこない…。

ワイバーンの所まで辿り着けたなら、いくらか戦いようはあったかもしれない。だが、彼らはあの一瞬で勝ち目がないと悟ったのだ。

「降参だ…。こんなに強いとは思わなかったよ。さあ煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

竜騎士11人はワイバーンを放棄し、降伏。

後に彼らはエジエイに捕虜として収容されているロウリア兵達と出会い、再び日本軍の異常な強さを思い知った。

「なんだって…?! ギム本陣が壊滅?!」

「ああ、そうだ。クワ・トイネの奴らに教えてもらってな…。パンドール将軍も行方不明らしい」

曰く、ギムに駐屯する師団が壊滅したと。

そこにいるワイバーン達は竜舎で休んでいたものも一瞬で全滅し、強大な爆裂魔法のようなものではぼ全ての兵士が焼かれたとも。

それを知った竜騎士達は何を思っただろうか。

身柄を拘束された竜騎士ムーラは不幸中の幸いとも言える自分の境遇に感謝していた。

「もしかしたら、あいつが助けてくれたのかもな…」

いつの間にか、妻からもらったお守りが消えていることに気付く。

一時期は死を覚悟したが、家族にまた会えるかもしれないと思い、彼は今ある生にこれ以上なく喜んだ。

10話：王都ジン・ハーク上空制圧戦

中央歴1639年8月29日――

ロウリア王国　　王都ジン・ハーク　　ハーク城内

「それでは会議を開催します」

この日、ロウリア王国の首都ジン・ハークに建つハーク城では、国防の要である軍幹部らが勢揃いしていた。

議題はもちろん対クワ・トイネ戦のこと。絶対に勝てるという戦力差で、農家の国に負けたことは彼らの腸を煮え繰り返すのには十分すぎる理由だった。

それも、負けたのは1回だけではない。

戦争前夜はこれでもかと高揚していた彼らだが、今やその見る影もないほど顔は暗く、絶望のドン底へと落とされているようだった。

「パタジン將軍、現況説明をお願いします」

王国防衛騎士団の將軍であるパタジン。

いつも自信に満ち溢れていたはずの彼は、いつにも増して疲れ果てていた。

「皆の衆、緊急会議に集まっていたいただき感謝いたす。此度の――（以下中略）――、この時点で日本国がクワ・トイネに味方し、参戦を表明しました。それから我が軍は敗北に敗北を重ね……」

ここにいる会議の参加者達は敗北続きの報告に嫌気が差しており、歯を食いしばって不快感をあらわにする。

それと同時に、絶望していた。

「ギムを占領した我が国の陸軍は、先遣隊及び本陣の壊滅も確認されており、本陣のわずかな生き残りに聞き取り調査を行った結果……日本軍の鉄竜が空から攻撃を行ったと判明いたしました」

彼の言葉は鉛のように重く、参加者達は頭を抱える。

中には誰にも聞こえないように「どこが文明圏外の蛮族だ！」とぼやく者もいた。

「このままでは王都に日本軍が攻め入って来る可能性も考えなければ

ならない。誰か案はないか？」

「それについては私が」

パタジン将軍の問いかけに対し、真っ先に手を挙げたのは三大将軍の一人、ミニネルだった。

「ほう、さすがは三大将軍であるミニネルだ。忌憚なく述べよ」

「はい、日本軍は王都に来る前に、南東の工業都市ビーズルを通過する必要があります。ここは1つ、王都防衛団の1部を含めたロウリア王国軍の全兵力をビーズルに集結しましょう」

つまり彼は、ビーズルで全ての決着を着けようと言うのだ。

いささか博打じみているが、無謀という訳でもない。

日本軍がいくら強かろうと、全兵力なら何とかなるはずだと彼らは考えていたからだ。

「そうだな…だが、それを決めるのはまだ時期尚早であろう。もう少し奴らの動向を見てからでも…」

パタジンが言い終わるや否や、扉がバタンと開き、全員が音のした方向を向く。

そこにいた伝令兵らしき人物の顔は青ざめており、「これから聞きたくない事を聞かされるのだな」と全員が身構える。

「会議中失礼します！ 海軍本部より連絡！ 『現在日本軍に攻撃を受けている』との事です！ それともう1つ！ 王都付近に日本軍のものと思しき巨大な鉄竜が一騎だけ確認されました！」

「——!!!」

パタジンは真っ先に部屋の窓へ駆け寄り、空を見上げた。

どこまでも澄み渡る青い空に、小さい汚れのような黒点が浮かぶ。目を凝らすと、それが件の鉄竜であることが分かった。

「あれが日本国の鉄竜…?! なんと巨大で面妖であるか…」

その大きさはまるで神竜のよう。

胴体が非常に太く丸く、外装は緑と茶色の奇妙な斑模様をしており、無機質。

おまけに翼は羽ばたいておらず、その「竜」はパタジンが知るものとは天と地ほどの差があった。

唯一の共通点と言えば「飛ぶこと」くらいであろう。

「不味い！　すぐに竜騎士団を飛ばせ！　王都が火の海になるぞ！」
けたたましい鐘の音があちこちで鳴り響き、第1、第2、第3竜騎士団の全てが緊急発進の命を受ける。

『王都防衛隊の全竜騎士団に告ぐ！　敵の巨大鉄竜が接近中！　全竜騎士は即座に発進、敵を撃墜せよッ!!』

街に住まう人々は彼らの全力出撃を、まるで凱旋パレードのように送り迎え、その姿を称えた。

それが彼らにとって最後のフライング^{出撃}になるとも知らずに。

「行くぞ相棒！」

愛騎に跨り、新人竜騎士ハンスは初の出撃に燃える。

城壁に隠れているのか、まだ距離があるだけなのか、敵の姿はまだ見えない。

「竜騎士ハンス！　行きますー！」

彼は隊の誰よりも先に飛び立ち、大空を舞う。

空は快晴で風が涼しく、太陽が眩しかった。

「さて、敵は……」

すでに敵の方角は知らされているため、ハンスは首を回し、その方向を見る。

そして彼は驚愕し、叫んだ。

「あれが敵の竜?!　なんて大きすぎだ!!」

自分の遠近感が狂ったのではないかと思う程の巨大な体躯。

しかもかなりの速度が出ているらしく、その姿はみるみるうちに大きくなっていく。

「うおッ?!　なんじゃありゃあ?!」

後から続く竜騎士達もハンスと似たような反応であった。

しかし彼らは王都の防衛を任せられる精鋭中の精鋭。すぐに落ち着きを取り戻し、即座に敵の分析、戦い方を模索する。

「デカイな……あれの所属はどこだ？　まさか魔法帝国じゃないだろうな?」

「バカ言うな。日の丸が見えるだろ？ 日本軍だよ」

「はッ！ どこかと思つたら文明圏外の蛮族か！」

「あんなの所有してる時点で蛮族じゃねえよ。しかも噂によるとスゲエ強いらしいぞ。誘導魔光弾も持つてるとか…」

「それはもはや『古の魔法帝国』じゃないか。でも、どうせ噂だろ？」

「まあ…そうなんだが」

「じゃあ楽勝じゃん♪」

笑い声が高空に鳴り響く。

彼らはよもや、自分達が負けるとは思つてもいなかったのだ。

「よしッ…！ あの巨大鉄竜をサクッとやりますか！」

「そうだな！ 晩飯までには帰るぞ！」

しかし、彼らの戦う相手は巨大鉄竜ではない。

彼らの言う鉄竜は「戦闘を行う機械」を運ぶ「輸送機」であり、どちらかと言えば「航空母艦」であり、別の言い方をすれば「飛行空母」であった。

「ん…？」

目の良い竜騎士達が敵の僅かな異変に気付くのにそう時間はかからなかった。

巨大鉄竜の尾部——現代人に分かりやすいように言えば機体の後部——から「虫」のような小さな飛行物体が落とされていたのだ。

「なんだ？ なにか産み落とされたぞ？」

「産卵でもしているのか？」

空中で産卵する竜がどこにいる！

あれは敵の攻撃だ！

誰かがそう言う前に、その「虫」は異常な速度で竜騎士団の前を横切った。

竜騎士の類まれなる動体視力を持つてしても、目に追えない速度で飛ぶ「飛行物体」。

あまりにも速すぎるため、その姿をハッキリと確認できた者は皆無であった。

「うわあああああッ!!!」

「——なッ?! ハンス!!」

最も敵に近かったせい、真つ先に撃墜されたのはまだ新人であるハンスの騎であった。

しかも絶命したのはワイバーンだけであるらしく、生々しい断末魔が竜騎士達の士気を削る。

「クソがッ!!! 野郎め!! 許せねえ!!」

「新人くんの仇を取るぞ! 全騎散開! 敵を撃滅せよ!!」
と、意気込んだ彼らだが、あまりにも相手が悪かった。

『全方位飛行型 無人戦闘機』

「UFO」のような外装を持つ円盤形の戦闘用ドローン。

重心を中心に置き、機体を外側に向けて薄くすることで周囲360度が翼と化す。裏返しでも飛行が出来、急激な方向転換、超音速飛行(最高速度はマッハ10〜15とされている)が可能。武装は『高出力レーザー照射機』。

搭載された人工知能はイージスシステムのように仲間内で情報を共有、瞬時に戦略を練り、連携を取り合う。

元はトンボ型の『火星生物』テラフォーマーに対抗するために開発された無人機であったため、現在は敵の『被手術兵』に対抗するための兵器とされている。

「お…おい! なんだあれは!!」

町の住民は空を見上げ、王都防衛を担う竜騎士団が次々と撃墜される光景を目の当たりにしていた。

地上から見える部分は真つ黒い影を纏い、あまりにも薄すぎるため旋回すると一瞬見えなくなる「それ」を、彼らはどのように認識しただろうか。

少なくとも、未曾有の脅威だとは理解しただろう。

精鋭であるはずのワイバーン部隊がまるで害虫駆除の「虫」のようにボトボトと落ちてくるのだから。

「いやああああ!!!」

「逃げろ！ 日本が攻めてきた！」

「うわっ！ あいつらこっちに来るぞ！」

しばらくは高空で戦っていた謎の飛行物体だったが、何を思ったのか、それらはいきなり全機が高度を落とし、建物の屋根スレスレの高度で乱舞し始めた。

ワイバーンでも平野なら敵と同じ高さを飛ぶことができるだろう。だが高さの違う建物がいくつも存在する市街地で同じ高度で飛ぶとなると、あまりにも危険すぎる。

こうなつてくると高度の有利はむしろ仇となってくる。

竜騎士達は敵より高い位置、つまり攻撃を外せば確実に町に被害が出る位置からしか攻撃できないのだ。

「クソっ！ 俺達が町に手を出せないのをいいことに！」

「王都を蹂躪されるよりはマシだ！ この際多少の被害は仕方ない！ 構わず撃て！」

「な…ッ！ 守るべき民に矛先を向けると言うのですか！」

「ならどうすると言うのだ！ あいつらがいつ住民に危害を加えてもおかしくないのだぞ！」

ちなみにこの『無人戦闘機』が高度を落としたのは、『AI』の判断人工知能によるものである。

それは人間とほぼ同等の思考をするまでに至っており、「敵の護衛対象はこの町、民間人。高度を落とし、護衛対象が流れ弾に被弾する可能性を高めれば敵は攻撃できない」と『AI』は判断したのだ。

「我慢比べだ！ 我々が敵を攻撃できないのと同じように、敵も上方にいる我々に攻撃できない——」

そんなことはなかった。

この無人機は内部の機構を変形させることによってレーザー照射器の向きを変えることができ、前方だけでなく、上部、下部、後方にも攻撃を行えるように設計されている。

人間が乗るスペースの必要がないからこそ成せる技であった。

「ぎゃああああ!!！」

再び、見えない力によってボトボトと落とされ始める竜騎士団。

すでに彼らの数は半分以下となっており、このままでは全滅も必至であると思われた。

「もう街の被害を気にしてはいられん！ 全員集まれ！ 火炎弾の空
間制圧射撃を実施する!!」

これが成功しようがしまいが、少なからず町に被害が出るだろう。

竜騎士団長は苦渋の決断をし、生き残りの竜騎士を招集する。

しばらくすると生き残った数十騎のワイバーンが縦、横、斜めに、まるで面のように並んで口を開け、それを確認すると彼はカウントダウンを開始した。

「発射5秒前！ 4、3、2、1——発射ア!!」

生き残りのワイバーンによる火炎弾の一斉射撃。

整列した点が互いに引火するように燃え上がり、王都上空に炎の壁が出現、地面に着弾し、爆発が巻き起こる。

奇跡的にも、彼らの攻撃による死傷者はゼロであった。

「…やったか?!」

手応えはないが、彼らが生きているような音沙汰もない。

…撃墜——!?!

「団長！ 後ろです！」

「何だとおっ?!」

団長が振り返る間もなく、王都上空は再び地獄の様相を呈し、ワイバーン部隊は為す術もなく落とされていく。

落下して来たワイバーンの亡骸による被害も少なからず出ており、市民は恐怖のドン底に陥れられた。

「おのれ！ 好き勝手しおって！ 皆の者、王宮魔導師の腕を見せるぞ！」

絶望的な空戦が繰り広げられる中、王宮首席魔導師ヤミレイは配下の王宮魔導師100人を連れ、階段で城壁の上へと駆け上がって行く。

彼らが城壁の上で整列を完了する頃には、空には敵騎だけが飛び、すでに友軍騎の姿はなかった。

「むう……！ 大空に散って行った仲間の仇！ くらえ！ ファイアー
ボ——」

しかしヤミレイはその魔法を見せ付ける事無く、謎の力によって頭部を瞬時に焼かれ、絶命した。

「ヤミレイ様?！」

「クソ野郎が！ くらえ！ ファイアー——」

何故かは分からないが、杖を上空に向けた者だけが倒れていく。それにいち早く気づき、生き残った幸運な者はたった数名。

その数名だけは攻撃をしなかった、もしくは攻撃をするような素振りを見せなかったため、『A I』^{人工知能}は敵対的な脅威と判断せず、攻撃対象から外していたのだ。

しばらくすると謎の飛行物体は満足したのか、巨大な母機の元へと帰り、悠々と北の空に飛び去って行った。

「竜騎士団が全滅するとは、一体どういうことだ！」

その日の夜に急遽行われた軍部の会議は紛糾していた。

作戦最高指揮官であるパタジン将軍が吠え、ヤミレイが座るはずの席が空席になっているのを見た彼らは、いよいよ終わりだと諦める。

「日本国が参戦してから敗退に敗退を繰り返している！ このままでは我が国が亡国となるぞ！」

緊急会議の場を深い、深い沈黙が満ちた。

それを見かねたのか、三大将軍の一人、ミミネルが口を開く。

「将軍、日本に関してですが……」

「なんだ？」

「いまだ陸自を見た者がおりません。空からの苛烈な爆撃、魔人、海魔がごとき艦艇。これらを見た者はおりますが、陸自は未だに誰も確認していないのです」

「りくじ？」

「失礼、陸軍ですね。緊張で噛んでしまいました」

一応ロウリア兵で陸上自衛隊の姿を確認して生きている者は存在する。エジエイ西側に展開していた東部諸侯団の生き残りも、早期に降伏したワイバーン偵察隊だ。

だが彼らは味方に情報を伝える間も無く捕虜となってしまうため、誰も彼らの行方を知らないのだ。

ミミネルは続ける。

「今回の攻撃で日本軍が強力な海と空の兵を持っていることは裏付けました。ですが日本は島国です。もしかすると陸軍はあまり強くないのかもしれませんが」

「ずいぶんと希望的な観測だが、確かにその可能性もあるかもしれない。」

一同はそう思いつつ、彼の話に耳を傾き続けた。

「いくら空と海が強くとも、陸軍が弱ければ町は占領できません。そこで私は今一度、提案いたします。工業都市ビーズルに全戦力を集中し、敵の陸軍を迎え撃ちましょう！　そこでの戦に勝てば、大地は我らのものです！」

さすがは三大将軍だ。と賞賛と共に拍手が送られる。

パタジンも「大地は我らのもの」という何とも魅惑的で甘美な言葉に、いくらか冷静さを取り戻した。

「よし！　全兵力にビーズルに集まるよう連絡しろ！　王都防衛騎士団も一部出陣だ！」

「おお!!!」

絶望的な状況が変わる。

そんな夢物語の中で、彼らは自分が主人公になったような高揚感を感じていた。

「これで勝てる！　ロウリア王国は不滅だ！」

「ロウリア王国万歳!!　国王万歳!!」

真つ暗闇の中で灯る、一筋の光。

まるで宴会場のようなになった会議場では、日本軍に対するありとあらゆる対策が立てられ、彼らは勝利を確信していた。

「空からの攻撃は——」

「いや、こうした方が——」

「海はどうする?」

「いい考えがあるぞ! まずはこうして——」

しかし、誰も気付いていなかった。

その希望が、誘蛾灯の放つ光である事に。

1-1話：ロウリア王捕獲作戦I

ロウリア王国 王都ジン・ハーク 早朝

ロウリア王国王都防衛騎士団の管轄である城壁監視塔は現在、24時間体制で監視員を増員している。

先日の攻撃により緊急体制となった監視塔で、監視員マルパネウスとその同僚は自分の職務を全うしていた。

「今日は視界が悪いな…」

その日の朝は霧が発生しており、監視員からしてみれば最悪のコンディションだ。

近々、敵が攻めてくるという噂も広がっているため、気は抜けない。

「…ん？ なんだあれ？」

「さあ…動物じゃないか？」

角ばった体を持ち、長い角を生やしている。今までに見たことのない魔物の群れだ。

しかし、様子がおかしい。

「なんか…こつち来てないか？」

それだけではない。

その魔物は整然と並んで隊列を組んでおり、何よりも速度が異常なのだ。

「まさか…敵か?!」

「分からん。何かの攻城兵器かもしれんし、一応報告しておこう」

マルパネウスは魔信のスイッチを押し込み、叫んだ。

『第17監視塔より王都防衛本部。北側4kmに正体不明の物体を確認。繰り返し返す——』

報告を受けた通信員は止まりかけていた脳をある程度覚醒させ、返答した。

「正体不明では分からない。具体的に説明せよ」

『えーとめっちゃ足の速い破城槌……ザザザ』

「あれ？」

ドオン…

突如、遠くで何かが爆発する音が通信員の耳に入った。

「——!!! 第17監視塔応答せよ！ 聞こえるか?! 応答せよ！」

返事はなく、聞こえてくるのはノイズだけ。

「17監視塔が攻撃を受けた！ 警鐘鳴らせ！」

すぐさま鐘の音が鳴らされ、全兵士に緊急出動命令が出される。

街では慌てて家を飛び出した人々がパニックを起こし、すでに負傷者も出ていた。

「状況は—」

王都防衛騎士団将軍パタジンは、先程の爆発音を聞くなり一瞬で覚醒し、すでに鎧に身を包み、出勤していた。

「はっ！ 今のところ第17監視塔が足の速い破城槌に攻撃を受けたと報告が入っております。城壁に損害はありませんが、敵は不明です」

「まさか日本軍か…？ ビーズルを無視して来たとは…！」

パタジンが作戦室の扉を開くと、すでに先日の面子…1部はビーズルへ向かっていたが、が集結していた。

誰もが怒りと不安を顕にしている。

この前の会議で練りに練った計画書が、効果を発揮する間もなくゴミとなったからだ。

ドオン…

再び鳴り響く轟音。

しばらくして聞こえてくるドタドタと廊下を走る音は、良くない知らせだと誰もが分かりきっていた。

「報告します！ 敵の2回目の攻撃により、第1城壁の1部が崩れ落ちました！」

王都ジン・ハークは外側から順に第1、第2、第3という3重の城壁に囲まれている城塞都市である。

その1つが崩壊、つまり機能を停止したという報告は、彼らの耳には命のカウントダウンのようにも聞こえた。

「敵は？」

「たった今、監視塔の1つが日の丸の旗を確認しました！ 日本軍です！」

最悪のタイミングで来てしまったか…。

まさか敵がビーズルを無視して来るとは思わず、かなりの戦力が不在なのだ。

「現在投入可能な兵力は？」

「歩兵まだ非常招集中で、当直の即応騎兵400騎でしたら、今すぐにも出陣可能です」

パタジンは悩んだ。個別に戦力を投入するか、少し待ってから一気に戦力を投入するかを。

前者は各個撃破される可能性が高く、リスクが大きい。

しかし後者の選択肢をとれるほど、時間が余っているようにも思えなかった。

「パタジン将軍、ここは機動力の高い騎兵を使い、敵の強さを測りましょう。決戦の前に敵の攻撃方法や、その威力を見て弱点を探るのです」

またも発言したのは、三大将軍の1人であるミニメルであった。

「そうだな…よし、例の騎兵隊を出陣させよ。いくら騎兵とは言え、たったの400騎だ。無理はするな。ある程度戦ったら離脱するように伝える。軍師には壁上で彼らの戦いを目に焼き付けさせろ！ 彼らの命を無駄にするな！」

「ははっ!!」

「隊長、騎馬隊を確認しました。時速50km、装備は鉄鎧です」

「報告通りだな。前時代的な装備と戦闘ドクトリンとは言え、迂回されて本隊との挟撃にいられたら厄介だ。敵さんがバカで助かったよ」

「これである程度の脅威をノーリスクで排除出来ませぬ」

「ああ、撃て」

陸上自衛隊の斉射により、ロウリア王国王都防衛隊第32騎士団は300騎以上の人員を損失、実質的に壊滅。

その後、遅れてやって来た歩兵、重装歩兵、弓兵、騎兵、魔導師による一斉攻撃も似たような結果となった。

「隊長、我々は本当に戦争をやっているのでしょうか？ あまりにも呆気なさすぎます」

「人間が人間を効率的に殺すために創られた武器を使っているからな。そういうもんだろ」

「それはそうと、上から言われてた本国派遣隊の実戦訓練はどうします？ このままでは彼ら、何も出来ずに帰国することになりますよ？」

「それは考えてあるから心配するな。俺達は夜までここに居座るだけで良い。あと焚き火の用意をしとけ、一芝居うつぞ」

「はあ…？」

同日 夜

「日本軍はまだ攻めてこないな。いつ王都に再攻撃を仕掛けてくるのだろうか」

とは言ってたパタジンであったが、もう来て欲しくないと言うのが本音であった。

それに答えたのは、やはり三大将軍のミミネル。

どういうわけか、彼は今までの戦争以上に意見具申をしてきているのだった。

まるで人が変わったように。

「あれほどの魔力投射をしたのです。意外と消耗しているのかもしれない」

「と考えると…今が好機か？」

パタジンはカマをかけることにしてみた。

この空前絶後の損害を見た上で、「今が好機だ」とでも答えたら彼がスパイである可能性が高まる。

「…いえ、あくまで可能性の話をしてみただけです。もしこれが真実でしたら好機かもしれません」

「…そうだな」

考え過ぎだったか…。

恐らく、亡国の危機に瀕して愛国心が高まっただけだろう。

「もしくは、ただ単純に休んでいるのかもしれませんが。敵からしてみれば、我々がこれ以上出撃しても損害を増やすだけで無意味に見えるのでしよう」

「…そこに付け込むのか！」

なるほど。今日の敵は大勝しているため、もうこれ以上の出撃はないと踏んで、宴をしている可能性すらある。

さすがは三大將軍のミニネルだ、と彼は心の中で彼を見直した。

「ええ、今回はカルシオ將軍に行つてもらいましょう。彼の率いる王都防衛騎士団第3騎兵隊は夜目の効く者が多く、夜の闇に紛れての奇襲には打って付けです」

そして彼は会議室のカーテンを開き、続けた。

「おまけに敵の陣地を見て下さい。不用心にも火を炊いております！
気が緩んだのでしょうか！ もう今夜しかございません！」

それを見た彼らに、ふつふつと怒りが込み上げてくる。

同胞を殺された悲しみが大きな炎となつて燃え上がり、会議室を怨恨が冷たく包む。

「何としても敵に一矢報いたい…ツ!!」
と言うのが彼らの総意であった。

「…カルシオ、分かっているな？」

「ははっ!! 我らが同胞の魂は刃となり、敵に突き刺さるでしょう！」

「良い心掛けだ。他の者も出撃の準備を整えろ。カルシオが敵の攪乱に成功した後、全兵力を以て敵を殲滅するぞ！」

夜も深くなり、ほとんどの者が眠りにつく中、知将カルシオとその配下2000名の騎兵は静かに出陣する。

そしてその後方には王都中から掻き集めた兵士が今か今かと吉報を待ち続け、仲間の無念を晴らすための戦意を滾らせていた。

「また報告通りですか？ 隊長」

「ああ、また報告通りだ。壁で隠れて見えないが、あの後ろには本隊も待ち構えているらしい。作戦を決行するには最高の状況だな」

隊員達は暗視スコープを駆使し、敵が進軍する様子を事細かに把握していた。

世代に世代を重ね、改良が繰り返されて来た現代の暗視装置は手術を受けていない一般の隊員達にも、新月の夜が真昼のように見える目を与えていた。

「敵の注意をこちらに釘付けにするぞ、照明弾用意。奇襲部隊を殲滅した後、城門を破壊して本国派遣隊を突撃させろ。俺達はその後に続く」

「了解しました」

漆黒の闇をカルシオ達は進軍する。

夜目が効く者を中心に集められたこの部隊は、報復攻撃の先陣を切る榮譽を授かったと皆が喜んでいたが、カルシオはただ1人、背中に冷や汗をかいていた。

何故か妙に見られている気がするのだ。

そんな彼の不安は的中し、突如、夜の闇は打ち払われる。

上空に太陽が出現したのだ。

「なッ…?! い、いかん！ 逃げろ！」

彼が命令を叫んだ直後、敵陣から無数の光弾が飛来し、部隊を襲つ

た。

軽い矢なら簡単に弾く鉄の鎧が、紙のように破られ、兵士が倒れ込む。

『パタジン將軍、聞こえますか?! 奇襲は失ば——ザザザー…』

カルシオの率いた2000人も兵士はあつという間に全滅し、司令室から戦場を眺めていたパタジンとその仲間も、もう切れる手札が無いことに気が付き、絶望する。

後はもう、ビーズルからの増援を待つしか無いのだ。

しかし、時間は彼らの味方ではなかった。

突如、城門付近に爆煙が上り、白い壁のようなものが王都に広まる。その壁が彼のいる一室に到達すると、轟音が鳴り響いた。

「將軍！ 城門が破壊されました！ 日本軍がなだれ込んで来ます！」

全員が戦慄する。敵はこの夜で全てを終わらせるつもりなのだ。

しかし…

「すでに城門付近には総戦力が集結している。焦るな、我々は最後の一兵まで戦うぞ。お前達も前線に行つて指揮を執れ」

「ははっ!!」

パタジンと通信員以外は馬を駆け、友軍の元へと向かった。

この行動を含め、彼らの全てが日本の手の上で踊らされているだけと一体誰が予想しようか。

彼らは走る。

誘蛾灯太陽に惹かれる虫のように。

12話：ロウリア王捕獲作戦Ⅱ

王都ジン・ハーク 北側城門

ロウリア王国の技術を結集して作られた北側正面城門は、その強度に定評がある。

しかし圧倒的な技術差を前には、そんなものはハリボテウドの大本に等しい。ヒュルル：という音が聞こえてきたかと思うと、いきなり爆発が起こり、城門は完全に瓦礫となった。

そして、砂煙から姿を現すのは異形の者達。

それを目の前にした兵士達は何を思っただろうか。

「化け物…!!」

「まるで百鬼夜行に遭ったようだった。」と、後に日本でインタビューをされた生き残りはそう語る。

『本国派遣隊の全隊員に告ぐ。一般人に被害が出ない程度に…』

骨伝導イヤホンから伝えられた指令は、シンプルであった。

『――暴れる!!』

この世界線の日本では、通称「バグズ手術」もしくは「モザイクオーガン・オペレーションM・O・手術」と呼ばれる、生物としての人間の機能を大幅に向上する手術が一般化されていた。

その概要は、ヒトがヒト以外の生物の能力を獲得できること。

例えば翼を持つ生物を「手術ベース」にすれば空を飛べ、再生能力を持つ生物をベースにすれば失った体の部位を再生することができるといふ夢のような話だ。

だが、当然肉体への負担は大きく、当初は手術成功率も3割ほどであつたため、一般人はこれを受けられず、火星で異常進化を経たテラフォーマーズ害 虫と戦う者にしか手術は許されていなかった。

しかし、それはもう過去の話。

火星での戦いは終わり、そこで得た戦エイリアンエンジンウイルス利 品は手術の成功率をほぼ100%まで高めることを可能にした。

そして技術の発展で真っ先に変わるのは、軍である。

「これ使えばヤベえ兵士量産出来んじゃん！」

真つ先に目を付けたのは、中国であった。

人権がない国は、モルモットが多い。

そしてそのモルモットは、全て虎となった。

小銃が効かない兵士、戦車の装甲をも紙のように破壊する兵士、戦闘機に追い付いて素手で破壊する兵士。

戦力としての利点だけでなく、超高額な手術費用さえ無視すれば、後は変身薬の代金だけで何百億もする兵器がゴミとなる。

戦争時における敵国への経済的な打撃を考えれば、可能性は無限大だ。

人民解放軍は変わった。なら、我々は？

中国に続いたのは、アメリカ合衆国、ロシア連邦、欧州各国、そして日本であった。

「第四次世界大戦では、石と棍棒が主な兵器となる。」と、アインシュタインは言った。

彼の予言は、ある程度当たった事となる。

人類は気付いたのだ。

長距離ならミサイルで、近距離ならばむしろ、「石と棍棒」の方が良い。

「了解!!」

本国特別派遣隊。被手術兵の実戦経験が第7師団ばかりに偏るのは不味いと上が考え、各地の部隊から人員が集められ、特別に編成された増援部隊である。

その全員が手術を受けており、彼らは自衛隊内でも一騎当千の強さを誇る猛者だ。

今回はその1部を紹介しよう。

『アフリカゾウ』

現生する陸棲動物では最大種の像。その圧倒的な強さと凶暴性の前には、百獣の王でさえ近づくのを躊躇する。

大昔には兵器として飼育されていたこともあり、この生物の突進を前に逃げない人間などいない。

「どけえ!! チビどもお!!」

彼が腕を振るうだけで兵士だった物が宙を舞い、それらが味方に被害を出して落下する。

まるで巨人のような体躯。人間相手には有効な武器が全く効かない分厚い皮膚。それを振り回す重機のようなパワー。

まるで異界の魔物。最大最強の「陸の王者」である。

「何だあれは…! リントヴルムか…?!」

「いや…巨人だ…!」

巨人を先頭にした軍隊は、まだまだ続く。

我真つ先にと飛び出したのは、2匹の羽が生えた蟲であった。

オオスズメバチ
『大雀蜂』

日本最大、かつ最強と悪名高い昆虫。世界最大の殺人蜂とも呼ばれており、攻撃性が非常に高い獰猛な蟲である。

その戦闘能力も卓越したものがあがり、セイヨウミツバチの巣に単騎特攻をし、数万匹を虐殺したという記録も残っている。

「巨人の次は魔人かよ! どうなつてんだ?! クソッ!」

「もうダメだ! おしまいだあ!!」

騎士を鉄鎧ごと引き裂く怪力、猛毒の滴る毒針、そして戦車の装甲のような硬い外骨格。おまけに異常な攻撃性。

それは職務を全うしているのではなく、ただ本能のままに人を、敵を、生物を破壊する。

そして似たような奴がもう1匹。

『アフリカナイズドミツバチ』

通称「キラ^殺ビー^人」。こちらも非常に凶暴な種であり、その異常性は人工的に生み出された失敗作とも言われるほど。

ミツバチの仲間にしては運動性能、毒性が高く、縄張り意識が強い。

そして非常に短気な性格であるため、僅か0.5秒で対象を敵と決めつけ、1度敵と認識したら巣から何km離れていようと対象を追いかけ、攻撃を続ける。

「こいつら空を飛ぶぞ! 気を付けろ!」

「なんだと?! 日本に魔法は無かったはずだぞ?!」

「噂じゃあワイバーンすらいないらしいぞ！」

「そりゃあいないだろ…こんなヤバい奴らがいるんだから…」

空を飛ぶ魔人の数は続々と増え、ヴヴヴと不快な音が王都上空を乱舞する。

この前来た奴らと違うのは、今度は地上の兵士を積極的に狙って来るということだ。

ワイバーンには不可能な飛び方で、ワイバーンとは異質の攻撃で、空の魔人達は兵士の命を刈り取る。

しかし、その更に高空にいる物体の存在には誰一人として気が付かなかった。

「…陽動は成功したようだな」

漆黒の闇の中、王都上空をヘリコプターが音もなく飛翔する。現代に生きる者であれば、音をほとんど出さない回転翼機など見たことがないだろう。

その秘密は『音力発電』である。

音というのは空気の振動であり、振動というエネルギーが発生している以上それを変換させることさえできれば発電させることも可能なのだ。

それに真つ先に目を付けたのは、またも中国である。

「これ使えば音の少ないヘリ作り放題やん！」

空気の振動というエネルギーを、電力に変換する。

そうすれば音も減り、ロスとして出た分が電気として再利用可能という理屈であった。

結果、第一空挺団及びS A T混成部隊を乗せたヘリコプターは、王城広場に着くまで誰一人にも気付かれなかったのである。

その場にいた兵士達を除いて…。

「地上に武装勢力を確認！ 制圧射撃を開始する！」

発砲炎が光り、曳光弾がハーク城を守る第7、第8近衛隊に降り注

ぐ。

地上で動く者はいなくなると、滞空するヘリからロープが降ろされた。

「降下！ 降下！ 降下！」

鍛え上げられた精鋭達は、その仕事迅速たるや、王宮広場をあつさり制圧後、王城の図面に従い、王がいるであろう場所へと駆けた。

「空から軍を送り込んで来やがったのか…!!」

パタジンも司令室から敵兵が王城に降下する様子を目撃していた。

この世界で主要な航空戦力であるワイバーンは基本的に重たい物が運べず、乗せられる人員はせいぜい2名である。そして高価な竜騎士を歩兵として扱うと言った運用方法はなく、空から歩兵を送り込むという作戦自体が発想になかったのだ。

しばらくしないうちに、廊下からドタドタと誰かが走って来る音が聞こえてきた。

「ランド近衛大隊長より援軍の要請が入っています！ 敵は王を直接狙ってきたものと思われまます！」

「くそ…！ 城門の破壊も全て陽動だったと言うのか?!」

しかしパタジンは、報告をしに来たのが一般の兵士ではないことに気付く。

「……ミニネル?! なぜここに?! 前線で指揮を執っているはずじゃ…」

扉の前に立っているのは、三大将軍の1人、ミニネルであった。

「…まあ良い！ 通信員！ 北門に兵を半数残し、残りは王城に侵入して来た敵に差し向けよ！」

「了解！ こちら司令室、緊急…」

——パシユ！

突如、指令を出そうとしていた通信員が倒れる。

まるで一瞬で全身の力が抜けたように椅子から転げ落ちた彼は、頭

に穴が空いており、出血していた。

「…は?! おい、どうした?!」

しかしパタジンの介抱も虚しく、似たような現象は続く。

パシユ! パシユ!

まるで死神の鎌に魂を抜き取られたような不可視の攻撃。

彼は最初、報告にあったような日本の攻撃を疑ったが、近くにそれらしき影はない。

「くっ…! ミミネル、走ってどこか別の魔信機から指令を出してくれ。ここの魔信機は呪われているようだ」

「…」

魔法がある世界であれば、呪いという言葉が平然と出てくるのも無理はなからう。

しかし、ミミネルは何も言わず、じっと立っているだけであった。

「ミミネル…?」

「ぶ…ぶふお! 呪いですか?!」

彼は思わず吹き出し、ケラケラと腹を抱えて笑った。

まるで列強の人間が、蛮族を見るような目で。

「ミミネル…どうしたのだ?」

「いえね、明らかに私がやった事なのに…呪いつて! ひいゝお腹痛

い! (笑)」

ミミネルの手にはサイレンサー付きの拳銃がしっかりと握り締められていた。

しかし、パタジンは先程の不可解な現象がその仕業であるとは思いませんでした。

彼は列強であるパーパルディア皇国の長い、音が大きく、白い煙を吐き出す魔導銃は知っていたが、音をほとんど出さない極小の銃など知らなかったのだ。

「ミミネ…いや、誰だお前は?」

「ああ…ようやく本題に入れそうですね? パタジン将軍♡」

扉を閉め、鍵をかけると、彼は続けた。

「冥土の土産に教えてあげましょう。私は日本の諜報員なのですよ」

「???！」

当然、彼は困惑した。

ミミネルとは昔から親交があり、彼が売国奴になるような気は微塵も感じられなかったのだ。

それが…日本国の諜報員?!

「私達からするとですね、ロウリア王…いえ、武装勢力の長の捕獲にあたり、王城内に敵が大勢いるのは都合が悪いのです」

「テヘツと舌を出して笑う彼…いや口調から判断すると彼女に、パタジンは困惑しつつも、全てを悟った。

様々な陣地から報告のあった、中身の無い変死体。それは目の前にいるこいつの仕業だと。

同時に、自分が踊らされていた事にも気付く。

「まさか…ビーズルに兵力を集結させようと提案したのは…！」

「はい！ 我々の負担を少なくするために、厄介払いをしておきました♪」

「じゃあ騎兵隊をいきなり単騎特攻させたのも…！」

「ええ！ 回り込まれて本隊との挟撃とかされたら厄介だったので」

「夜目が効くカルシオ達を無謀な夜襲に導いたのも…！」

「上空からの接近を悟られないためか…！」

完全にしてやられた。

スパイが紛れ込んでいる可能性は模索したが、まさか將軍に成り済ますなんて…!!

何よりも、彼は目の前の人物に友人知人を殺された事が許せなかった。

「後ですね、今あなたに指令とかを出されたりするのは色々と面倒なので、あなたを排除しに来ましたあ！」

「…してやる」

「ん？」

「てめえ殺してやらあああああッ!!!」

剣が抜かれ、怒号が司令室に響く。

將軍とは言え、彼も一流の軍人。その剣技は軍内部でも1位2位を争う。

しかし、彼も1人の人間であった。

「や、やめ…:てくれ…:！ パタ…:ジン…:！」

「ッ?!」

いきなり苦しみ始めるミミネル。その姿はまるで、何かに抗っているようであり、彼は攻撃しようとする手を止めてしまった。

「おい、ミミネル？ ミミネルなのか？ お前…:まだ、生きてるのか…:？」

「あ、ああ…:！ 俺だ！ ミミネルだ！」

「ああ…:ミミネル！ 頑張れ！ 悪魔なんか迷惑されるなあッ!!」

「はいドーン☆」

「ああッ?!」

パタジンは足に激痛を感じ、倒れ込んだ。

鉄の鎧を貫通した銃弾は彼の鍛え上げられた体をいとも容易く破壊し、彼は動けずにいた。

「な…:?! ミミネル?!」

「なに言ってるんすか將軍、そんな映画みたいなのある訳ないじゃないすか。演技ですよ？ え、ん、ぎ」

「ぬうう…:!!! 貴様ッ!!! 貴様アアアッ!!!」

「じゃ、お疲れ様でした☆」

——パシユッ！

パタジンは眉間を貫かれ、永遠に意識を失った。

暗い一室に血の臭いが立ち込める中、彼女は脱皮する。

そして魔信機でいくつかの矛盾した指令を出した後、頭蓋骨の内部に埋め込まれた極小の通信機のスイッチを入れ、彼女は空に向かって話しかけた。

「ごちらパラサイト、司令室の制圧を完了。城の跳ね橋も上げています。敵はもう城内に入れません」

凄惨な現場の中、にこやかに話しかけるその顔はまるで一仕事を終えた子供のものであった。

「はい……はい……了解しました。撤退します」

彼女は獅子身中の虫。

百獣の王の体内に寄生し、王を内部から死に至らしめる寄生虫である。

13話：ロウリア王捕獲作戦Ⅲ

王都ジン・ハーク 王城4階 王の間

「第1会議室、制圧されました。敵は現在2階大広間に向かって進行中。大広間東側広場で第3近衛隊と交戦中です」

「第3近衛隊消失いたしました。それと、パタジン將軍とは依然、連絡が取れません」

王の間で警護に就くランドのもとに、侵入してきた敵歩兵の鬼神の如き強さが報告され続けていた。

王の間の隅に設置された魔力通信機の前では通信員が絶望的な顔を浮かべており、それはランドも同じであった。

「クソっ…！ パタジンの奴はどうしたんだ？ 跳ね橋なんかを上げおつて…これでは増援が城内に入れないではないか…」

それでも彼が来ない増援を今か今かと待ち続けるのは、パタジンが死亡したことを全くもって知らないからである。

「2階大広間が制圧されました。敵は3階大臣会議室に向かって進軍中。第2近衛隊が対応予定です」

「敵は魔杖のような物を持ち、これが火を噴くと味方が倒れます。そして、敵の中には魔人もいると報告がありました」

「噂の魔人か…！」

日本の兵士には、魔人がいるらしい。

ロウリア王国内ではそういう噂が広まっております、その噂は軍の上官もある程度は耳にしていた。

ちなみにこれに関しては、日本の諜報機関はノータッチである。

「ええ。虫の触覚のような物を額から生やし、人間とは思えないほどの怪力。そして防御力が報告されています」

「防御力ウ？」

「はい。鎧を来ていないのに、剣による攻撃も、魔法も全く効かなかったようです」

「何だそれは？ 私はおとぎ話でも聞かされているのか？」

「いえ、たった今入った報告です。怪力の話も聞きますか？」

「そうしてくれ」

ランドは若干ワクワクしていた。

彼は言わずと知れたロウリア王国最強の魔法剣士。その血がこれから出会う強敵を相手に沸いていたのだ。

「えつとですね…報告によると、素手のくせに重装歩兵が盾ごと体を真つ二つにされたようです」

「はあ?」

全くもって想像がつかなかった。

そんなのは、もはや怪力なんて話ではない。

「あ、第2近衛隊も…全滅したようです」

「第1近衛隊が謁見の間の前で接敵します!」

なんて速い進軍速度だ! とランドは舌を巻く。

鎧を来ていないとなると、敵は進軍速度を重視しているらしいが、いくら何でも異常だ。

すでに水の詰まった革袋間が破裂するような音が聞こえ、乾いた連続音が耳に入る。

「第1近衛隊…ダメです。全滅しました。謁見の間は敵の制圧下に入ったようです」

「いよいよか…」

次はここ、王の間に敵が侵入してくるはずだ。

あの精鋭である第1近衛隊もあっさりとやられ、このままでは王の身に危険が迫ることとなる。

彼は思考を巡らせた。

「第零近衛隊は全員、柱の裏に隠れろ! 私が指示するまで出るな!」
彼はパタジンが送ったはずの援軍の到着まで、時間を稼ぐことにしたのだ。

そして保険としてメイド2人を呼びつけ、謁見の間と王の間を繋ぐ扉から5mほど離れた位置に並んで立つように指示した。

「さあ…いつでも来い! 日本軍!」

第1空挺団の中野中隊長は障害を排除し、目標である4階の王の間へと先頭のすぐ後ろを走っていた。

その先頭とはもちろん、被手術兵のことである。

クロオオアリ
『黒大蟻』

特にこれと言った特徴もない、ただの蟻^{モブ}。

しかしモブのモブ^蟻とは言え、手術ベースとしては平均以上の筋力と防御力を持ち合わせた優秀さと、検体の採取も非常に容易な事から、量産化に向いている。

「先陣を切るのは俺だと思っていた…」

「私語を慎め橋本隊員。我々は任務中なのだぞ」

だが、あまりにもアツサリと終わる戦闘に、彼自身も気が緩みかけていたのは事実であった。

今まで現れたロウリア兵は特に脅威ではなく、魔法を使う兵との戦闘では、目の前の被手術兵が大いに腕を振るっていた（物理的に）からだ。

（しかし、我々第1空挺団よりも軽装とは言え、この進軍速度に着いて来るとは…SATも大したものだな）

警察官はもつと体力のないものと思っていた彼にとって、警視庁特殊部隊SATの体力は少し意外だった。

それと、被手術兵の力も。

（目の前のこいつは…何も言及しないでおこう。間違いなく、俺達では勝てん）

その異常な怪力に、彼らはトラウマになるレベルで舌を巻いていたのだ。

特に、盾を持った敵兵がその中身をぶちまけたのは一生忘れなさそうである。

「ふう…い」

中野は意識を目の前の扉に戻した。やはり被手術兵を先頭に、銃を構え、同僚に合図を出して扉を開けさせる。

「——ッ!!」

銃口の先には震えるメイドが2人立っており、彼女達は扉が勢い良く開いたことに驚いたのか、顔は悲愴に染まり、床が濡れていた。

「やあ皆さん、よくぞいらっしやいました。近衛大隊長のランドと申します……。私と少しお話でもしませんか？」

薄暗い王の間の奥から、声が聞こえる。そこには銀の鎧に身を包む、銀髪をなびかせた男が立っていた。

「お前と話をしている暇はない。敵意がないなら、すぐに武器を捨てて投降しろ」

「心外ですねえ…：せつかく対話の時間を設けているのに…。ねえ、戦いは愚かだと思いませんか？」

チラツとメイドを見る彼の目が、何かを企んでいるように見え、隊員達は一齐にメイドに銃口を向けた。

彼女達が戦闘員には見えないが、もし武器を隠し持っていて、これが演技だとしたら…？

「伏せろ！ 伏せないと敵とみなす！」

しかしランドだけでなく、メイド達もその場を動こうとはしなかった。

中野は彼女達も纏めて障害として排除するのか、隊員達の安全を守るのかというジレンマに悩まされていた。

しかし、それは意外と早く解決することとなる。

「中野さん、彼女達は戦闘員ではありません。臭いで分かるんです」
そう言ったのは、S A T小隊長の青木であった。

「ああ…。そういえばあなたも、被手術兵でしたね」

「私は兵士ではありませんよ。同じ公務員ですが、あくまで一般人です」

『ドーベルマン』

言わずと知れた、警察、軍用犬の代表格。体は細身だが全体的に筋肉質で俊敏性、走破性に優れる。飼い主に対しては非常に従順であり、強い忠誠心と忍耐力を持つ。

その特徴はなんと言ってもやはり、人より遥かに優れた犬の嗅覚であり、とある研究では犬は人間の感情を匂いで読み取ると言った結果

が出ている。

彼もまた2人のメイドの、心からの恐怖を感じ取っており、それと同時に数が合わないほどのオッサン達の加齢臭をも感知していた。

「ランドさん、柱の裏にも隠れていますね？ 24…いや、25人も」

「これは驚いた！ まさか数まで言い当てられるとは…！」

「ええ、プンプン臭ってますよ？ あなたの敵意も」

「…これは仕方がないな——」

ランドは手の内に隠していた、煙幕用の魔法陣を発動させた。

彼は王の剣であり、王の盾、ロウリア王国最強の魔法剣士である。

真っ白な煙が王の間を覆い尽くし、視界は急激に悪くなった。

「全員突撃せよ!!!」

剣士達は煙に紛れ、第1空挺団とS A Tの混成部隊に襲いかかる。

ランドも立ち上がり、中野に斬りかかった。

しかし、彼は魔人の存在を完全に忘れていた。

ドゴオン!!!

ランドは体がバラバラになりそうなほどの衝撃に吹っ飛ばされ、壁に激突した。

「な…なぜ見えて…い…る…?」

蟻は目が見えているかと聞かれれば、ほとんど見えていないというのがほぼ全ての種に当てはまる。

それでも彼らが道に迷わずに巢に帰れたり、真っ暗闇巢の中で歩けるのは、嗅覚が優れているからだと言われている。

彼は半分人間なので、視力は人間のままだに、嗅覚は蟻のものを有していたのだ。

「見えねえよ。でもS A Tのオッサンが言った通り、お前からは敵意の臭いがプンプンするな」

(オッサン…)

(こいつ目上の人をオッサン呼ばわりしたぞ…)

(俺のワキガもバレてんのかな…)

「こ、これが…日本の…魔人が…！」

ランドは気を失い、マシンガンの音が鳴り響く王の間の隅で、床に

倒れ伏した。

王の控え室

服従と言って良いほどの、屈辱的なまでの条件を飲んだ末に受けた列強、パーパルディア皇国の支援。

そして列強式兵隊教育を6年もの歳月をかけて施し、実現したロデニウス大陸を統一するための軍隊。

資材も国力のギリギリまで投じ、数十年先まで借金をしてようやく作った軍隊で、念には念を入れ、石橋を叩いて渡るかのごとく、軍事に差をつけた。

しかし…

「圧倒的勝利で勝つはずが…どうしてこんな事に?!」

最初はクワ・トイネとクイラの、農民と貧民の弱小国を相手にするつもりだった。

そしてしばらくして参戦してきた日本という国も、彼らと同じ弱小国だと思っていた。

そんな事はなかった!

ワイバーンのいない蛮族の国? とんでもない!

ワイバーンなんか目ではない魔人と飛行機械が居るのだぞ?!

国交を結ぶために訪れた日本の使者を、もつと丁重に扱っておけば良かったと彼は後悔する。

彼の国のデタラメな強さを前に、ロウリア王国軍は1人の戦果も上げられずに敗退したのだ!

とてつもない戦力比ではないか?! 文明国の列強を相手にしても、ここまで酷い結果にはならなかっただろう!

「…もう…どうしようもないではないか…!」

私がいる部屋の前でも戦闘が行われている。近衛隊の悲鳴が聞こえた。

扉を蹴破る音とともに、緑色の斑模様の、奇妙な軍勢が雪崩込んできた。

その中に、紺色の服を基調とした兵と……魔王か、魔人のような見た目の人間（？）が交じっていた。

「貴様らは……魔帝軍か何かか？」

ハーク・ロウリア34世は全てを諦めたように尋ねた。

「魔帝軍というのは存じ上げませんが……日本国警視庁の青木といいます。ハーク・ロウリア34世ですね？ あなたはクワ・トイネ公国のギムにおいて、大量虐殺を指示した罪で逮捕状が出ています」

そしてロウリア王の両手に手錠がかけられ、戦争は日本及びクワ・トイネ公国、クイラ王国の勝利によって終結した。

パーパルディア皇国編Ⅰ

14話：更なる動乱の幕開け

パーパルディア皇国 国家戦略局

第3文明圏の覇者であると同時に列強序列4位のパーパルディア皇国。

その国家戦略局のとある一室で、秘密の会議が行われていた。

「――以上、ロウリア王は日本軍と思われる者達に捕らえられました。束ねる者がいなくなった今、彼の蛮地は無政府状態になりつつあります」

暗い部屋に蝋燭の炎が煌めき、2つの影が揺れ動く。

絶対に覆ることの無い勝利がひっくり返ったという報告に、報告をした人物を含めた2人の人物は動揺する。

「簡単に言ってくれるな。我々の独断でロウリア王国に一体いくらもの支援をしたと思っっているのだ？」

この2人が独断でロウリア王国に支援をしたのは他でもない。彼の国がロデニウス大陸を統一、支配した時にその甘い汁を貪り食うためである。

そしてロデニウス大陸の利権を我がものとした成果を皇帝陛下に献上し、国家戦略局の地位を確実なものとするのが彼らの目的であった。

しかしそれらは全て、ロウリア王国が勝つ前提で組まれた計画である。

別に彼らが人事を尽くさずに天命を待っていただけという訳ではない。

計画の確度を上げるために彼らはロウリア王国に経済的な支援だけでなく、ワイバーン500騎、軍船も皇国では旧式のを大量に送り付けていたのだ。

元々の戦力差も相まって、負けることなど絶対にありえないはず

だったのだが――

「日本国という国がクワ・トイネ側に参戦してからと言うものの…：ロウリア王国は敗退に敗退を重ねていたようです」

――日本国という国のせいで計画が全てパーご破算となってしまうのだ。

「日本国の軍隊はそんなに強いのか？」

男が聞く。

完全にノーマークだった場所から非常に強力な伏兵が現れたようなものだ。気にならないわけがない。

「それが…：現地の諜報員は戦闘に巻き込まれて死亡したため、日本軍に関する情報は全て民間人頼りとなったのですが…」

もう片方の男は資料を一瞥してから、報告するのを躊躇った。

「どうした？」

「いえ、あまりにも荒唐無稽過ぎると言うか…：。一様に現実離れした意見が出るばかりでして…」

彼は唾を飲み込んでから、続けた。

「曰く、日本の空中戦力は『巨大な鉄竜』とその配下である『黒い円盤みたいな虫』、それと空を飛ぶ『魔人』であるようです」

「なんだそれは？」

「巨大な鉄竜は名前の通りです。我が国のワイバーンロードと比較しても非常に巨大で、外皮を見る限りは鉄で出来ているとか…。さらに、その配下である虫はワイバーンの数十倍の速度で飛ぶとか…」

ロウリア王国に送ったワイバーンは皇国では旧式の物だが、それでも最高時速は200kmを超えらる。

その数十倍で飛ぶとなると、『古の魔法帝国』の兵器でしか対抗出来ないのではないかと彼らは思う。

「なお『魔人』については地上でも海上でも姿が確認されているようです。あくまで噂ですが…：その姿は様々で、中には獣人族のような見た目の魔人もいたと」

「そうか…」

これではもはや獣人族を魔人と見間違えたのか、魔人を獣人族と見

間違えたのかがさっぱり分からない。

そもそも魔人という単語が理解できず、報告を聞いていた男は古代の文献に記されている『魔王ノスグーラ』のような存在を思い浮かべていた。

「その魔人というのは何だ？　ゴブリンやオークみたいな魔物か？」

「いいえ、人間であるようです」

「は？　人間なのか？　魔物ではなくて？」

「はい」

ますます訳が分からず、報告を聞いている男は頭を悩ませる。

それを気にせず、男は報告を続けた。

「あとこれはクワ・トイネで仕入れた情報なのですが、日本には『魔人化する武器』があるようでして…。局長は前の『光翼人騒動』を覚えていますか？」

「ああ、魔法帝国が復活したとかという誤報だろうか？　それがどうかしたのか？」

「その騒動はクワ・トイネ沖を哨戒中の竜騎士が日本国の魔人を光翼人と見間違えたのが原因らしいです。なんでも、南方地域に住まう有翼人のような見た目の女性が空を飛んでいたとか…」

「ふむ…」

兎にも角にも、この話が真実であれ嘘であれ皇国のお偉方の耳に入る訳にはいかない。

ロウリア王国への支援金額はかなりのものとなる。本来ならこの額を補って余りある利益が入っていたはずだったが、今は存在しない狸の皮算用をする彼らではない。

国家戦略局とロウリア王国の繋がりがバレたら、罰を受けるのは彼ら2人だけではないのである。

「どちらにせよ、日本国の情報とロウリア王国への支援の履歴は全て焼却しろ。我々との関わりを一切残すなよ？　一族郎党罰を受けるのは嫌だろうか？」

「了解しました」

ロウリア王国を支援していたパーパルディア皇国の国家戦略局は、

ロウリア王国が引き起こした侵略戦争の一部始終を徹底的に隠蔽した。

この行動が吉と出るか凶と出るかは、今となつては後の祭りである。

数日後――

クワ・トイネ公国 政治部会

「――というわけで、ハーク・ロウリア34世は日本国に捕らえられました」

頭を失つたロウリア王国軍の動きが止まつてから数日後、クワ・トイネ公国の政治部会でロウリア王国の国王が捕らえられたという正式発表が初めてなされた。

「おお……」

「ということとはつまり……」

場がどよめくのも当然だった。

彼らは日本国を信じていなかった訳ではないが、日本軍がそれを本当に成し遂げるとは思わなかったのだ。

一時は長く続く公国の歴史もこれまでかと思われた。

殺されるくらいなら奴隷になつてでも他国へ逃げようとする亜人もいた。

そこへ、差し伸べられた救いの手。

「我々の勝利だ!!!」

当初は日本の国力を疑問視し、毛嫌いしていた議員達も立ち上がつて喜び、亡国の道から愛する祖国を救い出した国への感謝の言葉を述べる。

彼らの日本に対する好感度は爆上がりし、その場にいるほとんどの者が親日家となった瞬間は公国の後の歴史書にも記載されるほどであったという。

日本 東京 とある一室

「はあ?! また私ですか?!」

呆れ混じりに怒気を孕んだ声が鳴り響く。

散らかった部屋で、いつかのロウリア王国に潜入していた女スパイは電話に向かって叫んでいた。

『ああ、また君だよ。パラサイト』

イタズラっぽくからかう声が電話越しに伝える。

「任務中じゃないんですからその呼び名は辞めてください！ てか休暇くれるって話じゃないんですかあ?!」

『その節は本当にすまない。先日起こった事件で急遽次の任務が決まったんだ』

「ああ、何でしたっけ？ フェン王国の軍祭でパールディア皇国と自衛隊が衝突した事件ですよね？」

事の発端は数日前――

「^{日本国}貴国の力を見せてくれ」

「はい??」

それは新世界における日本の隣国となったフェン王国の首都アマノキにて、日本の外交官が剣王（フェン王国における国王の称号）シハンに言われた言葉であった。

まだ国交を締結してもいない^{フェン王国}その国の王にそう言われた外交官達は少なからず困惑したという。

それも当然、日本の常識からすれば他国が国交もない国に軍を派遣すると言うのは普通は威嚇行動なのだから。

この世界でもそれは変わらず、普通は嫌がるものだと言うのに、この国の王は「力を見せろ」などと戦闘狂めいた事を言うのだから、日

本政府はかなり悩んだ末に「新世界の常識に慣れる」ために自衛隊の派遣を決定した。

そして中央歴1639年9月25日の午前、フエン王国が5年に1度開催する『軍祭』の日に事件は起こった。

曰く、パーパルディア皇国とその場にいた日本国海上自衛隊の最初の戦闘行為である。

中央歴1639年9月25日 午前――

フエン王国 首都アマノキ

「おお！ あれが日本の軍船…！ なんと巨大なことか！」

王城から軍祭の会場を見下ろし、剣王シハンはその顔に笑みを浮かべる。

その視線に先には海上自衛隊の護衛艦8隻が浮かんでおり、自身が住まう城よりも巨大に見える軍船に彼は興奮を隠しきれない。

そしてシハンの横でそれに頷いたのは、武将マグレブであった。

「いやはや、これならパーパルディア皇国の懲罰軍も何とかなりそうですね…」

「そうだな…これで我が国も安泰よ」

軍祭の日日本軍が来てくれたのはフエン王国にとってこの上ない幸運になるだろう。

それはなぜか。フエン王国は先日、パーパルディア皇国からの要求を蹴ったのだ。

「自国の権威を何よりも大事にする皇国が、要求を突っぱねた小国を攻め滅ぼさないとはいはずがない。なら、我々はあえてそれを利用しよう」

彼らは再び日本国の護衛艦を見る。

自国の水軍^{海軍}以外には疎い彼らだが、日本国の軍船が皇国を遙かに超える超技術で造られているのはガハラ神国の風竜騎士団長の証言によって明らかとなった。

曰く、日本国では護衛艦と呼ばれるあの灰色の軍船は『古の魔法帝国の対空魔船に近い』とのことだ。

それがこの場だけで8隻もいるのだから、ロウリア王国軍の大艦隊4400隻が敗北したのも十分に頷ける。

「剣王、そろそろ我が国の廃船に対して日本国の艦から攻撃を始めてもらいます」

「うむ、存分にやってくれたまえ」

護衛艦が停泊する場所から更に沖合、4 kmの地点にフェン王国水軍の廃船4隻が並ぶ。

あの4隻は標的艦であり、剣王シハンは日本国の艦がどのようにして標的を沈めるのかワクワクしていた。

しばらくして、海上自衛隊の護衛艦『みようこう』前部に搭載された『電磁加速砲』が旋回を始める。

日本製の高性能な望遠鏡を覗き込み、彼は子供のようにはしゃいでいた。

「これは素晴らしいぞ！ 日本国艦と標的艦の姿がくつきりと見えるわ！」

直後、4 km先の標的艦が木端微塵となる。

海上に木片が飛散し、続けて小さな砲声が耳に入ったためシハンは困惑した。

「…おろ？ いつの間に攻撃をしたのだ？ 砲声が聞こえる前に船が爆発したぞ」

「砲弾の速度が音速を超えたのでしょう。日本国の者によれば、彼の国の砲は基本こんなものだとか」

なるほどとシハンは納得し、それと同時に恐怖を覚えた。

フェン王国にも大砲はあるが、威力、射程、精度のどれをとっても性能が桁違い過ぎるのだ。

もし日本国を怒らせでもしたら…何が起こるか考えたくもない。

「この望遠鏡と言い、船の戦闘力と言い…日本国の技術は凄まじいな。これならパーパルディア皇国なんぞ屁でもないわ！」

シハンとその側近はに笑う。

一時はどうしたものかと大いに悩んだものだが、日本国ならパーパルディア皇国を打ち負かす事も十分可能だろう。

「さてと、まずは安全保障条約でも……」

その時であった。

カンカンカンとけたたましい鐘の音が鳴り響き、軍祭の会場がにわかに騒々しくなる。

「むっ……あれは皇国のワイバーンロードではないか……」

ワイバーンよりも一回り大きい皇国のワイバーンロード。

パーパルディア皇国監察軍東洋艦隊所属のワイバーンロード部隊20騎が、フェン王国に懲罰的攻撃を加えるために首都アマノキの上空に来ていたのだ。

シハンはそれらの存在に気付き、ますます顔に笑みを浮かべる。

「千載一遇の好機だわい……」

軍祭には文明圏外の各国武官がいる。彼らの眼前で、皇国に逆らった愚かな国の末路がどうなるのかを知らしめるため、パーパルディア皇国はあえてこの祭りに合わせて攻撃の日を決定していた。

これで文明圏外各国はパーパルディア皇国の恐ろしさを再認識するだろう。というのが皇国の目論見であった。

それをフェン王国に逆手に取られるとも知らずに。

『ガハラの風竜には構うな。フェン王城と……そうだな、あの目立つ灰色の船に攻撃せよ』

飛来してきたワイバーンロードが、軍祭でにぎわう首都上空で二手に分かれ、1つはフェン王城に、もう1つは護衛艦『みようこう』に向け、導力火炎弾を放出した。

「——ッ?! 我が艦にワイバーン10騎が急降下中! 『みようこう』に攻撃をしてくると思われます」

海上自衛隊の護衛艦『みようこう』のCICでは、自艦に向かって急降下をしてくるワイバーンの姿をはっきりと捉えていた。

「そうか、甲板にいる者はいないな？」

「いません」

しかし、これから攻撃されると言うのに『みようこう』のCICは平穩そのものであった。

当然である。ワイバーンの攻撃程度では護衛艦はビクともしないからである。

「未確認騎が我が方へ発砲」

「効かないとは言え、念の為だ。エンジン出力最大、回避しろ」

これは自衛隊が導力火炎弾の威力のほどを知っていたからこそその態度であった。

まずワイバーンの『導力火炎弾』というものは、科学的に見れば、粘性のある可燃性物質に点火されたものが飛んできているに過ぎない。人間を殺傷するほどの威力はあるものの、最新のシミュレーターによると自衛隊の兵器が相手では全くと言って良いほど効果がないらしい。

それはワイバーンの品種改良型であるワイバーンロードでも変わらず、威力は多少向上しているものの、鉄で覆われた相手にはやはり無効であった。

「船体後部に1発被弾。正当防衛射撃を開始します。全自動近接防空システム起動」

——シーン——

何の破壊音も聞こえず、衝撃も感じられず、CIC内に沈黙が流れる。

「…損害を報告せよ」

「着弾箇所が塗装が剥がれただけです。あと後部甲板で火災が発生したようですが、数分で自然鎮火すると思われます」

さすがは旧技術研究本部が「制空戦闘には全く使えない代物」と揶揄しただけはある。

相手が木造船であれば効果は絶大だろうが、鉄鋼艦の前ではその攻撃力も皆無に等しい。

「敵ワイバーン全て撃墜しました。自動消化システムにより火災も鎮

火」

「……………」

口にこそ出さなかったが、「あまりにも呆気なさすぎる」というのは誰もが感じていた。

「……………」

剣王シハンや各国の観戦武官を含め、その戦闘の一部始終を見ていた全ての目撃者達は開いた口が塞がらなかった。

「なんとという……………」とだ……」

ワイバーンロードは間違いなくパールディア皇国のものだろう。

たった1騎を撃墜するだけでも大変な戦闘を繰り広げる必要があるはずの皇国のワイバーンロードが、害虫駆除の虫けらのように呆気なく全滅すると言うのは、現実であつてもにわかには信じ難い。

「…我がフェン王国がパールディア皇国のワイバーン1騎を撃墜するためには武士団を一個大隊も投入する必要があります。それを日本国は…たった1隻で20騎も落としてみせました。彼の国の力は本物です」

「そんなの言われなくとも分かかっておるわ。あれを見てまだ疑う者がいるのなら、そやつは自刃した方がよかろう」

フェン王国だけでワイバーンロードを仕留めるのは事実上不可能に近いのだ。

それを日本軍はいとも容易く叩き落としてしまった。

「は……い……日本をこの戦に巻き込めたのは運が良い！ 今日にはフェン王国にとって最良の日だ！」

剣王シハンはただただ笑うだけだった。

15話：フェン沖海戦

パールディア皇国監察軍東洋艦隊

「竜騎士隊との通信が途絶しました」

「なッ：?!」

一同に衝撃が走った。

通信途絶とは部隊の全滅を意味し、20騎ものワイバーンロードが通信をする間もなく撃墜されたと言うことになるのだから。

「嘘だろ：?!」 第3文明圏にワイバーンロードを超える航空戦力は存在しないぞ：?」

これはプライドの塊であるパ皇の驕りとかでは無く、事実なのだ。

文明圏内国家に存在するワイバーンロードは、そのほとんどは皇国が輸出したものであり、文明圏外国家には一切輸出していなかったからである。

不可解な事態が起きている現状に、ポクトアール提督は嘆きたくなかった。

しかし嫌な予感がするからと言って、第3外務局長カイオスの命令には抗えない。ここで帰ったら、皇国の懲罰軍が懲罰せずに戻ったという事実が広まり、祖国の威信に傷がつくからである。

彼には、現地に向かうという選択肢以外が残されていないのだった。

「全速前進、フェン王国に各国武官の前で懲罰を加えるぞ」

「ははっ！」

その後、懲罰艦隊はフェン王国の水軍と戦闘、これを殲滅する。

しかし、ポクトアール提督はそれでも違和感を感じていた。

「一体：何がいるのだと言うのだ：」

違和感の正体を求め、懲罰艦隊は東へと進む。

日は傾き、彼はフェン王国から西に約100kmの海上で水平線を睨んでいた。

空は快晴であり、比較的乾いた潮風が彼の不安を一拭する…はずだった。

「なんだあれは?!」

「艦影と思われるものを発見! こちらに接近してきます!」

城のように大きい灰色の、恐らく船だと思われるその物体は、彼らの常識とは掛け離れた船速を叩き出していた。

「提督、どうしますか?」

「…」

艦隊と並走しながらも近付くその巨大艦は、少なくともパーパルディア王国のものではない。

彼の船はフェン王国方面から来たのだから、フェンの関係国所属艦に違いないと彼は判断する。

ならば、立場上やることは1つだ。

「射程圏内まで入ってきやがったな阿呆が! 魔導砲、撃てえええ!!」

22隻もの戦列艦から放たれた無数の砲弾が、海上自衛隊の護衛艦『みょうこう』に襲いかかる。

フェン王国の水軍を赤子の手をひねるが如くあっさりと葬ったこの艦隊ならば、正体不明の巨大艦にも勝てるだろうと彼は踏んだのである。

「4発命中!」

「はっはー! 見たか炸裂砲弾の威力を! 文明圏外国にはこんな代物ないだろう!」

しかし『みょうこう』はビクともしていない。

この時代は、どんなに重装甲化しても1発当たれば撃沈or大破の対艦ミサイルだけが脅威という訳ではないからだ。

戦闘艦を戦闘不能にするための手段としては、数百機もの無人機による飽和攻撃、被手術兵の移乗攻撃、電子的な妨害が出来ない「ただの鉄の塊」を超遠距離から超高速で飛ばしてくる電磁加速砲、その他もろもろが上げられる。

特にドローンと被手術兵による攻撃は厄介で、これら2つは迎撃をし損ねる可能性が特に高いため、その対応策として、「ある程度の重装甲化」がこの時代の戦闘艦には主流となっている。

その理由として、ドローンは生産性を重視しているため、そこまで威力が高くないのと、被手術兵も濃密な対空迎撃網をすり抜けて移乗して来るタイプは機動力に特化しているため、地上での戦闘能力は低いからである。

他にもエンジンのさらなる高出力化が進み、機動力を落とさずとも装甲を厚くできる余裕が出来たのもあった。

そのため地球史で見れば中世程度の大砲など、恐るるに足りないのだ！

「敵艦加速、魔導砲の射程圏外に高速で離脱していきます」

「ファツ：?! なんて速さだ！ 早く追いかける！」

攻撃態勢のまま、『風神の涙』による最大戦速で彼らは敵艦に進路を向ける：が、追いつけない。

「敵艦に追いつけません。敵、さらに遠ざかります」

「ちつ、舐めやがって：もういい。灰色の巨大艦に対する監視を厳とし――」

ボウツ

突如、マスト付近に火の手が上がった。

「ツ?! 火災だ！ 消火急げ！」

木造船は火災に弱い。

特に帆やロープは非常に燃えやすく、すぐさま鎮火しないと、そこから他の場所に引火して大惨事になり得る。

「提督！ 他の艦にも火災が発生しております！ 発生源は全てマストからです！」

「なんだとツ?!」

そんな緊急事態に見舞われながらも、優秀な船員達は消火作業を続ける。

幸いなことに火災が発生したのはマストだったため、被害は帆を数枚失った程度に済んだ。

しかし『みようこう』の艦長、海原はそれくらいで彼らを許すほど冷静ではなかった。

「ふっふっふ…うちの嫁に手を出したこと、後悔させてやるよ…!」
帆を新たに張り替えた直後から、再び発生する火災。

それにより被害はじわりじわりと拡大し、負傷者が増えていく。
何より、消火にあたっていた者達の疲労度合いは凄まじかった。

「こんくらいでは終わらんぞ? さあ次いつてみよう!」
またまた同じ場所から火災が発生する。

船員達は必死に消火活動に従事するも、終わりのない作業に精神的にも体力的にも限界を迎えていた。

何よりの問題は、帆のストックである。

「提督! このままでは帆が無くなり、航行不能になります!」

「分かっている!! だが、マストが消失しても航行不能になるぞ!」

Q. 船なら最悪、オールで漕げば良いではないか?

A. いいえ、それは無理です。

同じ船とは言っても、大きさが違い過ぎるのだ。種類にもよるが、文明圏外の船ならばオールでも大丈夫である。

しかしパ皇の戦列艦はそんな事を想定しておらず、仮にそれを実践しようとしても、その巨体をずっと人力で動かすのは不可能。

つまり、このまま火災が続けば彼らは航行不能となり、広大な海を彷徨う事となるのだ。

とても熱いはずなのに、彼らの背中を冷や汗が流れる。

「提督、敵艦から何か飛んできます!」

「はっ!」

彼は一瞬、砲弾か何かが飛来しているものだと思っていた。

しかし、現実はその予想をはるかに大きく超えていた。

「なんだあれは…光翼人か?!」

それは背中から透明な薄い羽が4本生えているため、彼らが知っている光翼人の見た目とは程遠かったが、光翼人だとしか考えられなかったのだ。

「攻撃しますか?」

「ばかッ！ やめろ！ 恐らくあの巨大艦からの使者だ！ ポクトアールの名において攻撃を禁ずる！」

すでに帆を張り替える度に発生していた謎の火災は止まっていた。恐らく、さつきまでの攻撃（？）はあの灰色の船が行っていたのだろう。

先程までは粒ほどの大きさだった光翼人は、艦隊上空まで接近し、高度を落とした。

「ここに降りてくるぞ！ お前ら場所を開けろ！」

スタツと甲板に降りた彼は、空の色に混ざるような見た目の服を着ていた。

「はじめまして。私は日本国海上自衛隊所属、蜻蛉^{あきつせいや}星矢と申します。単刀直入に言いますが、この艦隊の責任者を出せ？」

ポクトアール提督は意を決する。

「私がパーパルディア皇国監察軍東洋艦隊の提督ポクトアールだ。日本国と言ったな？ 用件を聞こう」

「貴方ですか、敵でもない我々に攻撃した馬鹿は。うちの艦長、嫁を傷付けられたとご立腹でしたよ？」

「文明圏外の国に攻撃をして何が悪い？ そもそも貴様らはフェン王国の関係国であろう？」

「は？」

「は？」

まず日本の言い分はこうである。

我々は怪しい船団に航行目的を聞こうと接近しただけ。なのに、いきなり殴られた（無傷）。

そしてパーパルディア皇国の言い分は――

文明圏外の蛮国の船に警告無しで攻撃して何が悪い？ 我々は第3文明圏最強のパ皇だぞ？ 文句があるなら言ってみろ？

である。

「まあ命令されてないから貴方達を殺すのはまた今度にして、とりあえず艦長の言葉を伝えます。『撤退せよ。さもなければ、今度は船体に火災を発生させるぞ』」

「——ッ!!」

やはり先程の攻撃は、日本国のものと見てよさそうである。マストだけに火災を発生させる魔法など聞いたことが無いが、所詮は蛮族の国。我々の船を沈める方法は他に無いと見た。

しかしこれ以上は帆を焼失する訳にもいかず、ポクトアールは涙を飲んで日本の命令に従った。

「…ちっ、了解した。撤退しよう」

「賢明な判断です。攻撃に関する謝罪は後ほど聞かせてもらいますよ」

「ぐっ…!!」

自分達が我々の命運を握っているからと言って、何と傲慢で不愉快な蛮族だ！

と彼は叫びたいのを堪え、光翼人もどきを見送る。

その顔は憤怒の色に染まっていた。

後に『フェン沖海戦』と呼ばれるこの戦いの後、日本にやって来る時代がかった船が増えた。

そのほぼ全ては文明圏外国と呼ばれる中小国であり、フェン王国の軍祭で護衛艦の活躍(?)を見た各国の武官がその情報を上に伝えた結果であった。

この時代の日本は近海の哨戒をほぼ全て無人機に任せていたため(地球ではほとんど全ての国がそうであったが)、海上保安庁は大忙し…という訳でも無かったが、外務省は空前絶後の激務にみまわれる。

しかし、今までは日本側から現地に出向き、現地を調査してから国交を申し込んでいたが、今回は大使達が詳細な資料を携えていたためにその手間がはぶけ、日本は次々と国交を結ぶことができた。

彼らはいずれも非常に友好的で礼儀正しく、中にはいきなり安全保障を求める国もあったが、概ね国交締結に支障はなかった。

日本と国交を結んだ国は22ヶ国に増え、やがて通商が始まった。

16話：とある外務局員の憂鬱／亡国の王女Ⅰ

中央歴1639年9月28日――

パーパルディア皇国 第3外務局

局長カイオスは激怒していた。

その原因は、とある提督の戦闘報告書である。

「な、何なんだ……これは!!!」

『皇国監察軍東洋艦隊 敗北』

数多の国々が存在するこの世界において、文明圏5カ国、文明圏外67ヶ国。計72ヶ国もの属国を持つ列強パーパルディア皇国にとって、軍が負けた事によって文明圏外国から軽視されるのは、とても許容できたものではない。

理由は非常にシンプルで、彼らは属国の民を恐怖と力で抑圧していたからであった。

おまけに、この報告書を出したポクトール提督とやは、ろくな損害も無いのにノコノコと帰ってきたとのこと。

彼の言い分によれば、

○灰色の超巨大艦1隻と会敵する

○皇軍が攻撃を行う。命中弾は4発。いずれも無効

○敵艦は我が方の船速より速い速度で距離を離す

○いきなり全ての船のマストが炎上。いくら帆を張り替えても火災は発生。これは敵艦の攻撃と思われる

○敵艦から日本国籍を名乗る光翼人もどきが飛んできて、甲板に着陸。撤退を要請してきたため、従った

この先もあるのだが、まずこの時点で色々とおかしい。

船が我が方のよりも大きいのに、速度が速いというのは考えられない。船体が巨大であれば水の抵抗も強くなるからだ。

そして炸裂砲弾が4発も命中したのにも関わらず、無効というものもおかしい。

敵は日本国という文明圏外の蛮国らしいのだが、そんな国が対魔弾

鉄鋼式装甲のような代物を持っている訳がないのだ。

そして、カイオスが一番困惑したのはこれである。

『全ての船のマストが炎上』

「…よくもこんなふざけた報告書を出せたものだ」

確かに帆船から帆が無くなれば航行不能となり、実質的な戦闘不能状態になるため、敵船のマストを燃やすのは効果的だ。

だが、いくら何でも全ての船で火災が立て続けに発生したというのは、嘘に決まっている。

そんなことを出来るのは魔帝くらいだ。

…もしかしたら魔帝でも無理かもしれないが。

他にも、この報告書を提出した提督は想像力が豊かなようで、光翼人が飛んできて撤退要請をしたという部分に関しては、彼をファンタジー小説を読んでいるような気分させた。

「何ヶ月か前の『光翼人騒動』じゃないんだからさあ…」

結局、カイオスはこの報告を1ミリも信じなかった。

これが全て、負けた言い訳だと考えたからである。

彼はコップのお茶を1口飲んでから気持ちを切り替え、紙をめくる。

「それよりも、問題はこれだな…」

その指が指したのは、報告書にも出てきた国、『日本国』。

実はここ1ヶ月、蛮国がやけに反抗的なのである。

それは外務局員の全員が顕著に感じていることであり、不思議に思っ調べてみると、必ず日本国というワードに辿り着くのだ。

「皇国に泥を塗ったのはお前か…!」

カイオスは日本国について本格的な調査を開始した。

中央歴1639年11月末――

ロデニウス大陸 北方海域

どこまでも広がる青空の下、潮風は心地よく、海上の波は普段と比べて落ち着いている。

地図には乗らないほど小さな群島が広がる海域を、1隻の商船が帆を張って航行していた。

「姫様、お食事の時間です。今は船上であるが故、このような粗末な食事しかご用意できません。申し訳ございません」

甲板に佇む1人の若く美しい女性はアルタラス王国の王女、ルミエスであった。

「あなた方は朝食を食べていないのではないですか？ 食料の備蓄が厳しいのでしょうか？」

「…はい。想定よりも向かい風が強く、日本国までは、まだまだ時間がかかりそうです」

「…では、この昼食はあなた方が食べなさい。私は昼食はいりません」
事の発端は数日前、パーパルディア皇国から突き付けられた理不尽な要求。それは国内最大の魔石産出量を誇るシルウトラス鉱山の献上と王女の奴隷化というものであった。

当然国民は激怒。列強である皇国に勝てる訳がなかったが、国王は開戦を決意し、アルタラス王国は僅か数日で亡国となったのだ。

列強国との戦いが決定的となり、決死の覚悟で国を守ろうとした王。彼は自ら最前線に立つて戦う、高潔な人物であった。

その王が、敗戦から何としてでも娘だけは守りたいと、ルミエスだけを事前に国外から逃していたのだ。

人間味があつて決して驕らず、民のためにあらんとする王と王女が、上級騎士のリルセイドは大好きだった。

彼女は王が全てをかけて守ろうとした王女ルミエスを、命に代えても守り抜くと決意する。

「なりません！ 姫様は王族、いくら船上とは言え、王族に満足な食事を与えないなど！ 私どもの誇りにかけて出来ませぬ！」

「何をおっしゃいますか、リルセイド。力を使い、働いているのはあなた方です。私は昼食の必要はありません——」

「敵襲うううう!!」

突如、見張りの兵士が叫ぶ。

彼の指さす方向を見ると、群島の陰から3隻のドクロの旗を掲げた船が姿を現していた。

「ッ……海賊か!!」

「総員、戦闘準備! 戦闘準備だ! 海賊船が来るぞ!」

偽装商船タルコス号。その防御力はただの商船とは程遠く、乗組員の7割が騎士、兵士という並外れた戦闘力を有している軍船。

全ては亡国の姫を、安全圏まで送り届ける為に――

同時刻――

海上保安庁 巡視船『しきしま』

「艦長、レーダーに4つの感あり。船と思われます」

「…真ん中の船、包囲されてないか? まさか戦闘中じゃないだろうな?」

「いえ、戦闘中のようです。恐らく海賊に襲われているのだと」

一時的に出力を上げたレーダー画面には、矢のような小さな飛翔物体が無数に表示されていたからである。

「なら話は速い、戦闘海域に向かうぞ。飛べる奴は先に行って加勢してろ。怪我人もいるかもしれん。『うみたか』も飛ばせ」

「了解!」

『しきしま』に搭載されたヘリコプター『うみたか』は舞い上がって行く。

その先には、すでに発艦していた隊員達もいた。

タルコス号は白兵戦を避けるため、火矢での応戦に終始していた。敵の移乗攻撃を許せば、ルミエスの身を守れなくなるかもしれないか

らである。

しかし敵の矢数は多く、ついに海賊の放った火矢がタルコス号の重要な動力源を焼いた。

「クソっ！ 帆がやられたぞ！」

タルコス号はただでさえ大型の商船であるため、小回りが効かない。それが動けないともなると、即座に敵の切り込みが来るだろう。

「移乗攻撃に備——」

「お困りのようですね？」

「ッ?!」

突如甲板に現れた謎の人物。それも複数人。

全員が背中から羽を生やし、空で旋回する者に至っては、腕の部分が鳥のような翼となっていた。

「えつと……どちらさまですか？」

リルセイドは物腰柔らかな態度を示しつつも、いつでも抜刀できるように構える。

「申し遅れました。我々は日本国海上保安庁の者です。海賊に襲われているあなた方を見つけ、救援にやって参りました」

「…日本！」

国王が生前言っていた国だ。

彼曰く、心優しい民族が住んでいるからそこに向かえと。

「それはありがたい！ 我々はアルタラス王国の商船だ。どうか手を貸してく——」

彼女が言い終わるや否や、船が大きく揺れた。

海賊が船を横付けにして来たのである。

「野郎ども！ 今夜はご馳走といこうじゃねえか!!」

「ヒヤッハア——」

彼らは下品な声を上げながらタルコス号に乗り込み、すでに至る所で戦闘が発生していた。

カキインと剣同士がぶつかると火花が散り、数に勝る海賊達はエリートである騎士達を圧倒してみせる。

「ああ…… 王女様！」

リルセイドは絶望した。彼女自身も強いとは言え、これ程までの数を相手に勝てる自信はなかったのである。

しかし…

「ここは我々にお任せください」

海上保安庁の職員達は各々の武器を抜く。

ハイテクな見た目をした刀、ハンマー、小銃と、種類は様々であった。

『しきしま』特別戦闘団の各員に告ぐ。正当防衛^戦を開始せよ」

「お頭ア！ あいつらヤバいつすよ!! 魔剣を持ってます!!」

「焦るな！ 1人に対して数人で取り囲め！」

海上保安庁職員達の手術ベースは自衛隊のものと比べると「戦闘向き」には程遠い。しかしここには、生身の人間相手に出し抜かれるような者は、まずいない。

彼らはいずれも武道に長けており、武器を持たせた場合、自衛隊の「戦闘向き」の被手術兵に、勝るとも劣らない実力を発揮するのだ。

『被手術兵用標準近接戦闘装備 555型超音波振動刀』

自衛隊から（無期限）拝借したもの。手術ベース的に近接戦闘が多くなる者のための標準装備。

名前の通り、微細な振動を発するため、金属ですら簡単に切り裂く。それが人間であれば言うまでもない。

通称『珊瑚^{サンゴ}』。作者が海に行った時、サンゴを踏んづけ足をザックリやったことに由来する。

見た目はハイテクなだけの刀だが、その斬れ味はまさに魔剣。

そして身体能力の高い彼らがこの魔剣を持てば、斬られた海賊は文字通り一刀両断されるのだ。

「おい！ 倒した騎士から鎧を拝借しろ！」

「無理です！ すでに試しましたが、鎧ごと斬られるのです！」

「なにい?! どんな斬れ味してやがる！」

百聞は一見にしかずとは良く言うが、この場合、彼は見たものが信じられなかった。重い打撃以外の攻撃が効かないはずの鉄鎧が、スツパリとやられているのだ：中身ごと。

しかも、その鉄鎧は王国の騎士団が着けるような高性能の物であつたらしく、驚きは止まらなかつた。

「しかもあれ、パ皇の魔導銃みたいなやつ！ 連射できるらしいのです！」

「いくら何でもおかしいだろ!? それは?!」

パーパルディア王国軍は地球でいう中世のマスケット銃のようなものを使用している。

火薬以外の原理は地球のものと変わらず、当然連射はできない。

それが彼らの知る銃であつた。

『対火星生物 テラフォーマー 大口徑 反動制御システム短機関銃』

地球に巢食う火星生物を一般人でも駆除できるようにと米の武器会社が開発した短機関銃。大口徑で威力が高いが、反動制御システムが搭載されており、非常に低反動。装填数150。

パタパタと軽い発砲音の割に、その威力は凶悪の一言に尽きる。

身体が千切れそうな大穴があき、後ろにいた海賊も鉄鎧ごと撃ち抜かれるのだ。

「テラフォーマー以外に向けるもんじゃねえな…」

「ははは！ そいつぁ違くないな！」

しかし火星の害虫相手には、これでも若干の威力不足なのである。

「…お、『うみたか』のお越しだぜ」

その場にいる海上保安庁の職員以外は見慣れない物体が空を舞い、それは巨大な大音声を響かせながら海賊に警告を発した。

『こちらは日本国海上保安庁である！ 海賊行為をしている者に告ぐ、今すぐ武器を下ろし、投降せよ！』

しばらく宙に浮かぶ『うみたか』を呆然と見ていた海賊達であつたが、彼らは気持ちを取り戻し、何もしてこない飛行物体を無視し始める。

しかし海賊の中にもただ一人、その正体を知っているものがいた。

「おい、おめえら…覚悟はできてるか？」

海賊船の団長ルーフルである。

彼の子分が口々に騒ぎ立てている中、彼だけはわなわなと震えていたのだ。

子分達は意味が分からず、回答に窮する。

「あれは…『白い悪魔』の配下の鉄鳥だ。奴は『白い悪魔』を呼ぶぞ!!」
「しっ…『白い悪魔』?!」

それは海賊業界では有名な話で、1ヶ月ほど前に突如として現れた、海賊を片っ端から狩っていく『しきしま』のことであった。

神は彼らに考える時間をくれない。

「あ…い…『白い悪魔』だああああ!!」

島陰から白く、海賊船や商船をはるかに凌ぐ大きさの、帆がない不気味な船が姿を現した。

17話：亡国の王女Ⅱ

「あれが…『白い悪魔』か…!」

「怯むな! 突撃するぞ!」

『白い悪魔』こと海上保安庁の巡視船『しきしま』を見て、海賊達は浮き足立ったが、彼らは同業者の無念を晴らすべく、船側からオールを突き出し突撃した。

「あくあ、人外には目もくれないのか」

「どうする? 処す? 処す?」

それを見た海上保安庁の職員達は、自分達の母船がこれから攻撃されると言うのに、冗談などを言っていた。

そんな様子を見て、落ち着けなかつたのはリルセイドである。

「ちよ…! 戻らなくて良いんですか? これからあなた方の船が攻撃されるんですよ?」

彼女の疑問は当然である。

彼女も大砲の存在は知っており、それがパールディア皇国の戦列艦のように数を揃えなくては当たらないのも知っている。

そして『しきしま』にも大砲のようなものが設置されているのも彼女から見えたが、それはせいぜい一門。

彼女の常識からすれば、彼らを心配するのも無理はない。

「まあ、見ててください。海賊船、数秒で蜂の巣になりますよ」

それに比べて日本人達はひどく冷静であった。

あの海賊船と『しきしま』の間には、絶対に越えられない壁技術の差があったからである。

『しきしま』の前方に設置された、長い棒が付いている屋根のようなものが回転し、海賊船の1隻に向けられた。

「あれは…砲撃か?」

魔導砲にしては細すぎるし、蜂の巣になるの意味がよく分からない。
い。

彼女がよく知る大砲は、命中したら木っ端微塵になるのが普通だからである。

次の瞬間、『白い悪魔』は棒から破裂音とともに無数の弾頭を放出し、曳光弾を交えた35mm口径弾は木造の船底を貫いた。

水線下に開いた無数の穴から海水が侵入し、海賊船はみるみるうちに沈んでいく。

「どうだ？ 見えたか？」

「そもそも、トンボなら回避も余裕よ」

そんな彼らの雑談はリルセイドと、他の騎士達の耳には入らなかった。

彼らは助けにくれたが、あれの標的が自分達にならないとは限らないからである。

「もしあれを向けられたら…」

どう足掻いても、姫様を守れない。

リルセイドの頬を冷や汗が伝った。

「リルセイド！ 皆さん、交代で疲れを癒しなさい。と言っても、あのような船の傍では緊張して休まるかも分かりませんが…船の修理を進めつつ、少しでも休息をとってください。あの白い船との交渉は私がかかります」

戦闘の音が静まったためか、ルミエスは甲板に姿を見せた。

「姫様、何をお考えなのですか？」

「おそれながら、いくら日本国が優しいと言われていても、まだどのような輩か分かりません。初の接触に王族が出向くなど、外交的には迂闊——」

ルミエスは奇妙な格好をした、見知らぬ人物達に気付いた。

「…誰ですか？」

「あつ、えつと…日本国の者です。彼らは助けにくれたのですよ」
それを聞き、ルミエスの顔はみるみるうちに赤く染まった。

どのような輩か分からない、と相手の目の前で言ってしまったのだ。外交的にも、彼女はかなりの失態を犯したことになる。

しかし、彼らの対応は予想外のものだった。

「うおッ…マジすか。姫様ですか」

「ごきげんよう…内親王様…？」

「それは日本の皇族だぞ…」

ある者はペコリと頭を下げ、またある者はぎこちないながらも深々と頭を下げ、その隣の者はツツコミを入れる。

それを見て緊張がほぐれたのか、ルミエスは思わず笑ってしまった。

日本国海上保安庁 巡視船『しきしま』

世界最大かつ、数少ない有人巡視船の一つである『しきしま』は、海賊の潜伏先があると思われるロウリア王国北部キルコーズ地区沖合を巡回中に、海賊船に襲われている商船を発見する。

彼らは直ちに現場に急行、海賊を逮捕し、収容する。

攻撃されていた商船にも負傷者が多数いると返答があり、引き続き商船の救援を行うこととした。

しかし、それが一国の王女を乗せた偽装商船であることが判明。

国はアルタラス王国。まだ日本とは国交を結んでおらず、完全に未知との遭遇であった。

「ひつろーい！ 船というより、もはや要塞ね！」

「姫様、はしやぎ過ぎです…。間違っても彼らを刺激しないようお願いいたしますよ！」

日本国を名乗る船に、船の長兼1国の代表として王女ルミエスと上級騎士リルセイドは乗船。

初めて乗る全身金属製の船に、ルミエスは年甲斐もなくはしやいでいた。

（なあ、この子は本当に王女なのか？ なんでこんなに上機嫌なんだよ?。）

（知らん。助けられたからじゃね?。）

海賊であれ救助した者であれ、今までこの船に寄せられた現地人は

全員がひどく怯えていた。

しかしなぜかこの王女様は上機嫌であったため、乗組員達は疑問に感じていた。

(まあ可愛いからいつか…)

2人は乗務員の案内に従い、船長のいる部屋に入室する。

部屋の中には背が高く引き締まった体格の男が立っており、慇懃な態度で2人を出迎えた。

「はじめまして、私は日本国海上保安庁の巡視船『しきしま』の船長、瀬戸です」

「私はアルタラス王国の王女ルミエスです。このたびは貴国の救援に感謝します」

「…!!」

先行した船員の報告通り、相手がガチの姫であることに瀬戸は不安を隠しきれなかった。

相手の航行理由がどうであれ、これは国際的に面倒くさいことになるぞと本能が嗅ぎとったのである。

「ええと…ルミエス王女様、貴船の航行目的を教えてくださいてもよろしいでしょうか…?」

「…」

しかしルミエスは答えられなかった。彼女は戦争状態にある国家の要人であり、もし日本国に厄介ごとを嫌う性質があれば、回答如何によつては亡命や救援の拒否も十分に考えられたためである。

(これは訳ありだな。家出か? 船の航行能力は大丈夫そうだし、ある程度の救援をしたらおさらばするか…)

しかし、瀬戸が人知れず感じていた予感的中した。

なんと彼女がいきなり倒れたのである。

「ひ…姫様あ!!」

「なっ?!」

瀬戸が見ると、彼女は異常なほどの汗を流し、口から涎を垂らしていた。目の焦点も定まらず、ガタガタと震えが止まらない。

「まさかさつききの戦闘で——ど…毒矢か!」

「い…いかん！——こちら瀬戸！ 女性1名、救命措置を要する！
『わかたか』の離陸準備急げ！」
アルタラス王国王女ルミエスは、日本国のへりを乗り継ぎ、クワ・
トイネ公国のエジエイ自衛隊基地内の自衛隊病院まで搬送された。
だが彼女は一国の王族であるため、万が一があってはならないと、
外務省権限で日本国内の大病院に搬送される運びとなった。

日本国 外務省

とある一室で、将来を有望視されている職員が2人、柳田と中井は話をしていた。

「緊急的な措置とは言え、結果的に戦争状態にある国の王族を保護してしまったか…やってしまったな」

しかも相手はパーパルディア皇国。この世界では大きな地位を築いている列強国である。

「まあパ皇とはすでに自衛隊が衝突してしまってますからね。あのプライドの塊が我々と戦う以外の方法を取ってくるとは考えにくいですよ」

もったもな意見である。

相手はこちらを文明圏外の蛮国としか見ていないのだから、話し合いが通じる訳がない。

しかも、すでに衝突してしまっているのだから、『戦争は避けられない』というのが関係閣僚から出ていた。

「うーむ…」

「アルタラス王国はパ皇の首都に近い位置にあります。今のうちに彼らを味方につけておけば、皇国との対立が決定的になった時に使えますよ」

「そうだな。上に話を通してみよう」

後日、中井と柳田の尽力の甲斐あって、王女ルミエスの保護が決定。

他の乗組員達も保護されることになったが、これに関与した者には籍
口令が敷かれ、彼女の存在は時が来るまで隠蔽されることとなった。

辺境の魔王編

18話：魔王復活

辺境の地に魔王が復活した。その名はノスグーラ。はるか古の時代に太陽神の使者によって撃退され、伝説の勇者達によって封印された魔物の長である。

その報に真っ先に反応を示したのはトーパ王国。

魔王が復活したと言う魔物の大陸と、人間の生存圏を隔てる『世界の壁』の管理を任された文明圏外国であった。

中央歴1639年12月5日――

トーパ王国　　王都ベルンゲン　　ニールベル城

「何故…なぜ今になって突然、神話の魔王が復活したのだ…？」

王は頭を抱え、唸るように問う。

その顔は恐怖で引き攣っており、青ざめていた。

よもや自分の治世に…いや、自分が生きている時代に最悪の魔王が復活するとは思わなんだ。

「神話では…魔王ノスグーラは勇者4人のうち3人の命を使用して呪結界に封じ込められたようですが、この結界は少しずつ弱まっていますと古くから言われていました。それが今になってようやく封印が解かれたのでしょうか」

傍に控える宰相が答えた。

古代の文献を元に作られた報告書を見ながら説明する彼に、王は八つ当たりにも近い態度で応答する。

「そんなことは分かっている！問題はどうかやって魔王を討伐するかだ！その軍勢も含めてな…！」

魔王の軍勢とは単体でも非常に強力な『魔王』を筆頭に、伝説の魔獣である『赤竜』や『ブルーオーガ』『レッドオーガ』。そして騎士10人でようやく勝てるというオーク、大地を埋め尽くすほどのゴブリ

ンによって構成された大軍勢の事を指す。

その圧倒的な物量は全ての人工物を薙ぎ倒して進み、非常に強固な防壁であるはずの『世界の壁』をもすでに陥落せしめた。

奴らは本気で大陸を蹂躪する気だ。

「考えたくない話ですが…もしも我が国が落ちれば、神話の如くフィリアデス大陸全土に魔物が拡散しかねません。陛下、これは世界の危機であります。各国に援軍の要請をしましょう」

「う…む。そうだな、そうしよ——」

しかし王の言葉を遮り、宰相の提案に手を挙げたのは騎士団長であった。

「陛下！ 恐れながら私は援軍が必要だとは思っておりません。当時に比べればドワーフの技術、エルフの魔術は遥かに向上しております。オークやゴブリン程度であれば、我が国の戦力のみで十分対応可能と思われまます」

「そうか……。そうだよ…な？」

「しかし」

騎士団長は続ける。

「問題は魔王とその側近です。これに関してはパーパルディア皇国と、日本国に応援を要請しましょう」

もつとも、トーパ王国はつい先日パーパルディア皇国の要求を突っぱねたので、彼の傲慢な国が援軍を送ってくれるとは思わないが…。

となると、頼みの綱は日本国だけである。

聞く所によると、彼の国の軍は文明圏外の新興国にあらざる強さを有しているらしい。

音速を越える航空機、大地を蹂躪する鋼鉄の魔獣。艦船は誘導魔光弾を配備し、3桁ものワイバーンの大群を跳ね返す戦闘力を持つとか…。

そして、魔力を持たない『魔人』。

彼の国の援軍がいれば魔王なんぞ恐るるに足らず。

「う…む…だが、日本国は国外に軍を送ることに消極的ではなかつ

たか？」

「確かに彼の国は国家間の紛争に関しての軍隊派遣に消極的ですが：この場合は大丈夫でしょう。相手は人類の敵、魔王なのですから」
「ふむ？　では、日本国とパーパルディア皇国に対する援軍の要請を許可する。くれぐれもしくじるなよ？」

「はっ！」

会議は深夜まで続いた。

翌日――

日本国　外務省　応接室

日本駐在トーパ王国大使は、外務省の応接室で頭を抱えて悩んでいた。

昨日、本国から魔王討伐の援軍を願い出るように魔信で指令が来たのだが、その事に関してである。

それは何故か？

日本国は非常に強い軍隊を保有しているのにも関わらず、『自国の防衛以外に軍を送る』ことを異常に嫌うのだ。

『どうしたものか…』

聞けば、パーパルディア皇国はトーパ王国の援軍要請を断ったと言う。

大陸どころか全人類の危機なのに、あそここの異常なプライドの高さは、世界が滅亡しても治らないのだろう。

「――という訳で、我がトーパ王国騎士団は現在、城塞都市トルメスにおいて魔王軍と戦闘中です。雑兵なら我が国の騎士団でも対応可能なのですが、魔王の力が伝承通りなら、我々は絶対に勝てません。少数でもいいので自衛隊の派遣をお願いできませんか？」

トーパ王国大使は国の全ての命を背負ってるつもりで説明する。皇国が当てにならないとなると、残された頼みの綱は日本国しかないな

いのだ。

日本国の外務担当は少しばかり考え込んだ。

「その魔王と言うのは知的生命体ですよ？ 知的生命体を一方的に虐殺したとなれば、国民感情や対外関係に影響が出る恐れが…」

パ皇もパ皇だが、日本の臆病ともとれる異常な慎重さは世界の危機でも変わらないようである。

それとも、これが世界の危機だと認識できていないのか。

「しかし…魔王及びレッドオーガ、ブルーオーガは人肉を主食としています。それでも保護する必要がありますかね？」

「……!!!」

日本国の面々の表情が明らかに変わったのを確認し、トールパ王国大使は後者が正解だったのだなと考える。

「…なるほど。他官庁も絡む問題なので、この件は一旦持ち帰ります。そちらとしても緊急を要するでしょうから、なるべく早くご回答さしあげます」

悪くない手応えに、駐日大使はホッと息をついた。さすがに人類の天敵ともなると、日本も重い腰を上げてくれるようだ。

後日、日本国政府は有害鳥獣駆除の国際貢献として、陸上自衛隊のトールパ王国への海外派遣を決定した。

中央歴1639年12月12日――

陸上自衛隊 トールパ王国特別派遣部隊先遣小隊

「私はトールパ王国特別派遣部隊先遣小隊の小隊長を拝命しました、百田太郎です。それではこれより、今回の派遣の概要について説明します」

百田隊長が数名の分隊長、隊員達、国際協力機構^Jの職員達を前に話し始める。

「今回我々は有害鳥獣駆除の名目でトールパ王国へと派遣されるのです

が……。今回の害獣は『魔王』と呼ばれる、知能を持った生物であることが確認されています」

隊員達は配布された紙を見る。

○魔王は知能を持ち、他の魔獣を配下に置き、組織的に人類に対し害を与えようとする

○魔王は『古の魔法帝国』によって作り出された生物兵器の1種と思われる。おそらくは遺伝子操作か、それに類似した技術であると思われる。

○レッドオーガ、ブルーオーガと呼ばれる個体は魔王に比肩しうる知能を持ち、身体能力に優れ、耐久性も頑強。現地騎士団の攻撃が通じないと報告あり

○オークと呼ばれる魔獣は全長2.5m程度の巨人のようなものである。知能は低いが頑強な肉体を持つ

○ゴブリンと呼ばれる魔獣は人間より力が弱いが強暴である。時間を置くとすぐに増殖する

○本任務の主目的は、魔王及びレッドオーガ、ブルーオーガの駆除である。

これを見た隊員達の意見は様々であった。

(7.62mm銃弾効くのかな……)

(ゴジラよりは弱いな……)

(人民解放軍の被混合手術兵の方がよっぽど強そう……)

(俺の方が強いな……)

「――以上です。今回は相手が完全に未知の生物であるため、部隊編成には被手術兵を多めに組み込みました」

概要を見る限りは、劣化版の被手術兵が相手と考えた方が良いのかもしれない。

裏を返せば、トーパ王国の騎士達は前時代的な装備でそれが率いる軍勢に挑んでいるのだ。

(一刻も早く助け出さないと……!)

皆の気持ちは同じであった。

「出発は3日後、各自準備を怠らないように。では解散!」

今回の先遣小隊の派遣目的は、あくまで状況把握である。

目標の弱点、撃破方法など、調べることは多岐に渡るが、可能であれば先遣小隊のみでの撃破も許可されていた。

むしろ、撃破する気満々である。

それは派遣隊に編成された被手術兵の人数を見れば分かるだろう。普通の小隊なら多くても10人にも満たず、少ないと1人か2人なのに対し、今回はなんと驚愕の40人である。

自衛隊では小隊の人数は30〜50人。今回の派遣小隊は50人で、百田小隊長と3人の分隊長、車両の運転手以外はほとんどが被手術の戦闘員なのだ。

そして以下は今回の被手術兵の手術ベースの一覧である。

虫類 16名

『弾丸蟻』
パラボネラ

『侍蟻』
サムライアリ

『大雀蜂』
オオスズメバチ

『アフリカナイズドミツバチ』
キラー

『リオック』

『ドクシボグモ』
オオムカデ

『大百足』

『イエローファットテール スコーピオン』

『タンザニア大馬陸』
オオヤスデ

『アマミサソリモドキ』

『ゲジゲジ』
カフトムシ

『兜虫』
オオクワガタ

『大鋏形』
オニヤンマ

『鬼蜻蜓』

『アシダカグモ』

『ゲンゴロウ』

動物類 9名

『ゴリラ』

『イリエワニ』

『アフリカゾウ』

『リンガルス』

『ハブ』

『オウギワシ』

『ツバメ』

『ナミチスイコウモリ』

『ジャーマン・シエパード・ドッグ』

水生生物類 10名

『タスマニアアンキングクラブ』

『ニシキテツポウエビ』

『デンキウナギ』

『テツポウウオ』

『アンボイモガイ』

『ハブクラゲ』

『ウミケムシ』

『ヒョウモンダコ』

『アナサンゴモドキ』

『カツオノエボシ』

その他 5名

『トリカブト』

『ヒカゲシビレタケ』

『カエンタケ』

『ジギタリス』

『ドクササコ』

何ともまあ、殺意増し増しな構成だ。

戦闘力に劣る支援要員を一切排除し、全員が全員戦闘要員という脳筋部隊。中には個人で師団単位の敵を壊滅しうる者も存在する。

そして小隊の隊員の多くはすでに、上層部の意図を感じ取っていた。『調査や捕獲なんて考えず、容赦なくぶち殺せ！』だ。

「鬼ヶ島の鬼退治、『桃太郎様ご一行』ですね」

誰かが呟き、笑いが起こる。

実はこの作戦は『オペレーション・モモタロウ』と名付けられ、部隊指揮官らの名前は太郎、キジ、サル、犬と本当に昔話の桃太郎のような者が集められていたのだ。

「アホぬかせ。これじゃあ『桃太郎と愉快な仲間達』だよ」
血湧き肉躍る猛獣

さらに大きな笑いが起き、隊員達の気が緩む。

だが魔王という生物が一体どれほどの戦闘力を有するのかは一切不明という現状、「この小隊と同じような編成の大隊を送ろう」と言った日本政府と臆病だと笑う者はここには一切いなかった。

隊員達は自分が負けるとは微塵も思っていなかったが、それなりの緊張感を持ってトールパ王国へと向かって行ったと言う。

19話：魔王の側近マラストラス

中央暦1639年12月19日――

城塞都市トルメス 南門

魔物の大陸と人間の生活圏を隔てる防壁「世界の扉」が陥落し、魔王軍との戦争においての最前線となってしまった城塞都市トルメス。

その南門で、2人の男が立っていた。

「なあモア、俺達が案内する自衛隊ってどんな連中なんだ？ 小隊規模の援軍って意味あんのか？」

「さあ…？」

騎士モアと、傭兵のガイである。

2人は元々は「世界の扉」に勤務していたが、伝令として一足先に戦線を離脱、襲撃時にそこにいなかったため運良く生き残ることができたのだ。

彼らは現在騎士団に身を置いており、上からの命令で間もなく到着するであろう自衛隊員の案内を任されていた。

北方に位置するトーパ王国は年間を通して寒々しい。

モアが言葉を続けると、口から出た息は瞬時に白くなり、煙のように空へと登っていく。

「だけど、彼らの力が噂通りならすごいことになるよ。君もロデニウス大陸のことは知っているだろう？」

「ああ、絶対に勝つと言われていたロウリア王国が負けたんだろ？で、なんか変な噂でもあるのか？」

首を傾げるガイ。

彼も日本国がロウリアとクワ・トイネ、クイラの戦争に介入していたのは知っていたが、そのような噂は聞かなかったのだ。

「聞いて驚くなよ…！ その戦争で、日本軍は1人も死傷者を出さずにロウリアの大軍を撃退したらしい。特に海戦はすごいぞ！ 4400隻もの大艦隊をたった8隻で撃退したんだ！」

「ふーん？ 魔導砲か何かで弓矢の射程距離外から攻撃したのかな

？」

モアの予想に反してガイは大して驚かなかった。

日本国も魔導砲らしき物を配備しているのは彼も知っている。その事象から考えるに、日本国は列強の一国であるパーパルディア皇国と同じくらいの技術水準があるのだろうと彼は判断していたのだ。

仮にロウリアの相手がパーパルディア皇国だったとしても、似たような結果になっていただろう。

にしても8隻は少なすぎだと考えたため、そこは幾分か誇張が入っているのだろうとも彼は思った。

「いや、海戦でも陸戦でも斬り合い近接戦闘が多発したようだ。なのに日本国の死傷者はゼロだ！ 君はすごいとは思わないか?！」

ガイは少し考え込んだ後、口を開いた。

「そりゃ嘘だな。接近戦で1人も死傷者が出ないなんて有り得ない。自分たちを強く見せるための情報操作ってやつだ」

「そ、そうか…?」

2人とも自衛隊の実力がある程度は認めていたものの、かなり期待しているモアに反して、ガイは懐疑的であった。

「おっと…そろそろだな。まあ噂がどうであれ相手は国賓だ。くれぐれも粗相のないようにな?」

「へっ！ わかってらあ」

遠方から大きな魔獣が唸るような音が聞こえ、彼らはいよいよかと気を引き締める。この声の主は恐らく、日本軍の使役する魔獣か何かだろう。

しかし、丘の向こうから現れたその魔獣は、彼らの予想を大きく上回って来た。

「な…なんだあれは…!?!」

鋭い剣も槍をも通さないであろう無機質な皮膚に、中心に穴が空いた長い鋼鉄の角。前方で先導している騎士団が弱く見えるほどの禍々しい巨体。

「なんだあの魔獣は…? 見たことがないぞ…」

後から知ったのだが、あれは魔獣ではなく日本陸軍が配備している

「戦車」と呼ばれる戦うための乗り物らしい。もつとも、乗り物と言っても人が乗っていないらしいが。

あの身体の大きさに対して細長い角は遠距離攻撃を行うためのものらしく、言われてみれば魔導砲のようにも見えなくはない。

そしてその魔獣よりも気になったのは、彼らの掲げる旗だ。

大きく描かれた日の丸の旗。

それはまるで、おとぎ話に出てくる――。

「なあモア、あれって…」

「ああ…！　まるで太陽神の使いのようだな！」

これで国が救われる。

淡い希望を抱いたのも束の間、後続の乗り物から自衛隊の方々がりて来、彼らは姿勢を正す。

しかし、彼らの希望は再び懷疑――もしくは幻滅に近いだろう――に変わった。

自衛隊員達の服装を目にしたせいである。

「日本国陸上自衛隊、トールパ王国特別派遣部隊先遣小隊、小隊長の百田太郎二等陸尉です。ご案内感謝いたします」

（なんだこの蛮族のような格好は…?!）

モアとガイにとつて、彼らの服装を一言で表すならば「蛮族」であった。

背景にもよるが、こうしてかなりの近距離にいるのにも関わらず、一瞬彼らを見失ってしまうのはこの模様のせいには間違いない。これなら遠距離攻撃の被弾率を幾許か下げられそうな気はする。

「けどそこまでするか?!　というのが彼ら2人の正直な感想であった。」

「トールパ王国『世界の扉』守護騎士モアです。隣の彼は傭兵のガイです。これよりトルメス城にご案内した後、我々はあなた方に同行いたします。よろしくお願いします」

それでも相手が国賓なものには違いない。

2人は態度をよりいっそう改め、隊員達をトルメス城まで連れていく。

城の中に入るのは百田という小隊長を含めた数人だけで、他は外で待機するらしい。

「あの服装をしている人をこうして見ると…確かに自然に囲まれた所なら目立たないな。あの汚い模様にもちゃんと意味があったのか」

最上階のまでの長い階段を登りながら、窓から自衛隊員達を見下ろすガイ。

「しっ！…聞こえるぞ」

「ああ…すまねえ。でもあの模様すげえぞ？　ちよつと離れると途端に人が消えるんだ。目を凝らしたらそこに居るつてのは分かるけど…」

「日本人は相応な実利主義なんだな…。ほら、もうそろそろ最上階だから態度には気をつけろよ？」

「知つてらあ」

軍の上層部が集う最上階に着き、モアは客人を連れた状態で部屋の扉をノックした。

「失礼します。日本の方々をお連れしました」

「お通ししろ」

返答が聞こえ、一同は中へと入る。

日本人が見たら中世ヨーロッパを彷彿とさせる部屋、その真ん中に映画で見るような円卓があり、その1番奥の男が立ち上がって来客を迎えた。

「日本の方々、よくぞ来てくださった。私はトールパ王国軍騎士長、魔王討伐隊長のアズズです。どうぞよろしくお願いします」

「日本国陸上自衛隊トールパ王国特別派遣部隊先遣小隊、小隊長の百田太郎二等陸尉です。よろしくお願いします」

そして各々が自己紹介して短めの挨拶をすると、さつそく会議が始まった。

まずは状況の確認からであり、各々に資料が配られる。

○魔王軍約2万が2週間前に侵攻を開始。『世界の扉』を　陥落させる

○続いて城塞都市トルメスから北側に位置するミナイサ地区に侵

攻、これを陥落

○魔王はミナイサ地区西側の領主館を占拠し、外には出ていない

○同地区には民間人約600名が取り残されており、毎日数十人が餌にされているため、現在は約200名まで減っている

「…事態は切迫していますね」

すでに半分以上の民間人が犠牲となっており、百田は拳を握りしめる。

「そうなのだ…：オーガと魔王さえ倒せば我々だけでも何とかなるのだが、我々では歯が立たぬ」

トールパ王国の騎士曰く、オーガは人間の何十倍もある怪力を有する非常に強力な魔物であるとの事だ。

おまけに怪力だけでなく、食事の供給がある限り延々と動き続け、中途半端な傷であればすぐに魔法で回復してしまう持久力と、針金のように硬い毛は剣や槍では十分な殺傷効果が認められない防御力を持つため、非常に厄介でもあるらしい。

「なるほど…：力は『蟻』くらいで、再生能力は『ウミウシ』かな？ 毛は…」

『ヤマアラシ』とか？」

「それが近いかもな」

「…??？」

ここは日本人にしか伝わらない話であったが、オーガが情報通りの強さならば、この例えはかなり近いかもしれない。

こんな被手術兵みたいな奴が敵として存在するのであれば、確かに前近代的な装備のトールパ王国兵では絶対に勝てないだろう。

一刻も早く助けないと…！

百田は少し思考を巡らせ、口を開いた。

「分かりました。準備が整い次第、私達は鬼退治と参りましょう」

「おお…！ あのパーパルディア軍を退けたという自衛隊が動いてくだされば、まさに千人力ですな。作戦決行に合わせて我が騎士団も全力出撃いたしましょう」

そうは言ったものの、アジズを含めた軍の上層部はモアやガイと同

様に自衛隊の力には半信半疑であった。

とんでもなく強いとの噂を聞くが、まだその強さの確信に至る光景を目にしていけないからである。

それを知ってか知らずか、百田は淡々と説明を続ける。

「まずは作戦協議を行い——」

しかし、彼の言葉は襲来する何者かの存在によって遮られた。

「百田隊長！ レーダーに反応あり！ 飛翔物体がこちらに接近中！」

「なっ——」

——ドガアツ!!

天井付近の窓が板戸ごとぶち破られ、冷えた空気とともに黒い影が部屋へと飛び込んで来る。

木片とガラス片が床に散り、翼をはばたかせた「人型の異形」が円卓の上に舞い降りた。

「こいつは……!!」

「…魔王の側近、マラストラス!!!」

突然現れた敵の存在に、会議室にいる騎士達は剣を抜き、構えた。

しかし、相手は人間よりも遥かに強力な生物。この場にいる人数では絶対に敵わない強敵と相対し、騎士達の手は震える。

マラストラスは怯えきった彼らを見下すように周囲を観察してから口を開き、笑った。

「ホツホツホ……人類の将を討ち取るために我が——え？」

——ドゴオオツ!!!

鷹揚に話すマラストラスの顔面に、容赦のない一撃拳がめり込む。

とつさに展開した強力な魔力障壁ごと顔面が破碎され、マラストラスの身体は壁に激突し、膝から崩れ落ちた。

「アッ……ガハッ……」

たった1発だったが、経験したことのない強力な一撃で

マラストラスは戦闘不能となる。

魔力障壁を展開できたからよかったものの、あれが無かったら間違いない致命傷だっただろう。

身体の再生が始まり、何とか時間を稼ごうと彼(?)は口を動かす。
「…ゲホッ！ 貴様…何者…」

「まだ生きてるのか。よし、やれ」
「…エッ」

あまりにも無慈悲な態度に、マラストラスは絶望する。

次の瞬間、彼の周囲に白い稲妻が発生した。

バババババババ!!!

「ツツあガガツが!がががつがつガツ?!!!」

苦痛に満ちた絶叫は数秒間にも渡り、マラストラスの身体は完全に炭と化する。

あまりにもおぞましい断末魔と、原理が不明な攻撃にトールパ王国の面々は真つ青であつた。

攻撃の正体は「放電」。

それは魔法文明にとつて未知の攻撃方法であつた。

「よくやった2人とも。部隊の初手柄は君たちのものだ」

百田が連れて来た2人の隊員。

彼らはかつてロウリア王国戦でも大いに活躍した自衛隊の精鋭であつた。

『刺針蟻』
パラポネラ

「最強の蟻」にして「最強の昆虫」。その寧猛さと一刺しでまるで銃で撃たれたような痛みを与えることから「弾丸蟻」と通称される。

自重の100倍近い物を持ち上げる怪力から繰り出される一撃の威力は計り知れない。

『電気鰻』
デンキウナギ

一属一種の電撃生物。探索や威嚇程度にしか電気を使わない他の発電生物と違い、敵を殺傷するために電撃を用いる唯一の生物である。電気によるリーダーで遠くの生物の位置を知ることが可能。

アジズは黒く焦げたマラストラスを眺め、茫然とする。それはモア

やガイ、その場にいる自衛隊員以外の全員がそうであった。

変温動物のワイバーンは寒いトールパ王国には存在せず、航空戦力が持てない以上、上空から何度も魔法を放つマラストラスに彼らは散々苦労させられたのだ。

例え地上でも、その膨大な魔力量から放たれる攻撃は大きな脅威である。

それを……自衛隊はたった2人で倒した。

しかも片方の人物は莫大な魔力量で発動される非常に強固な防衛魔法を素手で打ち破り、致命傷に届かなかったとは言え、それに限りなく近いダメージを与えたのだ。

「……もう疑う余地はないな」

アジズを含むトールパ王国の面々は自衛隊への認識を改めた。

この辺境の土地まで届く噂は本当だったのだ。

「百田隊長、マラストラスを倒していただき助かった。礼を言う」

「いえ、我々は成すべきことをしただけなので。では、作戦協議を行いますしょう」

百田が持参した紙を配り、作戦協議が始まる。

ミナイサ地区の民間人救出作戦の会議は、深夜遅くまで続いた。

20話：ミナイサ地区生存者救出作戦

城塞都市トルメス ミナイサ地区

「あれから何日が経ったんだろ…」

魔王軍の襲来以前はミナイサ地区で飯屋を営んでいたエルフの女性、エレイは大講堂の隅で呟く。

事の発端は数日前、平和な日々^にに突如現れた魔王軍により、彼女が生まれ育った町は蹂躪された。

そして現在、幸か不幸かはさておき、エレイと同じように侵攻の際に生き残った者達は^{大講堂を始め、議場や学校などの大きな建物に集められていた。}

両親も親友は行方不明で、幼なじみのガイ君とモア様は『世界の扉』に勤務していたため、もう死んでしまったのかもしれない。

あまりにも突然すぎる別れに、あの時死んでいた方が楽だったかもしれないと彼女は絶望した。

(……今日もか)

もはや何回目かも覚えていないが、薄暗い部屋の外がうっすらと明るくなる時間帯だ。

この時間になると必ず何人かが餌としてどこかへ連れて行かれるため、エレイが押し込まれている大講堂の人々もだいぶ少なくなってしまうていた。

扉が開くのはこの時だけ。

この隙を伺って逃げ出そうとした者も何人かいたが、建物の周囲には魔物や魔獣が交代で見張りをしているため、逃げる事は叶わない。

逃げ出そうとした人達はすぐに発見されて捕まり、皆が見ている前で生きたまま料理にされた。

(なんで…私たちが生きている時代に御伽噺の魔王が復活したの?)

髪をぐしゃつとかき分け、彼女は口を開く。

「……神様、助けて……！」

彼女は捕まった時から必死に祈り続けて来ていたが、もうすでに空

腹と疲労で限界だった。

だが、こんな絶望的な状況でも一片の希望も無い訳ではない。

大昔に魔王軍に追い詰められたエルフたちが神に向かって祈り、彼らの祈りを聞き届けた太陽神がその使者をこの世に遣わして魔王軍を撃退したという昔話もあるのだから。

これらは作り話ではなく本当に起こった事であるため、世界中で認知されている。

頑張つて祈り続けてれば、必ず助けが来る。

少なくとも、そう考えるだけで救われるような気がした。

そこへ、いつもの魔物が数体やってくる。相変わらず扉付近の警備は固く、あそこから逃げ出すのは魔王を倒したという勇者でもなければ不可能だろう。

「魔王様、今日ハあつさりしたモノガ食いたいト言つてタぞ」

「ナラ今日ハ野菜ヲ中心とするカ。ソレにメスエルフの肉デも添エよう」

エレイはドキつとした。

とつさにエルフ族特有の長い耳を隠し、寝ている振りをする。

(来ないで…… 来ないで……)

この場所にはまだ80人近くも残っているのだから、まだ自分が選ばれる事はないはず。

全く根拠の無い話だが、彼女は本気でそれを信じ続けた。

「おおまえとおおまえ、それとおおまえな」

——ガシッ

魔物に右腕を捕まれる。

次の瞬間、エレイは絶叫した。

大粒の涙が溢れ、体は本能のままに暴れる。

「助けて!! 誰かッ!!」

だが、目に入る大人も子供も、誰も目を合わせてくれない。

それどころか今日も自分じゃなくて良かったと安堵する者ばかり。

「いら、暴れンな」

大の大人ならまだしも、力の弱いエレイはすぐさま魔物に押さえ付

けられ、そのまま外へと連れて行かれてしまった。

夜が明けて東の空から太陽が顔を覗かせる頃、陸上自衛隊の先遣小隊はいくつかの分隊に分かれてミナイサ地区へと踏み入れる手筈となっている。

彼らの作戦概要はこうだ。

- ・百田分隊：赤鬼レッドオーガの討伐、及び陽動
- ・城島分隊：青鬼ブルーオーガの討伐、及び陽動
- ・犬神分隊：生存者の救出、その後の保護
- ・猿渡分隊：生存者の救出、その後は遊撃

○魔王は領主館にいとされていづつどのタイミングで外に出て、どこに向かうかも不明なため、遭遇した場合は全戦力を以て殺害を試みる。

○自衛隊が全ての生存者の救出を完了し、彼らの安全が確保出来た後、トールパ王国騎士団が市街へと進行を開始。自衛隊と協力して掃討作戦を行う。

まずは弓兵や魔法使いが城壁の上から近辺の魔物を掃討し、付近の安全が確保できると巨大な扉が開き始める。

いよいよ作戦開始か、と隊員達は各々気合いを入れた。

「——レッドオーガだ！ レッドオーガがオークとゴブリンを引き連れて真っ直ぐこちらに向かって来ているぞ！」

すると突然、城壁上で見張りをしている兵士が叫ぶ。

自衛隊がミナイサ地区に侵入するのに使用した城門からは一直線に大通りが走っており、その約1.5 km先の広場手前で待機していたレッドオーガに運悪く見つかってしまったのだ。

ただでさえデカイ凶体に、戦場で最も避けるべき色目立っをしているため、遠くからでも発見は容易い。

見張り員がなぜこれを見逃したのか不明だが、目標が自分から来て

くれるなら話は早い。

「戦車砲だ！ ぶちかましてやれ！」

百田が指示を出し、すぐさま戦場の砲口がレッドオーガへと向けられる。

しかし――

「撃てません！ 砲弾が貫通した場合、大講堂を巻き込んでしまうかもしれません！」

生存者が最も多いと見られる大講堂は戦車砲の射線上に存在する。

今この場から攻撃をすると、流れ弾――レッドオーガがいくら強靱な肉体を持つているとは言え、厚さ数百mmの鋼鉄をも貫く戦車砲に耐えられるとは考えにくかった――が生存者たちを巻き込む恐れがあるのだ。

「それは困ったな…。じゃあ、普通に殴るか」

すぐに新たな指示が出されて部隊は散開し、各分隊は己の任務を遂行するため、市街へと姿を消して行く。

一方で百田率いる分隊は最も目立つであろう戦車を囮とし、レッドオーガが通るであろうルート横の脇道へと先行、息を潜めた。

数分もしないうちにオーガ率いるオークの群れは百田達の潜む地帯へと突入し、尚も囮の姿へと向かって走り続ける。

「今だ！ 百田分隊の全隊員、攻撃開始!!」

待つてましたと言わんばかりの表情で、彼らは薬を服用する。

「人為変態…！」

側面の脇道、両側の家屋、建物の屋根上から襲いかかる伏兵。

完全に囲まれた状態で奇襲をかけられたオーガとオーク達は足を止めて取り乱す。オーガを含め、すぐさま戦闘態勢に入れた個体はたった数体。

戦闘は数分も経たないうちに終わった。

魔王軍の中でも特に強いとされている赤鬼は『弾バラ丸ポネ蟻ラ』が手術ベースの隊員に頸部を殴られて卒倒。追い討ちをかけられ、意識を取り戻す事もなく死亡。

『ニシキテツポウエビ』が発生させる衝撃波、『カツオノエボシ』や『イ

モガイ』の毒針でオーク達は軒並み全滅。

オークと比べて移動速度が劣り、遅れてやって来たゴブリンの群勢数百匹も『トリカブト』の『専用武器』毒ガス放出器で大半が即死。

他の隊員たちも大いにその力を発揮していたが、百田は小銃で死体撃ち（敵の死亡確認およびトドメ）をしていただけであった。

たった9人の分隊だが、彼の部下たちの制圧力が高すぎてそれしかすることが無かったのである。

「こりゃあ…生身の人間の出る幕はないな」

百田は改めて手術を受けた人間の有用性を思い知る。

それと同時に、国内にはまだまだ猛者がいることからこの世界での日本の軍事力は何十年経っても揺るがなさそうだと考えた。

百田分隊がレッドオーガを討伐し、付近に隠れている残敵を掃討している頃、市街の案内役であるモアとガイの2人を連れた犬神分隊は、涸れた上水道を通じて大講堂の裏手にある井戸の底へと到着していた。

「付近に人間大の生物5体の存在を察知、見張りのゴブリンと思われるます」

「30秒後に飛び出て制圧するぞ。時計合わせ…三、二、一、始め」
「人為変態——」

時計の秒数を合わせ、各々が変身薬を服用し、戦闘態勢に入る。

変身後の彼らの姿にモアとガイはいささか動揺していたが、すぐに隠密作戦中だと思い出し、口を閉じた。

——27、28、29、30…

瞬間、人間離れた身体能力で井戸の壁を駆け上がり、飛び出る自衛隊員。

彼らはその存在を敵に気取られる事無く、見張りのゴブリンロード達を音も無く全滅させた。

「クリア」

「こちらもクリア」

モアとガイを暗い井戸の底から引き上げ、彼らは武器を構えたまま講堂内に侵入。

途中で巡回中と思われるゴブリンやオーク数体にも遭遇したが、声を上げさせる間もなく瞬殺し、制圧。

入口付近のガードが固い場所も手早く制圧し、扉を開けた。

「こちら犬神分隊。ポイントAに侵入、生存者約80名を発見。井戸から救出する。送れ」

『こちら百田、了解。赤鬼は倒した。作戦続行されたし。以上』

しかし生存者80人を見つけられたのは良いものの、ガイは焦っていた。

「エレイ！ エレイはどこだ?!」

「どうしたんだガイ君。誰か探しているのか」

「エレイが…! あいつがいないんです! 俺の幼なじみが——」

言い終わるや否や、ガイは大講堂の玄関から約100mの距離に、ゴブリンロード数体に手を引かれるエルフの女性達を目にした。

恐らくはこれから魔物共の餌となってしまう人達だろう。しかも、そのうちの1人は幼なじみのエレイであった。

「——エレイツ!!」

考えるよりも前に身体が動き、抜き身の剣を構えてガイは一直線に走り出す。

だが、重い鎧を着ているためその速度は遅く、道中にもチラホラと魔物の姿が見えるため、救出は困難かと思われた。

しかし、ガイが走り出すよりも前に飛び出していた隊員がいた。

『オオスズメバチ』と『アシダカグモ』である。

『美女救出の手柄は俺のもんだ!』

『邪な動機で人質を救出すんなよアホ!』

この2種を同じ大きさにして100m走をした場合、ゴキブリを走って捕らえるスピードのアシダカグモが断然有利だろう。

だが、移動をするだけなら障害物を無視できるオオスズメバチに軍配が上がる。

この蟲は3〜4cmの大ききで時速40km以上の速度で飛翔するのだ。

「ギャア!!」

「グググ……」

たちまちのうちに2体のゴ布林ロードがその毒針で殺害され、縄で繋がれていた4人のエルフ女性が解放される。

最初の攻撃で毒針の脅威を免れたゴ布林数匹は即座に人質を放棄、棍棒を手にして戦闘態勢へと移行する。

「グググ……」

「グゲエアツ!!」

「なんだあ？ 雑魚が威嚇なんかしてよ?! 早くかかって来いよ!」

首を前に突き出し、挑発するスズメバチ。

しかし残ったゴ布林ロードは横から乱入したアシダカグモに引き裂かれ、バラバラの肉片となって路肩に散らばる。

「おお、流石アシダカグモだな! こんな短時間で大講堂からここまでの敵を全部倒したのか!」

「ふざけんなよてめえ……! 道中の敵は全部無視しやがって……!」

「はっ! 美女救出の手柄は俺のもんよ!」

ここで救出対象に手を差し出さず、喧嘩を始めてしまうのは災害派遣が多い自衛隊員としては失格だが、彼らは手術ベースの生物が獯猛である影響を受け、変身時は必然的にそうなってしまうのだ。

だがそんな事は知ったこっちゃない日本国のマスコミはこういう事が発覚した場合、即座にテレビで報道、自衛隊を貶めるが、ここは強い者が権力を握る異界の地。

助けてくれた彼らに、エレイは心を惹かれていた。

(なんて勇猛果敢で強い兵隊さん達なの……! 山賊みたいな格好と異形なのは置いといて……——絶対に逃さない)

「あの! 助けて下さって本当にありがとうございます! 貴女方のお名前を聞かせてもらってもよろしいですか?」

エレイは意外にも肉食だった。

そして任務中なものもあるが、こういう面倒事に発展しそうな事柄を

嫌う自衛隊にとって、打って付けの決まり文句が日本国には存在していた。

「名乗るほどの者ではございませんよ」

「はわわ……」

エレイは赤面し、2人の王子様に囲まれながら倒れ込んだ。

後刻――

大講堂、学校、議場に囚われていた生存者達は犬神分隊、猿渡分隊に速やかに救出され、ミナイサ地区の西側を除く広場周辺の魔物は百田分隊によつて一匹残らず駆逐された。

生存者達が囚らわれていた建物以外に人間の生き残りや魔物の残党らしき反応はなく、全部で204名の生存者を救助した時点で救出作戦は完遂と百田は判断する。

ここから自衛隊はトールパ王国軍と連携し、掃討戦に移行する手筈となっている。

隊員達の士気と体調は問題なさそうであるため、このまま魔王を倒しても良いのではないかと彼は考えた。心残りがあるとするればブルオーガや赤竜が確認されていないことであつたが、正直に言えばそれだけである。

害獣の数が1匹や2匹増えたところで、さほど問題はない。

「索敵班、青鬼は見つかったか？」

『いいえ、リーダーの範囲内にそれらしき反応はありません』

『それらしき臭いや痕跡、音も今のところ発見には至ってません』

『上空からもそれらしき姿は見当たりません』

しかし、無線から入るのは不穏な空気ばかり。

すでにトールパ王国騎士団の約3000名が城門から出発し、市街の制圧を始めている。考えたくはないが、もし索敵網に穴があつた場合、彼らの被害は免れないだろう。

(どこに行った…?!)

今作戦は被手術兵にとっては通常の訓練よりも楽な任務だろう。だが、未だ見つかっていないブルーオーガはトールパ王国軍にとっては十分な脅威なのである。

『小隊長、ブルーオーガを発見！ 領主館からそちらに向かっていきます！』

「やっとかー！」

これでトールパ王国軍の犠牲が無くせる、と百田は安堵した。

しばらくすると「グオオオオオオオ!!」と身の毛がよだつような雄叫びが百田の耳に入り、地響きのような細かな振動を身体が感知し始める。

それは、トールパ王国軍の騎士達の耳にも届いていた。

「ちくしょう！ ブルーオーガだああ!!」

その筋骨隆々とした見た目から想像は容易いが、オーガの脚力はかなり強い。

まるで大木の幹のような太い足で力強く地を蹴り、後方に引き連れている約40体のオーク達をグングンと引き離すその姿は見る者を圧倒する。

それを正面から見た威圧感は凄まじく、ブルーオーガを目にした騎士達はパニックを引き起こし、手術を受けた自衛隊員ですら一瞬萎縮してしまう程だった。

「こちらも目視で確認した。発砲するから誰も近付くなよー！」

騎士達が後ずさる中、百田の率いる分隊員達は小銃を構えて並ぶ。

「目標、正面青鬼及び魔物数十。射撃開始！ 撃てッッ！」

ダダダダダダ!!!

銃口から発射される無数の光弾が魔物の群れへと吸い込まれ、オーガを次々となぎ倒していく。

しかし、ブルーオーガの足だけは止まらなかった。

中にはオーガの肉体に深々と突き刺さる弾もあったのだが、基本的に7・62mm×51mm NATO弾の威力ではオーガの皮膚を多少削る程度で、魔法による再生力を上回ることが出来なかったのだ。

る。

「クソツ！ 人間を相手にする銃じゃ威力不足か！」

「あの感じだと対火星生物用の銃でも死ぬまで時間がかかるかもな！」
テラフオーマー

小隊内の手術を受けた隊員の比率が高くて本当に良かったと百田は思う。

あんな銃の効果が薄い相手がいるのであれば、生身の人間だけでは普通に死傷者が出てもおかしくなさそうである。

「射撃中止！ 小手調べは終わりだ！ 変身を解いていない手術兵、かかれ！」

百田の指令を合図に、今か今かと待機していた化け物達は哀れな魔獣の群れへと襲いかかる。

オーガだけでなく生き残ったオーク、ゴブリンもその身体をズタズタに引き裂かれ、トールパ王国の騎士達の見ている目の前で殺戮の宴が繰り広げられた。

「これが…日本国の魔人か！」

「伝説の魔獣がこれほどあっさりとやられるとは…。日本国の魔人はオーガよりも強いのか…！」

「これでトールパ王国は安泰だ！ トールパ王国ばんざい！ 日本国ばんざい！」

死傷者をいっさい出していない圧倒的な勝利を前に、トールパ王国兵は湧き上がる。

しばらくしてブルーオーガとオーク、ゴブリンを含む魔物の群れの全個体の死亡を確認すると、自衛隊はトールパ王国軍と協力し、未だ魔王がいると思われる領主館に近付きすぎないように、地区全体に散らばる魔物の残党を駆逐して回った。

事前の報告と倒した魔物の数が合わないのは気がかりであったが、いずれにせよ魔王に匹敵するときれている赤レッドオーガ鬼と青ブルーオーガ鬼の駆除に成功し、民間人の救出にも成功したため、彼らはその日のうちに撤収した。

21話：知的害獣『魔王』討伐戦

翌日 早朝――

城塞都市トルメス ミナイサ地区 東側城門

ミナイサ地区で捕らわれていた民間人を忌々しき魔王軍の手から救い出す事に成功した翌日。その日の朝は少し寒く、大量に発生した霧によって太陽の光が遮られ、視界が悪かった。

現地の人にとってこんな光景は見慣れたものだったが、昨日の事例を知る者にとっては歴史的な朝であっただろう。

臨時的に同地区を囲う壁上で監視に就くトールパ王国の兵士達は、歴史が変わった瞬間を目の当たりにしたような気分浸る。

だが、歴史的な出来事は民間人の救出だけでは終わらない。これから更に大きなことが起こるのだ。

「ようやく来たか……」

霧に包まれた無人の地区。その市街地を貫く大通りに、真っ白な背景を汚す1つの黒点のような影が現れる。

それは膨大すぎる魔力が溢れ出ており、体外に流出した魔力がドス黒い霧となつてその身体を覆っているのだ。

「魔信急げ！ 早く自衛隊に報告しろ！」

影は約1.5 km先の広場からゆっくりとこちらへと近付いており、黒霧に覆われたその輪郭は徐々に鮮明になっていく。

身長3.5 mほどの全身が黒く、角が生えた人型の魔獣。神話に伝わる伝説の魔王『魔王ノズクーラ』だ。

「魔王だ！ 魔王が来たぞおおおお!!！」

誰かが叫ぶ。

未だ接近中である件の魔物くだんの長はこちらの動きを伺っているのか、近づく速度は変わらず遅いままだ。

側近のマラストラスが人間の将を討ち取るため出たきり戻ってこないのを警戒しているのか。それとも、自らが囿となつて敵を誘き寄せて罠にかけるつもりなのか。

どちらにせよ、魔王が時間をかけてくれるのは人間側にとって好都合だ。

魔王が城壁へと辿り着く前に自衛隊の魔人部隊（トーパー王国兵はこう呼称している）が現場に到着できたのだから。

魔王という神話の相手を前にしているのにも関わらず怖気付いた雰囲気は微塵も無く、個人によってそれぞれ違えど隅々まで磨き上げられた装備で整然と並ぶ姿からこの部隊が精鋭中の精鋭なのだと容易に伺える。

50人にも満たない彼らだが、その実力は折り紙付きだ。

「自衛隊の皆さん、あなた方は歴史に残る偉業を成し遂げました。今やあなた方は我々の最後の頼みの綱であります。その比類無き強さを疑う者はここにはおりません。どうか魔王を打ち倒し……この国を、この国の未来を……よろしくお願いします！」

魔人部隊に付随した騎士団長がそう言い、頭を下げる。

自衛隊の面々は特に何も言わず、代表人物が必ずお守りいたしますとだけ伝えて敬礼をした。

「小隊傾聴！ 我々はこれより知的害獣『魔王』の討伐作戦を始める！ 変身薬用意!!」

各隊員がそれぞれの手術ベースに合った型の変身薬を取り出す。彼らはその薬を摂取することによって全身の細胞を超高速で破壊、再生させ、人間という種を超越した強さを手に入れる。

「二人為変態!」

寿命と引き換えに力を得られる時間は短い。変身後、彼らは即座に行動を開始した。

自衛隊が作戦を開始した一方、魔王ノスグーラは憤怒の形相で霧中を進んでいた。

しかし、見た目とは裏腹に彼（魔王に性別があるのかは不明だが、仮にこう呼称する）は至って冷静である。

彼は経験上、怨敵を前にした人間というのはどんなに無謀でも突撃を強行する傾向にあると知っているからである。

魔王はそれを狙って、あえて人間側に姿を見せながら接近していたのだ。もし人間が愚かにも突撃して来た場合、事前に街に潜ませた配下の魔物や魔獣で挟撃するつもりだった。

「クツクツク…！ 意外にも我が^{われ}策士だと知ったら、下等種どもはどんな顔で絶望してくれるだろうか…」

だが、向こうからこちらを視認できる位置でこれだけ待っても飛び出てこないのを見ると獲物は冷静であるようだ。

仕掛けた罠が不発に終わり、魔王は舌打ちをする。

「仕方ない、我が直々に——ん？」

人間がここで功を焦って飛び出してくるのは、間違いではなかった。

魔王にとって予想外だったのは、その飛び出してきた人間が1人であったこと。背中から生えた蜂の羽で超高速で飛翔、接近して来、人間にしては異常な怪力でその毒針をぶち込んで来たことであった。

攻撃をくらって魔王は大きく後ろに飛び、思わず地に膝を着く。

攻撃が当たる直前にとっさに身体を硬化させ、後方に飛んだのでダメージはそれほど大きくないが、無視できるダメージ量でもない。

まともに当たれば致命傷もあり得る攻撃だ。油断はできない。

「ナツ…?! 何なんだ貴様は…?!」

人間を家畜としか見ていないノスグーラだったが、勇者以外で自身に傷をつける生物が存在するとは夢にも思わず、大いに驚く。

だが、相手からの返事は容赦のない攻撃だった。

「オラオラオラオラオラオラア!! 死ねエツ!!!」

「ちよ…?! 待っ——!!!」

攻撃を捌くか避けるなどして回避する魔王だが、1発1発がオーガの怪力にも引けを取らない攻撃だ。防戦一方の魔王の身体に傷が増えていき、しかも殴られる度に相手の毒針が突き刺さるため、魔王の動きは徐々に鈍っていった。

(なんだこの毒は?! この世界に存在する毒ではない…?!)

『古の魔法帝国』の生物兵器である魔王ノスグーラは当然ながら毒への耐性を持っている。

だが、相手は何しろ『オオスズメバチ異界の魔物』だ。毒のカクテルと呼ばれる混合毒はゆつくりとだが、着実に魔王の身体を蝕んでその生命を脅かす。

「ぬうううう!! 魔族如きが我を舐めるな!!!」

防戦一方では勝ち目がない。

ノスグーラは防御魔法を発動すると同時に、魔族を殺すには十分な魔力で黒い炎を発生させ、敵に閻獄あんごくの炎を浴びさせた。

「熱ッ?!」

至近距離で炎を体に纏った敵が無様に辺りを転げ回る。

ノスグーラは勝ちを確信し、背を向けて言い放った。

「まさか人間に味方する魔族がいるとは思わなかったが：マラストラスやオーガ共を倒したのは貴様か？ 我には1歩及ばなかったが、敵ながらアツパレだったぞ。人間の味方をする魔族よ、安らかに眠れ」
そして魔王は再びゆつくりと歩き出す。

(魔族とはトーパ王国やパールディア皇国が存在するフィルアデス大陸より北東、細い地峡で繋がったグラメウス大陸に住む種族である。)

日本国召喚の原作の方でもまだまだ謎が多い種族だが、魔王ノスグーラの配下であるマラストラスが魔族である事からして人間には敵対的であると見られる)

しかし、ノスグーラは知らない。

火の熱にも耐えうる服を、彼らが炎を浴びた時の対処を十分に訓練していることを、『モザイクオーガン・オペレーションM・O 手術』を受けた人間の生命力の高さを、そして彼に匹敵する強さの隊員達がこちらに向かってきている事を。

——プオン!!!

「うおおおおおッ?!」

さっきの魔族が発生させたのとはまた違う羽音が耳を掠め、鋭利な刃物で斬られたのかノスグーラの針金のように硬い毛が飛び散る。

とっさに回避をしたのでカス当たりで済んだが、新たに登場した魔

族は一撃離脱戦法を心掛けているのか攻撃をした直後には霧や建物に紛れて魔王の探知圏内から離れてしまい、またも防戦一方の状況が続く。

魔王も必死にカウンターを狙うがこちらの攻撃は当たらず、縦横無尽に霧中を舞う耳障りな羽音に気を取られすぎたために、ノスグーラは先程戦った人間の些細な行動にしばらくは気が付かなかった。

『過剰変態』

モザイクオーガン・オペレーション

『バグズ手術』『M・O 手術』を受けた人間は変身薬を摂取することによって全身の細胞を作り替えて（これによって骨折程度の怪我は瞬時に治せる）手術ベースとなった生物の力を得るのだが、変身薬を短時間に過剰に摂取した場合は通常の変態時よりも更に強力な力を得る事が可能となる。

しかし当然ながらこれは身体に大きな負担となる。場合によっては人間に戻れずに死亡するため、緊急時でない限りは勧められる行為ではない。

「キュルルルル!!!」

おおよそ人間には出せないような声で叫び、更に蜂の姿に近付いた人物が立っていることに魔王は気付く。

こいつさつき死んだはずじゃ——？

直後、ノスグーラに襲いかかったのはオーガを遥かに凌ぐ怪力による一方的な攻撃だった。

「はあ…… はあッ……」

先程から出血が止まらない脇腹を抑え、狭い裏路地で壁にもたれかかるノスグーラ。

彼自身の記憶の限りでは、彼が人間から逃げ回るのは人生2度目である。

「クソっ！ 化け物共め……！」

魔法で煙幕を発生させて奴らの目を欺き、何とか逃げ込んだ建物内に潜んだ魔王は体の再生に尽力する。

化け物共の力は凄まじく、今追撃されたら本当に死にかねないため、念の為防御魔法も常時展開させていた。

「あいつらは……旗を見る限りは太陽神の使者か?! どう見てもただの化け物集団じゃないか！ 邪神の使いじゃないだろうな?!」

敵が魔法が使えないのを見ると魔族ではないようだが、あんなのはどう見たって人間ではない。

だが、掲げている旗を見る限りは太陽神の使者に間違いないのだ。太陽神の使いがどう見ても邪神の使いか邪神そのものだと驚きである。

「……毒で出血が止まらぬ。体組織も一部が壊死しているな……」

あの蜂のような魔族との再戦途中で2人目の似たような姿の魔族が乱入、形勢は一気に不利に傾いたところを魔王の目を以てしても対処不可能な速さの魔族に何度も斬られ、そこに30を超える数の魔族の増援だ。

大人数に殴られ、切り裂かれ、刺され、耐性がない毒をどんどん注入され、命からがら逃げてきたものの、ノスグーラの体はボロボロである。

特に毒のダメージは痛く、余剰の魔力で必死に抗体を作っているが、今は体の再生にほとんどの魔力を振っているため当分の間は解毒が出来そうになかった。

「我が……ここまで追い込まれるとは……一度グラメウス大陸に撤退するか」

2万もいた群勢は今や両手の指で数えられる程もおらず、主力であったはずの赤竜はいつの間にかグラメウス大陸に逃亡。1匹で魔王と張り合った実力者がいたのだから、敵の魔族に対抗するには更なる数が必要だ。

何百年かかろうと勝ってやる。

次こそは負けない。

そう考えた魔王はスッと立ち上がり、周囲に誰もいないのを確認すると、窓を開け、バツと翼を広げた。

——ドゴオ!!

「見つけたー!」

!!!!

「ギャアアアアアアアアアア!?!」

壁をぶち破って入壁[?]して来る魔族なんているだろうか。ノスグーラはそんな奴を知らなかったのだろうか。

生まれてこの方、上げたことがないような悲鳴を上げ、魔王は逃げるように窓から空へと飛び逃げる。

しかし飛ぶ直前に足を掴まれ、魔王は足を掴んで離さない化け物を振り回す。市街地を飛び回り、化け物を壁にぶつけ、地面に引きずらせ…。

それでも化け物は手を離さない。

「離せ! 離さんか化け物! 頼むから離せよクソが!」

魔帝の生物兵器ともあろうノスグーラは若干涙目となっていた。

そして大講堂前の広場にある巨大な石像に怪物をぶつけると、怪物はようやく手を離し、重量物から解放された彼は大空へと逃げるように飛ぶ。

「ふう…:ようやく手を離したか…」

息を着いたのも束の間——

「こんちわーッ! そしてさよなら!!」

「——ッは?!」

ノスグーラは困惑した。

4本の透明な羽を背中から生やし、刀を手に持った人間が挨拶しながら自分の横に飛んできたと思ったら、いつの間にか自分は落下していたのだ。

「なっ…:! なんて切れ味だ!」

片方の翼が切断されていることに気付くノスグーラ。

防御力が弱い部位だが、仮にも魔王という生物の体の1部。それを切断するなんていったいどんな業物を持ってきたのだろうか。

魔王は落下しながら舌を巻く。

「くっ……！ 仕方ない！」

今まで翼がなかった事がなかったのだが、魔王の余りある魔力を使えば翼がなくとも飛翔することは可能である。

しかしそれをする膨大な魔力を消費するため、ノスグーラは翼無しでの飛行を乱用することを避けていたのだ。

彼は地面に近付いた瞬間に一瞬だけ飛翔する魔法を全力で発現させ、墜落死を免れる。

それでもかなりの速度で落下した魔王の周辺に砂埃が舞い、視界が一瞬だけ悪くなる。

「ハッ！」

砂埃が晴れ、視界が鮮明になってからノスグーラは落ちた先が先程の怪物達の包囲網だということに気付いた。

万全の状態で戦って不利だったため、先程は撤退したのだ。もう逃げられそうにない。

(仕方ないな。奥の手を使うか……)

「生と死の傍らで、誓いの詞を示す。黙すなかれ、狂気に嗤え。胎動せよ、主を殺す者。万物の理はすでに暴かれた……出でよ、カイザーゴーレム！」

魔王が呪文を唱え、路地が割れて大地が盛り上がる。

岩の塊が首をもたげ、みるみるうちに人の形を形成し、高さ約17mの岩石で出来たゴーレムが緩慢な動きで立ち上がった。

日本人が見たら某アニメのロボットを思い出すだろうそれは、普通の人間ならば目にしただけで戦慄する迫力があつた。

それが敵対心も持って目の前に存在するとなると、その時の恐怖は計り知れないことになるだろう。

「下等種よ！ 恐れ慄くが良い！」

ノスグーラは前進するカイザーゴーレムの姿に満足していた。

いくら自分に深い傷を負わせたとは言え、魔族達は素手だ。おまけに魔法は使えないようであるため、岩石で出来たゴーレムを破壊することは出来まい。

あとは上空からの攻撃を警戒するだけだが、それくらいなら手負い

の魔王でも造作もない。

「ゴーレムよ、下にいる虫どもを潰せ！」

ノスグーラが命令すると、土をボロボロとこぼしながらゴーレムは片足を上げる。

しかし、動きの遅い岩の塊に被手術兵が攻撃をくらう訳がなかった。

下にいる虫けら達はヒョイヒョイと攻撃を避け続け、ノスグーラは空中から攻撃を仕掛けてくる魔族の迎撃に手一杯。

不利な状況を覆せなかった焦燥感がノスグーラを苛立たせる。

「ぬうう……！ ゴーレムよ、あそこの城門を破壊しろ！」

約1km先の城門の上には、多数の人間が居座っている。奴らはどうやら普通の人間であるらしく、八つ当たりにはちようど良い。

しかし――

「む……?!」

ゆっくりと開いた門扉。

そこから現れた『物』に魔王ノスグーラはトラウマ級の見覚えがあった。

「太陽神の使者の鉄竜?!!!」

脳裏に忌々しい記憶が蘇る。前回の侵攻では、魔王軍はあれの放つ強大な爆裂魔法に手も足も出なかったのだ。

そして彼は反射的に空を見上げる。

(良かった……！ 空を飛ぶ鉄竜はいない……)

気を取り直し、彼は命令した。

「ゴーレムよ、あの鉄竜を踏み潰せ！ 急ぐんだツ！」

だが、ゴーレムは動く前に鉄竜の爆裂魔法によって胸の核を貫かれた。

核を破壊されたことよってゴーレムは魔力による制御を受け付けないただの岩の塊へと戻り、ガラガラと崩れ落ちていく。

「相も変わらず、なんて威力をしてやがる……！」

足場を失った魔王もそれと共に落ちていき、ノスグーラは瓦礫の上で絶望した。

周り半分を囲まれており、筒のような物が向けられていたのだ。

『追い討ちをかけるぞ。各員射撃開始！ 撃て！』
ダダダダダダダッ!!!

弾丸の嵐が魔王に襲いかかる。トドメを刺すのに銃を使う理由は、至近距離で自爆でもされたら危険だからであった。

オーガにはほとんど効かなかった7.62mm弾だが、その時は距離が500mほど離れていたから効かなかったのもあるのだろう。なら、至近距離で撃てば十分な効果が与えられるはずだ。

「くっ…魔力量が心許ないが、この程度なら…」

防御魔法を展開し、なんとか逃げようと歩を進める魔王。それを見て銃火器を替えたのが数名。

『対火星生物 テラフオーマー 大口径 反動制御システム短機関銃』、パタパタと軽い音を発するのは裏腹に、人間相手では過剰な威力を誇る大口径弾がノスグーラへと襲いかかる。

「ぐうっ…?! なんて威力だ…!!!」

魔王の顔に焦りが見られ始め、金色の膜のような防御魔法が強くなる。

しかし、彼に引導を渡したのは人間ではなかった。

「はっ…！ 太陽神の使者の鉄竜！」

先程までは遠目にしか確認出来なかったのに、いつの間に…！

鉄竜はその砲口を魔王へと向けた。

AIによって制御される無人の車体と砲塔は、相手が空を飛ぶ被手術兵であろうと脅威の命中率を叩き出す。目標が地面をのりりくりと歩く目標なら命中はほぼ確実である。

「お…おのれえええ!!!」

砲口が火を噴き、音速の何倍もの速度で徹甲弾が発射される。

砲弾は魔王の防御魔法を難なく撃ち抜き、胴体部分を爆散させた。

パーパルディア皇国編Ⅱ 22話：諜報員達の憂鬱

トルメス城下町の宿屋

第一文明圏の列強国、世界最強の国である神聖ミリシアル帝国の情報官ライドルカは、城塞都市トルメス南の地区の宿屋の一室で、恐怖に震えていた。

古の魔法帝国の遺産とされる魔王ノスグーラ。その生物兵器がどの程度の魔力を持ち、どういった魔法を以て戦うのかを調べるのが彼の仕事であった。

「まさか…文明圏外の新興国が倒しちまうとはな…」

伝説の魔獣と呼ばれるレッドオーガ、ブルーオーガのタフネスさは凄まじく、トール王国の騎士が束になってかかってもビクともしなかった。

それが、彼が見た限りでは日本国の兵士達が素手でボッコボコにして殺害していたのだ。

おまけに日本国の軍隊は50人程で魔王ノスグーラと魔王が召喚した『カイザーゴレム』を撃破。

オーガ達を素手で撃破した彼らだが、魔王すらも素手で圧倒していたのだ。

「こんな報告書、誰も信じないだろうな」

？日本国の軍隊には『魔人』が複数人存在し、それらは素手でも魔王ノスグーラに匹敵する強さを持つ。ただし魔力反応は感じられないため、魔法は使用していないと思われる

？日本国も魔導銃を配備しており、こちらも魔力反応を感じられないため、第2列強であるムー国の物に近いと思われる

？日本国は『戦車』と呼ばれる攻城兵器のようなもので魔王にトドメを刺したが、こちらも魔力反応は感じられなかった。聞くと、『えーあゝ』と呼ばれる何かがその鋼鉄の身体を操作しているらしく、日本

軍の従魔か生物兵器かと思われる

？魔王は死に際に『間もなく魔法帝国がふつか…』と何かを言いかけたらしいが、その前に『魔人』にトドメを刺された模様。文脈から判断するに『間もなく魔法帝国が復活する』と言いたかったのではないかと思われる

嘘みたいだろ？　これが正式な報告書なんだぜ？

これを書いた本人にですら、思春期を迎えた子供が書いたファンタジー作品の世界観をまとめた書類にしか見えない。

あまりにもクセが強すぎて、ライドルカは『魔法帝国が復活する』という言葉のインパクトが薄れてしまいそうな気がしてならなかった。上の人達がこれを真に受けてくれるのが心配だったのだ。

「とりあえず本国に報告するか…」

宿にある荷物をまとめ、彼は帰国準備を急いだ。

中央暦1639年9月31日――

東京　最高検察庁

元パーパルディア皇国監察軍東洋艦隊所属　特A級竜騎士レク

マイア

レクマイアは困惑していた。

彼は25日のフェン王国への懲罰的攻撃の際、海上自衛隊の護衛艦『みようこう』に撃墜され、殺人未遂、放火の現行犯で逮捕されていたのだ。

(しっかし、ワイバーンだけが死ぬ攻撃か…)

彼が見た限りではワイバーンだけがいきなり即死し、乗っていた竜騎士達は海面に打ち付けられるまでは生きていたのだ。

そして彼だけが生き残った理由は、完全に運が良かったからである。導力火炎弾による攻撃をした後であったため、他の皆と比べると低空で飛行していたのと、完全に垂直ではなく、ある程度水平方向に

落下したからだと思われる。

取り調べに来た取締官には皇国の技術や素晴らしさを説き、文明圏の国々よりも皇国がはるかに進んでいることを朗々と語ってみせた。しかし取締官は特に驚いた様子を見せず、皇国民が蛮国の人間を相手にするときのような『何も知らない者に対する哀れみ』の態度も見て取れたのだ。

「ちっ！ 蛮族めが……」

レクマイアは困惑する。

まさか皇国の偉大さを知らない国がいたとは思わなかったのだ。しかも自分は頭のおかしい蛮族のような目で見られ、皇国民であるプライドがズタズタだ。

しかし彼の日本への認識は、日本国に近づくにつれて変わっていく。

最初に驚いたのは整備された港の美しさ、そして自動車と呼ばれる大量の鉄の箱であった。

しかもこれは、今は諸事情でそう出来ないらしいのだが、全自動で目的地まで連れて行ってくれるのだと言う。

留置所という場所も非常に快適であった。

今まで皇国軍は戦争に負けたことはないが、不慮の事故で捕虜を取られた例はある。彼らの末路はだいたい拷問された後に処刑という悲惨なものであったが、日本は違った。

捕虜ですら冷暖房完備の部屋で寝れるのだ。おまけに1日3食、非常に美味しい飯が出てくる。

そしてそこに3日間置かれた後、レクマイアは日本の実質的な首都であるという東京へ移送された。

最高時速600kmという巨大な鉄の箱に乗せられ、その箱の揺れの少なさや快適さ、窓を通して見る日本の都市群には目を回し続けた。

いよいよ東京に近付くと、恐怖を感じ始める。

天を貫かんとする巨大な建築物郡、空中を通る回廊、自動車が街に溢れ、空にはワイバーンロードよりもはるかに速く、大きい鉄竜が飛

んでいた。

「この国は…危険だ…!」

このままでは外務局がいつものように「蛮族を滅する」と言っ
て日本国に戦争をしかけるだろう。

だが、局地戦であろうと総力戦であろうと、皇国が勝てるはずが
ない。

彼は検察庁で聴取を受けつつ、祖国の未来を憂うのだった。

中央歴1639年10月6日午前――

第2文明圏ムー国 アイナंक空港

技術士官マイラスは軍を通したムー外務省からの急な呼び出しに
困惑していた。

呼び出し先は空軍基地が併設されているアイナंक空港であった。

「わざわざ空軍基地に呼び出すなんて、一体何の用でしょうか？ 部
長」

軍服の着た情報通信部部长、マイラスの上司。

横には外交礼服を着た男2人が立っていた。

「何と説明しようか…端的に言うのと、正体不明の国の技術水準を探っ
てもらいたい」

外交官らしき男が口を開く。

「グラ・バルカス帝国のことですか？」

「違うが、こちらにも新興国だ。本日、我が国の東側海上に帆船ではない
白い船が1隻現れた。海軍が臨検すると、『日本国』と名乗っていたそ
うだ」

「ああ、ロウリア王国を敗北に追い込んだ国ですね。帆船じゃないと
なると…魔導船でしょうか？」

「いや、魔力反応は感じられなかったらしい。恐らくは機械動力船と
思われる」

マイラスは驚いた。

今までムー以外に機械動力船は存在しなかったからである。

「それだけではない。我が国の技術水準を見せるために会谈場所をアイナंक空港に指定したら、なんと飛行許可を願い出てきたのだよ」

「…それもまさか…」

「そうだ。しかも船から飛んできたのはワイバーンではなく、飛行機械だった」

「なっ…?!」

「先導した空軍機によれば相手は時速300km程で飛行したらしい。しかもやろうと思えば、もっと速度を出せるそうだ」

「…つまり、それを見てくれと言っていることですね？」

「そうだ、話が早くて助かる。会谈は1週間後に行われるので、それまで彼らを観光に案内し、我が国の技術水準の高さを見せつけ、同時に相手国の技術水準を探ってくれ」

「わかりました。やってみます」

マイラスは解散後、足早に空港へと向かう。

そして日本国の外交官が乗ってきたという飛行機械を見て舌を巻き、重い足取りで空軍詰所の応接室へと向かい、日本の外交官達に会う。

本格的な案内は明日からとするため、今日はアイナंक空港と近場の海軍基地を案内する予定だ。

「それでは、長旅でお疲れでしょうから、本格的にご案内するのは明日からとします。本日はこのアイナंक空港と近くに海軍基地へとご案内します」

「よろしくお願ひします」

マイラスはさっそく、空軍格納庫内に御園みそのと佐伯さえきの2人を連れて行った。

格納庫に入ると全体が白く、青のストライプを施された機体が用意されていた。

ムーの誇る最新戦闘機『マリン』である。

「この飛行機械は我が国の最新戦闘機『マリン』です。最大速度はワイ

バーンロードよりも速い時速380km、前部に機銃を搭載しており、空戦能力もワイバーンロードより上です」

自信満々の説明を終えて、マイラスは2人の顔を見る。

2人はポカンと口を開けて、「はあ」と間の抜けた言葉を発していた。

「はあ…：複葉機でしたっけ？ これ」

「御園さん見てくださいよ。ちゃんとした星型のレシプロエンジンですよ。このレトロな感じ、いいですねえ〜！」

2人の反応が予想していたものと違い、彼は不安ながら質問をした。

「日本国には内燃式のエンジン以外にどういった選択肢がありますか？」

「日本にはジェットエンジンと呼ばれるエンジンがありますね。だいぶ前に反物質エンジンも発明されましたが…あれは価格が非常に高いのであまり普及していません」

「はんぶっしつエンジンですか…：へあ〜それはすごい。ちなみにどんな構造なのですか？」

マイラスは反物質エンジンが何なのかは知らなかった。

「それは…：法で禁じられているためお答えできません」

「ちなみに蒸気機関はどうでしょう？ あれは航空機には適しませんよね？」

「動態保存中の列車が存在しますが…：そのほとんどはクワ・トイネ公国に提供しています」

もしかしたら日本国は航空技術においてムーを完全に凌駕しているかもしれない。マイラスは恐る恐る尋ねた。

「ちなみにですが、日本の戦闘機はどのくらいの速度が出るのでしょうか？」

戦闘機は速度が重要だ。一撃離脱戦法が主流の現状だと、速度が速い方が圧倒的に有利である。

御園と佐伯は目を合わせると、顔を近づけてヒソヒソと話し始めた。

(まず…航空機とドローンってどう区別されてるんだっけ?)

(3m以下の無人機はドローン。それ以上の大きさは全て航空機に分類されています。無人であろうとなかろうと)

(じゃあ戦闘機は…空戦をするための航空機で良いのかな?)

(良いんじゃないですかね…)

「失礼、無人戦闘機であればマツハ1〜14。有人であれば最高時速マツハ4くらいですね」

「…ツ?!」

(無人戦闘機? なんだそれは?! 例え撃墜されても人的被害がないのか?! 操縦はどうするのだ?! てかマツハ14ってなんだ?! マリンの何倍だよ!?)

「ははは…是非見てみたいものです…。では、こちらへ…」

その後も色々質問をすると日本の実態が見えてきた。

ムーよりも遥かに高い技術力を持った、人外魔境だ。

なんと航空機だけでなく車も無人で走るらしく、電車に至ってはマリンの2倍ほどの速度が出る代物があるらしい。『被手術兵』と呼ばれる軍人に関しては、もはやSF小説の域だ。

マイラスは急に腹痛を感じ、移動の車の中では終始真っ青な顔をしていた。

海軍基地に着く。

そして彼は2人をムーの最新式戦艦である『ラ・カサミ』の所まで連れて行った。

ロウリア王国で撮られた魔写を見る限り、日本は高い技術力を持っているても、軍船は主砲1門しか付いておらず、装甲もムーの戦艦に比べたら貧弱だろう。撃ち合えば、よぼとの事がない限り負けることはない。

(今回こそは自慢できるぞ…!)

彼はここまで日本に驚かせられてばかりだったので、少しでも列強2位の雄姿を見せたかったのだ。

しかし、ここでも日本人2人は予想外の態度をとる。

「御園さん、見てください! 戦艦ですよ! 戦艦!! やはり戦艦は

男のロマンですね!!」

「佐伯さんはしやぎすぎですよ。しかし、記念艦の三笠にそっくりです
すね」

(ん…? 戦艦を知っている? しかも、そっくりだと?)

「日本にも戦艦があるのですか?」

「はい、だいぶ昔の事になりますがね。約700年前、大日本帝国と呼ばれていた頃、日本も立派な戦艦を持っていたのですよ。今はありませんが」

「へえ…ちなみに、今後戦艦を建造する予定はありますか?」

「我々の世界では大艦主義がある程度復活してきましたが…戦艦という艦種はもう建造されないでしょうね」

「この世は弱肉強食です。なぜ戦艦を造らないのでしょうか?」

「うーん。時代の流れですかね?」

「ところで先ほど記念艦に似ていると仰ってましたが、日本にも似た艦があるのでしょうか?」

「あ、はい。『三笠』と呼ばれる戦艦がありまして、約700年…と言っても大戦の前ですね。その時の連合艦隊の旗艦です。『ラ・カサミ』にそっくりなんですよ」

日進月歩の機械動力船で、700年もの歳月をかければ劇的な進化を引き起こす。

認めたくないが、日本はムーよりもはるかに技術が進んでいる。

マイラスは一通りその日の案内を終え、ムー首脳陣に届く報告書を書き上げた。

普通なら受け入れられないような内容の報告書であったが、敵対の意思はなく、先進技術を保有している可能性が大いにあるため、数日後にムーと日本は国交を締結することとなった。

23話：安寧の瓦解

中央暦1639年1月17日――

日本 東京 首相官邸

官邸スタッフが慌ただしく動き回り、閣僚が真剣な表情で報告を受ける。

防衛省からパーパルディア皇国軍の大艦隊がフェン王国方向へ進行中という情報が入ったのだ。

「ついに来たか……」

諜報員からの連絡によると、約1か月前の皇帝ルディアスが出席する最高会議にてフェン王国、次いで日本国を滅ぼすという方針が決められたらしい。

皇国は見せしめを多様する。

生意気な国は圧倒的な武力をもって侵略し、占領した地域の人間を処刑することで、他の国に「逆らったらこうなるぞ」という恐怖心を植え付けるのだ。

今回はそのターゲットにフェン王国（もともとそうするつもりであった）と日本国が選ばれた。特に日本は文明圏外国の多くと友好関係にあるため、皇国は見せしめに最適だと判断したらしい。

「どうする？」

「フェン王国には多数の日本人観光客が滞在中です。直ちに退去命令を出すべきです」

皇国が日本を滅ぼすつもりなのは前々から知っていた。

しかし、諜報で得た情報には致命的な弱点があった。

それは正式な証拠として使えないことであり、それは500年経とうと変わっていないかった。

そのためフェン王国への渡航を政府の独断で禁止することは出来ず、治安悪化の恐れがあると注意を呼びかけていたものの、努力は最悪の形となって終わった……。

――終わってしまったのだ！

「それはもちろんそうする！ …が、フェン王国まで電波が届くのか？」

答えはNO^{無理}。いくら技術が発達しているとは言え、衛星と電波塔が不在という状況で韓国の首都よりも遠い場所へ電波を届かせるのは厳しい。

さらに電波を受信する物が民間の携帯電話しかない状況となると、今すぐフェン王国の日本人全員に連絡をするのは不可能となる。

「では艦隊を止めるべきです。前々からこうなる事は分かっていたでしょう？」

「それは越権だ。日本とフェン王国の間には集団的自衛権を盛り込むだけの法整備はされていない」

「外務省は何をしている。相手は止められないのか？」

「パーパルディア皇国とはやつと外交チャンネルが開けそうなタイミングだ。まだ正式なルートはない」

武力以外にこの侵攻を止める手段がない。しかし、武力を使ってしまつては越権なのである。

これが日本の最大の弱点であった。

総理は悩んだ末に、1つの答えを出す。

「…何があつてもすぐに対応出来るよう、『水空陸機動団』を近くに配備しろ」

何かをされる前に止めるのではなく、何かされてからすぐに止める。

それが彼の答えだった。

翌日――

パーパルディア皇国

皇都エストシラント

パラディス城

つい先日パーパルディア皇国内での日本の扱いはカイオス率いる第3外務局から第1外務局へ権限委譲され、実質的に外務局監査室が

担当することとなった。

そして外務局監査室のレミールはこの日、日本国の外務担当に対し、「貴国への以降の対応は第1外務局が担当する」「皇宮へすぐに来るように」という内容の命令書を出していた。

パーパルディア皇国駐在日本大使の朝田あさだと篠原しのはらは書面に見て、すぐに準備を始める。

2人は不安を抱きつつホテルを出て、皇軍が準備していた馬車に乗り、彼らは皇帝の住まう皇宮パラデイス城へと着いた。

「はあ…『すぐに来るように』とは穏やかじゃないな」

朝田は1人で愚痴りつつも、レミールの指定した部屋へと入室する。2人は使用人に促されて部屋中央のソファに着席した。

「パーパルディア皇国、外務局監査室のレミールだ。これからはカイオスに代わり、お前たちの相手をする」

「日本国外務省の朝田です。急なご用件ということですが、どのような内容でしょうか？」

朝田の質問にレミールは不敵に笑う。

皇国がフェン王国と日本を滅ぼそうとしているのを知っていたため、彼の背中を冷たい汗が流れた。

（まさかな…。もしそうなら、日本人が巻き込まれていなければ良いが…）

「いや、今日はお前たちに面白いものを見せてやろうと思ってな。これは皇帝のご意思でもある」

レミールが使用人に合図をすると、水晶の板が貼り付けられた装置が2人の前に運び込まれた。

「これは魔導通信を進化させ、音声だけでなく映像まで見れるようにしたものだ」

「はあ…」

ますます嫌な予感がする。朝田は篠原に目配せをし、直ちに本国へ信号を送れるように準備をさせた。

「まず、これを起動する前にお前らにチャンスをやろう」

レミールが朝田に紙を渡す。

日本の外交官2人は、その紙に書かれている内容を見て、驚愕した。それには、日本に対する非常に無茶な要求が記載されていたのだ。

要約すると日本を属国以下の扱い、つまり植民地にしてやるということが書かれており、とてもこの要求を飲むことはできない。

「何ですかこれは…?! 我々は民主国家で、そして平和主義国家です。属国にされるいわれもありませんし、攻め込まれるというのであれば防衛するしかありません。どうか考え直してください」

「皇国の力を知らぬ、愚かな抗議だな。お前たちは確かに皇国監察軍を押し返した。しかしそれは指揮官が精神を病んでおり、正常な指揮が取れなかったただけだ。お前たちの実力で監察軍に勝ったのではない。我が国の部内的な問題で撤退しただけだ」

そんなわけではない。海自からの報告では帆を焼いて足止めし、直接的な交渉をして撤退させたのだ。

パーパルディア皇国は粗野で、野望に満ちた危険な国だったと彼は思い出す。

「では問おう、日本人よ。その命令書に従うのか、それとも国ごと滅びるのか」

「…我々は国交を開くために来た使節です。全権特命大使ではありませんので、この場での判断はいたしかねます。まずは本国に報告し、対応を検討いたします」

これを聞いたレミールは悪魔のような笑みを浮かべた。

「ほっほっほ…そう言うと思ったぞ。哀れな蛮族、日本国民よ。お前たちは皇帝陛下に目をつけられた。しかし、陛下は寛大でいらっしやる。お前たちにも更生の余地があるか…再考の機会を与えてくださっている」

「どういうことですか?」

「これを見るがいい」

レミールが指を鳴らすと、朝田の眼前の水晶板に映像が映し出された。

「——なっ?!」

「先ほど、フェン王国ニシノミヤコを占拠したと皇軍から報告があつ

てな。住民に紛れていたこやつらは、我が国に対する破壊活動をする恐れがあるため、スパイ容疑で拘束した」

首を縄で繋がれ、1列に並べられる約200人もの人々。

その服装や顔つきは朝田達によく知る人種のものであった。

「日本人を…!!」

「そうだ。お前たちの返答次第で、こやつらを見逃してやってもよいぞ?」

見逃す、つまりは見逃さない場合は、どうなるか朝田も篠原も分かっていた。

しかし、彼らは冷静である。

朝田は篠原に目で合図をした。

「うっ…! すみません、気分が悪くなったので外の空気を吸ってもよろしいですか?」

篠原は急に口を押さえ、気分が悪そうにする。

「あ? 仕方がない、その窓を開けてやれ」

レミールは従者に命令し、窓を開けさせた。

篠原はそこに駆け込み、胸ポケットからとある物を取り出した。

「さて、どうする日本人?」

気を取り直し、レミールは質問する。

「……………どうにもなりませんか?」

「ならぬ! さあ、早く選べ! 200人の命をとるか! 要求を飲むか!」

ここで要求を飲めば、ここに映っている人達の命は救われるだろう。しかし日本という国は滅亡する。

朝田は膝を着き、頭を床に擦り付け、お願いした。

「…お願いします! どうか、どうか本国に伝えるお時間だけでも!」
「分かっていないようだな…? なら分かせてやるぞ! 5人ほど処刑しろ!」

「なっ——!!」

剣が振り下ろされ、映像に映る5人の日本人の首が落ちる。

朝田は拳を強く握りしめ、爪が食いこんだ手のひらからは血が流れ

ていた。

「これが…皇国のやり方ですか…」

「そうだ。皇国と貴様らが戦争をした場合、多くの人間の命が落ちる…主に日本人のがな。例え蛮族でも大量に死なれては私も気分が悪い。そして皇国は寛大である、だからお前達が生き残れる道を示してやっているのだよ」

彼女は日本人観光客の命を盾に、拒否権なしの絶対服従を要求しているのだ。

この要求を飲めば戦争は回避され、皇国、蛮国ともに多くの人命が助かるであろうというのが彼女の意見であり慈悲でもあった。

「ちなみに…その要求をここで拒否した場合はどうなりますか…？」

「もちろんさっきのようになるぞ？ 捕まっている全員がな」

「…言質は取りましたよ、レミールさん」
「む？」

朝田は深呼吸をしてから、大声で叫んだ。

「篠原ア!!」

「もう伝えました!!」

篠原が手に持っていたのは、『偏光発生器』。文字通り強力な偏光を発生させる機械である。

しかし、偏光の違いというものは人間の目はイマイチ認識できない。い。

だが一部の動物や虫は違う。

彼らは大気の層に阻まれて特定の「傾き」に偏っていく『光の波長の偏り』を認識している。

彼はこれを使い、超遠方へと信号を送っていた。

皇国内に潜んでいた日本の諜報員達が等間隔で並び、自らが電波塔となることで彼の信号はフェン王国付近の洋上へと届いたので。

海上自衛隊 『水空陸機動団』 強襲揚陸艦 甲板

「コ・ク・ミ・ン・ゴ・ニ・ン・ガ・シ・ヨ・ケ・イ・サ・レ・タ。日本人5人が処刑されたとのことですよ！」

「上からの命令は待てん！ 現場の独断で国外における 『日本人非戦闘員退避活動』 を敢行する！ 被手術戦闘員は全員飛べ！ 急げ！」

水平線の彼方から届く僅かな違和感^編を 『モンハナシヤコ』 は視逃さなかつた。

24話：ニシノミヤコ非戦闘員退避作戦I

フエン王国 ニシノミヤコ

『5人ほど処刑しろ!』

魔信機から女性の声が流れる。

それを合図に剣が振り下ろされ、1列に並べられた、1番左の男の首が落とされた。

配偶者らしき女性が悲鳴をあげ、滂沱の涙を流す。

皇国軍の陸将ベルトランはそれをただ見つめていた。

「例え蛮族と言えど……この光景は気分の良いものではないな……」

しかし上司のさらに上の人間、皇族であるレミールの命令に逆らうわけにはいかない。

自分だけでなく、自分の家族や親族の命を守るためだと自分に言い聞かせ、彼は処刑を行わせた。

しかし5人目の首が落とされた瞬間、彼は微かな違和感を覚える。

「ん……?」

それは処刑人も同様であった。なぜか断面からの出血が異様に少ないのである。

「てやる……」

「ヒッ?!」

処刑人が腰を抜かす。

足元のカゴから微かに声が聞こえてきたからだ。

周りにいた兵士達もゴクリと唾を飲む。

魔法が存在するこの世界では、オカルトは十分以上に通用するのだ。

「……てやる! ……してやる! ……殺してやる!!!」

「うわああッ?!」

5つのうちの1つの首が、喋った。

断面からは肉のようなものがボコボコと膨らんでおり、それは徐々に大きくなっていく。

「な…なんだっ?!」

「ひ…ヒイツ!!」

それを目にした兵士達はパニックになり、統率が乱れる。

まるで見たことのない光景にベルトランも焦り、腰を抜かした。

首から出た肉塊はさらに大きくなり、ついにはカゴから立ち上がるようになる。

人間の上半身だけの化け物が腕で這い、処刑台からボトツと落ちた。

兵士達は「未知の何か」に剣を抜くことが出来ず、地に尻をつけたまま恐怖する。

『おいっ！ 何があった！ 誰か応答しろ！』

魔信機から状況説明をもとめる声が出るが、誰も何も言えなかった。

声を発しようとしても、喉から掠れた声が出るだけなのである。

ついに肉塊は完全な人間の形に戻り、傍に落ちていた剣を拾った。

『おい！ 栄えある皇国軍が何をしている！ 相手は1人だぞ?! 早く処分しろ!』

レミールの金切り声が流れる。

そうだ、俺達は栄えある皇国の尖兵。

相手が『古の魔法帝国』であろうと負けることは許されない。

「う…うおおおお!!」

相手の力量は完全に未知数。

しかし、ここで引いてしまつては皇国の恥。

ここで倒れようとも、後に委ねることはできる。

何人かの兵士が気を奮い立たせて剣を抜き、呐喊の声を上げて敵に向かつて行った。

——ブシユウ!!

剣が刺さる。

それは謎の男の腹を貫通し、引き抜かれた。

「…はあっ！ どうだ！ 化け物め！」

しかし、『化け物』は倒れない。

それどころか穴はいつの間にか塞がれ、剣が振るわれる。

剣術は素人同然。彼の剣を容易く捌いた皇国兵は再び剣で滅多打ちにする。

全身の骨は折れ、内臓もいくつかが損傷…完全に戦闘不能のはず。

——なのに、何故か立ち上がる!!

「うわああああ!!」

もはや人間とは思えない生命力に、いくらか落ち着きを取り戻した兵達も恐怖に囚われる。全身が血塗れのそれはいくらか攻撃しても死なないのだ。

『プラナリア』

日本原産『波渦虫』ナミウズムシ。脳も目も内臓も持つ多細胞生物とは思えない驚異の再生能力を有し、最低限の材料さえあれば身体を1から再生れる。

『M・O・手術』が普及した現在、日本では一般人も手術を受けれるようになってきている。

当然その費用は非常に高いが、一定の基準を満たしていれば、国から金銭的な支援を受けられるようになっていた。

「職業上の理由で必要な場合」と「従来の医療では完全な回復が厳しい場合」である。

自衛隊や警察、消防などの体を使う仕事はほとんどの場合前者に当てはまるが、それ以外の人間で手術を受けている人はほとんどが後者であった。

そして後者でよく用いられるのは「再生機能」を持ち、かつ「生物的に安全」人畜無害であること。

異常な再生能力と、低い戦闘能力の『プラナリア』は打って付けであった。

「…手術しといて良かったあ!」

首を斬られたのにも関わらず、体調は万全。

人道的な問題で残った方は仕込まれていた薬剤で機能を停止して

しまったが、第2の身体は再生したてのせいか、まるで若い頃に戻ったように軽かった。

(でも、ここからどうやって生き残ろう…。まだ何百人も捕まってるし、絶海の孤島から泳いで日本まで行くのは無理があるし…)

目の前の兵士に勝つにはソルビエアタックデスルーラを何回もしなければならなさそうだが、パツと見た感じそれを100回以上こなさなければならぬのは確実。

そもそも捕縛されてしまったら『プラナリア』の再生力も意味がないのだ。

(やべえ…生き返ったは良いけど、生き残る手段がない。奇跡でも起きねえかな…)

幸い今は腰を抜かして怯えてくれていたが、いつ気を取り直して襲いかかって来るかも分からない。

かと言って自分だけ逃げる訳にもいかない。

あの日本政府のことだし、助け舟は来ないんじゃないか…？

しかし、神風は吹いた。

——バビユウ!!!

強烈な風と共に、迷彩柄の服を着た自衛隊員達が彼の周りに降り立つ。

それだけでなく、捕まっている日本国民全員の縄が切られた。

「お待ちせしました！ 『水空陸機動団』、国外における非戦闘員退避活動を開始します！」

腕の部分が鳥の翼となった約30人の自衛隊員達。

彼らは事前に体内に仕込んでおいた薬のスイッチを作動させ、更なる変身を遂げる。

「天てん異い変へん態たい…!!」

『C・B・技術』
キマイラ・ブラッド・オペレーション

日本のみが保有する最新技術。『バグズ手術』『M・O・手術』を受けた人間が万能変身薬と共に『とある細菌』と『別の手術成功者のDNA』を服用することで、別人の手術ベースとなった生物の能力を3分程使用する事ができる。

『水空陸機動団』

自衛隊に不足する離島の奪還能力を補うために設営された『水陸機動団』に「飛翔が可能な被手術兵」という即応小隊を加えた部隊。

即応性とステルス性に優れた被手術兵が追加されたため部隊の即応性は上がったものの、空を飛べる手術ベースのほとんどは地面に足を着けた戦闘には弱く、その弱点を補うために『C・B・技術』が使用される。

「自衛隊だ！ 自衛隊が来てくれた!!」

「助けて！ 頑張つて!!」

「ガンバレ自衛隊！ お願いだ！ 勝つてくれ!!」

超短時間で敵地に強襲降下をし、降下をしてからも高い戦闘力を有する小隊。

それがこの30人である。

「応援ありがとうございます!! 必ず助けます!!」

彼らは捕まった日本人達に敬礼をしてから、戦闘を開始する。

「クソっ！ 日本国の魔人が来やがったか！ 総員戦闘開始！ 竜母にも通信を入れろ！」

陸将ベルトランが指令を出し、パーパルディア皇国皇軍陸戦部隊が武器を構える。

陸戦隊の数は約2800人。全員が魔導銃を持っており、32頭ものリントヴルムにたった数十人そこらの日本軍が勝てるわけが無い。

沖合には艦隊総司令官シウス将軍が率いる200隻を超える戦列艦と9隻の竜母による大艦隊が待っている。

ワイバーンロードの数も240騎、絶対に覆ることのない戦力差だ。

「いくら化け物どもが来ようとも…地上でも海上でも、勝つのは我々パーパルディア皇国だ！」

同時刻――

パーパルディア王国　皇都エストシラント　パライディス城
とある一室

「なツ…何が起こっている…?」

レミールは震えていた。

その顔には憤怒の色が浮かび、鋭い眼光で朝田を睨みつける。

「さあ…私には分かりかねます」

石の仮面を貼り付けたような顔で喋る朝田。

その顔には少しも「してやった」という色が浮いていなかった。

「嘘をつけ！ 私には分かるぞ…お前ら…何かしたのだなツ?! 答えろ!!!」

「いいえ。私達は何もしていません」

すでに水晶の板に映像は流れておらず、向こうで何かあったらしいのは明白であった。

(自衛隊がやってくれたな…。無能な我々の尻拭いを)

「おっと、レミールさん。日本国政府の言葉を伝えます。『その要求を飲むことはできない』です」

「…ッ!!!」

画面の向こうで何が起こっているのか分からないが、十中八九日本軍が来たのだろう。

皇国軍が負けるとは思えないが、自分が何も知らないのに、目の前の蛮族は何かを知っている。

その事実レミールは激昂し、机を叩いた。

「おのれ…！ おのれおのれおのれおのれおのれえッ!!!」

「…」

しかしここが外交の場であることを思い出し、レミールは気を取り直す。

一旦深呼吸をしてから、彼女は落ち着いた声で話した。

「…言っておくが、皇国軍は強い。貴様ら蛮族の軍がいくら来ようと皇国は負けぬ。ニシノミヤコで捕らえられた日本人の死は避けられ

ぬが…フエン王国の首都アマノキにはいったい何人の日本人がいるかな？」

「それは…避けたいものですねえ？」

「…アマノキが落ちるまでに、我々の要求を飲むか飲まないか、貴様らに判断する時間をやろう。アマノキにいる日本人だけでなく、日本国自身の運命も決することになるだろうがな」

「分かりました。その時に本国の「正式な」返事をお伝えします」

「はっ…！ お前たちの命は預けておいてやる。とっとと帰って、今度は我らに平伏しに来るがいい」

会談は決裂という最悪の形となって終わった。

25話：ニシノミヤコ非戦闘員退避作戦Ⅱ

「弾込めー！ 狙えーっ！ ……撃てええええッ！！」
パパパパパッ！

戦列歩兵による一斉射撃。

パーパルディア皇国では最新鋭の魔導銃は単発式でリロードが非常に長く、精度は劣悪。原理は違うが性能的には地球で使われていたマスケツト銃に近い。

これは日本からすれば骨董品レベルの装備、戦術だが、パーパルディア皇国が位置する第3文明圏ではこれが最強の手法である。

しかし相手は異界より来たりし日本国。

皇国からすれば約1000年程先の未来技術を有する、この世界では最強の国力を持つ国である。

「隊長！ 魔導銃が効いてません！」

「うるさい！ 『魔人』と言えど皇国に逆らったらどうなるか見せてやれ！ 突撃ッ！！」

「う…うおおお！！！！」

銃を前に突き出し、仲間が前を走る。

それを難なく殴り、なぎ払い、吹き飛ばす怪力。

銃弾が効かないほどの防御力を持った『魔人』が腕を振ると、同胞の血と臓物の雨が降り、戦場は地獄の様相を呈す。

まさに一方的虐殺。

「クソっ…！ めんよ母ちゃん俺——
体に衝撃が走った。

意識が薄れ、後方を走る仲間らに身体を以て皇軍の何たるやを教える。

これで少しでも敵が疲弊してくれるといいが…

「栄えある皇国よ！ 永遠なれええええ！！」

「バンザアアアアアアイ！！！！」

人が砲弾のように浪費される無謀な突撃。

それらは全て切り札を引っ張ってくるための時間稼ぎに過ぎない。

「魔導砲、ツてええええ!!」

皇国が誇る主力兵器、牽引式の魔導砲。フェン王国の城門を難なく打ち破るほどの威力を誇る。

今まではこれと魔導銃があったため、どんな文明圏内国や蛮国の軍も敵ではなかった。

はずなのだが…

「クソっ！ 至近弾か！ あいつ速いぞ！」

「再装填急げ！ 急げえ！」

残念なことに魔導砲も精度が悪いため、まとまった軍勢になら効果は抜群なのだが、単体で素早く動くような相手には効果がないに等しい。

「敵接近中！ すごい速さです！」

「撃て！ とにかく撃ちまくれ！」

敵の『魔人』は攻撃力や防御力だけでなく、速度も異常に速いのだ。

「リントヴルムだ！ 火炎放射を食らわせてやれ！」

そして皇国の最終兵器、大型魔獣リントヴルム。

こいつは魔導砲を牽引するだけでなく、射程は短いが広範囲に効果のある火炎放射を行うことができる。

これで地面を焦土に変え、敵の接近を阻止することが出来れば、あとは遠距離武器を持っていない『魔人』を遠方から一方的に撃つことができるはずだ。

しかし…

「なっ…！ 空を飛びやがった！」

『魔人』が飛んだのである。体の特徴も到着時と同じ姿に変わっており、先程とは違い、細い体付きに腕の部分は鳥のような翼となっていた。

「天異変態…！」

そして空中で何かを呟いたあと、再び先程の『鬼神』のような体付きへと変わる。

「ヴォオオオオ!!」

リントヴルムは『魔人』に素手で殴られ、昏倒したのか絶命したの

か分からないが、倒れる。

下敷きとなった兵士達の断末魔は夢に出てきそうだ。

それも生き残れたらの話になるのだが。

陸将ベルトランはすでに戦死しているらしく、もう統率はないに等しい。

圧倒的な暴力を前に、彼らの脳裏に「降伏」の2文字が浮かぶ。

(いや、散々蛮国の恨みを買った皇国人を彼らが許してくれるのか？)

しかし彼らの視界に、最後の頼みの綱である、沖合に停泊しているはずの皇国海軍の姿はなかった。

それどころか砂浜からは日の丸を掲げた『鉄の竜』のような物体が上陸しており、それから放たれる光弾に皇国軍が蜂の巣になる。

「——ッ!!!」

空にはワイバーンロードの姿もなく、斑模様の『空を飛ぶ鉄竜』から敵の兵士と思われるものが紐のようなものに捕まって降下していた。

これではもう…勝てない…!

僅かに残った軽傷もしくは無傷の皇国軍陸戦隊の兵士達は武器を捨て、降伏を選んだ。

日本国自衛隊『水空陸機動団』

損害無し

パーパルディア皇国皇軍陸戦部隊約2800名

死亡：約2600人

重傷：約150人(捕虜も含む)

捕虜：約200人

リントヴルム全頭死亡。

大量の魔導砲、魔導銃は後にフェン王国軍に鹵獲される。

陸戦が始まる少し前——

超フィシャヌス級戦列艦『パール』の甲板上で將軍シウスは悩んでいた。

フエン王国侵攻のための皇軍は当初の戦力でも十分アモノキをも占領できるはずだった。

実際ニシノミヤコはあっさりと落ちたのだ。

しかし、先程から陸地の方がおかしかった。

魔信で『敵襲！ 敵は日本——』と報告を受けてから通信は途絶し、おまけにニシノミヤコでは戦闘が発生しているようだった。

最初は彼もワイバーンロード部隊を地上部隊の支援として発艦させるつもりだったのだが、彼は少し悩んでから、それを辞めたのであった。

ワイバーンは案外デリケートな生き物である。

1回全力出撃をさせてしまえば、パフォーマンス面が万全になるまでに1日単位で時間がかかる。

そのため、彼はワイバーンロードを出撃させることを渋ったのだ。

「まあ皇軍が負ける訳ないしな……」

驕りなどではなく、実際に今までそうであったため、彼は本当にそう信じきっているのだった。

「……いや、何騎か出しておくか。通信兵、竜母艦隊に『ワイバーンロードを何騎か地上支援に向かわせよ』と伝えろ」

通信兵は言われた通りに通信を行う。

しかし、流れてくるのはノイズだけだった。

「竜母艦隊応答せよ！ 聞こえるか？ 竜母艦隊応答せよ！ ……故障ですかね？」

「うーん……」

何故か異様に嫌な予感がする。

竜母艦隊の姿は見えないが、なぜか猛烈に嫌な予感がするのだ。

「まさか全滅したとか……」

「バカを言うな。通信をする間も無く全滅なんて、魔帝でも出来ぬわ」

「ですよね…」

しかし彼らはこの後、地獄を見る間もなく即死することとなる。

『南東方向に未確認飛行物体を複数騎確認!! 超速度で向かってきます!!!』

魔信からの報告は耳に入らなかった。

その飛行物体は、すでにシウスの直上にあっただから。

「あ?」

「は?」

『電磁^{マイクロ波}パルス弾頭搭載型 多目的巡航ミサイル』

文字通り広範囲に電磁パルス攻撃を行う「対多目標」ミサイル。

その弾頭は護衛艦に搭載されている『H・ADS』を広範囲攻撃用に改造したものであり、それは電子機器^Eを破壊^Mするなんて生温い威力ではなく、範囲内の人間が瞬時に沸騰する程の威力がある。

ピピピ…カチツ——ブアツ!

戦列艦及び竜母合計223隻。

艦船は無傷なれど、人員の99.9%の死亡を確認。

「う…ん…」

戦列艦『ロプーレ』の船員ライタールは生きていた。彼の艦はミサイルの有効射程ギリギリに居たからである。

そして、彼自身も陽の光が届かないような薄暗い船室にいたという要因も大きい。

「体が…動かない…?!」

彼は普段通り船内を歩いていたら、突然体が一瞬で麻痺したような感覚に襲われたのだった。

ようやく体を起こし、甲板へと続く階段を登る。

船内はひどく静かだった。

「おーい…っ?」

返事はない。

それどころか甲板に出た彼は、仲間の変死体を目にした。

「なんだこの傷は……？　火傷？」

全身をくまなく焼かれたような火傷跡。

それ以外の外傷はいつさい無く、どんな魔法で死んだのか見当もつかなかった。

マストの上にある見張り台に登ると、他の船の生き残りも発見する。

生き残りの数は彼が確認できる限り、2桁にも及ばなかった。

「皇国軍は……負けたのか」

しばらくするとフェン王国旗を掲げる船が到着し、彼の身柄はフェン王国へと預けられることとなる。

しかし、このような攻撃をしたのはフェン王国ではないと彼は分かっていた。

（まさか……日本国か？）

真相は謎のままである。

26話：我が上の星は見えぬ

日本国 東京都 東京拘置所

地球と違い戦時国際法が存在しない上、皇国と捕虜の身柄の取り扱いに関する規定が定まっておらず、国内法で勝手に裁くこともできないので、元パーパルディア皇国監察軍東洋艦隊所属の特A級竜騎士レクマイアは東京拘置所へと収容されていた。

ちなみに山形県にはパーパルディア皇国、その他の国との戦争を想定し、刑務所を改装した捕虜収容所が整備されている。

彼はファイルアデス大陸共通言語と日本語を相互翻訳する電子辞書を片手に、日本の新聞を一言ずつ翻訳しながらゆつくりと読み進めていた。

【非道なるパーパルディア皇国、日本人観光客を処刑!!】

【新たな英雄「水空陸機動団」】

【野党、独断で救出作戦を行った英雄を糾弾！ 白い目で見るネットユーザー達】

現在、日本ではフェン王国に観光で訪れた日本人観光客を捕縛し、日本人外交官の目の前で5人を処刑するように命じたパーパルディア皇国に憎悪の念を抱くような者が増えていた。

世論は一気に右傾化し、日本国及び日本人を守る為ならば自衛隊の戦力増強や国外派遣も致し方ないという意見が多い。

自由時間中に「パソコン」というものを触らせてもらったレクマイアはそれを知っていた。

「不味いぞ……これは……」

日本という国がこの世界に転移する前、日本には多くのスパイが存在し、政治家は右翼的な発言を許されないというような風潮が流れていたらしい。

愛国心を持つ政治家は様々な策略にハマられ没落し、マスコミも協力してあたかもその政治家が悪いように報道、糾弾し、日本は内部から徐々に崩壊へと向かっていったという。

この世界の住民からすれば、「国を守るために武装してはいけない」という意見は理解されず、それはレクマイアも同様であった。

しかし隣国にある、こんな強い国が平和ボケしているならば、皇国としては都合がいい。

にも関わらず、祖国は長い間まどろみの中で眠っていた日本人を叩き起したのだ！ 見せしめみせしめという最悪もの方法で！

彼の指先は震え始め、徐々に汗に濡れて行った。

内閣官房長官は「今まで通り対話を試みるが、必要とあらば新たな日本人、友好国の犠牲者を出さないために、我々は武器を持つて戦う」と発言し、ネットでは彼の声明に賛同する声が大多数であった。

後ろ盾をなくした野党議員、マスコミも形式上はそれに賛同するような意見を出し、民の間ではパーパルディア皇国を許すなという風潮が流れ始める。

『独断で行われた今回の救出作戦ですが、ネットでは様々な説が唱えられており——』

『「プライドの塊」と称されるパーパルディア皇国ですが、彼の国が宣戦布告をしてくる可能性は極めて高く——』

『自衛隊への志願者が急増し——』

『戦争になった場合、我が国が負けることは間違いなく無いでしょう』
食堂に置いてあるテレビのニュースチャンネルはどれもレクマイアの聞きたくないことばかりであった。

「……………祖国は滅ぶのか……」

この国はつい先日、魔帝の『僕の星しよく』によくよく似たやつを打ち上げたらしく、ザツと調べてみた結果、ワイバーンの飛ぶ遙か、遙か上から皇国は丸裸にされるらしい。

これは性能も凄まじく、条件が整っていれば宇宙空間から地上にいる人間の毛穴までクツキリ見えるらしい。

これが意味することは、どんな重要な文書も太陽の下に晒した瞬間、まさに白日の下に晒されるということだ。

おまけに大海の浮かぶ艦隊や広大な領地に散らばる軍勢も位置が丸分かりであり、それらがどう動こうと日本の裏をかくことは出来な

い。

…なんだこれ！ 勝てないじゃないか！ チートだ、チーターだ！
(彼は覚えたての言葉を使いたくなつたのだ)

さらに絶望の追加情報で、日本国は海上、海中、上空に大量の哨戒機を回らせており、『僕の星』がなくなるとも上陸は不可能なのだ。

例えば哨戒網を突破したとしても、この地に住む人間はほぼ全員が魔信機をさらに改良したような道具スマホを持っており、通報でもされたらすぐバレるという。

そもそもその哨戒機という無人の飛行機械もそこそこの戦闘力を持つており…日本がいた世界基準でだが…、皇国の軍船なんぞ浴槽に浮かべた紙の船と変わらない。

「まあ何が言いたいかと言うと、皇国は絶対に日本に勝てないっつーことだ」

この声が祖国にいる誰かに届くことを願いつつ、彼は就寝する。

その胸中は穏やかではなかった。

(……そういえば、処刑されたのは5人のはずなのになんで死者数は4人なんだ…?)

パーパルディア王国

皇都エストシラント

第1外務局

局長の執務室では、今後の日本に対する措置についてレミール、アルデを交えて話し合いが行われていた。

通常であれば文明圏外の一国家程度に軍の最高司令官や皇族が介入することなど有り得ないのだが、今回はレミールがやけに関心を示すため、このような会議が行われていたのだ。

「そろそろ皇国軍がフェン王国の首都を落とす頃ですな…。連絡がつかないというのは、いささか心配ではありますが…」

「どうせ魔法通信の故障だ。アルタラス王国から連戦だからな。フェン王国を落としたら休ませてやれ」

と言ったレミールであつたが、こちらも内心は穏やかではなかつた。

少しも「してやった」という感じを見せなかつた朝田と篠原の顔がやけに忘れられないのだ。

(局地戦とは言え…皇国が負けるなんて有り得ない…)

トントントンと指で机を叩く彼女に皇国の重鎮達は「蛮族によほど失礼なことを言われたのだろう」と考える。

「レミール様、本当に現地の日本人観光客は処刑してよろしいのですか?」

「構わん。蛮族はしっかりと教育せねばならんからな」

「承知しました」

「で、そのあとのことだが——」

——コンコン

扉がノックされ、レミールがバツと振り返る。

「諸君、待ちに待った吉報のようだ。入れ」

「緊急の要件につき失礼します!!」

第1外務局の若手幹部が入室する。

「フエン王国に派遣していた皇軍の戦列艦隊、竜母艦隊は全て敵に鹵獲されました! 陸戦部隊も壊滅! 捕虜の数は数百! それ以外は全て戦死したもよう!」

「…なっ…?!」

啞然。

海軍の3分の1もの戦力が丸ごと敵に鹵獲された? 精鋭であるはずの陸戦部隊も壊滅?

「馬鹿な! 何かの間違いでは無いのか?!」

「いいえ! 全て事実であるようです!」

「まさか皇国海軍が寝返つたとか…?!」

「それもありません! 1部を除いて船員だけが全滅したようです!」

「敵はなんだ?! どのような攻撃をしたのだ?!」

「敵は恐らく日本国です! 攻撃方法はただいま全力で調査中であり

ます！」

——パリンツッ！

食器の割れる音がする。

音の主は鬼のような形相のレミールであった。

「蛮族ごときに…局地戦とは言え、この皇国が敗れただど?!」

目は血走り、顔を真っ赤にして激怒するレミール。

その脳裏では朝田と篠原が静かに「してやった」という表情を浮かべていた。

皇軍が敗れたという事実はすぐに各国に広まるだろう。膨大な数の属国を恐怖で支配していた皇国にとっては、その事実は致命的となる。

宗主国が弱く見えると、恐怖感が薄れて力関係が崩れてしまうのだ。

「おのれえええツ……蛮族があああ!!! 殲滅だ!! 列強たる皇国がここまでコケにされたことを、絶対に許す訳にはいかない! 日本国を殲滅だ!! エルトオ!!」

「は、はい！」

「陛下に許可を貰いに行く、殲滅戦の準備をしておけ! アルデも分かっているな!!」

「承知しましたツ!!」

レミールは床を踏み鳴らしながら執務室を退室した。

パラデイス城 王の間

「もう報告書は読まれたと思いますが——」

レミールは皇帝陛下に概要を説明する。

「——結果、皇軍はフェン王国の攻略に失敗しました。そして元アルタラス王国の王女ルミエスが日本国内で臨時政府の樹立を宣言したようです。他の属領も沸き立っており、このまま日本国をのさばらせ

ておくと皇国の障害になりかねません。よって日本国に対する正式な宣戦布告と同国に対する殲滅戦の許可をいただきに参りました」「…たかが文明圏外の蛮族に列強たる皇国がここまで舐められるとはな。私は不愉快だよ」

皇帝ルディアスは立ち上がり、王の間にいる全ての文官、武官が膝をつく。

「今ここに！ パーパルディア皇帝ルディアスの名において、日本に対する宣戦布告、及び殲滅戦を許可する！」

列強パーパルディア皇国は日本国に対し、民族浄化を原則とした戦争を行うことを決意した。

地獄の釜が蓋を開く。

しかし、それはまだまだ序盤に過ぎない――

後日――

皇都エストシラント パラデイス城

レミールは先日のように日本国の外交官を呼び出し、座って待っていた。

会議室に入ってくる朝田と篠原の顔はやはり「してやった」という気を微塵も感じさせず、レミールは顔を歪める。

彼女からしたら面と向かって舐められるより、裏で舐められる方が頭にくるのだ。

「フェン王国での戦いの結果はもうご存知だと思いますが…考え直していただけましたか？」

「ふん…もちろん断る。貴様らは我々を舐めすぎた」

「そうですか」

――ブチッ

レミールは激怒しかけたが、これから絶望するであろう彼らの顔を思い浮かべ、なんとか堪えた。

「……こちらから伝えることがある。貴様らは皇軍に仇なすだけでなく、我が国からの独立を促す者を保護し、あまつさえその活動を支援するなど、皇帝陛下の怒りを買いました」

彼女は続ける。

「貴様らは列強の力を舐めすぎている。そして貴様らの国の意思決定を行う者達は自分たちだけは安全だと思っているのではないか？」

「…続けてください」

——ブチブチツ

今にも噴火しそうな感情を押さえるレミール。

その表情は静かであったが、顔は真っ赤に染まっており、握りしめる手はプルプルと震えていた。

（あーあー、美人がこんなに怒っちゃって…勿体ない）

（もう何を言うか知ってるから、勿体ぶらずに早く本題に入ってくれ）
「……貴様らとて同じ立場なのだろうか？ 今殺さないのは我々が寛大で貴様らの政治ごっこに付き合っているからだ。…だが甘いな。貴様らの愚かな認識が自らの国を滅ぼすことになる。貴様らは皇帝陛下の怒りを買ってしまったのだよ」

「はい」

「ふう…！ ふう…！ ふう…!!」

（もはやマトモに話せる状態じゃないな…）

（今だけうちのカミさんにそっくり…）

「蛮族よ、よく聞け。我が国は日本国に対し宣戦を布告する。それと同時に全国民を抹殺することを決定した」
「わかりました」

予想に反した2人の冷めた返答に、ついに堪忍袋の緒が切れるレミール。

彼女はバツと立ち上がり、ヒステリックに喚き散らした。

「○※□◇#!△!!○!!□☆〒√C!!!」

「行きましょう朝田さん。ここに居たら本当に殺されかねない」

「そうですね。戦争が終わったらまた会いましょう、レミールさん」

交渉は完全に決裂。

日本はすでに宣戦布告と殲滅戦を宣言されることを知っていたため冷静であったが、レミールはそんな蛮族の澄呆れたようなました態度が気に食わず、彼女の怒りは数日続いたと後世の歴史書に書き記されることとなった。

27話：アルタラス王国再独立支援作戦

中央歴1640年1月30日――

日本国　首相官邸　記者会見室

「間もなく記者会見が始まります！」

先の大戦から約600年。

望まずに突入してしまった他国との戦争に、内閣総理大臣は重い足取りで壇上へと上がる。

宣戦布告を言い渡されたその日からテレビでは連日、戦争に関するニュースが流れ、今回の記者会見に対する国民の関心は高かった。

「我々の外交努力も虚しく、パーパルディア皇国は我が国に対し、宣戦布告いたしました。彼の国は罪の無い日本人観光客の命を盾に日本国に植民地になるように要求し、現場の外交官が彼らを見逃すようにお願いしたものの、非道なことに彼らは、見せしめとして約200人の観光客の処刑を命じ、4人の尊い命が失われました」

カメラのフラッシュがたかれる。

「またパーパルディア皇国は宣戦布告に付随し、日本国民全てを虐殺し、民族浄化を行う意志を表明いたしました。政府を代表し、国民の皆様にも申し上げます。私たちは持てる力の全てをかけて、皆様を守ります！　必ず、必ず守り抜きます!!」

この日、日本政府はパーパルディア皇国の宣戦布告に対し、個別的自衛権の発動を宣言。

日本に侵攻してくる敵はもちろん、基地や武器生産工場、その他の敵国の武力行使に直結するあらゆる存在を「国民の安全」のため排除することを発表した。

中央歴1640年2月4日――

東京都　とあるホテルの一室

ムーの技術士官マイラスと戦術士官ラツサンは窓際の椅子に腰掛けて話し合いをしていた。

彼らは日本とパ皇の戦争に先立ち、観戦武官として日本国を訪れていたのだ。

ムーの情報収集、戦力分析力は世界で1番と言われており、彼の国が観戦武官を送ったほうの国が勝つ確率は高く、ムーが観戦武官を送った時点で勝敗は決しているとさえ言われている。

彼らが日本に送られたと知った時のレミールはどうだったかと言うと、当然激怒であった。

そんな話はさておき、観戦武官の2人の会話に目を向けてみよう。

「マイラス：…お前の目からは日本はどう見える？」

「どうもこうも、我々より技術が遥かに進んでいるとしか言えません。コンピューターと呼ばれる高性能演算装置の使い方は分かりましたが、原理は全く分からないままです」

分からないとは言いつつも、彼は「子供の道具図鑑」と電子辞書を手にも、目を輝かせていた。

「…でもそれ、子供向けの書物だろう？ そんなのを見て分かるのか？」

「分からない単語だらけですが、内部構造は1%ほど分かりました！

まるで終わりのない迷宮を彷徨っているようです！」

「…」

一方ラツサンは日本の兵器に関する本を読んでいた。

彼らはまだ日本と皇国の戦場に赴いていないが、これらの本に目を通すだけで日本が圧勝する光景が目に見えかぶ。

百発百中の『電磁加速砲』、狙った目標を外さない『誘導弾』、音の何倍もの速度で飛翔する『無人戦闘機』。

『潜水艦』と呼ばれる、海に潜る船。そして海中を進む『魚雷』。

これらはムーにおける科学の延長線上にあるらしいのだが、いくら見ても魔帝の兵器のようにはしか思えない。

(進みすぎた科学は何とやら…だな)

日本の書店で見かけた言葉を思い出しつつ、彼は本をパターンと閉じ、布団に入った。

翌日――

東京都 旧カナダ大使館（現ムー大使館） 応接室

「柳田^{やなぎだ}です。突然の来訪に対応していただきまして、まことにありがとうございます。」

「ユウヒです、どうぞおかけ下さい。それで、本日はどのようなご用件でしょうか？」

「実は日本国政府から要望がありまして、貴国は各国に空港を造っていると伺いまして、アルタラス王国にあるこの空港の使用許可をいただきたいのです」

柳田は人工衛星から撮った写真を取り出し、ユウヒに見せる。

「……これが衛星写真ですか……！」

ユウヒはまじまじと写真を見つめる。

非常に精巧な写真。それに写るのはアルタラス王国にある、ムーが建てたルバイル空港。

その精巧さと言ったら、屋根の上の汚れがクツキリと見え、周りの木々は今にも動き出しそうな解像度であった。

「あ、失礼。この空港に関しては、現在はパーパルディア皇国が所有権を有しているので特別許可は必要ないでしょう。拡張や改造に関しても、日本国の責任においてその機能低下を招くことがなければ自由によって頂いて結構です」

「本当ですか！ ありがとうございます！」

その後も様々なやり取りがされ、しばらくしてから日本とムーの交渉は終わった。

これにて、日本国の対パーパルディア皇国戦の戦略方針が決定する。

後日、その第1段階として、アルタラス王国における皇国戦力の完全制圧の命令が下された。

中央暦1640年5月22日――

パーパルディア皇国アルタラス統治機構　海上警備隊

皇国のアルタラス統治機構、海上警備隊の戦列艦5隻はアルタラス島近海を紹介中であった。

「ん?」

旗艦『ヒゲル』の魔力感知器を見ていた兵が、哨戒任務中のワイバーンロード2騎が突如消滅したことに気が付いた。

「――なっ?!」

しかし彼が立ち上がると間もなく、隣を航行中の戦列艦が大きな火柱とともに海上から消える。

「敵襲か?! 戦闘配置に――」

衛星から送られてくる情報を元に敵の精確な位置と航行速度、進行方向を検出した護衛艦『たかなみ』に搭載されたAIは『電磁加速砲』人工知能を使用し、超長距離からの対艦狙撃の目標5隻を難なく撃破してみせた。

パーパルディア皇国　アルタラス統治機構海上警備隊　ハイ
ペリオン基地

アルタラス王国を落とした皇軍は首都占領後、フェンおよび日本国へ進攻するべく東へ転進した。

現地軍の武装解除はすでに済んでおり、時折起こる小規模な反乱を脅威ではないと判断した皇国は監察軍と同程度の戦力を持つ統治機

構を置いた。

その戦力は、ル・ブリアスの東側の軍に25隻の戦列艦。少し離れた場所に2000人の兵と20騎のワイバーンロード部隊がいる基地。そして首都から北へ約40kmの位置に人員2000名の陸軍基地がある程度である。

陸軍中将リージャックは仮設の司令棟屋上からアルタラス王国の首都を眺めていた。

「フェン王国に派遣していた我が国の軍は全滅したらしいな。特に海軍はいつたい何をやっていったんだ？」

鹵獲された200隻をこえる戦列艦は全て日本の友好国に分配され、9隻の竜母に関しては、そのうち2隻ずつがクワ・トイネ公国とクイラ王国に譲渡され、他は競りに出されたという。

「さあ…そもそも皇軍が負けたこと自体が信じられません。海軍にいたっては、戦う前に降伏でもしたのでしょうか…？」

生き残りは全てフェン王国の捕虜にされたため、真相は謎のままである。

「まあいい…大尉、少し港まで散歩をせぬか？　なに、気晴らしだよ気晴らし」

「よろこんで」

2人は基地から出て港まで歩く。

ハイペリオン基地は陸・海・空の3部隊統合基地であり、彼らがいいた場所から港まで5分とかからない。

「基地東側のワイバーン用滑走路の敷設はいつ頃になるのだ？」

「明日には完了するかと」

「さすがは皇軍だ」

リージャックたちが港に着くと、見るものに威圧感を与える皇軍の戦列艦20隻が棧橋に並んで停泊していた。

比類なき強さを誇る船が整然と並ぶ姿は壮観である。

「美しいな」

「中将殿は戦列艦がお好きなのですね」

しかし次の瞬間、彼らはとんでもない光景を目の当たりにした。

——ボツ!!!

何か超高速で飛来した物体が戦列艦を貫く。それは1番外側に並ぶ船から順に両方の外壁に穴を開け、最後に海軍基地の建物にも同じような被害を残す。

四散した木片や鉄片が周囲に降りかかり、当たり所が悪かったのか、数隻が爆散した。

積載されていた魔術媒体である粉状魔石が爆発したのだ。

「なっ?! 事故か?!」

「中将殿! お逃げ下さい! どう見ても攻撃でしょうに!」

しかし彼らは逃げた先で理解することとなる。

アルタラス統治機構はそのほとんどの戦力を一瞬の間に潰され、機能を失っていた事に。

同時刻——

アルタラス島

反皇国勢力の地下組織を指揮する軍長ライアルと、その部下であるシユサクは塔の上から事の顛末を見ていた。

港に停泊してある列強の戦列艦20隻が爆散するか沈んだかと思うと、その近くにある基地も超強力な爆裂魔法のような何かで吹き飛んだのである。

黒いキノコのような形状の煙は遠くにある基地の方向からも上がっており、空を乱舞する日の丸が描かれた物体が視界にうつった。

「日本軍?! …ああ、なるほど! そういことですか女王様!」

彼はルミエス王女が日本で保護されている事と、それを知った後に届いた魔信の内容を思い出していた。

『明けない夜はなく、日はまた東方より昇る。苦しみの闇を払うように、太陽はより強く輝くだろう。良運はタスの日に訪れる』

「日はまた昇る」と「太陽はより強く輝く」は日本軍の来訪を暗示

していたのだ！

そしてタスの日は今日！

彼は魔法通信機を取り出し、力いっぱい叫ぶ。

「時は来た！ アルタラス王国を取り戻すぞ！ 全軍作戦開始！」

後刻、兵力のほとんどを失っていたパーパルディア皇国アルタラス王国統治機構は一斉蜂起したアルタラス王国地下組織及び、加勢した民衆の前に降伏。

それはアルタラス王国が実効支配を取り戻した瞬間であった。

28話：過ちては改むるに憚ること勿れ

パーパルディア王国 皇都エストシラント

周辺国より搾取した富で潤う、「悪魔のような国」の名に相応しい都、エストシラント。

そこをズンズンと曇った顔で歩く美しい女性がいた。

レミールである。

緊急の呼び出しに睡眠を妨害された彼女は、振り切れそうな不機嫌ゲージをなんとか堪え、第1外務局へと向かっていた。

「どうしたのだハンス?! 呼び出すほどの事ではなかったら許さんぞ?!」

「レミール様、まずはこれに目を通してください」

束ねられた簡易報告書。

題名は『アルタラス島陥落に関する報告書』であった。

「…な、なんだ…これは…!」

パーパルディア王国の歴史上、植民地が独立、もしくは奪還されたことは1度もない。

まさに前代未聞、青天の霹靂である内容にレミールの手は怒りで震えていた。

「…概要を説明します。本日早朝、在アルタラス皇国軍は日本国からの侵攻を受け、数分でほぼ全部隊が消失いたしました。この機会を見計らったかのように原住民の反乱が起こり、アルタラス統治機構は降伏し、アルタラス王国が独立を宣言いたしました」

それだけでなく、アルタラス島の西側海域で試験航行をしていた最新型の竜母『ヴェロニア』とその護衛の戦列艦が、積載されていたワイバーンオーバードゴと鹵獲され、アルタラス王国の戦利品となっただけらしい。

最後に入った通信は『日本の魔人に船長が斬り殺された!』と報告しており、こちらも日本国の仕業と見て間違いなさそうだ。

「…ッ何故だ! なぜ文明圏外の蛮国に皇国がこうも連敗するのだ

！」

「実は…今回の攻撃には、飛行機械が使用されていたようなのです」
「飛行機械だとツ?! それはムーしか造れないはずじゃ…」

飛行機械とはムーが生産している、魔法に頼らず科学の力で空を飛ぶ兵器である。

皇国がワイバーンロードを開発したのはこの飛行機械『マリリン』に對抗するためであり、それでも空戦能力が劣るため、ワイバーンオーバード種が新たに開発されたのだ。

その最新兵器が無傷で元属領に奪われたというだけでも皇国にとっては悪夢であるが、彼女らの頭はそれどころじゃなかった。

「ということは…代理戦争か! ムー大使を呼べ! 私が直接審問する!」

「承知しました」

パーパルディア皇国史上最も忙しい時間が始まる。

カイオス邸

カイオスはアルタラス島陥落の報を受け、恐怖していた。

彼はレミールに仕事を奪われ、暇になった時間を活用して、独自に日本の調査に乗り出していたのだ。

「なんつ…てことだ…!」

そこで明らかに変わったのは、日本という国が持つ、新興国家では考えられないほどの国力であった。

とある商人から譲り受けた雑誌、日本国の出版社が出したそれには、兵器比較について詳しく書かれていた。

非常に鮮明な魔写が大量に使われ、皇国の兵器に関してはある程度の差異はあれど、ほぼ全てが正確に分析されている。

そして第3文明圏では最強である皇国産の兵器の性能を全て知った上で、この雑誌は『日本の圧勝』と記しているのだった。

「もはや屈辱を通り越して…何と言えば良いか分からんな」

皇国の魔導銃の完全上位互換である銃や、その銃弾を防ぐ鎧。大地を蹂躪する『鉄竜』や空を飛ぶ『鉄竜』。

例の『魔人』に関するページもあった。

「…この戦争は負けるな」

先日、何とか日本の外交官と秘密裏に接触することができ、日本と外交の窓口となる通信機器を自宅に設置することは出来たのは祖国にとってこれ以上ない幸運だ。

しかし狂犬レミールが日本との外交担当の座に居座り続ける限り、ここまで栄華を極めた皇国に破滅の道以外に選択肢はない。

「…祖国よ、汝を滅ぼしてたまるものか！」

以後、彼は生まれ育ったパーパルディア皇国を救うべく動くことになる。

皇都エストシラント 第1外務局

——コンコンコン。

会議室の扉がノックされ、ムー大使が入室する。

ムー大使のムーゲとその他の3人は会議室に皇族であるレミールがいることに驚いた。

「それでは会議を始めさせていただきます」

するといきなり、レミールが切り出す。

「我が国が日本国と戦争状態に突入していることはご存知かと思うが、今回のムー国の一連の対応についてご説明願いたい」

「承知しました。このたびの貴国と日本国の戦争は激戦となる可能性があります…主にフィルアデス大陸で。そのためムー政府は国民の安全を確保するために貴国からの避難指示を発令するに至りました」

その説明を聞き、レミールは顔を曇らせた。

「いえ、上辺はいいのです。調べはついています。本当のことを話し

てもらえませんか?」

「は?」

「アルタラス島において日本国からの襲撃がありました。その際、『飛行機械』が目撃されているのです。本当の事を話してください」

ムーゲは最初は混乱したが、直に全てを悟る事となった。

(何故ムーが疑われるのだ?!?! まさか…まさか皇国は日本のことをろくに調べていない…?)

「えつとですね…貴国は重大な勘違いを犯しておられるようだ。日本国は我々よりも遥かに進んだ飛行機械をお持ちなのですよ」

「なんだと? 文明圏外の蛮族が我々のような列強よりも優れた技術を有していると言われていたのか?」

彼はまさかがそのまさかだと知り、驚愕する。

「いいえ、ですが日本国は例外です。彼らが転移国家であることをご存知ないのですか?」

「あ? それは自称だろうか? 貴国は蛮族の戯言を信じるのか?」

「信じます。ムー以外では単なる神話と思われていますが、我が国もまた転移国家なのです。そして日本国は旧世界の友好国であることが判明いたしました」

ムーゲが部下に目配せをする。

すると部下は鞆の中から数枚の写真を取り出し、机の上に並べて見せた。

「右は日本国、左はムーの飛行機械です。これを見て納得して頂けると幸いなのですが…」

ムーの飛行機械は見慣れた『マリン』であり、プロペラと翼が2枚、縦についていた。

それに比べて日本国のは…

「これが飛行機械…?」

「ええ、パイロットが要らない飛行機械だそうです。情報によると音の10倍以上の速さで飛ぶとか」

見た目がのっぺりしており、どこからどこまでが翼なのかが分からないこれが、音の数倍以上で飛ぶ…?

そもそもパイロットが要らないというのが理解できない。

「はっ！ こんな嘘に決まっておる！ 音の数倍など…そんな魔帝の兵器じゃないか?!」

「にわかには信じ難いのですが、信じてもらうしかないのですよ」

「じゃあこれは何だ！ これは人面ワイバーンか何かか?!」

レミールが指をさした魔写にはいわゆる『被手術兵』が写っていた。

これを見て生きていられた皇国人は全員が捕虜として収監されているため、彼女の元にこれについての情報は入ってこなかったのだ。

「いえ、それは俗に『魔人』と呼ばれる日本国の兵士です。こちらも音速以上で飛ぶことが可能らしく、他にも様々な種類がいるようです」

「魔人…？ 魔王か何かか？」

「いいえ、それとは全く別物らしいのですが、それ以上に強いと我々は判断しています。そもそも魔人というのは我々がそう呼称しているに過ぎないのでから」

皇国側の顔色がどんどん悪くなっていく。

ムーゲは皇国が怒りに狂い、日本のことをろくに調べもせずには宣戦布告と殲滅戦を言い渡したのだなど内心呆れた。

「…最初に申し上げましたが、ムー政府は国民を守る義務があります。

このままでは皇都が灰燼に帰す可能性もあると判断し、ムー国民に避難指示を出したのです。我々ももう間もなく引き上げます」

彼は続ける。

「戦いのあと、まだ貴国が残っていたら、私は戻ってくるでしょう。あなた方とまた会えることをお祈り申し上げます」

パーパルディア皇国側がただただ絶句する中、ムーゲの言葉を最後に会談は終わった。

彼の言うことが真実であれば、自分らは超列強国を相手に挑発し、あろうことかその民を処刑するように命じてしまったのだ！ 相手の外交官の目の前で！

「…さて、これからどうするかな」

ここでレミールが心を入れ替えて素直に謝罪していたら、この世界線でもパ皇が滅ぶことはなかっただろう。

しかし、彼女は自らの運命を変えることはできなかつた。

「ムー大使が言っていたことが本当だとは限らん。ムーが我らを謀つて、実際に代理戦争を行っていたとしたら、まだ我々にも勝機はある」
第2列強を相手にどれだけ戦えるかは分からないが、途中で神聖ミリシアル帝国にでも仲介を頼めば止めてくれるだろう。

それどころか上手く行けば、皇国が列強2位の座に着くことも十分可能だ。

「とりあえず当面の相手は日本国だ。ムーの支援を受けたからと言って、我が皇国を侮辱したことは許さぬ。変わらぬ殲滅するぞ！」

「はっ！」

29話：皇国海軍殲滅作戦

日本国 防衛省 パーパルディア皇国特別防衛対策室

「意外と簡単に落ちるかも？」

防衛省の職員は先日打ち上げた人工衛星から送られてきた写真を見て呟いた。

デジタル化された写真はパーパルディア皇国を隅から隅まで写しており、その結果、皇国は兵力を集中させすぎていることが分かった。

おまけに基地は街からもかなり離れており、近代戦を経験したことがある日本からしたら間違いだらけである。

「極大サイズの陸軍基地が国内に3つか…。おまけに1つは工業地帯のすぐ近くときている。パ皇は近代戦を経験していないのだな」

「よく我々を殲滅するなどと言ったもんですよ。相手が日本で良かったですねえ？ もし相手がアメリカや中国だったら宣戦布告した次の日には核で吹っ飛ばされてるでしょうに」

「次の日があるのかも怪しいぞ」
「たしかに」

雑談する幹部達。

最近の彼らの日課は、仕事の話も混ぜての戦力分析だ。

「それよりも…基地が極大なのは攻撃がしやすくていいんだが、あまりにも死傷者数が多いと戦後処理が面倒くさそうではないか？」

「そうですねえ…例の『非殺傷性生物兵器』を試してみます？」

「いや、ある程度はアルタラス島での戦闘のように力を見せる必要があるだろう」

「あれは凄かったよなあ…。あの威力で核兵器じゃないってんだから…」

「核兵器に対して敏感な日本にピッタリですね。しかし、噂では極秘裏に進んでいるらしいですよ、核武装案」

「まあ魔帝が出てきても使うか怪しいがな」

大陸間弾道ミサイル
「ICBMの開発も極秘裏に進められているとか…」

「おつとイケね、早く仕事終わらせなきや…」

こうして対パーパルディア皇国の作戦概要は作られた。

まず第1段階として海軍の殲滅。

第2段階で皇都エストシラントの北側にある敵極大基地を爆撃、空軍機能を完全に破壊した後、従属化。

第3段階で工業都市デュロとそれに隣接する敵基地を破壊。

第4段階は「とある作戦」の成否によるため、プランはあるが未定。そして後日、首相の作戦開始の命令により、反撃の火蓋が切られた。

中央歴1640年8月6日――

パーパルディア皇国 皇都エストシラント沿岸 エストシラント港海軍基地

北側にある陸軍基地と対を成す皇都防衛のもう1つの要、エストシラント南側の海軍基地。

第3文明圏で最大規模を誇るこの港はその機能の半分を基地機能に当てており、現在は日本との決戦に備え、皇国海軍の動員可能な戦力のほぼ全てを召集している。

海将バルスは180隻を超える戦列艦と20隻もの竜母が並ぶ光景を海軍本部の一室から眺めていた。

「…索敵網は？」

「はい、命令通り索敵のワイバーンの数を3倍に増やしました。索敵範囲もワイバーンの飛行可能距離ギリギリまで広がっています」

ワイバーンだろうとワイバーンロードであろうと、バルスは皇国の兵器が日本国のそれに通用しないことを直感で理解していた。

フエン王国の戦いの戦闘報告を見たからである。

ただ200隻撃沈するならば皇国だって出来る。

しかし全てを無傷で鹵獲するなど、あの神聖ミリシアル帝国でも不可能なのではないか。

他国から来た商人に聞けば、試験航行中の新型竜母『ヴェロニア』もワイバーンオーバードごと鹵獲されたらしい。

そんな強力な相手ならば、どう足掻こうと無駄ではないか？

今だけ友好を結び、技術を吸収してから攻め込めれば良くないか？

(しかし…負けると知つていても謝罪も降伏もしないのは、列強のプライドが邪魔をしているからだろうか)

色々と言いたい事はあるものの、彼の脳裏では皇帝ルディアスとレミールがキーキー騒ぎ立っている様子が浮かんでいた。

だが、「現実は小説よりも奇なり」とはよく言ったもので、皇国が降伏や講和をしない理由は、上の人間が未だにろくな戦力分析をしていないからであった。

バルスはそれを知らない。

「ん…あれ!? 海将! 索敵網から反応が消失! 飛竜の反応が消えました!」

「位置は?!」

「地図と照らし合わせると…ここです! ここから南南西の方向です!」

「よし! 地上にいる騎を全て離陸させよ! そして空中待機中及び、哨戒中の騎は一旦南東方向へ向かい、通信があるまで待機だ!」

「了解!!」

しばらくしてワイバーンロード部隊は全て飛び去り、別働隊も所定の位置につく。

すると、魔信機から報告が入った。

『敵らしき物体を発見! 円盤のような飛行物体と、1000匹を超える羽虫だ!』

『円盤に日の丸を確認! 日本軍です!』

バルス海将は魔信機を手に取り、叫ぶ。

「A部隊は交戦開始! B部隊はそこから南西方向へ向かった後、敵を後方から奇襲しろ!」

そして彼は続ける。

「港にいる全艦に出撃命令! 飛行物体が飛んで来た方向に向かえ

！」

「了解!!」

全力出撃の命令を受けた第3艦隊提督アルカオンは皇国に3隻しか存在しない150門級戦列艦『ディオス』に乗船し、約600隻もの仲間と共に港を出た。

「…主力艦隊の全力出撃は皇国史上初めてだな。いつかこんな日が来るとは思ったが…相手が魔帝じゃないのが残念だよ」

「提督、決して侮ってはいけない相手だと思いますが…」

「分かっている。敵の航空戦力は優秀なワイバーンロード部隊が倒してくれるだろう。さあ、魔帝戦前の肩慣らしといこうじゃないか」

エストシラント海軍基地

南南西方向へ約数十km

「ちくしょう、敵が速すぎる!」

「来るな! 来るなあああ——」

ワイバーンロード部隊と対峙するのは日の丸が描かれた円盤型の飛行物体。

その正体はジン・ハーク上空制圧戦で活躍した『全方位飛行型 無人戦闘機』であった。

『誰かあ! 助け——』

搭載されているレーザー照射器によって皇国軍はワイバーンだけを殺害され、騎乗している竜騎士は生きたまま海面に叩きつけられる。

青空でワイバーンと竜騎士が踊り狂う、地獄絵図。

竜騎士達は必死に応戦するが、何倍もの速さで飛び回る敵騎を相手にすると、自分らがひどくノロマに感じられた。

「ああクソっ! 下の羽虫も逃がすな!!」

どうやら護衛と制空戦闘の役割を担っているのは円盤だけらしく、下の羽虫はきれいな編隊を組んでエストシラント方向へと向かって

いくだけ。

ろくな武装があるようにも見えないが、恐らく海軍基地か皇都を攻撃するのはこいつらなのだろう。

『敵騎後方から友軍を確認！ 増援が来たぞ！』

その方向を見ると点のように小さいが、こちら側に大量に向かってくる別働隊の姿が見えた。

『交戦中の友軍に告ぐ、我々はこれより空間制圧射撃をする。至急退避されたし』

遠くの空で200騎を超える友軍が竜騎士団が一斉に導力火炎弾を発射。炎の輝きは星の瞬きのように連続して明滅し、苦戦していた彼らにとって幻想的にすら見えた。

「よし！ これで勝てる！」

下で編隊を組んで飛ぶ羽虫は先程の戦闘からずっと真っ直ぐ飛び続けているだけであり、火炎弾の流れ弾が当たりそうになってもろくに回避すらしようとしない。

そのため、彼らは勝ちを確信したのだった。

しかし――

『下の羽虫が編隊を解いたぞ?! しかも、やつら味方にぶつかることなく完璧に回避行動を取ってやがる！』

「なに?!」

まるで群れで海面ストレスを飛ぶ鳥のように完璧なフライト。あんな神業、我々には出来ない！

『ああクソっ！ 拍手をする暇もくれないのか！』

『B部隊、交戦開始!!』

しかし円盤は淡々と作業を続ける。

「おのれえええ!! 化け物どもめえええ!!」

数十分も経つと、その海域からワイバーン部隊は姿を消し、海面では誰のモノか分からない肉片に海魔が群がっていた。

「飛竜隊…全滅しました。そろそろ例の羽虫と会敵します」
戦列艦『ディオス』の甲板は葬式のような静かさに包まれていた。
ワイバーンロードの数は400近くいたはずなのに、それが全滅？
なにかの悪い冗談だろうと誰もが思う。

『前方に報告にあつた羽虫を確認！ 真つ直ぐこちらに向かつて…：
うわあああ!!! —— ザザザ…』

目標に向かつて全速力で突撃し、爆破する、人間並かそれ以上の判
断力がある羽虫^{自爆無人機}1000匹^機。

対するは、対空兵装が弓しかない木造船。

その戦いを一言で例えるなら、「完全なワンサイドゲーム」であつた。

——— ヴウアアアアア!!!

それを埋め尽くす飛行物体の数々。

無数のプロペラが発生させる空気の振動は、大きなサイレンのよう
な音を共鳴させ、皇国海軍の人員を恐怖に陥れた。

『竜母全艦で火災発生！ 鎮火は不可能です！』

『戦列艦「アデイス」「マルタス」「レジュール」「カミオ」が炎上中！

こちらにも鎮火は不可能！』

『「ターラス」が爆沈！ 粉状魔石に引火したと思われまます！』

『第2艦隊全滅！ さらに水平線の向こうから敵の増援を確認！ 数

…多すぎて不明！』

『こちら第1艦隊！ 被害甚だ——— ザザザ…』

皇国海軍内で行われる魔信では怒号が飛び交い、全方位で上がる大
量の黒煙で太陽の光は遮られた。それでも猛烈な勢いで燃えては沈
む味方艦の存在で、戦場は明るい。

そのため、黒雲の中から飛び出し、味方艦もしくは自分の艦へと
突っ込んでくる羽虫の姿は容易に確認でき、甲板上で起こる大爆発に
よる閃光と轟音で、船員達の精神はゴリゴリと擦り切れていく。

鳴り止まないサイレン音で耳は痛くなり、いっどこから羽虫が飛び
出し、自艦へと向かつてくるのか分からない恐怖とストレスに狂う者
も現れ始める。

中には戦闘することを諦め、いそいそとランチを降ろしている者の姿さえもあつた。

「おい貴様らー！ 私はまだ退艦命令を出していないぞ！」

「船長らしき男が近付き、勝手に退艦しようとしている者達へと近づく。」

「そうかよ！ じゃあお前は勝手に死んどけ！」

「なっ…?! 貴様！ 敵前逃亡と抗命（上官の命令に逆らうこと）は重罪だぞ！」

「構わねえよ！ 死ぬのはごめんだ！」

次の瞬間であつた。

上空の黒雲の中から例の『羽虫』が飛び出し、真っ直ぐ本艦へと向かってきたのだ。

「船長！ 本艦に向かって羽虫が急降下してきます!!」

「なっ——?!」

この報告を聞き、何人もの船員が海へと飛び込む。

それにはもはや軍規などなく、ただ強大な敵から逃げたい人間の本性だけが彼らを動かしたのだ。

「早く降ろせー！ 巻き込まれるぞ!!」

——ドガアアア!!!

甲板で大きな爆炎が上がり、轟音が船体を震わせる。

火の手はどんどんと燃え広がり、猛烈な黒煙が立ち上た。

「……ちくしょう！ あんなの勝てねえよー！」

この海上における戦いで皇国海軍は全戦闘艦が炎上、沈没。

海に飛び込むなりして生き残った船員達は、後に全員が漂流中のところを海上自衛隊に救助され、一命を取り留めたものの、心的なストレス障害を患った者が多かったという。

数十km先で阿鼻叫喚の地獄が広がっている一方、エストシラント海軍基地では対空戦闘の用意がされていた。

すでに航空戦力、約600隻もの主力艦隊は全滅、パーパルディア皇国の海軍は消滅したかに思われたが…。

「動け！ 艦船が存在せずとも我々が皇軍であることに変わりはない！ とにかく動くんだ！」

海軍に在籍する全ての者に魔導銃が配られ、陸上配置型の魔導砲を混じえた急ごしらえの対空陣地が構築されていた。

付近の民間人も全員が退避させられており、この短時間でこれら全てをやつてのけたのは海将バルスの指揮能力と、皇軍の練度の高さによるものだろう。

しばらくして彼らは、水平線の向こうから迫りつつある敵の姿を確認した。

その数は増え続けており、報告で入った数の何倍もいるように思われた。

『羽虫を確認！ 数は500……1000……3000匹以上！』

「対空戦闘用ー意！ 射程内に入り次第……撃てッ！」

パパパパパパパッ!!!

海軍戦列歩兵による一斉射撃。

数機が羽やプロペラを損傷して自爆し、これを確認した『AI』は人工知能その被弾率から脅威度合いを分析し、全機がその撃滅を決定する。

「何騎かがこちらに向かつてきます！」

「第2射！ 撃てッ!!」

パパパパパパパッ!!!

この羽虫の大群は全てが「個」であり「全」でもある。

「個」から得た情報はすぐさま全機に共有され、個々に搭載されたAIが瞬時に合理的判断を下し、「全」として最適の行動指示を出す。

全ての「個」が「全」のための判断をし、行動を実行する。

皇国人から見たら、まるで異質な群体攻撃。

感情も心も持たず、常に全ての為にあらんとする「それ」に恐怖を抱いた者も少なくなかった。

「ダメだ!!! 逃げろおおお!!!」

自衛隊のドローン部隊による攻撃は苛烈を極め、港湾施設、武器弾

薬庫、海軍本部は完全に破壊され、無人の兵舎だけが取り残される。
この日、パールディア皇国はその海上戦力の全てを消失した。

30話：エストシラント北側基地懐柔作戦

陸軍基地を発った皇都防衛隊所属、第18竜騎士団第2飛行隊のワイバーンオーバード20騎は皇都のやや南方空域を警戒飛行中である。

そんな中、先頭を飛行するデリウス隊長は何か嫌な予感を感じていた。

「なあプカレート、下の民衆は何だと思う?」

『さあ：何かから逃げているようにも見えますが：』

「となると：海軍基地で何かあったのか?」

『そんな馬鹿な』

皇国の軍上層部は士気の悪化を恐れて海軍消滅の情報を下つ端には伝えていなかったのだ。

『隊長！ なんか来ます！』

突然隊員が叫び、彼が指をさした方向を全員が見る。

彼らは南の空に、綺麗な絵画に付いた汚れのような斑点を確認した。

約数十の斑点は徐々に大きくなる。

「あれは：なん——」

——シユバアアア!!!

第18竜騎士団第2飛行隊は飛行物体が何なのかを理解する間もなく、全騎が同時に撃墜される。

航空自衛隊の『全方位飛行型 無人戦闘機』20機が照射したレーザーはワイバーンの頭部を正確に焼き、容易く絶命してみせた。

「ああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

——ブチャアツ!!!

列強となったあと、1度として本土が戦場となったことはなかったパーパルディア皇国。

その首都であるエストシラント全域に20騎のワイバーンオーバードと、それに乗っていたと思しき竜騎士20人が降ってくる

る。

竜騎士達は落下死するまでは生きていたらしく、おぞましい断末魔が皇都に響いた。

「いやああああ!!!」

「ひっ…！ ひいいい!!」

円盤が恐ろしい速さで北に向かって飛翔していく。

住民達が正体不明の存在に怯える中、今度は翼に日の丸が描かれ、炎を2本噴き出す飛行機械が北へと向かうのが見えた。

「あれは…日本国か？」

「何が文明圏外の蛮国だよ…。まるで魔帝じゃないか！」

皇都北側 皇都防衛隊 陸軍基地

装飾が施された豪華な石造りの建物の1階で、女性魔信技術士のパイは魔力探知レーダーを確認していた。

軍船に搭載されている対空魔信感知器よりも大型かつ広範囲を索敵できるレーダーで、これは対空のみならず対地用としても機能する。

「ん…？」

表示の変化に気付く。

綺麗な隊列を組んで飛行していたワイバーン部隊が突如消失したのだ。

「撃…墜…?!」

彼女は魔信機を手に取り、送話器に向かって叫んだ。

「緊急事態発生！ 皇都南方空域を警戒中の第18竜騎士団第2飛行隊20騎が消失！ 魔力探知レーダーに敵影なし！ 飛行機械と思われまます！」

——ウウウウウ—— ツツ!!!

基地全体に警戒報知器の音が鳴り響き、基地内が慌ただしくなる。

しばらくすると陸将メイガの命令によって第3飛行隊が緊急発進のために滑走路に集まった。

すでに彼らはジグザグに整列して滑走を開始している。

しかし、彼らが大空へ飛び立つことはなかった。

「あつ?!」

先頭のワイバーンオーバーロードが転び、後続の騎がそれに突っ込んだのだ。

さらに後続のワイバーンも急には止まれず、玉突き事故のように先頭集団へ突っ込んでいく。

乗っていた竜騎士はワイバーンに押し潰されるか前方へと吹っ飛び、負傷した。

「陸将! 敵飛行機械のハラ嫌スメがントら攻撃により全飛竜隊、離陸不可です!」

彼が窓から空を見ると、大量の円盤のような飛行物体が乱舞していた。

「他基地に上空支援要請だ! 兵達にも武装をさせろ! 対空陣地を構築するぞ!」

メイガは吼える。

しかし、それらは全て無意味となった。

「陸将! 円盤が離れていきます!」

「なぬっ?!」

先程まで基地上空を押さえいていた円盤は消えていた。

ワイバーンを離陸させるなら今がチャンス!なのに、何故か猛烈に嫌な予感がする。

——ゴオオオオオ……

「なにか…後ろからもっとヤバいのが来ているのではないか…?」
微かに聞こえる獣の咆哮のような音。

それは徐々に大きくなっていった。

「あつ?! 先程とは形状の違う飛行機械が何かを落としました!」

翼に日の丸が描かれた、円盤状ではない飛行物体。それらが落としたのは、白い傘がついた何か。

大量に降ってきたうちの1つが地面に接触したかしくなかつたか、次の瞬間。

猛烈な風圧、コンマ1秒もしないうちに、全身を覆う火炎。

急激な気圧の変化による内臓破裂、酸欠と一酸化炭素中毒と呼吸困難が同時に起こり、メイガとその他の兵士達は窒息、意識を失い、死亡した。

『改良型気化爆弾』

アメリカが持っていた燃料気化爆弾を日本が独自に改良し、加害範囲を更に広くした爆弾。

同兵器作動時に発生する巨大な火球は人間を爆風で圧死させたり、急性無気肺と一酸化炭素中毒と酸素分圧の低下による合併症によって窒息死させる。

(核兵器のそれと比べると)小さめのキノコ雲が発生するため、配備当時はマスコミや野党にめっちゃ追及された。

日本の有人戦闘機から投下された数発の『改良型気化爆弾』は皇都防衛隊の基地の滑走路とワイバーンが待機する竜舎付近だけを壊滅させる。

しかし空軍機能を喪失しても、基地はまだまだ生きていた。

「報告急げ！」

『リントヴルムに被害無し！ワイバーンオーバーロードも5頭だけ被害を免れました！』

『滑走路1部使用可能！残存飛竜隊を離陸させます！』

『爆弾投下地点に生存者はいません！メイガ陸将の死亡が確認されました！』

滑走路の1部が使用可能となっているのは、日本側のミスであった。

彼らは転移するまで、いかんせん実戦経験がなかったため、この爆弾1発で滑走路を破壊出来るだろうと考えていたのだ。

しかしそれは間違いであった。

この気化爆弾は威力が非常に高いという訳ではなく、ただ広範囲の生物を殺傷できるというだけで、木造の滑走路は1部が燃えたか吹き飛んだものの、埋め込まれた魔石は無事であり、表面が焦げただけで済んだ部分は使用可能だったのだ。

「飛竜隊の離陸を急げ！ 恐らく第二波が来るぞ！」

しかし先程の円盤が戻って来たため、生き残ったワイバーンは翼を広げる間もなく絶命した。

これにより、彼らは皇都上空の制空権を完全に消失したのであった。

皇都エストシラント

「おい！ 見ろ！」

興奮した皇国民が北を指さす。

皇都を守る力の半分が存在していたはずの場所には火を含んだキノコ雲がいくつも立っており、突然訪れた皇国の危機に誰もが絶句する。

それを嘲笑うかのように、再び飛行機械数機が皇都上空に侵入してきた。

「で…デカイ…！」

さっきまでの物とは比べ物にならないほどの大きさの飛行機械が数機、V字に並んで飛ぶ。

超高速の機体を見たあとなので、上空から侵入してくるその飛行速度はひどくゆっくりに見えた。

「飛竜隊はどうしたんだ…?! まさか全滅…?!」

そのまさかである。

パーパルディア皇国の皇都防衛隊には、空からの侵攻を防ぐ手段はもはや残っていなかったのだ。

皇国民は自らを破滅に導く行軍を、ただ見つめる他なかった。

皇都防衛隊 陸軍基地

陸軍基地では破壊された基地機能を少しでも復旧させるべく、基地内の兵や工作班、魔導班を総動員して作業に取り掛かっていた。

もはや彼らにやれることはないが、地上からの侵攻がないとも限らないので、勝手に帰ることもできないのだ。

「な……！ また来たぞ！」

基地にいる多くの者が空を見上げる。

今度の飛行機械は数が多く、大きさもさっきの物とは桁違いであった。

「ん……？ なんかに撒まいてるぞ？」

まるで白い粉のような……大きめの雪のような……。

それらは地面に、肩に、頭に積もり、基地を白く染める。

「なんだこれは……」

「雪……ではないな。なんか羽毛みたいにフワフワしてるぞ……？」

『改良型ゾンビzombie 蟻ant キノコfunggi 胞子』

日本の切り札的『非殺傷性生物兵器』。当初この胞子はテラフォーマーのみに効くと思われていたが、人間にも効果があることが判明。

非殺傷かつ敵をほぼ無条件で懐柔できる兵器として改良に改良を重ねられ、さらに広範囲に、さらに複雑な行動を命令できるようになった。

「あ……ッ?! あがッ!!」

「う……うぐッ！」

胞子に触れた、もしくは吸い込んだ者達が急に苦しみ出す。

彼らはバタバタと倒れていき、数分もすると基地内に立っている者はいなくなつた。

『敵無力化に成功、これより降下する』

元第一空挺団の被手術兵数人が基地に落下傘降下をする。その手にはバツと見、銃のような形の万能変身薬が握られていた。

『これより従属化作業を始める。人為変態はじめ』

『ゾンビ蟻キノコ』

本来は蟻に寄生しゾンビ化させる昆虫寄生菌。

これに寄生されると全身の筋肉が菌に感染し、行動を制御される。

脳に寄生される訳ではないので、寄生された生物は死ぬまで意識があると言われているが、それだと非人道的であるため寄生された人間は意識を失うように改良された。

突如、立ち上がるパーパルディア皇国皇都防衛隊。

彼らは首の背面から小さなキノコを生やしており、目は虚ろだった。

『こちらフンギ1、敵とのリンクを確認。敵の従属化完了』

『フンギ2、敵の従属化完了』

『こちらフンギ3、リントヴルムの従属に苦戦。応援を要請する』

『了解。フンギ4、5は3がいる位置に向かえ』

少し大きめのタッチパネルを手に、お互いに連絡を取り合う隊員達。

彼らは空中から投下された物資を敵に回収させ、その中に入っていた大量の首輪のようなものを敵に装着させた後、さらに投下された電波塔を建てさせた。

敵が装着した首輪はここからの電波を受信し、遠く離れた位置の敵にも命令を出すことを可能とする。

「情報統合処理端末と全個体のリンクを確認、リントヴルムの従属化も完了。こちらは首輪がはめられないので直接操作する」

『了解、作戦成功を祈る』

通信を切ると、上空で待機していた機体は全て撤収する。

「さあ…作戦を続けるぞ」

以後、戦争が終わるまで皇都防衛隊約20万人は日本の奴隷として動くこととなる。

その数は陸海空を合わせた現役の自衛隊員の総数に届きそうな程の人数であった。

31話：窮鼠リヴァイアサンを噛む

中央暦1640年8月13日――

皇都エストシラント　皇宮パラデイス城　大会議室

「それではこれより、緊急御前会議を始めたいと思います」

国家が危機的状況となったときのみ根回しも何もないうまま開催される御前会議。

議題はもちろん日本対策のことである。

しかし、国の重役達の顔は暗かった。

「皆さんぐ存知の通り…今日の午前、エストシラント海軍基地、皇都防衛隊陸軍基地が日本国の攻撃を受け…壊滅しました。まずは軍の現状から説明いたします…」

そんなこと聞きたくない！

しかし、聞く他ない。

参加者達の顔色はますます悪くなっていく。

「海軍の状況は…全滅です。日本襲来時、監察軍東洋艦隊42隻、西洋艦隊13隻も襲撃を受けていたらしく…通信が途絶しました。全滅もしくは鹵獲されたかと思われます」

「……………」

皇国の高い技術力で明るく照らされたはずの部屋が、ひどく暗く見える。

まるでお通夜のように冷えきった空気はただひたすらに静かだった。

「次に陸軍の状況です。海軍基地襲撃の少し後、皇国軍三大基地の1つ、皇都防衛隊が日本の飛行機械の襲撃を受け、それ以来連絡は途絶しています」

「……………」

彼らは思い出す。

あの立ち上る真っ黒な煙を。

皇都に響いた断末魔を。

「ですが、皇都防衛隊は生き残っていました。20万人も」

「……!!!」

司会進行役の言葉を聞き、国の重鎮達の顔に明るさが戻る。

「しかし奇妙なことに……彼らは基地から出てこないのです。現在基地まわりにはバリケードが築かれ、彼らはそこに立てこもっています。様子を見に行った兵士が警告射撃をされ、逃げて帰ってきたとの報告も」

「……………」

再び彼らの顔から明るさが消えた。

「……待て、立てこもったとはどういう事だ？」

皇帝ルディアスが質問する。

「分かりません。人間の心理に詳しい者に聞いたところ、人が落ち込んだ時に部屋に閉じ籠もるのと同じようなものではないかと言っていました」

「来た人を追い返すほど落ち込んでいるのか？」

「敵の攻撃で心に深い傷を負ったのだと思われます。時間が経てばあちらから報告をしに来るでしょう。今は我々がとやかく言うべきではないかと」

時間をかければ20万人もの戦力が戻ってくる。だから、今は放置しろ。

皇国の重鎮達とは言え、彼らも目先の利益ばかりに踊らされるような無能ばかりではなかった。

「まあ……時間が経てば元に戻るのだろうか？　なら今はそつとしておいてやろうではないか」

「そうだな。前線に立つのは彼らなのだから」

しかし、ルディアスの顔は暗いまま。

「待て、時間をかければ彼らが戻ってくるとは言え、皇都防衛に大きな穴が開いたのは事実だ。この問題は どうする？」

すると皇国軍最高司令官アルデが立ち上がった。

「この補填のために属領統治軍を撤収します。反乱が起こる可能性も無視できませんが、現地民を虐げたりしていない限り、その可能性は

低いでしょう」

皇国は大きくなり過ぎた。

現地民から搾取する

そのため列強の威を借りて甘い汁を吸う輩が多いことに、上層部は気付いていない。

ここにいる統治機構長のパーラス以外は。

「待つてくださいアルデ殿！ 属領統治軍を撤収する?! そんなことをすれば反乱が起こりかねません！ 他の陸軍基地から引つ張ってくる訳にはいかないのですか?!」

「無理です。他の基地も重要拠点ですから。それに属領はすでに牙を抜いていますから、そこまでの心配はないでしょう?」

「…ツッ…」

統治機構が正常に機能していれば、属領統治軍がいなくなったところで反乱など起きたりしない。

そう、現地民を虐げたりしていなければ!

司会進行役は続ける。

「話が途切れましたが、アルデ最高司令官はすでにその指令を出しております。なお皇帝陛下と財務局長には事前に連絡をし、ご了承いただいております。工業都市デユロの武器工場はすでにフル稼働であり、補給が途切れないように徹底させていくつもりだそうです」

(根回しはしてないはずなのに:よくもまあペラペラと代弁してくれる小僧だ。気の利く誰かが資料を渡しておいたのかな?)

アルデは1人で思考にふける。

すると第3外務局長のカイオスが手を挙げ、起立して話し始めた。

「現在の軍の状況から、日本が決して侮ってはならない存在であり、そして脅威である認識は皆様持たれたと思います。ここで問題となるのが、今回の戦争の終わらせ方、落としどころです」

「ツツ!!」

会議室に緊張が走る。

誰もが思っていて、もつとも口に出しにくい言葉をこの男は皇帝陛下の目の前で口にしたのだ!

「…アルデ殿にお尋ねする。残存兵力で日本に上陸を行い、皇帝陛下の指示である殲滅をなすことは可能か？」

するとアルデはニヤリと笑った。

「ああ、もちろんだとも。彼の国のことを調べた限り、殲滅は難しいが、たった今上陸作戦を練っているところだ」

「…!!!」

そんなことは聞いていない。

しかし、重鎮達の顔はみるみるうちに明るくなっていく。

「アルデ最高司令官、発表するなら声の通りやすい、こちらでどうぞ」「ありがとう。気が利くな」

「いえ」

アルデは司会進行役が立っていた壇上へと上がり、1つ咳払いをしてから堂々と極秘で進めていた作戦を説明した。

「まず、私が調べあげた限り、日本国の哨戒網は我が国の船では突破は不可能です。ですが先日、私はとある国から亡命してきた將軍に会いまして、彼が出来ることを聞いた瞬間、これだ！ と思ったのですよ」「…まさかそれって…」

「はい。元ロウリア王国東方討伐軍副将、アデムです」

会議が始まる少し前――

パーパルディア皇国 デュロ海軍基地跡地

「これで…日本に復讐ができる…!」

「アデム殿、嬉しそうですね」

嬉しそうに独り言ちるアデムに話しかけたのは、100門級戦列艦『ムーライト』艦長サクシード。

彼は船が日本に攻撃された時、偶然そこに乗り合わせていなかったため、生きていたのだ。

「いやあ、皇国に亡命した甲斐がありましたよ。サクシード艦長」

「よしてくれよアデム殿。私は元艦長だよ」

「そうでした…まあそれは良いとして、兵士達の到着はまだですか？」

「もうすぐ来るはずだよ。この作戦を成功させるために、皇国中の精鋭をかき集めたからね」

今作戦には皇国陸軍の中でも精鋭中の精鋭が集められている。

それほどまでに、皆の期待がこもった作戦なのだ。

「ところで…我々はその海魔の口の中に入るのだろうか？　飲み込まれたりしないのか？」

「いいえ…私が命じない限り大丈夫ですよ」

アデムが口を開けるように命じると、その海魔は巨大な口を開き、サクシードは中へと入る。

「どうです？　これなら50人くらいは収容できそうですよ？　私の

力が及べばこの海魔をもつと使役できるでしょうに…残念です」

「若干狭くないか？　せいぜい45だろう？」

「飲み込まれないって言ってんだろが！　私が命令しない限り喉奥でも大丈夫なんだよ！」

「そうか…。ところで、君は日本のどこに上陸するつもりなのだね？」

「そうですねえ…どうせなら近くて、軍港がある場所が良いでしょう。なので――」

――我々が上陸するのは京都府、舞鶴市です！」

自信満々に言い張るアルデ。

彼が第三国経由で手に入れた日本地図では、デュロからもっとも近く、かつ敵の軍港がある舞鶴市が攻撃するにはベストの場所であったのだ。

攻撃は最大の防御、皇国本土に日本の目が向いている際に日本の本土を攻撃しようという狙いだ。

「しかし、日本の哨戒網を突破できないというのにどうやって上陸するのだ？」

もつともな疑問である。

「はい。アダム殿は魔獣を使役できるらしく、従魔のうちの1匹である巨大な海魔に兵士を乗せ、日本近海まで潜航して近付き、上陸すると言っていました」

「おお……！」

カイオスは焦っていた。もしその作戦が成功してしまえば、日本との講和がさらに困難になるからだ。

しかし彼以外の参加者は全員がその作戦を支持しており、反対することもできない空気が会場を包む。

(なんてことだ……！ 何としても阻止せねば！)

こうして会議場に明るさが戻り、日本対策会議はしばらく続いた。

32話：デユロ工場地帯爆撃作戦

パーパルディア皇国東部 工業都市デユロ

パーパルディア皇国の工業力の要とも言える巨大工業都市デユロ。沿岸部には工場が密集しており、その西側には工業区画を守るように皇国三大基地の1つ、デユロ防衛隊陸軍基地が構えている。

この基地にはワイバーンオーバーロードも多数配備されていた。

その皇都防衛隊にも引けを取らない戦力を束ねるのが基地司令のストーリームであった。

「これより定例幹部会を始める」

基地内の司令部棟の会議室では装備品、人事、様々な運用状況と今後についての議論がされていた。

「諸君も知っての通り先週6日早朝、エストシラント海軍基地と皇都防衛隊が日本軍の襲撃を受けた。海軍は監察軍の艦隊も含めて全滅。皇都防衛隊も心に深い傷を負い、戦力にならないと聞いている」

会議室にいる者達は寝耳に水とでも言わんばかりにざわめき始める。

「敵は本当に日本なのか?! そんなことが出来るのは、ムーカミリシアルくらいだろう…?」

「まさか本土上陸を許したのか?! 皇都に地上軍が上陸してきたのなら、ここを警戒している場合ではないぞ!」

しかし現実是非情だ。

「敵は日本国で間違いない。現在本土への上陸は確認されていないが、敵は飛行機械による地上攻撃のみで皇都防衛隊と海軍本部を壊滅させた」と報告が入っている」

彼は一呼吸を置いてから、続けた。

「敵の航空戦力は……強いぞ」

確かに報告書の情報が全て本当だとしたら、強いなんてレベルの話ではない。

曰く、日本国の飛行機械はワイバーンの数十倍の速さで飛ぶとか。

曰く、飛行機械の攻撃は長射程かつ不可視であり、何の前触れもなくワイバーンだけが死ぬとか。

「しかし不思議なのは、彼の国は非常に強力な航空戦力と、そこから投下される高威力爆弾を保有しているのにも関わらず、街やパラディス城への攻撃をいつさいしなかったことです」

「確かに皇国と日本が逆の立場だったら、街も城も全て破壊し尽くすだろうな」

それは間違いない。

「日本国はフェンで国民が処刑されて激怒したらしいぞ。それから察するに、日本は強い力を持っているが、無駄に命を奪うのを忌避しているのではなからうか？」

「なるほど、それなら基地だけを攻撃した説明がつく」

実際、彼らのこの推理はほぼ完璧に近かった。

日本は敵国であろうと民間から死者を出すことを良しとしないため、無差別爆撃などしないのだ。

「そう考えると…日本の狙いは我が国の戦争継続能力を壊滅させ、『否が応でも講話か降伏をさせる』ではないか？」

「戦争継続能力か…となると次の目標は皇国の心臓部、デュロで間違いないな」

参加者達は息を飲み込んだ。

あの報告書に書かれていた、幻想じみた飛行機械が来るのだ！ここ、デュロに！

「となると…ミ帝から輸入した『あれ』も実戦投入しなければならなさそうですね」

「そうだな。あれは研究用だが工場が破壊されたら元も子もな——」

——ウウウウウ——!!!

「——ツ!!!」

突如、基地に非常事態を知らせる警戒音が鳴り響いた。

「会議中失礼します！ 沖を哨戒中の竜騎士が撃墜されました！ 魔導レーダーに反応はないため、例の飛行機械だと思われまます！」

「早いな、もう来てしまったか…」

魔信器を掴み取ってからの、ストリームの判断は早かった。
「デュロ陸軍基地全域、防御態勢に移行せよ！ 対空戦闘用意！ こ
こが落ちたら工場を守る者がいなくなるぞ！ 総員一層奮起せよ！」
基地内で兵士達が武装を始め、備え付けの対空魔導砲が空を向く。
牽引式魔導砲も引っ張りだされ、飛竜隊は続々と離陸していった。

工業都市デュロ 上空

緊急出撃の命を受けた第11竜騎士団第1飛行隊隊長はジンスは
絶望していた。皇国が列強になってからは、本土で戦闘など起こらな
かったからである。

彼らは軍の花形である飛竜隊なのだが、実戦経験はなく記念すべき
初陣が列強相手に連勝を続けているような化け物だ。

「ひっ……！」

彼は前方から超高速で向かってくる飛行物体を発見した。

それが敵からの攻撃であると本能的に理解した彼は、部下の隊員達
に対して叫ぶ。

「避けるおおお——！！！」

指示を出しつつ、自分も急降下を開始する。

次の瞬間、例の飛行物体が目の前を過ぎった。

「ギッ!!」

「グエツ!!」

ジンスは自分と併進して飛行していた隊員と同様に、全身の水分を
瞬時に沸騰させられ、即死した。

『空対空 電磁パルス弾搭載ミサイル』

対無人戦闘機、テラフォーマーを念頭に置いて開発された空対空ミ
サイル。

電磁パルスを発生させる装置が搭載されており、それを起動させな

がら飛翔するため、1度に複数の目標を撃墜することが可能。最後は無力化されていない目標を探し、普通のミサイルと同じように突っ込んで爆発する。

「隊長がやられた!!」

「に…逃げろ!!」

しかし生き残った者達も回避をする間もなく愛騎ごと全身を沸騰させられた。

「ああッ!!」

「ゲッ!!」

とんでもない挙動で飛び回る「あれ」に近付くと死ぬ。

それを本能的に理解したワイバーン達は騎士の命令を無視してバラバラに逃げ始める。

しかしA Iは彼らを逃がさない。

心のない死神

「追ってくる…!! ちくしよおおお!!!」

不気味な炸裂音が町にこだまし、第11竜騎士団第1飛行隊は全滅。

後から到着した飛竜隊も全てが似たような兵器に撃墜され、デュロ防衛隊は空戦能力を完全に喪失した。

「あれは…魔帝の兵器か…?」

ストリームは地上で震えていた。

ワイバーン達をボタボタと落としていったそれは、まるで御伽噺おとぎばなしに出てくる『誘導魔光弾』のようだったのだ。

「司令、まだ本格的な攻撃があるでしょう。本番はこれからです」

若手幹部が発言したそれをストリームも理解していた。

敵はまだ制空戦闘を行っただけ。いや、あれは戦闘ではなく、一方的な虐殺だった。

しかし、本当の虐殺はこれから起こるのだ。

『東の空から敵機襲来!! 日の丸を確認しました! 日本軍です!』

東の空から来ている矢じりのような形状の飛行機械。

それは猛烈な速度でデュロ上空を飛翔し、咆哮のような音を響かせる。

「いかん! あれは先遣隊だ! これから本隊が来るぞ! 対空魔光砲の使用を許可する! 何としても敵の攻撃を阻止しろ!」

対空魔光砲とは、誰もが認める世界最強の国家、神聖ミリシアル帝国で採用されている対空兵器である。

皇国はミ帝の技術に少しでも追い付くため、そして仮想敵国でもある彼の国の兵器の性能を探るために秘密裏にこれを輸入し、研究していたのだ。

すでに本隊と思しき鉄竜の群れが東の空に現れており、悩んでいられる時間はない。

検証用でたったの1門しかないが、技術者達はしぶしぶ対空魔光砲を倉庫から引っ張り出した。

しかし…

「おい、魔力充填はまだ終わらないのか?」

人間が5人くらい楽に入りそうな鉄の筐体6つと、モニターとして並ぶ魔導圧計、水晶版を眺め、開発主任は忌々しそうに呟いた。

「神聖ミリシアル帝国の技師に聞いたところ、『魔力充填はすぐに終わる』と言っていました…我が国の魔導エンジンの出力と制御技術がまだまだ未熟ということでしょう」

「こんな燃費の悪いものを当たり前に運用できる帝国は、さすが魔導力学で世界最先端を走るだけのことがありますね」

「そんな悠長なことを言っている場合か! 早くあの鉄竜の群れを落とさないと、二度とこいつの研究が出来ないんだぞ!!」

日本の爆撃機はすでに目視でもハッキリと見える位置まで接近しており、皇国の技師達は焦る。

「エネルギー充填…完了しました! 呪文自動詠唱開始します!」

「詠唱完了! 連射モード切り替え完了! 対空魔光砲、発射準備完了です!」

「撃て！ 撃ちまくれ!!」

空に向かって突き出た筒から光の弾が超高速で、連続して上空に発射される。

それは地上から空へ向かって描かれた光の線のようなものであった。

同時刻――

日本国 とある自衛隊基地

「爆撃機は？」

「順調に飛んでいます」

ゲームのコントローラーを手に持った隊員達が各々の機体を操作する。しかし、これはゲームではない。

一見平和な光景だが、画面を隔てた向こう側は本物の戦場だ。

「まさかこんな旧式の哨戒機を無人に改造した挙句、爆装するなんて……さすがです狂ってまね」

「魔改造は日本の十八番おはこだからな」

『BQP―5』

異世界諸国の技術水準が日本に対し大幅に劣っていることが判明し、技術格差による最新兵器の非効率化が問題視され、生み出された兵器。

パ皇戦前に防衛省は「航空機の多目的運用に関する構想」を立案していた。その一環として倉庫でホコリを被っていた「P―5C」の爆装案が進められ、同時に無人化もされたのだ。

愛称「Bパーベキューパーテイー Q P」

「爆撃なんてAIに任せれば良いでしょうに……なんでわざわざ人間にやらせるんですか？」

「アメリカならまだしも、日本のAIは爆撃なんかしたことがないか

らだよ。誤って民間人に被害が出たらシャレにならない」

「まあ…」

「ほら、そろそろ爆撃地点だぞ。集中しろ」

「はい」

ズラリと並んだ、彼と同じように画面にかじりつく隊員達。

彼らの胸中は穏やかではない…という訳でもなかった。

(これから俺は人を殺すのか…。ちつともそんな感じがしないな…)

爆撃機の左後方に位置する『有人戦闘機』を操る樋口3等空佐は地上を警戒していた。

眼下に広がる工場地区。その一角でフラッシュを確認する。

「――!! 地上に対空兵器を確認! 各機、警戒!」

彼が無線機に叫ぶと同時に、前方を飛行していた『BQP-5』の翼を光弾がかすめ、いくつかはエンジンに着弾し、火を噴き上げた。

「あーあ。操縦してたやつは怒られるんだろうな」

そんな無駄口を叩きつつ、彼は敵対空兵器を攻撃するために機体を下に向ける。

曳光弾を交えて発射された猛烈な鋼鉄の嵐に見舞われた地上は穴だらけとなり、粉々になったミリシアル製の対空兵器は爆発を起こした。

『対空魔光砲、沈黙!』

『敵飛行機械、間もなく基地上空へ到達します!』

悲鳴のような報告が次々に司令室に入る。

ストリームは真っ青な顔で窓から空を見上げた。

「あッ…!」

すでに基地上空へ到達した敵騎は黒い何かを投下し始めていた。

「総員退避！ 退避——!!!」

しかし次の瞬間、司令室は爆弾の直撃を受けて消滅し、ストリームもそれに巻き込まれて死亡する。

頭を失った軍勢は命令が届かないうちに右往左往し始め、こちらにも爆撃を受けて吹き飛ばす。

その日、デユロの工場とデユロ防衛隊の大規模陸軍基地はエストシラント海軍基地と同様に壊滅した。

皇国の陸軍の約3分の1が消え去った瞬間であった。

33話：鳥取砂丘非正規上陸阻止戦

中央暦1640年8月20日――

海上保安庁 無人哨戒機司令室

「…なんだこれは」

日本の周辺海、空域には何万、何十万、何百万もの無人哨戒機による哨戒網が張り巡らされている。

その紹介網の濃さは世界でも桁違いに高く、旧世界では「日本の領海に入ったなら、いつ、どこにしよう」と監視される」とさえ言われていたほどだ。

サイバー攻撃や物理的攻撃でドローンの活動を停止させることが出来ればこの紹介網も突破可能だが、裏を返せば、それが出来ない限り海上経由の密輸や密入国は不可能。

しかしパールディア皇国はとある手段を用いて、その嚴重な警戒網を突破していた。

「どうした？ パ皇の帆船か？」

「いいえ、無人潜水哨戒艦のソナーに巨大な…艦影？ 魚影？ が写ったようで…」

「新世界生物か？ それとも報告にあつた舞鶴攻撃部隊か？ でも敵の兵器に潜水艦はないしな…」

「皇国の技術でこんな大きい潜水艦を建造出来るわけがないじゃないですか。シロナガスクジラより大きいんですよ？」

「…とりあえず監視はしておけ。用心するに越したことはない」

同時刻――

鳥取砂丘沖

「…さあ皆さん、もう少しで目的地へと到着しますよ」

巨大な海魔の口の中で、アデムは不気味な笑顔を浮かべた。

「もうそろそろか…」

「やっとか…腕が鳴るぜ…!」

パーパルディア皇国の日本本土攻撃部隊の45人は武器を研ぐ。

当初アデムが言っていた乗組人数50人よりも5人ほど少ないのは、食料やその他もろもろも載せる必要があったからである。

アデムにとって兵士の命や健康など知ったこっちゃなかったので、戦士の数を減らして食料やその他の物資を載せることに彼は猛反対していたのだが、蛮国からの亡命者の分際で凶に乗るなという兵士達の声に気圧けおされたのだ。

「さあ…そろそろですよお…!」

ズズズと海魔が地面を擦る音が聞こえる。

水かさが減ってきた証拠だ。

「まだ…まだだ…いまだ! 海魔よ、口を開け!」

——ガパア…

「さあ! 殺戮の宴を始めようではないか!」

「ヒヤツハア——!!!」

魔導銃の先端に短刀をつけ、勢いよく走る兵士達。

彼らはバチャバチャと海水を散らし、砂浜へと駆ける。

目の前には敵の軍港が…

——あるはずだった!

「……………どこだ? ここは…」

彼らの足は自然と止まった。

目の前には砂漠が広がるばかりだったのである。

「この砂丘、ミルキー王国のバムナ砂漠みたいだな…」

「俺達は東に向かっていたはずだろ? それなのに第1文明圏まで来てしまったのか? 世界周航かよ」

「世界周航なら先に第2文明圏に着くだろうよ…」

「いや、第2文明圏より先にグラ・バルカス帝国だろ」

彼らは困惑するばかりであった。

皇国軍をあつさり壊滅させられる国家なら、それなりに都会が広がっているのだろうと想像していたのだ。

しかし目の前は砂漠、砂漠、砂漠！

現地人らしき人間が数人逃げているだけで、皇都にあるような立派な建築物はおろか、建物すらない！

「…いや、ここは日本で合っているようですが、慣れない海域に海魔が迷ったのでしよう」

六分儀のような物を手にアデムは舌打ちをする。

久方ぶりに敵国の民を蹂躪できると彼は期待していたのだ。

「まあまあ、皇国軍を壊滅させたとは言え、文明圏外国には変わりません。首都である東京はもう少し都会かもしれないですよ？」

「サクシード艦長、地図を見る限り私の海魔はこの鳥取砂丘という場所に上陸してしまったようです。舞鶴は東へ100kmほど進んだ所なのですが…」

「ですが？」

「私の目的は日本国の民を蹂躪することです。兵達に今しがた逃げた蛮族を捕えるように命じてください」

何ともまあ残虐で自己中な奴だとサクシードは思う。

しかし我々をここへ連れて来てくれたのだから、嫌な奴であろうとその恩に報いらぬ訳にはいかない。

「わかった、ところであそこに突っ立っている老人はどうする？」

「あれはいい声で囀せいなすってくれなさそうだから却下だ。殺せ」

「…わかった」

サクシードはアデムに聞こえないように兵達に囁いた。

「…なるべく苦しませずに殺してやれよ」

アデム達が上陸する数分前――

鳥取砂丘

「じい様、あれは何かしら…?」

とある老婦人が夫に問う。

彼女が指さす先には、沖合。遠浅の海に巨大なナマズのような生き物が出現していた。

しばらくするとそのナマズは砂浜海岸へと乗り上げ、口を開いた。

その中から現れたのは、誰の目に見ても時代錯誤な武装集団。

「まさか…：パーパルディア王国が上陸してきたのか!」

「逃げろ——!」

周りの観光客達は蜘蛛の子を散らすように逃げる。

しかし、彼女の夫は逃げなかった。

鮎積たこづみ 朝一郎あさいちろう (84歳)
兵庫県生まれ大阪育ち。

十数年前に骨粗しょう症を患い、翌年に脊椎椎体骨折を発症。立っていることさえ叶わない体となってしまい、治療目的で『M・O・手術』を受けること決意。

手術は無事に成功し、歩くどころか生身で100m走を11秒台で走れるまでに回復。最近の趣味は夫婦旅行。

「婆さんや、先に逃げとくれ。ワシらが逃げても蛮族に捕まって殺されるだけじゃ」

「そんな…：貴方はどうするのですか!」

「ワシは手術を受けている…：多少は時間稼ぎになるはずじゃて」

先の火星生物テラフォーマーによる日本本土侵略と、『バグズ手術』『M・O・手術』の普及によつて日本の法律には多少の変更点を加えられていた。

そのうちの1つに、『手術を受けた人間による正当防衛戦闘に関する法律』がある。

その概要は、予期せぬ火星生物テラフォーマーもしくは、主に手術を受けた人間で構成される暴徒集団の出現時、その場に居合わせた「手術を受けた一

一般人」による戦闘活動を正当防衛として合法化する法律であった。

これが施行された理由は様々だが、1つは火星生物テラフォーマーはその場に居合わせた人間を躊躇なく殺害するため、犠牲者を少なくする目的で自衛隊が到着するまでの間の時間稼ぎが必要だから。

2つ目は先の火星生物による本土侵略時、日本が狙われた理由として「武装した人間」の少なさが考えられたからである。

そしてこの法律が施行されるにあたって、手術を受け、かつ本人が望む場合にのみ、変身薬が1人2本支給されることとなった。(消費分の追加は要相談)

彼もその例外ではない。

「人為変態……!」

『水蛭ミスダコ』

世界最大種、最長寿を誇る海の死神。

全身が筋肉であるためタコでありながらサメをも殺す力を有し、烏のくちばしのように鋭い口で甲殻類の殻もいとも簡単に壊すことが可能。

その腕と吸盤が生み出す怪力に人間のダイバーが死亡した例もある。

背中から赤茶色の触手が4本生え、砂浜に異形の者が出現する。

パーパルディア皇国の兵には、日本の『魔人』を見て本国に帰れた者はいない。

「あれが日本国の『魔人』か!」

「まずい! 総員戦闘配置!!」

精鋭兵らは機敏に動き、すぐさま陣形を組む。

皇国の誇る魔導銃が噂の魔人にどれほど効くかは分からないが、彼らは冷静であった。

目の前の老人が強いようには見えなかったからである。

「構え——! 狙えッ!! ……撃て——」

——ブワア!!

突如、皇国兵の視界が闇に覆われる。

「な…なんだッ?!」

「魔帝が復活したのか?!」

「怖気付くな! 奴が黒い霧のようなものを吹き出したただけだ!」

サクシードは兵達が落ち着きを取り戻すのを確認してから、号令を出した。

「掠りでもしたら上出来だ! 黒霧に向かって斉射!!」

パパパツ! パパツパパパ!

魔導銃が火を噴き、弾丸が闇へと吸い込まれる。

43人による一斉射撃。敵が魔人とは言え、これの直撃を受けて生きていくはずがない。

「どうだ…?!」

手応えは十分。

「や…やったか?!」

黒い霧が晴れ、徐々に視界が拓く。

そこに敵の姿はなく、元通りの景色が広がるだけであった。

「やった…のか?」

「な訳があるか! 全周警戒!」

彼らはお互いの背中を守るように円陣を組む。

その中央ではサクシードとアテムが剣を抜いて背中を合わせ、前後を警戒する。

——シユルルル!!!!

突然、砂中から触手が伸び、1人の皇国兵の足を掴んだ。

「…え」

彼はそのまま隊列から引きずり出され、空へと投げ飛ばされる。

「ギヤアアアアアッ?!?!」

「——なッ!?!」

悲劇はそれだけでは終わらない。

追加の触手が3本、隊列を囲うように生え、皇国兵を次々と掴んで

は引きずり出し、投げ飛ばす。

「うわああああッ!!!」

「やめろおおおお!!!」

おぞましい叫び声。

しかし、精鋭達の士気はそれごとくでは下がらない。

「撃てッ!! 撃ちまくれえッ!!!」

サクシードの号令を合図に一斉射撃が行われる。

細いへの命中は期待出来なかったが、運良く1発が目標ぶち抜き、切断された触手は麝香ジャコウのような臭いを放ちながらビチビチと蠢うごめく。

「…あッー!」

——ズドオン!!

先程の一撃が痛かったのか、3分の1程が切断された触手は地面を打ち付け、そのまま暴れ回る。

周りにいた兵士達は雑草のように薙ぎ払われ、砂が飛び散る。

「くそお……いい加減にしろッ!!!」

サクシードは暴れ回る触手に剣を突き刺し、固定することに成功する。

「今だ! 刺しまくれ!!」

彼の勇気ある行動に発破をかけられ、短刀を持った兵士達がこれでもかと触手を攻撃する。

すると、不思議な現象が起きた。

「痛ッ!! 痛たたたた!!」

戦っていると思いき老人の声がアデムのいる場所から聞こえ、全員がバツと彼の方へと顔を向ける。

「え…?」

「あれ…?」

しかし敵の姿はない。

老人は『ミスダコ』の能力の1つである、肌の色だけでなく、体の

質感も砂っぽく変え、アデムの足元に隠れていたのだ。

それを皇国兵が知る由はない。

「アデム殿…今のは貴方が…？」

「そんな訳ないでしょう？ 貴方はバカなのですかあ？」

いちいち腹が立つ嫌な野郎だが、サクシード達はそれに反応しない。

「おい！ もう一度攻撃してみろ！」

「はい！」

皇国兵の1人が触手に短刀を突き刺す。

するとアデムの足元の砂が僅かに盛り上がったのを、彼らは見逃さなかった。

「砂中だ！ 砂の中に敵がいるぞ！」

次の瞬間、全ての触手が引つ込んだかと思うと、足元の砂が飛び散り、老人が姿を現した。

先程は遠目であったため顔がよく見えなかったが、戦っていた相手は皇国では滅多に見えないほどの高齢であるらしく、サクシードは度肝を抜かれる。

「なかなかやりよるな小童ども！ だが日本は蹂躪させぬぞ！」
背中から生えている触手は3本まで減っていた。

これも『ミズダコ』の能力のうちの1つの、自切である。

だがたった1本で人間を投げ飛ばす怪力を持っているため、脅威であることには変わらない。

——バチィ!!!

空気を叩くような強烈な音とともに、鞭を巨大化したような攻撃が行われる。

サクシードとアデムの体は大きく吹き飛ばされ、鳥取砂丘の砂に埋もれる。

「艦長とアデムがやられた!!」

「臆するな！ 皇国兵の意地を見せてやれ!!」

ここまで近付かれては銃は十分に効果を發揮できない。

そう判断した彼らは近接武器だけで1人の老人に立ち向かう。

その光景はもはや、戦いではなかった。

一方的に暴力を振るわれ、理不尽に弾かれる皇国兵。片や老人の方は、その場から1本も動いておらず、背中から生える触手を動かしているだけ。

これが「ただの一般人」であると、その場にいる誰が信じられただろうか。

1分も経たないうちに、鳥取砂丘から立っている皇国兵の姿は消えた。

…2人を除いて。

——バアン!!

「むおっ?!」

乾いた銃声とともに、老人の腕が千切れる。

銃声の主はサクシードであった。

「…どうだ! 皇国の誇る片手魔導銃の威力は!! いくら『魔人』とは言え、腕が吹き飛ばされたら失血死するだろう?!」

「いんや?」

「…えっ?」

見ると、老人の千切れた腕の断面からは、触手のようなモノがウジウジと生えていた。

これも『ミズダコ』の能力の1つ、千切れた腕の再生である。

最後の力を振り絞って立ち上がったサクシードは、現実に関心を打ちひしがれ、気絶し、砂上に倒れ伏した。

「やれやれ…呆気なかったのう…」

変態が解け、彼の姿は元へと戻る。

しばらくすると警察の機動隊や陸上自衛隊が駆け付け、皇国兵達は拘束された。

パーパルディア皇国日本本土特別攻撃隊

拘束：44名

重傷：6名（死者がいなかったのは、下が柔らかい砂地であったか

らだと思われる)

逃亡：1名(報告にあつた海魔と呼ばれる新世界生物に乗つて逃走したと思われる。後に海魔は魚雷で殺処分されたが、人間の遺体は見つからず)

後日、鮎積たこづみの元にマスゴコミが大勢押し寄せ、彼は一躍有名人となつた。

バラエティなどのテレビ番組にも多数出演し、「救国の英雄」として名を馳せた彼だったが、しばらくすると表から姿を消し、手に入った大金で妻と旅行に明け暮れたそう。

34話：四面日本歌

1640年8月22日――

パーパルディア皇国　皇都エストシラント　皇宮パラデイス
城　　大会議室

このところ毎日開かれる緊急御前会議の進行に、カイオスは焦りを感じていた。

会議室で雁首を並べているだけの馬鹿どもは皇軍が被った大損害と日本国の異常な強さに目を瞑り、彼の国に対して徹底抗戦する姿勢を示している。

この馬鹿どもも皇国のトップだけあつて無能ばかりではなく、相手がそこそこ強ければ最低でも講和を考えるくらいの事は考えるだろう。

しかし彼らは第3文明圏最強のプライドに傷を付けられ、すでに正気ではないのだ。

「――であり、デュロの兵器生産規模を拡大し、さらに属領からの徴兵も行い、軍の人員を確保します。そして今までの皇国主力軍の3倍の量の大船団を作り出し、日本を火の海にする方向性で行きたいと思えます」

アルデの軍再編計画も、日本がそれまで何もしてこない事を前提としており、机上の空論に過ぎない。

彼らが有効な手段が何も無いことに気付き、早々に講和を考えていれば皇国もここまでこつ酷くやられる事はなかっただろう。

（「会議は踊る、されど進まず」だったか…。革命を起こすには好都合だが…）」

「会議中失礼します！　デュロが日本軍の攻撃を受けて壊滅しました！」

ノックもせずに大会議室に入ってきた軍部の士官。

彼の口から発せられた言葉に、会議室がザワつく。

「な……何……だど？　詳細を申せ!!」

「はっ！ 民家に被害はありませんが、工場及び、デユロ西側の陸軍基地も壊滅したとの報告が入っております！」

彼は続ける。

「そして日本国本土特別攻撃隊も上陸には成功したものの一般の老人1人を相手に敗北し、アテム以外は全員拘束されたとのことですよ！」
「なんだって?!」

皇都防衛隊を無力化させたあとに、継戦能力を的確に破壊する判断力。そして奇襲すら成功しそうにない、徹底した防衛力。

「まさか日本国は一般人ですらも皇国兵数十人よりも強いと言うのか…!?!」

全員の頭に伝承にある魔王軍の姿が浮かぶ。

その報告から想像するに、日本国本土は『人外魔境』なのだろう。

「かつ…:会議中失礼します！」

「ええい！ 今度はなんだ!!」

今度入ってきたのは軍部ではなく、統治機構の幹部だった。

「は…:はっ！ 全ての属領で反乱が起きました！ 属領反乱軍はアルタラス王国、フェン王国、トーパー王国、マール王国、リーム王国、アワン王国、シオス王国、マオ王国を含めた『80ヶ国連合』を名乗り、我が皇国に宣戦布告してきています！」

統治機構長のパーラス、軍部最高司令官アルデはそこまで聞いて、気を失って倒れた。

第3文明圏のほぼ全ての国VSパーパルディア皇国

普段の皇国ならば、多少の被害を被るが、問題なく対処できる状況である。

しかし属領はともかく、属領以外の国々は日本国が鹵獲した皇国の軍船でかなり強化されている。アルタラス王国に至っては最新鋭の竜母を数十騎のワイバーンオーバーロードごと獲得しており、海軍がない今の皇国では制海権の獲得は不可能に近い。

陸上では量、質ともに何とか勝っているが、国の心臓部であるデユロが機能しなくなったとなれば、補給は絶望的だ。

「この連合はアルタラス王国のルミエス女王が魔信で呼びかけたもの

であります！ しかもロデニウス大陸各国も食料や資源の輸出を停止いたしました！ 第3文明圏のほぼ全てが我々の敵であります！」
パーパルディア皇国は「恐怖」で他国を支配し、富を吸い上げ続けてきた。

しかし恐怖を与えるための、象徴たる「力」が日本国によって打ち砕かれてしまった。

恐怖支配の脆弱性が最悪四面楚歌の形となって返ってくる。

「お…おのれえええええ!!!」

ルディアス皇帝は怒りの言葉を吐き出すことしか出来ず、もはやまともな判断が出来るような状況ではない。

「もういい！ 遅かれ早かれ第3文明圏の統一はするつもりだったのだ！ これを機に我々は世界最強へと成り上がるぞ！」

皇国のトップが出した結論は日本を含む全ての国の殲滅だった。

翌日――

パーパルディア皇国

臨時皇都防衛隊

仮設基地

皇都防衛隊陸軍が日本の攻撃によって使い物にならなくなってしまったため、各属領から引き上げてきた属領統治軍は皇都防衛隊基地の隣に仮の基地を建てている。

しかし彼らは属領の治安維持の命を受け、撤収する準備をしていた。

「はあ…せっかく皇都に来れたのに、また辺境防衛かよ」

「噂では上層部は相手の戦力をろくに調べもせずには戦いを挑んだらしいぞ。それでボッコボコにやられたのに、まだ徹底抗戦の意志を見せているらしい」

一般兵の間ではそのような噂が流れていた。

「ところでよ、お前は第3外務局長のカイオスを知っているか？」

「まあ、名前だけなら」

「そのカイオスが無能な上層部に取って代わろうとしているそうだが。すでに十兵長も彼の傘下に加わっている。お前も祖国のために立ち上がらないか？」

「え？」

すでに軍内部では保身やプライドのために徹底抗戦を示した上層部への不満が募っており、一部では決起を企てているカイオスの傘下に入る者が増えていた。

「カイオスは日本との接点を持っていて、皇国が形だけでも残るよう交渉しているそうだが。言っておくが革命派は俺と十兵長だけじゃない。あの壁の向こうの20万人もそうだ」

「マジかよ……。そりゃあ選択肢はあつてないようなもんだな」

「で、どうする？」

「もちろん俺も加わる。これ以上戦争が続いたら、どうなるかわからないからな」

決起の日まで、あと少し。

日本国 東京拘置所

レクマイアは日本の新聞を読み続けてきたことで、ある程度は日本語が読めるようになっていた。

その日の新聞はパーパルディア皇国の特集記事が中面見開きで掲載されており、各国政府が発表した最新の内容を交えて記載されていた。

「大変だ……」

新聞を読み進めるレクマイアの顔は次第にけわしくなり、汗が吹き出す。

「どうしたんだレクマイア？」

彼の隣には『ニシノミヤコ非戦闘員退避作戦』で捕虜となった戦列艦『ロプーレ』の乗組員のライターの姿があった。

「ふー……ふー……ライタール、心して聞けよ……」

「おう」

「日本はまずアルタラス島を攻撃し、進駐していた皇国軍を全滅させ、アルタラス王国を独立させたいらしい」

「おう」

「そしてアルタラス王国を落とすとした日本は在アルタラスのムーの空港を基地に改修し、ここを使用して皇国本土へ攻撃を行ったようだ」

「おう」

「そして…皇国海軍も全滅。1隻も残っていないらしい」

「まあ予想通りだよな。『ロプーレ』も竜母艦隊も無傷で引き渡されたんだから」

「ああ、海軍本部も攻撃を受けて壊滅したらしい。そして皇都防衛隊基地、デュロ工場地帯も飛行機械の爆撃で瓦礫の山だ」

「げっ…」

「そして…」

「まだあるのかよ」

ライタールはしかめっ面をしてみせた。

「皇国の属領全てと、第3文明圏内、圏外国の国々が『80ヶ国連合』を組んで宣戦布告を行ったらしい。おまけにロデニウス大陸の各国も食料や物資の輸出を停止したとよ」

「詰んだな」

「お前もそう思うか？」

「当たり前だろ。ただでさえ日本国にボッコボコにされてるのに、それに第3文明圏のほぼ全ての国が足されたら、もう勝ち目はねえよ」

2人はここから祖国の未来を憂うことしか出来ない。

それが何よりも悲しく、悔しかった。

35話：皇都制圧作戦

1640年9月1日――

パーパルディア皇国　皇都エストシラント　カイオス邸

「よし…準備は整った」

朝日が差し込む邸宅の中、カイオスは窓から外を眺めていた。

今日はパーパルディア皇国民にとって歴史的な日となるだろう。

皇国軍の中に賛同者は大勢いる。

例えば軍部が本気で抵抗をしに来ても、日本の約20万人の操り人形が相手だ。

むしろ革命後に彼らが抵抗をしないかが心配だが、今は祖国を亡国の道から救うのが先である。

彼は大きく息を吸い、通信用魔法具トランシーバーで各所に指令を出す。

「全軍、行動開始ッ!!」

皇都エストシラント　皇宮パラデイス城　大会議室

「軍はいったい何をしていたんだあ!!」

「外務局の責任だろ！ あんな異常な国に戦争ふっかけるからだ！」

怒号の飛び交う会議室。

各行政担当大臣が集まり、彼らは皇国始まって以来未曾有の危機の前に紛糾していた。

海軍は全滅し、皇国の艦船で強化された敵が沿岸部の都市を蹂躪して回っている。

おまけに陸軍はデユロ防衛隊が工場もろとも壊滅し、皇都防衛隊は深刻な心的外傷を負い、無力化。

残った北方の陸軍は『80ヶ国連合』の猛烈な攻撃に晒され、日本の相手どころじゃない。

すでに穀倉地帯は敵の占領地となっており、食料自給率の大幅な下落によって数ヶ月以内に大量の餓死者が出る恐れすらある。

完全に八方塞がり、お先真っ暗、四面楚歌、孤立無援である。

そして…

「会議中失礼します！ 皇都防衛隊約20万人が寝返りました！」

「……………」

会議室に入ってきた幹部の顔は真っ青であり、会議参加者も同様であった。

「…跳ね橋を上げろ！ 籠城戦だ！ 北方の陸軍が来るまで耐えるんだ！」

アルデが命令を出す。

しばらくすると深い堀に架かる跳ね橋が上げられた。近衛隊は武装し、来たる20万の敵に徹底抗戦の意を示す。

そして……

パアン！ パパアン！

「な、なんだ?!」

城内に響いた発砲音。

それは近衛隊内部に裏切り者がいたことを示す合図であると共に、その排除に成功したことを知らせる報告でもあった。

「近衛隊の中にもネズミが紛れ込んでいたようです。前々から対策をしておいて正解でした」

「アルデ…どうしたのだ？」

「ああ皇帝陛下、御安心を。城内に敵はおりません。たった今、全て排除したもので」

アルデもこのままでは皇国がどんな末路を辿るのかは知っていた。

こんな状況で、自分が違う立場だったら、間違いなく革命を起こすだろう。そして革命が成功したら、旧政権の人間は処刑されるに違いない。

そう考えた彼は、国の命よりも保身を選んだのだ。

『アルデ最高司令官、ネズミは排除いたしました』

魔信器から近衛隊の者と思しき声が流れる。

「ご苦労、次は迫り来る20万のネズミを見事撃退してみせよ。成功した暁には、末代まで楽に生活できるようにしよう」

もはや彼は正気ではない。

しかし、その優秀な頭脳はいつも以上に冴えていた。

「さあ…かかってこい！ 日本軍！」

皇宮パラデイス城 城下町

「おい…！ なんだあれは…！」

「皇都防衛隊か?!」

住民達が指をさす方向には、規則正しい動きで行進する兵の姿があった。

その姿はまるで人形。異常に規則正しく揃った足並みは、本当に寸分たりとも狂っていない。

「これが…連合革命軍か…」

彼らが掲げるのは現在の国旗の雰囲気はどこか残しつつも、革命軍の指導者カイオスが作り出した新たな国旗。そしてそれに交じるは、白地に日の丸の日本国旗。

皇都に住む全員の恐怖の対象である。

「な…リントヴルムまで…！」

皇国軍が誇る最強の生物兵器リントヴルム。

それすらも革命軍の軍門に降ったらしく、背中から革命軍と日本国の旗を垂らしていた。

「皇都エストシラントの住民に告ぐ！ ここは第3外務局長カイオスが率いる革命軍が占領した！」

魔導拡声器スプレィカを手に、臨時皇都防衛隊の革命派が次々と街へと進行する。

行政施設、講堂、通信施設など様々な公共施設は占拠され、皇都は革命軍の手に落ちた。

さらにパラデイス城の周りは操られた皇都防衛隊約20万人に包囲されており、すでに攻城兵器のような物までもが配備されている。革命派に気がかりがあるとすれば、旧国境付近を防衛する特大サイズの陸軍基地だが、あそこは『80ヶ国連合』の相手をしているため、しばらくはここには来れないはずだ。

もはや旧体制側に勝ち目はない。

しかし、誤算だったのはアルデが予想以上に優秀であったことだった。

「クソっ！ 近衛隊の革命派が始末されたか……！」

本来は近衛隊の革命派数十名と共に城内の敵対勢力の制圧及び、皇帝陛下のいる会議場を占拠する予定であった。

そして、もし占拠が難しいようであれば、最終手段として日本国の隷下20万の兵を城内へと雪崩込ませ、否が応でも屈服させるつもりであった。

「このままでは……戦争が泥沼化してしまう……！」

攻城戦というものは攻める側はどんな大軍であろうと、かなりの損害が出るのは必至である。

しかも相手は、1つの城であると共に、皇宮でもあるパラデイス城だ。非常に堅固な防衛力を有しているだけでなく、常に大量の備蓄があるため、力技でも兵糧攻めでも陥落させるのは難しく、まさに難攻不落の城。

ワイバーンで空から内部を焼き払おうにも、色々リスクが大きすぎる上に、そもそもワイバーンは日本国の攻撃でこの近辺にはいない。

カイオスは焦った。

3分の1まで減った皇国陸軍でも、日本国の援助がなければ『80ヶ国連合』を撃退することは十分に可能だろう。

いや、きつと連合への日本国の援助はない。

日本国がああ基地を攻撃するための十分な理由がないからだ。

そして敵を退けた陸軍は間違いなくここへ来る。

そうならば何もかもおしまいだ！

「大丈夫ですよカイオスさん。今、我々の^{日本}諜報部員が城内で大暴れしているようなので」

「おお……それはそれは……何とも頼もしい味方ですな。その方が跳ね橋を下ろしてくれるのでしょうか？」

「はい、跳ね橋が下がったら我々（の奴隷）が城内へ先行して敵対勢力を制圧します。カイオスさんは後から続いてください」

「承知した。いやはや、日本国が味方だと本当に心強い」

カイオスは日本国の諜報部隊の実力に関心すると共に、ゾツとした。

日本国からしたら圧倒的格下の国と言えど、皇宮に忍び込み、ましてや戦闘行為を行うなんて正気の沙汰ではない。ただでさえ嚴重な警備を、満足に戦闘できる程度の武器を持つてくぐり抜けるなんて、ジミー王国の隠密部隊でも不可能だ。

（これは戦後でも気を抜けないな……）

彼は皇国の未来に期待を抱くと同時に、常時日本の監視下に置かれることを憂うのだった。

同時刻——

皇宮パラデイス城 城内

パラデイス城内では、突然現れた敵との戦闘が行われていた。

ネズミは全て駆除したはずだったが、思わぬ所に強力な伏兵がいたため、兵達は大混乱を起こしている。

「いたぞー！ 撃てエ!!!」

聞き慣れた魔導銃の発砲音だけが大きく響くが、それは一向に鳴り止まない。

会議室で軍に指示を出しているアルデは大いに焦っていた。

『こちら第9近衛隊、敵1人と交戦ちゅ——ザザザ——…』

『こちら第8近衛隊。敵は発砲音のない小型魔導銃を装備して——ザ

ザザ——……』

次々と味方部隊との交信が途絶えることから察するに、敵はたった1人のくせに皇国最精鋭と言っても過言ではない近衛隊と互角以上に渡り合える実力を有している。

彼は戦力の各個投入は勝率が低くなるだけだと判断した。

「敵の目的はなんだ？ 跳ね橋か？」

『はい、敵は跳ね橋のスイッチがある部屋へと向かっているようです』
「わかった。交戦中の部隊へ告ぐ、応戦しながらスイッチのある部屋へ退却しろ。他の部隊は部屋へと急行して、彼らの退却を援護しつつ敵を待ち構えろ」

『了解！』

ひとまずここからやれる事は全てやれた。

後は現場の兵士達に期待する他ない。

しかし、敵は彼に一息つかせる暇すら与えなかった。

『アルデ様！ 城外の敵が動き出しました！ 複数の攻城兵器に、リントヴルムも確認！ 敵はこの城を落とすつもりです！』

「籠城戦だ！ 近衛隊以外の部隊は全戦力を以て敵軍を撃退せよ！

北方の軍が来るまで持ちこたえろぞ！」

彼は通信を一旦切り、吐き捨てた。

「何としても跳ね橋を下ろさせるつもりか！ これ以上増援を来させないつもりだな?! そうはいかん！」

魔信の通話相手を切り替え、彼は送話器に向かって叫ぶ。

「皇宮防衛第1部隊、聞こえるか?! 部隊から練度の高い者を20人ほど抽出し、指定する部屋に——」

パシュツ!!

突如、通信が途切れる。

「な、なんだ…?」

向こう側で何か起きた訳ではなさそうだ。

数秒後、彼は魔信機に小さな穴が開いているのを確認し、ゆっくりと後ろを向いた。

「貴様ア…なんのつもりだ…!」

報告にあつた小型魔導銃のような物を手に持っていたのは、司会進行役を務める人物だった。

「いえね、アンタがおっしゃる通り、今スイッチのある部屋に増援を呼ばれるのは不味いんで、阻止させてもらいました」

前とは打って変わった口調で話す彼の周りを、皇帝を警護する兵達
が囲む。

銃口を向けられているのにも関わらず、少しも動揺の色を見せない彼に、国の重鎮達は何か嫌なものを感じた。

「器物破損、外患誘致、国家反逆罪だ。処刑は免れんぞ」

「現状を作り出したのはあなた方でしょう？ 私よりも国家反逆して
んのに処刑もクソもないわ。f○c k^ビ_音」

「現状を理解できてないようだな…。貴様は今、この場で処罰を受け
るのだぞ？ さあ、遺言があるなら早く言いたまえ」

「ああ、それはご心配なく」

パシユツ！ パシユパシユ!!

彼が言い終わるや否や、囲んでいた兵達が倒れる。

それと同時に、会議室にいる武装した人物は全員が頭部を撃ち抜か
れ、絶命した。

「なツ…！」

そして、彼らにとって終わりの始まりとなる知らせが入る。

『緊急事態発生！ 近衛隊が全滅しました！ 跳ね橋が下げられてい
ます！』

アルデは窓へと駆け寄り、城門を見下ろし、絶望の表情を顔に浮か
べた。

「もうダメだ…！ おしまいだ…！」

「これから20万もの敵が城内に雪崩込んでくるでしょう。旧体制側
の負けです。さあ、遺言があるなら早く言いたまえ？」

ケタケタと笑うスパイ。

しかし、皇帝ルディアスを含め、彼らは何かを言えるような精神状
態ではなかった。

しばらくすると会議室の扉が強く開から、武装した軍人が雪崩込ん

で来る。

「全員動くな!! 勝手な行動をした場合、即座に発砲する!!!」

リーダー格の軍人が声をあげる。

「定刻通りですね。では、これにて私は退散するとしましょう」

「動くな貴様ア! 発砲するぞ!!」

「はあく?! (怒) 私、日本のスパイなんですけどお?!」

「貴様はどう見ても皇国人だろうが! 例え日本のスパイだとしても、あらぬ誤解を招かないために大人しくして頂きたい!」

「ええ〜。帰って見たいアニメがあるのに……」

多少の誤解はあったものの、こうして大会議室は第3外務局長カイオスの軍により、占拠された。

その後――

皇宮パラデイス城

「カイオスよ、これからどうするつもりだ? 我を拘束しただけでは皇国は救えんぞ」

屈強な軍人5人に囲まれながらも、ルディアスはカイオスを睨みつけた。

「大丈夫です、ルディアス様。私が日本及び『80ヶ国連合』との戦争を止め、皇国を救います」

「:我をどうするつもりだ? レミールはどうなる?」

「皇帝陛下の安全は保証させていただきますが、今後貴方様が政治に口を出すことは許されません。国の皇族として、儀礼的行事には参加していただき、政治に関しては未来永劫口を出させないようにします」

彼は続ける。

「そしてレミール様の身柄は日本国へ引き渡します。彼女の安全は: どうでしょう。日本の外交官の目の前で日本人観光客5人の処刑を

命じましたから、有罪判決は免れないと思われます」

「そうか……」

この日、パーパルディア皇国運営の実権は皇帝ルディアスからカイオスへと引き継がれ、彼の革命は成功した。

そして、その報告を受けて日本国政府は『80ヶ国連合』へ皇国との停戦を要請。これらは全て受理され、パーパルディア皇国は頭が変わったものの、形だけは残されることとなった。

36話：悪役の末路

中央暦1640年9月13日――

皇都エストシラント 郊外

「はあっ……！ はあっ……！」

太陽はすでに落ち、月明かりの下で裏路地を走る1人の女性の姿があった。

彼女は路地裏に隠れた後、表通りで兵士達が走り回っているのを覗き見る。

「はあっ……！ なんなんだ……あれは……!!」

異常に規則正しく走り回る彼らの姿に、彼女は恐怖を憶えた。

無表情な顔と、生物としての何かを失ったような瞳はまるで人形のようなものである。

「あの首輪と……キノコが原因か?!」

彼らの首には金属の首輪のようなものが装着されており、背中側の穴から生える菌類は孢子のようなモノを放出している。

住民も何人かが「あれ」に侵されたらしく、兵士達と同じようにレミールを探して回った。

それだけではない。

皇都にいる全ての者が彼女を捜している。そんな気さえしてくるのだ。

「くっ……！ なぜこの私が……こんな目に……!!」

日本国は激怒し、血眼になって私を捜している。

捕まれば、待っているのは恐らく「死」。

その恐怖が彼女を体力の限界以上に突き動かしていた。

「アア、アアアアアッ!!」

「しまった！ 見つかったか！」

屋根の上で叫んでいたのは皇国の兵士。

仲間を呼ばれたに違いないが、路地裏は非常に入り組んでいるため、彼女の足でも逃げ切れる……

——はずだった！

何を思ったのか、屋根の上から兵士達が降ってきたのだ！

——ドサア！！

「な…… その高さから飛び降りるのか！！」

屋根から飛び降りてまで捕まえるなんて、普通の人間ならそんな発想は出てこないだろう。

しかし目の前にいる奴らは、もはや人間ではなかった。

彼らは『レミールを捕らえる』という命令に従うだけの「ゾンビ」に他ならない。

レミールは逃げ出そうと必死で体を動かすが、恐怖で筋肉が弛緩してしまつたらしく、体が思うように動かない。

数秒後には彼女は腕を捕まれ、悲鳴を上げた。

「ああ、ッ！ 痛い！！ 痛いイイイ！！」

人間とは思えない怪力で、彼女の細い腕は握られる。

兵士達の体は人間としてのリミッターが外れており、常に「火事場の馬鹿力」並の筋力を発揮しているのだった。

骨はミシミシと音を立て、レミールは苦痛に悶える。

「待て！ 力を弱めろ！！」

それを制止したのは、普通の革命派の兵士達だった。

拘束が解かれ、レミールはヘナヘナと座り込む。

彼女の腕は真っ赤に腫れており、顔の化粧はスツカリ流れ落ちていた。

皇国を亡国まで追い詰めた大罪人と言えど、彼女の姿を見て同情したのか、彼らは非常に紳士的な振る舞いを見せる。

「レミール様、訳あって貴方の身柄を拘束します。乱暴はしないのでご安心を」

そして、1人の兵士が彼女を上着で包んであげた。

「なあ……ヤベエな日本国」

「まったく。人間を操る魔法なんて聞いたことがないぞ。それも20万人って……いったいどれ程の魔力が消費されたのやら」

「今のレミールには同情するけどよ。ぶっちゃけ自業自得だよな……」

「それもそうだが、こんなヤバイ国が文明圏外にあると予想する方が無理だろ。見てみ？」

彼らが振り向くと、どこから湧いたのか、数百人もの操り人形が直立不動で整列していた。

レミールが無抵抗なのは、この光景を見たからでもある。

「まあ、ひとまずは国が残ったことを喜ぶべきか……」

「ああ。日本も敗戦からあの強さまで漕ぎ着けたんだ。俺達も負けてらんねーよ」

「そうだな」

こうして皇族レミールはカイオスの手に落ち、彼女の身柄は日本国へと引き渡された。

こうしてパーパルディア皇国と日本国の戦争は完全に終結し、皇国は敗戦国として新たな未来を歩むのだった。

1週間後――

日本国 東京都 外務省

「やれやれ、思ったより混乱がなくて助かったよ」

パーパルディア皇国との講和から1週間が経過し、外務省では幹部達が話の花を咲かせていた。

「本当ですね。もっとカオスになるかと心配していましたよ。特にキノコの件」

キノコに汚染された人間は全て、講和後すぐに日本国から送られた特效薬によって意識を回復している。

彼らからすれば「目が覚めたら国が滅んでいた」「おまけに怪我をしている」という状況なので、日本国政府はよくて暴動、最悪は内乱を想定していたが、予想は良い意味で裏切られたのだった。

特に元々皇国の圧政があった地域の住民は、自分の国を取り戻せたことだけに満足しており、目立った混乱はない。

「新皇国軍の上層部は、レミールを捕らえた兵士を表彰するか否かで頭を悩ませているそうですよ」

「当たり前だろ。そんな前世界でも悩むわ」

「まあそうでしょうね。ところで、戦勝国の利権はどうするか聞いてます?」

「たしか…とある地区の地下資源採掘権だ。今のパ皇に賠償金を払う余裕なんて無いからな」

彼らの雑談は夜遅くまで続いた。

リーム王国 王都ヒルキガ セルコ城

第3文明圏国家、リーム王国のセルコ城で、王バンクスは宰相と話をしていた。

「――では、我が国はどうあっても、ほぼ全ての分野で日本国には勝てぬというのか?」

怒りと困惑が混じった様子で、王が尋ねる。

彼は皇国が負けたのは戦力を順次投入したため各個撃破されたのだろうと思っており、列強ではないがそれに準ずる強さを持つリーム王国軍の全力出撃なら日本に勝てるかと画策しているのだった。

「はい、魔法に関しては我が国が圧倒的に優位ですが、決して戦ってはならない相手です。まず武器の性能が違いすぎます。我が国の軍をどう運用しようが、日本軍が相手では1人も倒せずに全滅するでしょう」

「武器の性能が違いすぎるとは、どういうことだ?」

「例えば日本軍の歩兵が装備している一般的な自動小銃と呼ばれる銃ですが…全ての性能において皇国の魔導銃の上位互換であります。というより、もはや同じ種類の武器ではありません」

宰相は続ける。

「特に『対かせい^火星^星生物』と名付けられた銃は非常に強力で、たった数発

でワイバーンもリントヴルムも、さらには伝説の魔獣であるオーガをも殺せる威力を持ちながら、100発以上を連射できます」

バンクスは、おとぎ話を聞いているような気分だった。

「信じられんな。そんなの戦いにならないではないか」

「空軍や海軍はもつとすごいですよ。日本の航空戦力は音速の10倍で飛ぶとか、ワイバーンの頭だけを瞬時に焼く不可視の攻撃をしてくるそうです」

「10…倍…?!」

「海軍に至ってはファンタジーですよ。古の魔法帝国の『誘導魔光弾』に似た兵器を実用化、改良させてますし、それを撃ち落とす術を数百年前に開発しているのですから」

陸軍の時点でファンタジーだわ！ とバンクスはツツコミを入れた。

「そして日本には『魔人』と呼ばれる軍人が存在しております、これの強いこと強いこと。魔王を素手で完封できる実力を持っているそうです」

「…そうか」

「あと、魔人の中には飛ぶ事が可能な者もいるらしく、これの侵入を許した軍事施設はもうどうしようもありません。なにせ人間の数倍の身体能力を持っているのですから」

「…そうか」

「あと、アルタラス王国が鹵獲した皇国の竜母や戦列艦は、実際は日本軍の魔人が海上で移乗攻撃をしかけ、数名を殺害した後に降伏させたようです」

「…そうか」

もはや恐ろしいを通り越して、聞くことが苦痛になってくる。

「軍事も恐ろしいのですが、日本国はそれを支える技術力や生産力が凄まじく、兵器の新規開発能力も優れているようです。技術力の一例ですが、日本の新幹線と呼ばれる乗り物は最高時速1000kmで走行するようです」

「…?!?!?!」

他にも無人で走る機械動力の車、神聖ミリシアル帝国の「ゲルニカ35型」よりも大きい飛行機械、1秒間に10の100乗回計算できる計算機械などなど、その異常な技術力の高さに、バンクスは吐き気を催した。

「すまん、また今度聞く」

一方の宰相はと言うと、荒唐無稽とも言えるリアルチート国家誕生のおもしろさに目を輝かせ、国王の気分なぞ知ったこっちゃないという感じだった。

「何言ってるんですか国王！ 話はこれからですよ！」

「やめっ！ やめろおおおお!!!」

宰相の話を延々と聞かされたリーム王国の王バンクスは数日の間悪夢にうなされ、日本に敵対しないことを誓うのだった。

先進11ヶ国会議編

37話：列強の使者達

中央暦1641年1月23日――

日本国 九州地方南西約700km 上空

雲1つない空を、真っ白な機体が飛ぶ。

神聖ミリシアル帝国の天の浮舟『ゲルニカ35型』は数人の使節団を乗せ、日本国に向かって巡航していた。

『間もなく日本国の領空に入ります。なお日本国の戦闘機が2機、着陸誘導する予定となっておりますので、戦闘機が来てもご安心ください』

機内放送を聞き、ファイアームは顔をしかめた。

「まったくもって遠い。なぜ我々が極東の文明圏外国家に……」

事の始まりは約1週間前――

世界最強、最大の列強国と言われる「神聖ミリシアル帝国」。

彼の国が誇るゼノスグラム空港に、30名にも及ぶ使節団が到着した。彼らは列強4位であるパーパルディア皇国を滅ぼしたという日本国への先遣使節団だ。

その代表的な人物は下記の通りである。

- 外務省外交官 ファイアーム
 - 情報局情報官 ライドルカ
 - 軍務省事務官 アルパナ
 - 技術研究開発局開発室長 ベルーノ
- 一行はゼノスグラム空港の駐機場へと向かう。

『天の浮舟』と呼ばれる航空機に乗り込み、さつそくファイアームが愚痴をこぼした。

「事前に説明を受けたが……我々中央世界の、しかも世界一の国が、わざわざ自分から、第3文明圏の、さらに東の果ての田舎国に足を運ぶな

んてな」

「パーパルディア皇国程ではないと言え、神聖ミリシアル帝国人も高いプライドを持っている。

そんな世界最強の誉れ高き帝国人が、自ら極東の文明圏外国に赴くことを不満に思う者は少なくなかった。

「フィアームもその1人である。」

「まあまあ、実質的に皇国に勝利した国ですから。融和政策を推進する上でも穏便に行きましよう」

一方、情報局の情報官であるライドルカは、事前調査である程度日本の事を知っていたので、これから行く国がどれほど「人外魔境」なのかワクワクしていた。

「まあ、私は期待せんで。所詮は文明圏外の蛮国だろう」

「なにを言っているんですか。実際に魔王を倒したのも日本国ですよ」

「その…日本の『魔人』が魔王を倒したのも本当なのかね？ にわかには信じ難い話だが…」

「本当じゃなかったら、今頃第3文明圏が大変な事になっていますよ」

「…そうだな」

時間は戻り、約1週間後の23日午前。フィアーム含め、十数人の先入観は轟音と共に吹き飛ばされた。

2機の戦闘機が窓を横切ったのだ。

「なっ…何だあれは！」

「日本国の戦闘機か?!」

ムーのレシプロ戦闘機のような機を予想していた彼らにとって、ゲルニカ35型の左を飛ぶ日本国の「それ」は明らかに異質。

「プロペラがない…！ あ、空気取入口があるぞ！ まさか魔光呪発式空気圧縮放射エンジンか?!」

「あの翼型は後退翼だ！ あの戦闘機は少なくとも音速を超えますぞ!!」

子供のようにはしゃぐ使節団達。

「おい！ 右を見ろ！」

しかし彼らは右側を飛ぶ機体を見て、はしやぐのをピタツと止めた。

「右の機体は…なんだあれは…」

「どこからどこまでが翼なんだ…？ やけにノツペリしているし…」

「そもそも人が乗れるのか…？」

左の戦闘機も異質だが、右の円盤型の飛行物体はそんな言葉では生ぬるい。

完全に「未知」との遭遇であった。

「ま、まあ日本国がそれなりの技術を持っていることは分かった。我が帝国の最先端には及ばないだろうがな」

フィアームは強がりを行い、虚勢を張って見せる。

そして最先端という言葉に折れかけたプライドを取り戻したのか、他の団員達も彼女と同じような態度を取った。

「まあ文明圏外国だしな。あれはムーの最新鋭の戦闘機か何かをコピーしたのだろう」

「ははは！ そうに違いない」

ライドルカは彼らの精神状態を心配した。

あれがムーのものであろうと、日本のものであろうと、世界最強の座を脅かすに足るのは変わらないのだから。

（やれやれ、こんな感じだと現地に到着してからが大変そうだ）

しばらくして、天の浮舟『ゲルニカ35型』は日本の戦闘機に先導されて九州の上空に入った。

先進的で大きな都市が眼下に見え、全員が呆然とする。これほどの大都市が文明圏外の小さな島国に存在し、しかも一地方都市に過ぎないと思われなかったのだ。

「日本国には魔法が存在しないと聞いていたが…魔法なしでこれほどの大都市が作れるものなのか？」

「それを言ったらムーもそうでしょう…あそことは比べ物にならない程、大きい気がします」

不必要なほどに大きい滑走路に着陸し、中央世界の、誰もが認める世界最強の国である神聖ミリシアル帝国の技術の結晶とも言える『ゲ

ルニカ35型』は日本の旅客機に挟まれて駐機する。

「なんて…大ききなんだ…」

ほとんどの帝国人は、眼前のボーイングシリーズの2機を見て、屈辱的な気分を味わっていた。

偶然なのか、日本国がわざと『ゲルニカ35型』をここに駐機するようにしたのか。その真相は不明だが、プライドを粉々にされたファイアームは暴論を唱える。

「はっ！ 新興国のくせに、日本国とは生意気な国だな！ 自分達の技術力を高く見せるために、わざわざ精巧なハリボテを用意したらしい！ ほら見ろ！ 動かんぞ！」

「ファイアームさん、動き出しましたよ」

「はッ……あ?!」

見ると、超巨大な機体の窓からは小さな子供が手を振っている。

そしてその機はファイアーム達の見てる前で滑走路へと移動し、悠々と飛び去った。

「……………」

「ど、どこの国でも子供は可愛らしいですね！ ほら、さっきのあの子の笑顔！ 微笑ほほえまし…いい……」

ライドルカは彼らの精神を保つために必死に話題を転換しようとしたが、機内は全く微笑ましくなかった。

むしろ絶望にも似た空気が渦を巻いている。

しばらくして機を降りた使節団は、精いっぱい虚勢を張って日本国の出迎えに礼と挨拶を交わし、彼らの用意した自動車でホテルへと向かった。

車窓から見える景色が、ただでさえ絶望のドン底に突き落とされてきた彼らの精神にとって致命的な衝撃インパクトとなったのは容易に想像できよう。

彼らはホテルの部屋に着くなり、すぐにベッドに身体を投げ出し、枕を濡らし続けたそう。

ちなみにライドルカはと言うと、日本国が想像以上に想像以上だったことに興奮して眠れなかったと証言した。

翌日――

福岡国際会議場 多目的ホール

日本国外務省は国交締結に先立ち、文化交流のために訪日した神聖ミリシアル帝国使節団を前に、画面が空中に表示されるタイプのプロジェクターを使用して日本国の概要を説明していた。

ことに軍事に関しては、約500年前の「富士総火演」の映像を見せている。これを使用するのは、パーパルディア皇国と戦争状態となった原因に、日本があまりにも謙虚すぎて相手に侮られたということがあるため、あえてこれを見せたのだ。

情報流出？ 武力による威圧？

気にする事はない。なぜなら500年前の映像だもの。

「改めまして、神聖ミリシアル帝国使節団の皆様。本日は遠路はるばる日本国まで御足労いただき、誠にありがとうございます。私は日本国外務省の近藤と申します。以後、お見知り置きください」

彼は一礼し、使節団もそれに返礼する。

「事前にご説明した通り、まずは歓迎と我々の出会いを祝してお食事を執り行います。どうぞ、ごゆっくりおくつろぎください」

挨拶が終わり、各人のテーブルに様々な食事が運ばれてくる。食事に手をつけながら、ライドルカは横に座るフィアームに話しかけた。

「フィアームさん、さっきの映像を見てどう感じられました？」

「う…うん、そうだな。科学文明もなかなかやるようだ。しかし、魔法技術に関して全く説明がなかったせいで国力を読みづらいな」

フィアームは何としてでも日本の国力を認めないつもりだった。

少なくとも、外見上は。

「ベルーノ殿はどう思われます？」

「…あの映像が本物なら、日本国は総合的な技術力だけでなく、産業分野でも我が国を大きく上回っているだろう」

彼は続ける。

「だが、日本軍が演習を一般市民に公開しているのは驚いたよ。もちろん悪い意味でな。この国に国家機密というものはないらしい」

「でもあれ、500年前の映像ですよ。それに、あの映像が何かを暗示しているとしたら、どうします?」

「…どういうことだ?」

「これくらいバレても我々は負けない自信がある、とか…」

「……………」

確かに「戦車」や「戦闘ヘリ」と呼ばれる兵器は凄かった。日本国にとつては500年前の骨董品でも、今のミ帝では、あれを真似をすることすら難しいだろう。

そして、あれが500年かけて進化した「物」が帝国に牙を向けた時、帝国軍がどうなるかを想像するのは難しくくない。

使節達を取り巻く空気が昨日の機内と同じくらい悪くなる。

しばらくすると会場前方から1人の日本人が歩み寄ってきた。

彼は使節たちの前で立ち止まり、慇懃に一礼する。

「先程は丁寧な対応をありがとうございました。近藤さん」

「こちらこそ、ご清聴ありがとうございました」

フィアームがにこやかに声をかける。

ライドルカは彼女が何をしようとしているのか察し、まだ何もやっていないのに羞恥を覚えた。

フィアームは邪悪な笑みを浮かべて立ち上がると、足元に置いた箱から帆布に包んだ物体を取り出す。

そして帆布を外し、それを近藤に渡した。

「これは私個人からのプレゼントです。我が国で開発された一瞬で演算するための魔道具であります。計算能力は産業のスピードに直結します。重さは14kgもありますが、大変な事務作業もこれで楽になるでしょう」

「贈り物までご用意いただいて恐れ入ります、フィアームさん。これ結構重いですね」

骨董品も骨董品過ぎる計算機に、近藤は返答に困る。

しかし政府からは侮られないようにと指示を受けているため、彼は心を鬼にして、脳に埋め込まれたチップを起動し、ポケットから画面のような物体を取り出した。

頭部に埋め込まれたチップは脳の働きを感知するため、念じるだけで視界に浮かび上がる画面を操作することができる。

しかし近藤は使節の人々のためにわざわざ、チップがない人と画面を共有^{見れる}できるようにする機器を買ってきたのだ。

(さて、どう説明しようか…)

説明をしても理解されないのは分かっている。

近藤は脳内でネット検索をし、wikiを見た。

「ええとですね…まず、ほとんどの日本人は脳に超小型の機械を埋め込んでいます。これによっていつでもどこでも、手がふさがっていても、スマートフォンを操作することができます」

「脳…？ 小型機械…？ スマートフォン…？」

「簡単に説明しますと、我々は超小型の機械を脳に埋め込んでいますので、超高速で計算できます」

近藤は説明を諦めた。

「まあ見ててください。失礼ながら、どなたか理系の方はいらっしやいますか？ もしいらっしやったら、数学の問題を出してください。とても難しいのを」

「私だ」

ミリシアルでトップクラスの頭脳を持つベルーノが名乗りを上げ、彼は大陸共通語で非常に難易度の高い計算式を紙に書き上げた。

「ベルーノさん、ありがとうございます。ではさっそく脳内の電卓を使って解いてみせます。私が見ている景色をこの画面に映し出しているのです、こちらをご覧になってください」

全員が画面に注目する。

驚くべきことに、そこには近藤が見ていると思われる光景が映っており、空中にはベルーノが書いた計算式が浮遊していた。

「はい、解きました」

「なっ…?!」

ペルーノが近藤の紙を取り上げる。

「ぜ……全問正解……」

「と、このように我々も高性能計算機に力を入れております。そちらの画面をご覧ください。今から500年以上も前に、フィアームさんに頂いたような電卓が発売されました。当時は高級車くらい高価な代物だったとwikiには書いてあります」

「……………」

絶句する使節団達。

内心ちよつと可哀想だなと思いながらも、近藤はさらに追い討ちをかける。

「このような貴重な物をいただいて嬉しい限りです。貴国の優れた魔法技術の研究材料にさせていただきますね」

フィアームは顔を真っ赤にして俯き、ライドル力達はただひたすら、絶句する。

その後も食事は続いたが、美味しいはずの食事はまるで喉を通らず、一行は空きつ腹のまま新幹線で東京へと向かった。

38話：先進11ヶ国会議

中央暦1642年4月22日――

神聖ミリシアル帝国　カルトアルパス港

カルトアルパスは世界有数の、広大な港湾施設を持つ港町。

先進11ヶ国会議には各国大使を乗せた船だけでなく護衛の軍艦もやってくるため、それらのすべてを収容できるよう、会場には毎回この港町が選ばれる。

『第1文明圏トルキア王国軍、到着しました！　戦列艦7、使節船1、計8隻』

『第1文明圏アガルタ法国到着。魔法船団6、民間船2』

港湾管理者の元に続々と到着する各国の軍艦の情報が集約されている。

「この辺りのは代わり映えせんな…」

港湾管理責任者のブロントは、この先進11ヶ国会議が大好きだった。

「使者を護衛する」という名目で各国が最新式の軍艦を編成して送り込んでくるため、軍艦が大好きな彼にとって、この催しは仕事であるとともに、お祭りのようなものだ。

「ブロントさん、今回はどの国に注目していますか？」

新人が聞く。

「今回注目すべき国は2つある。グラ・バルカス帝国と日本国の艦船だ」

「グラ・バルカス帝国と言うと、単艦でレイフォルを滅亡させた『生ける伝説』を建造した国ですね！」

「ああ、楽しみでしょうがないよ。両国とも、一体どんな船で来るのか…」

彼はあまりにも楽しみで寝れず、仕事場に午前3時に到着した程であった。

「お、恐らくあれだろう。すごい大ききだな…」

彼の視線の先にはグラ・バルカス帝国の旗を掲げた巨大な船が1隻、港に向かつて来ていた。

それは神聖ミリシアル帝国の魔導戦艦を見慣れたブロントでさえも絶句する程の大きさであり、その雄々しきに見とれてしまうほどの造形美と、力強さを備えた艦であった。

『ブロント局長！ 日本国の艦船も到着しました！ 巡洋艦1、民間船1、計2隻です！』

ブロントは双眼鏡で沖合を確認する。

軍艦にしてはやけに派手な真っ白の艦が見え、その後方に大型客船が見えた。

「…日本国の船は変わった形をしているな」

「あれ？ ブロントさん、日本国の船はもう見ないのですか？」

「興味が失せた。グラ・バルカス帝国の艦を見る方がよっぽど良い」

確かに『しきしま』と『グレードアトラスター』を比較すると、後者の方が見ていて楽しいだろう。

さて、日本国政府があれだけ辛酸を舐めさせられたのに、ここで護衛艦隊ではなく『しきしま』を随伴させた理由をお教えしよう。

理由は至極単純で「国際会議の場に軍艦を使用するのはあまりにも失礼ではないか！」とマスコミと野党が騒いだからである。当然、彼らに賛同する者は少なかった。

もう1つの理由は、神聖ミリシアル帝国の使節達にとっては砲艦外交のような外交方針が当たり前なので、彼らは「外務大臣の道中の護衛と規模は任意で可」としか伝えていなかったからであった。

「まさか、ほとんどの国が戦闘艦を連れてきているとは…脳内お花畑平和ボケ共は、この世界の常識を忘れているようだな」

『しきしま』の艦長瀬戸衛は愚痴をこぼす。

「本当ですね。パ皇の時のように見くびられなければ良いのですが…」

彼らは会議の行く末を案じる。

しかし、その不安は最悪の形となって彼らに降りかかるのだった。

神聖ミリシアル帝国

港町カルトアルパス

帝国文化館

ミ帝の帝都に並ぶこのカルトアルパスは、「港町」という枕詞が不適當なほど大規模な交易都市である。

そんなカルトアルパスの北部に、ミリシアルの繁栄を象徴するかのよな豪華絢爛な建物が構えていた。

先進11ヶ国会議の会場となる帝国文化館だ。

近藤と部下の井上は自分達の着席位置を確認し、ロビーに戻って持参した水筒のお茶を飲んでいた。

(あと少しで始まるな…。どうなることやら。特にグ帝が)

(国際会議の場で何かをやらかすとは思えません…。ミリシアルの艦隊に愚^グ帝の艦隊が接近しているのは確かですからね)

(人工衛星と例の部隊があるとは言え、もう少しそれを早めに知れたら護衛艦隊でも連れて来れたんだけどなあ…)

(なに呑気な事を言っているんですか！ 近藤さんもあの傍若無人^{グ帝の}ぶりは知っていますよね?! もしあれがここに攻めて来たらどうするんですか！)

(まあ…海保の連中を信じるしかないさ。この世界に来てから実戦に実戦を重ねて、被手術兵の実力だけなら自衛隊を凌駕していると言われてるほどの奴らだぞ)

近藤達が話を続けていると、ローブを身にまとった人物が近づいてきたため、2人は脳に埋め込んだチップの電源を切り、立ち上がり、背筋を伸ばした。

「御二方は日本国の方——ですね？」

「はい、そうです」

「私は中央世界北西に位置するアガルタ法国、外交庁に勤めるマジと申します。以後よろしくお願いします」

彼はにこやかに右手を差し出す。

「日本国外務省の近藤と申します。よろしく申し上げます」

「同じく井上と申します。よろしく願いします」

2人はマジの手をしっかりと握り、順に握手を交わす。

「ところで…なぜ我々が日本人だと？」

「お噂はかねがね。科学文明のみで発展したのにも関わらず『誘導魔光弾』や『魔人』を軍に配備し、あの伝説の魔王や列強であるパーパルディア皇国を完膚なきまでに叩き潰した不思議な国であるとお聞きしています」

近藤たちは『誘導魔光弾』と『魔人』というワードに奇妙な違和感を感じる。

「えーと…何をおっしゃっておられるのですか？」

「ええ？」

「え？」

微妙な沈黙が流れる。

「ま、まあ軍事に関しては色々と機密があるのでしよう。それよりも、我々アガルタ法国は日本国に対して非常に興味を持っています。今度、日本国にも伺ってみたいものです」

「ありがとうございます。是非一度、日本にいらしてください。歓迎いたします」

好意的な態度に、近藤も笑顔で答えた。

『間もなく先進11ヶ国会議を開始します。関係者の方は、席へお戻りください』

館内放送が流れる。

2人はマジたちに会釈で挨拶し、国際会議場に戻って着席した。

『これより先進11ヶ国会議を開催いたします』

議長席が並ぶ舞台を中心として同心円状に席が設えられた場内に、会議の開始を告げるアナウンスが流れる。

「これが先進11ヶ国会議かあ…」

近藤が呟く。

初参加であるため日本とグラ・バルカス帝国の代表が座る位置は末席であり、舞台からやや遠いが、少し高い位置から場内を見渡せるため、近藤達はここは異世界なのだつくづく痛感した。

人間種以外の存在が代表を務める国も多いのだ。

しばらくすると議長席付近に座るエモール王国の代表が手を挙げ、議長の指名によって発言権を得てから起立した。

『エモール王国のモーリアウルである。火急の件につき、心して聞いてもらいたい』

彼は一息おいてから、続けた。

『…先日、我が国は「空間の占い」を実施した。その結果、古の魔法帝国、忌まわしきラヴァーナル帝国が、近いうちに復活すると判明した』
各国の代表達の顔が青くなつていき、会場がざわつく。

「な…なんてことだ!」

「あれは伝承ではなかったのか!」

しかし転移国家であるため「占い」のようなオカルト的な事物を信じておらず、その重大性を理解できていない国があった。

日本国と、グラ・バルカス帝国である。

「くっ…くっくっ…ツハア——ツハツハツハ!!」

突如哄笑こっしょうを始めたのはグラ・バルカス帝国の代表を務める若い女性、シエリアであった。

会場中の視線が彼女に集中する。それは例外なく、非難の色に満ちていた。

『ああ、いやいや失礼。私はグラ・バルカス帝国外務省、東部方面異界担当課長のシエリアだ。魔法帝国だからヴァーナルだか何だか知らんが、過去の遺物を恐れる諸君ら現地人の程度の低さに、呆れを通り越して滑稽さを感じたものでな』

『どこの蛮族かと思ったら、新参のグラ・バルカス帝国か。安心しろ。貴様らのように魔法も知らず、魔力指数の低い人間種のみ国家には期待はしていない』

『ふっ…科学を理解できない亜人風情が何を言う』

『貴様ア! 竜人族を愚弄するか!』

会議は紛糾し、せめて乱闘が起きないようにと議長達が走り出す。

「なんと言うか：旧世界では考えられないな」

「グラ・バルカス帝国も転移国家らしいですけどね。前世界でもあんな風に振舞っていたのでしょうか？」

しばらくして収拾がつくと、ムーの外交官が挙手し、立ち上がった。

『我が国はこの場において、グラ・バルカス帝国に対する非難声明案を提示します。このところ、彼らはやりすぎている』

すると神聖ミリシアル帝国の外交官も挙手し、立ち上がった。

『我が国もムーの提案を支持するとともに、グラ・バルカス帝国に第2文明圏からの即時撤退を求める』

「——!!!」

世界最強の2ヶ国の介入。

普通ならどんな国であろうとそれをチラつかされただけで震え上がり、剣を納める。

しかしグラ・バルカス帝国がその要求を飲まなかったのは、世界が相手でも勝てる自信があったからである。

『1つ、勘違いしているようだから伝えておこう。我が国がこの会議に参加したのは、近隣地域の有力国の代表者が一堂に会するこの機会に、通告しに来たのだ！』

彼女は机の天板をなぐりつけ、ダンツと音を響かせた。

『グラ・バルカス帝国帝王グラルクスの名において、ここに宣言する！ 我らに従え！ 我が国に忠誠を誓った国には永遠の繁栄を約束しよう！』

「……………」

沈黙、というよりは絶句である。

あまりにも突然の、あまりにも非常識な発言に、困惑混じりの糾弾が飛んだ。

当然、日本人の2人も驚愕の表情を浮かべていた。

——ピピピ

怒号が飛び交う中、日本人2人は脳内のチップで受け取った情報を聞き、再び驚愕する。

(近藤さん聞こえるか! 『しきしま』の瀬戸だ! グラ・バルカス帝国の艦隊がミリシアルの艦隊と交戦しているらしい!)

(なっ…! 彼女は正気だったのか!)

(そっちでも何かあったようだな。動画送るか?)

(ええ、お願いします。録画しておいて正解でした。緊急通達で外務省に送ってください)

(……動画を確認した。外務省に緊急だな?)

(はい、お願いします)

日本の代表がそうこうしている内にも、会議は進んでいた。

『まずは尋ねよう! 今、この場で我が国に忠誠を誓う国はあるか?!』
シエリアが叫ぶ。

各国の返答は当然、「NO^{f u o k}」であった。

『やはり今すぐ従属する国はないか、まあ当然だろうな』

シエリアは小さく肩をすくめ、出入口に向かって歩き出す。

扉の前で振り返った彼女は、その日見せた中では最も真摯な表情をしていた。

「帝王様は寛大だ。我が国の力を知った後でも構わん。レイフォル行政府に申し出るが良い」

グラ・バルカス帝国の外交団は退室し、カルトアルパス港からも去っていき、その日の先進11ヶ国会議は波乱のままに終了した。

39話：最終手段の画策

神聖ミリシアル帝国　　帝都ルーンポリス　　外務省　　大会議室

「お忙しいところお集まりいただき恐縮です。さつそくですが、これより緊急防衛対策会議を始めます」

神聖ミリシアル帝国外務省統括官のリアージュは困惑していた。

先進11ヶ国会議にも参加している彼には、明日も明後日も会議が控えているのにも関わらず、夕方頃に急に帝都へ戻るよう招集がかかったからだ。

何事かと思い大急ぎで帝都まで戻り、夜中に外務省の会議室に入室すると、外務省の幹部や何故か軍の幹部、そして国防省のアグラ長官までもが勢揃いして座っていることに彼は舌を巻いた。

しかし、それだけでは終わらない。

室内が少し暗くなり、投影魔導式映像機が起動する。

「概要を説明いたします。本日早朝、本国から南西方面にあるマグドラ群島付近で、訓練中の第零式魔導艦隊がグラ・バルカス帝国の艦隊と交戦し、部隊消失しました」

リアージュは自分の目と耳が信じられなかった。

それが本当なら、前代未聞の重大事件だ。

「ちよつと待ってください！　第零式魔導艦隊がああ非礼な国の艦隊に負けたって?!　嘘だろ！」

「生き残りに聞き取り調査を行い、国籍を確認しました。グラ・バルカス帝国で間違いありません。リアージュ様、何か心当たりがおありなのでは？」

彼の到着を待つて始まったこの緊急会議は、実質彼から状況証拠の裏取りをするようなものだと言は察した。

「実は——」

彼は事の顛末^{てんまつ}を話す。

「なるほど、報告通りらしい」

「え？」

国防長官であるアグラが顔をしかめ、リアージュは素っ頓狂な声を出した。

「実は会議が終わる直前に日本国から連絡があつてな。どうやら、そのシエリアとか言う女性がご高説な演説を始めたのとはほぼ同時に、グラ・バルカス帝国から攻撃を受けたらしい」

「え？ え…？？」

「まあ落ち着け。種明かしをすると、驚くべきことに日本は『僕の星』しほへを実用化しているそうだ。我が国の使節団もそれを確認している。そして彼の国の情報によれば、第零式魔導艦隊を壊滅に追いやった艦隊は東へと向かっているらしい」

「東？ 東だと?! ま…まさか…！」

リアージュはここに至つて自分が招集された意味を完全に理解した。

「そうだ。想定されるのは帝都ルーンポリス、もしくは先進11ヶ国会議中の港町カルトアルパスへの攻撃だ」

会議室が一気に暗くなる。

そして、彼は自分が成すべき事を理解した。

「…世界に敵なしと畏れられる神聖ミリシアル帝国が『守りきれないかもしれないので避難してください』などと言えるものか！」

「そんな悠長な事は言っていられん！」

「悠長だと?! ミリシアルがそんな弱腰な姿勢を見せてみる！ 離反する属国の数は何桁までに及ぶだろうなあ?! 我が国の国益の維持のためには、強さを見せ続けるがあるのだぞ！」

「もし相手の襲撃を許し、先進11ヶ国会議がめちやくちやにされた場合『なぜ接近を察知、阻止できなかった』と言われるのは目に見える。ここは正直に説明し、会議の延期を申し入れ、各国に一時避難を促すのが最善だ」

「矢面に立って説明しなくていい国防長官は気楽だな！ 分かったよ畜生！」

会議は明け方にまで及び、リアージュは帝都でゆつくりとする暇も

なく、船内泊を経て、昼過ぎにカルトアルパスへと戻った。

中央暦1642年4月24日――

神聖ミリシアル帝国　　港町カルトアルパス　　帝国文化館

『これよりも先進11ヶ国会議実務者協議を再――』

リアージュ不在のため、代わりの議長が彼の代理を務める。しかし彼がそう言いかけた時、リアージュは扉をバタンと開いて入室し、戻ってきた。

議長席で立つ彼はかなり顔色が悪く、憔悴している。

そしてそれを見て顔色が悪くなったのは、日本国の2人も同様であった。

『本日は朝から欠席しており、ご迷惑をおかけしました。議長国の神聖ミリシアル帝国から皆様へ連絡がごございます。先日、グラ・バルカス帝国の艦隊が我が国から西側にあるマグドラ群島に奇襲をしかけ、地方隊が被害を受けました』

第零式魔導艦隊は全滅している。

だが、それは何としてでも伏せなければならぬため、彼は半分だけ嘘をついた。

『テロ対策としてカルトアルパス港には巡洋魔導艦8隻が警備についておりますし、近くの空港基地から戦闘用「天の浮舟」がエアカバ―を行いますので問題はありません。ですが万が一を考慮し、これより皆様にはカルトアルパスから全艦隊を引き揚げていただき、開催地をここより東のカン・ブリッドに移したいと思えます』

しかし、この世界線も概ね原作通りに物事は進む。

一瞬の沈黙のあと、エモール王国のモーリアウルが起立し。

『あの無礼な新参者が攻撃してきたからと言って、世界の強国とも言える国々が尻尾を巻いて逃げるといえるのか？』

日本国の面々はあちやくという顔をした。

『ここに来ている者達は皆、それなりの規模の艦隊を連れてきているのだろうか？ 文明圏に属していない国を相手に強国が戦わずして逃げるのは、敵からも圏外国からも情けないと思われるぞ。此度の戦、我々は控えの風竜22騎を投入しようぞ』

それに感化されたのか、続々と名乗りを上げる国の代表達。

『我が国も戦列艦7隻を投入しましょうぞ！』

『我が艦隊も参戦します！』

日本国外交使節団の隣の席に座るパンドーラ大魔法公国の大使が、目を輝かせながら近藤に聞く。

「対パーパルディア皇国戦での貴国の数々の伝説は、かねがね伺っています。日本国は今回どうなされるのですか？」

「…本国に問い合わせ中なので、お答えできません」

護衛艦が1隻でもいたら、グ帝の艦隊の殲滅は簡単だろう。しかしこの場に連れて来ているのは、基本的に表立った戦闘を想定していない巡視船である。

(瀬戸さん、事情は分かっていますね？ 第二次WWIIの艦隊に勝てますか？)

(……………知らん)

近藤は苦虫を噛み潰したような顔をする。

会議場は熱を帯び始め、「打倒グラ・バルカス艦隊」という風潮が流れ始める。

彼は世界序列1位であるミリシアル帝国が「万全を期すために少し離れた場所に移動しよう」と言っているのに、他の国がそれを断る理由が分からなかった。

中央暦1642年4月25日――

日本国 東京 首相官邸

「――以上です。現状、グラ・バルカス帝国がカルトアルパスに強襲を

行う可能性は極めて高い状態にあります」

外務省幹部の説明を聞いて、首相はじめ、誰もが絶句する。

「敵…いや、グラ・バルカス帝国の目的は何だと思う？」

「そりゃあ世界侵略の負担を少なくするために、ここで世界連合を完膚なきまでに叩き潰して見せしめにするつもりなのだろうな」

「なるほど、それで戦わずして降伏する国が出てくると？ どこぞの皇女と同じやり方だな」

日本の推理は正解だ。

だがグ帝の目的が分かったところで、彼らがやれることは少ない。

「今すぐ現地外交官と大臣を引き揚げさせるべきだ！」

「いや、各国が一丸となつてグラ・バルカス帝国と戦う意思を示している時に、日本だけが逃げ帰つたとなると心証を害する可能性があります」

全員が沈黙する。

「グラ・バルカス帝国というのは第二次世界大戦の軍にそっくりなのでしょう？ 現代の海上保安庁の巡視船なら何とかなるのでは？」

「護衛艦ならまだしも、相手は物理的防御力なら世界1位の「大和（もどき）」ですよ？ 巡視船の装備では、傷を負わせられるかどうかすら…」

『「大和もどき」だけではない。ミリシアル艦隊を全滅させた空母機動部隊もいるんだぞ」

「でも第二次世界大戦時の装備だろう？」

「当時の艦砲でも爆弾でも魚雷でも、当たれば致命傷です。それに『しきしま』の装備は「対最新」を想定しているため、飛来してくるだけの巨大な砲弾を迎撃出来るかはどうか…」

最新は常に「対最新」を想定している。

『しきしま』はミサイルやドローン、被手術兵を相手にした場合の防御力は高いが、ミサイルやら大量のドローンやらを積んでいる訳では無いので、護衛艦に比べたら攻防共に大きく劣る。

しかも、ただ飛来するだけの電子部品もろくにならない砲弾は護衛艦にとつても脅威だ。『電磁加速砲』や機関砲から発射されるそれもそう

である。

当たれば致命傷の砲弾は、電子的な妨害を受け付けず、硬い外殻を持つため、物によっては（例えば徹甲弾とか）ミサイルくらいでしか迎撃できない可能性すらある。

それが対空ミサイルを持たない『しきしま』にとってどれだけの脅威かは理解いただけだろう。

「各国の艦は？」

「ほとんどパ皇と同じか、それ以下です。期待できるのはムーとミリシアルくらいですかね。ミリシアルは魔法技術を使っているため正確な分析は難しいですが、全滅したのを見た感じ、ムーと同じくらいと考えるべきでしょう」

「航空戦力も教えてくれ」

「ワイバーンを載せた竜母が数隻と、それよりも強いと言われるエモールの風竜が22騎。ムーは複葉機で、ミリシアルはジェット機もどきですが、衛星からの動画で性能を計算した結果、グ帝のより弱いと言ったことが分かりました」

「勝てないじゃないか！」

そう、勝てない。

普通なら絶対に勝てないのだ。

「念のため、防衛省では現在2個護衛艦隊群の派遣準備をしています
が、今回の襲撃には到底間に合いません。前世界の軍事大国のように『対艦攻撃弾道ミサイル』か『超長距離巡航ミサイル』があれば良いのですが…」

「無いに決まってるだろう。今からAI人工知能に造らせても発射まで2日はかかるぞ」

「航空機はどうなんだ？」

「片道切符で良いのなら、支援は間に合います」

つまり1番射程の長いミサイルを積んで今から飛ばせば間に合うが、パイロットの命が危険に晒されるだけでなく、貴重な国産戦闘機を失っても良いのならということだ。

「それは……ダメだ。日本人だけでなく友好国の人間の命が危険に

晒されているとは言え、それで国民が納得してくれるか…」

「ですがフェン王国ではどうにかなったじゃないですか！」

「いや、あれは現場の独断という事になっている！　だが、今回は現場の独断ではない。政府の判断になるんだぞ！」

「まだまだ日本には、その身体を拘束する鎖が多すぎた。」

「……………あれだけは使いたくなかったんだがな。仕方ない」

「総理は一息ついてから、続けた。」

「『宇宙作戦隊』に繋げてくれ。最終手段を使うぞ」

40話：フオーク海峡海戦I

神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパス 帝国文化館

港町カルトアルパスはたった14kmの幅の海峡の奥にある。

正確には、カルトアルパスの両脇から南北約60kmの半年がそれぞれ突き出ており、その内側の幅が約14kmなのだ。

そんな港の一角で開かれている先進11ヶ国会議だが、こちらは朝早くから紛糾していた。

『——やはり皆様の安全を考え、早期に移動をお願いしたい!』

昨日からグラ・バルカス帝国への対応はまとまらなかった。

皆を避難させたい神聖ミリシアル帝国と、グラ・バルカス帝国を迎え撃ちたい諸国と、日本のように担当者の一存だけでは決められない国の3つに別れ、議論は一夜明けても平行線が続いているのだ。

近藤達はどちらかと言えば神聖ミリシアル帝国寄りである。

大規模即応戦力のない今、危険だから避難する。そんな単純な事なぜ分からないのかと、彼はイライラしていた。

しかし、迎え撃つのに賛成する国にもそれなりの事情があったのだ。

各国は日本のように、最低限の戦力で来た訳では無い。彼らは砲艦外交よろしく最新鋭の艦隊を半ば見せびらかすために艦隊を派遣しているため、国家の威信が落ちることを恐れ、戦うべきだと判断したのである。

——ピピピ

(近藤さん! 外務省から連絡だ!)

(瀬戸さん、連絡ありがとうございます)

(そういうのはいい! カルトアルパスから迅速に避難しろとのことだ! もう間に合わない! 早く逃げろ!)

(——え?)

瀬戸の言った通り、彼らは間に合わなかった。

近藤の目にリアージュに耳打ちする人物の姿が映り、彼の顔が苦渋

に満ちる。

『皆様、静粛に！ これより重要なことをお伝えします！』

場内が静まる。

『先程、我が国の哨戒機がカルトアルパス南方約150km地点を北上するグラ・バルカス帝国の艦隊を発見しました。もう避難は間に合いませんので、各国皆様のへ 臨時連合軍を組織して迎撃する〳案を議長国権限で採択します』

近藤は頭を抱え、せめて出来ることを考えた彼は「日本国は憲法上の問題から集団的自衛権を認めておらず、自衛のためにのみ戦力を行使するよう規定しているため、可能ならば戦場から離脱する」とだけ伝えた。

(瀬戸さん、せめて乗組員達だけでも生きて帰ってきてくださいね。日本に着いたら奢りますよ)

(ドーンと任せろ！ 負けたら骨は拾ってくれよな)

(あれは戦うための船じゃないと言ってやりますよ)

(それで構わん。じゃ、気を付けてな)

『しきしま』は本国から『あらゆる手段を用いて自衛戦闘を行え』『必要とあらば「宇宙作戦隊」による1回限りの火力支援も可』としか言われていない。

つまり、あれをどう料理しようが上層部からは何も言われないということだ。

「……光栄だな」

海上保安庁の有人巡視船『しきしま』は迫り来る『グレードアトラスター』とその連れを全滅させる計画を練り始めた。

カルトアルパス港

カルトアルパス港管理局局長ブロントは恐怖と期待が入り混じった感情で空を見ていた。

上空には多目的戦闘型天の浮舟『ジグラント2』が何機も編隊を組んで南の空に消えていく。

視線を港に移すと、世界の強国と言われる国々の艦隊が、陣形を組んで南下を開始していた。

『日本国有人巡視船、出港!!』

ムーのラ・カサミ級戦艦よりも長大な、ミリシアルの巡洋艦並みの大きさの日本国の船は、最初発となる。

戦場では目立つであろう純白の美しい船体もさることながら、1隻のみで派遣してくるあたり、戦闘力に自信があるのだと彼は判断する。

『マギカライヒ共同体機甲戦列艦隊、出港!!』

『アガルタ法国魔法船団、出港!!』

『ニグラート連合竜母艦隊、出港!!』

『ムー機動部隊、出港!!』

日本国だけでなく、列強、中央世界、第2文明圏で名を連ねる強国の艦隊が次々と出港していく。

それはとても壮観な光景であった。

今回の派遣艦隊、臨時連合軍の戦力をまとめると、下記の通りとなる。

○ムー

戦艦2隻、装甲巡洋艦4隻、巡洋艦8隻、空母2隻

○日本国

有人巡視船1隻

○トルキア王国

戦列艦7隻

○アガルタ法国

魔法船団6隻

○マギカライヒ共同体

機甲戦列艦7隻

○ニグラート連合

戦列艦4隻、竜母4隻

○パンドーラ大魔法公国
魔導船団8隻

○エモール王国
風竜騎士団22騎

○神聖ミリシアル帝国
巡洋魔導艦8隻

総勢61隻にも及ぶ、大艦隊である。

しかし列強、特に上位の国々は戦列艦等を戦力として数えていない。

それは『しきしま』も同様であった。

「約600年前の艦船に負けるとは思っていないが、こうなる前に我々だけでも逃げてしまえばよかつたな」

「任せろ」とは言ったものの、相手は世界最強の戦艦である大和と全く同じ艦に、空母機動部隊がセツトおまけについてきているのだ。

それに比べて味方が頼りない木偶の坊ばかりようであれば、多少の尻込みくらいはしても良からう。

「日本という看板を背負っている以上、外交官殿達の顔に泥は塗れませんよ」

「分かつてる。それより、支援攻撃の準備はもう出来ているんだよな？　ほぼ任意のタイミングで出来るんだよな？」

「もう準備も完了しましたし、時間設定があれば誤差1秒以内でいけるそうです」

「勝ったな」

「どうでしょうね。レーダーで見た限り、敵はあまり固まっていように見え……あ、敵空母と思しき艦が飛行隊を発艦させました」

「まずはそつちか。……200機もいるんだな？　なるべく一網打尽にしたい。味方に航空戦力を出さないようにと言ってくれ」

「了解しました」

彼らは自らの行く末を憂う。

しかし、負けるなどとは微塵も思っておらず、虫のように冷たい戦意を滾らせていた。

『全特別戦闘員に告ぐ！』

各員変身薬の使用上限解放
ウエボンズフリー!!』

続々と港を出港していく世界の強国たる艦隊群。

それらの総数は61隻にも及び、堂々たるその雄姿は港にいる各国の者たちを安心させる。

ムーの機動部隊を指揮する司令官ブレンダスは、ムーの技術の象徴たる戦艦『ラ・カサミ』の艦上で、初のグラ・バルカス帝国との戦いを前にして自信に燃えていた。

彼は横に立つラ・カサミ艦長ミニラルに話しかける。

「敵の規模はどうなんだ？」

「はい、日本国から入った情報によると戦艦2隻、重巡洋艦2隻、巡洋艦2隻、駆逐艦5隻、空母4隻の大艦隊であります。ですが『生ける伝説』だけが接近しており、他は速度を落としているとのことですよ」

「戦艦の単騎突撃イ？ 敵は何を考えているんだ」

技術レベルはグラ・バルカス帝国より低いムーと言えど、戦艦の単騎突撃がどれほど無謀なのかは分かっていた。

相手が木造船ならば問題ないのだが、大口径砲を持った艦船が複数いる中に突っ込むのは狂っているんじゃないかと思えない。

「あとたった今日本国から入った情報なのですが、敵空母から2000機もの飛行機械が飛び立ったようです。それらは真つ直ぐこちらへ向かってきているとも」

ブレンダスは息を呑む。

「2000機か……。よし、戦闘機を発——」

「あ、いえ、待ってください。この通信には続きがありません……」
「なんだね？」

『超広空域制圧攻撃を行う。味方を巻き込む恐れがあるため、指定空域からの航空戦力の撤退と、離陸していない航空戦力の一時待機を要請する』と『巨大な波が発生する可能性あり。沿岸部の一般人を高台

に避難させよ』です」

「はあああああああ?!!」

神聖ミリシアル帝国、エモール王国などを始めとする「航空戦力」を持つ国の人々は全員、彼と同じように声を荒らげていた。

それも当然と言えば当然だろう。この世界では航空戦力には航空戦力をぶつける他ないのだから。

「おいおい…日本国の戦艦が急加速して行ってるぞ…。我々を置いて単騎特攻する気か?」

「ゲツ…海魔みたいな速さですね。性能と言い、見た目と言い、日本国の戦艦は本当に目立ちますな」

彼らの目線の先には、その大きさからは考えられない速度で白波をたてる、戦場には似合わない真っ白な『しきしま』の姿があった。

「……技術部の連中に日本国の艦は凄まじい性能を持っていると聞いたが、本当に大丈夫だろうか?」

「…どうでしょうね? 敵飛行機械がワイバーンオーバード程度に強いと仮定したら、あの数を無傷で凌げる艦なんて、魔帝の『対空魔船』くらいしか思いつきません」

「まあ、あまり期待はしないでおこう。『マリン』をいつでも発艦できるようにしろ」

「了解!」

そのような指示を出したのはムーだけでない。

神聖ミリシアル帝国は近くの飛行場基地に配備されている最新鋭制空戦闘機である『エルペシオ3』をいつでも離陸させられるようにし、エモール王国の風竜騎士団や、その他の航空戦力を持つ国も同様であった。

「日本国はいったい何をするつもりだ…?」

臨時連合軍の兵達は不安と期待の入り混じった思いで『しきしま』の勇敢とも蛮勇ともとれる行動の行く末を見守るのだった。

カルトアルパス南方沖 海上
グラ・バルカス帝国空母機動部隊 第1次攻撃隊200機

グ帝の空母から飛び立った航空機約200機は、針路を真つ直ぐ、港町カルトアルパスにとつていた。

第1次攻撃隊の攻撃目標は、恐らく迎撃をしにくるであろう敵航空戦力の殲滅、異世界の有力国の連合艦隊への適度な攻撃、そしてカルトアルパスへの爆撃である。

だが実際は神聖ミリシアル帝国を打ち負かし、グラ・バルカス帝国の強さを、恐怖を全世界に知らしめるのが主目標であるため、明確な軍事攻撃目標はない。

航空隊第3中隊の中隊長スバウルは、どこまでも広がる青空を見つ、今日は祖国にとって最良の日になるだろうと確信していた。

「ふ…帰ったら酒の1本や2本くらい開けても良さそうな気がするな。なあ、相棒？ あ、お前は燃料しか飲めんかったな」

彼は相棒である『シリウス艦上爆撃機』に話しかける。

当然返事はないが、彼は自分が1人ではないと知っていた。眼前には帝国の誇る『アンタレス艦上戦闘機』が、横には苦楽を共にした第3中隊の仲間が、そして後方には『リゲル雷撃機』が飛行していたからだ。

「しっかし、敵の航空戦力はまだ来ないのか？ 戦闘機の連中はさぞかし暇だろうな…」

しかし、次の瞬間であった。

——バチバチバチイ!!!!

突如機体から大量の火花が上がり、燃料に引火したのか、両翼が内側から爆発する。

それは前や横を飛ぶ機体も同様であり、空が赤色に包まれ、黒く焦げた残骸が落ちる光景は、まるでこの世の終わりのようだった。

しかしスバウルは幸運だった。

彼は爆発に巻き込まれて即死したため、燃えながら落ちる機体の窓から、燃えた蝶のように乱れる友軍機の姿を見る事が無かったからで

ある。

『なんだ！ 何が起こっ——ザザザ——……』

『敵はなんだ！ どこにいる——ザザザ——……』

かろうじて『H・ADS』の攻撃範囲から外れていた機もパイロットだけが死亡し、無傷の機体は次々と海の藻屑となって消えていく。

地獄絵図なんて言葉では生温い、最悪の現実がその海域には広がっていた。

しかし運良く生き残ったのか、それとも生かされたのか、何機かは無傷で飛行を続けていた。

『リゲル雷撃機』のみで構成される雷撃部隊30機である。

「助かった……のか……？」

彼らの眼前には雲一つない青空が広がっており、先程見た光景が吹き消されそうなほど美しい海が輝いていた。

『おい！ 隊長は無事か?!』

『いや、さっき墜落したのを見たぞ。異世界には不思議な現象があるもんだな……』

『とりあえず状況を報告しよう。いくら敵の航空戦力が弱いとは言え、魚雷を積んだまま空戦はしたくない』

『そうだな』

彼らのうち1人が無線機を手に取り、後方に待機している艦隊に報告を行った。

41話：フオーク海峡海戦Ⅱ

レーダー上に映る200もの点が一気に30まで数を減らした。

その情報は現在進行形で単騎特攻中の『グレードアトラスター』だけでなく、後方にいる艦隊の各艦長も確認していた。

全ての艦の艦橋が異様な空気に包まれる中、生き残りの機から通信が入る。

『こちらリゲル雷撃隊、突如前方の友軍機が一斉に爆発する現象を確認。その後、機体は無事なのにパイロットだけが死亡する現象も確認しました』

「なんだ！ なにが起こったのだ?！」

軍属ではないが『グレードアトラスター』に搭乗しているシエリアの、半ばヒステリックな叫び声がキンキンと響く。

『異界の気象現象か、敵の攻撃か、偶然が重なりに重なった事故のいずれかと思われます』

しかし彼女以外は冷静であった。

「……さて、2つ目の選択肢は除外だな。レーダーに敵らしき姿はないのだろうか?」

「はい」

『グレードアトラスター』艦長ラクスタルは当初、帝国の誇る機体が一瞬で消滅したことに少なからず驚いていたが、最終的に「原因は不明だが、たまたま不運が重なってこうなったのだろう」と判断し、冷静さを取り戻していた。

「艦隊司令に第2次攻撃隊を発艦させるように伝えてくれ。生き残りのリゲル雷撃隊はその場で待機、攻撃隊と合流した後、彼らと攻撃に参加させる」

「了解、そのように伝えます」

通信員がボタンを押し、ラクスタルが言った通りの事を友軍に伝える。

しかし応答はない。

「…あれ? 艦長! 連絡が繋がりません!」

『ベテルギウス』応答せよ！ 応答せよ！ 誰でもいい！ 応答せよ！』

しかし流れるのはザーというノイズの音だけ。いつの間にかレーダーの画面も真っ白になっており、彼らは妙な違和感を感じる。

「…なんだ？ 故障か？」

全然違う。

彼らが知る由もないが、それは日本国の電子妨害ジャマーであった。時は少しだけ遡る…。

数分前――

日本国海上保安庁有人巡視船『しきしま』

「何機かの雷撃機以外の敵はロックしました！」

「よし！ 撃て！」

護衛艦だけでなく『しきしま』にも装備されている『H・ADS』が音もなく何も無い空間へと向き、電子レンジのような音を立てて起動する。

――ヴウウン…

真っ向から戦うための船ではない『しきしま』はミサイル等は搭載しておらず、総合的な火力性能は低い。

しかしこの兵器が稼働している限り、ミサイルやドローン等から攻撃を受ける可能性を大幅に下げる事が出来る。

例えばそれが、人の乗った航空機だとしても。

水平線の向こう側を飛ぶ敵に「見えない攻撃」が襲いかかる。

『マイクロ波』への対策が十分に施されている兵器なら、これを照射されても電子部品が一時的に狂うだけだが、対策が十分ではない航空機は容易に撃墜される。

水平線の向こう側を見るレーダーは、『H・ADS』の真価を画面に

映し出した。

「敵機残り30!」

『よし! 特別戦闘隊行け! 1つも残さず奪って落としてやれ!』
瀬戸の合図と共に甲板で待機している特別戦闘団の職員達が各々の変身薬を取り出し、服用する。

「人為変態:!!」

ある者は背中から薄く透明な羽が生え、またある者は足の形状が大きく変化する。

彼らは軍人でも、自衛隊員でもなく、本来の主任務は戦闘なんかではない。

しかし軍隊に勝るとも劣らない実力を持った彼らは、何度も実戦を経験した戦闘のエキスパートである。

『頼むぜ! お前ら!』

「応ツ!!」

蟲の群は大空へと飛び去って行った。

生き残ったリゲル雷撃隊30機

「応答せよ! 応答せよ!」

『リゲル型雷撃機』のパイロットであるカースは無線機に向かって懸命に話しかける。

先程の不可思議な現象後、何故か誰とも通信が出来ないのだ。

「……ダメか」

無線機を手元に置き、彼は非常時の小型信号灯を使って仲間に見覚的通信を行う。

「こ・つ・ち・も・つ・な・か・ら・な・い……つと」

通信が出来ないのは艦隊だけではない。編隊を組んでいるすぐ隣の機とも無線での連絡が取れないのだ。

こんな現象は今まで聞いたことがない。

さっきの現象と何か関係があるのだろうか？

「はあ…今日は最悪の1日になりそうだ」

パイロット達は思い思いにコックピット内で愚痴る。

それらは上に聞かれたら不味い内容ばかりなのだが、こんな状況ならむしろ聞こえていた方が嬉しいくらいだった。

「……ん？ なにやってんだあいつ？」

突如編隊を組んでいた機体のうち、1つが急上昇を始める。

よく見ると機体の底の魚雷がなくなっており、何百kgもある重量物から一瞬で解放されたため、勝手に上昇してしまったのだろうかとは考えた。

しかしあの機体のパイロットが魚雷を意図的に投棄したのか、それが事故で落下したのかは定かではない。

それが敵襲であると気付いたのは、その機体のエンジン部分から炎が噴き上がるのを見てからの事だった。

「あ?! 敵襲か!!」

「全機交戦開始!」の発光信号が送られ、彼らは編隊を解いて大空へと舞う。

カースが操る機体はエンジンを大いに唸らせ、翼端が雲を引いた。

「…やけに上昇速度が速い!」

機体は魚雷を積んでいるとは思えないほど軽くなり、海面がグングンと遠ざかる。

空戦では高度を取った方が有利であるため、カースは無我夢中で太陽へと向かっていた。

もはやエンジンの音も聞こえないくらい——

「…あれ?! エンジンは?!」

実際は音が聞こえないのではなく、そもそもエンジンが機能していなかったのである!

「うわあああああ!! クソっ! クソっ!」

幸いにも高度は取れているため、海面に落ちるまで時間はある。

彼は機体の体勢を持ち直し、それ以上の飛行は望めないため、姿勢を安定させ、滑空状態へと入った。

仲間が「異形の何か」と空戦を広げる中、彼の機体は徐々に高度を下げていく。

「…なんだあれは！ 人間か?!」

窓から見えたそれは、友軍機のエンジンを次々と破壊し、仲間を落としていつてる。

しかし、それは航空機なんかでは無い。

どう見ても人間だった。

「急加速に急停止?! しかもバックにホバリング?! なんて機動だ!!」

恐らく敵と思われる…いや、すでに交戦しているため敵なのだが、彼らは急加速、急停止、バックやホバリングなど、人間の造る飛行物体には不可能な機動で仲間を翻弄している。

手に持っている「剣」や「槍」で仲間の機体が次々と損傷を負い、すでに自分と同様に戦域から離脱する者が増え始めていた。

「どんな業物わざものでも鋼鉄で出来た機体を斬るのは不可能じゃないか?! なんなんだあいつら!!」

おまけに友軍機のほぼ全ては魚雷を強奪されて(?)おり、専用の運搬車がないと運べないほど重いはずの魚雷が、たった数人の羽がついた人間に海面へと運ばれていく様子が見えた。

「あ…! 魚雷を海面の仲間に渡している?! 敵の狙いは兵器の鹵獲か!」

エンジンが破壊されたないためこれ以上は高度を取ることが出来ないが、操作系統と機銃は機能するはず。

彼は操縦桿を握り、海面の敵に向かって急降下を始めた。

帝国の技術が敵に伝わり、それを真似されたら祖国の進む道は一層険しくなる。

彼は命と引き換えに祖国の安寧を選んだのだ。

「帝国よ! 永遠なれ!!」

機銃発射のボタンをグツと押す。

しかし何も起きない。

「こんな時に故障か?! クソ野郎が! このまま機体ごとぶつけてや

る！」

しかし、彼の目論見は叶わなくなった。

突如機体のコントロールが効かなくなったかと思うと、両翼が根元からモグているのに気付いたのだ。

カースは空を仰ぎ、未だ無謀な空中戦ドッグファイトを繰り広げる友軍の奮戦を願いつつ、祖国の未来を憂う。

バランスを失った機体は、パイロットを抱えたまま海面に激突し、木端微塵に砕け散った。

その後――

「よし、ほとんどは無傷で鹵獲出来たぞ。傷物は捕虜と一緒に『しきしま』行きかな」

不時着した機のパイロットを全員ゴムボートに収容した海上保安庁の職員らは、鹵獲した魚雷を海に浮かべ、調査をしていた。

「で、これ大丈夫そうか？」

「ああ、調べた感じだと、まずは安全ボルトを取って、次に木製のキャップを取ったらスクリューの固定ロックが解除されて……」

調べたところによると、グラ・バルカス帝国が一般に配備している航空魚雷は旧日本軍の『九一式魚雷』とほぼ同等であることが分かった。

その起動方法も捕虜を尋問したら聞き出せたため、彼らはいつでも魚雷を起動できるようになっている。

「じゃあ今言ったことをやったら、後はこれを抱えて泳ぐだけ？」

「そうだ。しばらく泳いだら勝手にエンジンが作動するらしいから、後は作戦通りにな」

「了解」

瀬戸船長の作戦が上手く行けば、これらは全て無用となるが、作戦が失敗した時用の保険として彼らは複数の人員を残して別れることとなった。

日本国海上保安庁有人巡視船『しきしま』

「船長、特戦隊が魚雷の鹵獲に成功。操作方法も調査と尋問によって判明いたしました」

「よし、これで保険は揃ったな。敵艦隊の通信に割り込め。敵艦同士が連絡できるように、電子妨害ジャマーは一旦中止」

「…本当にやるんですね」

副船長が苦々しい顔をする。

場合によっては、これから何千もの命が一瞬で消えることとなるのだから。

『しきしま』だけで巨大な鋼鉄の城を沈めるのは厳しいからな。撤退させるか、少なくとも数を減らしてからでないと俺らが危ないのは理解してくれ」

「理解しているつもりですが、やっぱり嫌なもんですよ」

「…俺もだ。さっ、降伏勧告を行うぞ。これをやっとかないと色々な団体がうるさいからな」

旗艦オリオン級戦艦『ベテルギウス』の艦橋に、突如知らない男の声 flowed。

『あーあー。こちら日本国海上保安庁「しきしま」の瀬戸です。この通信を聞いているグラ・バルカス帝国の1番偉い人、応答せよ』

「ツ?!?!」

当然だが、全ての艦の艦橋は騒然とする。

先程まで全く通信が使えなかったのに、いきなり敵から通信が届くなんて驚かない方が無理だろう。

なにより、敵に通信を送るなんて自らの位置を曝しているようなものであり、ハッキリ言ってそんなことをやるのはバカしかいないからだ。

「司令！ 他艦とも連絡がつかしました！」

「待て！ まず敵と話してからだ！」

瀬戸の通信に最初に返事をしたのは、オリオン級戦艦『ベテルギウス』に搭乗する艦隊司令アルカイドであった。

「グラ・バルカス帝国の東征艦隊司令のアルカイドだ。日本国の瀬戸と言ったな。何の用だ？」

『ようやく応答してくれたな。全艦撤退しろ。さもなければ沈める』

予想通りと言うか、予想の斜め上と言うか、全員が「こいつはバカなのか？」と全く同じ感想を抱く。

これで撤退する敵がいるわけないからだ。

「ふっ…バカめ！ そんなことする訳ないだろう?! 貴様の住む日本国というのは相当な平和ボケ国家のようだな?!」

『え〜。殺さないで置いてやるって言ってるのに?』

敵は随分と腑抜けた奴なのだろうとアルカイドは判断した。

「烏合の衆で何が出来ると言うんだ？ 日本国は我が国と同じように転移国家であるらしいから、少しは期待していたのだが、蓋を開けてみれば小口径の砲を数門しか搭載していないではないか！ そんな豆鉄砲で我らに傷を付けようなど片腹痛いわツ!!」

瀬戸は少し考えた後、言い方を変えた。

見方によつては彼は他の艦を人質に敵を脅すカス野郎にも見えるが、これなら作戦の主導権を握る人は変わり、場合によつては戦わずに済むかもしれない。

『じゃあ一隻だけで接近して来てる「グレードアトラスター」聞こえるか？ 直ちに回頭し、仲間を連れて帰れ。さもなければお前ら以外を沈める。これは艦隊司令ではなく、あくまで「グレードアトラスター」の艦長に言っているからな?』

「…???」

この通信は『ベテルギウス』だけでなく、他の艦も聞いている。

いきなり話題を振られた『グレードアトラスター』艦長ラクスタルは困惑しながらも返事をした。

「なぜ『グレードアトラスター』だけが接近している?」

『機密情報だから詳しいことは答えねーよ。でも「G A」グレードアトラスターだけが真つ直ぐ北上してんのはバレてんぞ。他の艦はその後方、約40km

の所で約5ノットで進んでいるのもな』

瀬戸と言う名の人物が言ったことは全て正解だった。

「何が目的だ？」

『言ったろ？ 「GA」艦長に告ぐ、直ちに回頭し、仲間と共に撤退しろ』

「回頭しなかったら？」

『グレイドアトラスター「GA」以外を沈めて、あんたらはお持ち帰りだ』

言葉は通じるのに話が通じない。

これは何とも奇妙なことであり、滑稽でもあった。

「司令に通信は繋がるか？」

「いいえ、もう繋がっていません。さっきのも含めて、恐らく日本国の仕業かと」

「あくまで私の一存で決めろと言うことか…」

ラクスタルは考える。

もし日本国の言うことが本当ならば、彼が撤退の命令を出さなかった場合、後方にいる艦隊は全滅するのだろうか。

だが、ハツタリかもしれない。

いや、ハツタリだろう。

日本国は電子系統の技術ではグラ・バルカス帝国よりも優れているのだろうが、軍事的にはそこまで強くないため、我々と戦うことを恐れているのだ。

「通信士、日本国に『バカめ！』だ。伝えろ」

「は、はい！ バカめ！」

通信は終わる。

それは終わりの始まりでもあった。

42話：フオーク海峡海戦Ⅲ

日本国海上保安庁有人巡視船『しきしま』

『バカめ!』

——ブチッ!

小学生のような悪口を吐かれ、敵との通信は強制的に終了する。

「バカめ!」はつまり「断る!」と同義語であると捉えて良いだろう。

瀬戸は菌痒い思いをしながらも、「支援攻撃」の着弾地点や細かな秒数を入力し、攻撃要請を行った。

「よし、例のあれはダウンロード出来たな? スピーカーに繋がっていつでも流せるようにしておけ」

「了解しました…本当に流すんですね、あれ」
「もちろん。機密情報の漏洩防止だよ」

日本国 防衛省 『宇宙作戦隊』本部

二十一世紀初期に創設された自衛隊の新たな宇宙部隊『宇宙作戦隊』。その人数と規模は約500年で比べ物にならないほど大きくなっており、宇宙空間における作戦行動の重要性がどれだけ膨張したかを裏付ける。

彼らの主任務は『火星生物』^{テラフォーマー}やその他の地球外生命体の接近を宇宙から観測するだけでなく、他国の軍事攻撃衛星の監視である。

しかし、今日という日は違った。

「司令、『しきしま』から支援攻撃要請です」

「やっぱり来たか。これは最終手段なんだが…人命には替えられん。応えてやれ」

「了解」

複数の職員がパソコンに人工衛星の投下座標や着弾時間を入力する。

現代地球では複数の軍事大国が存在する。その例にはアメリカを筆頭に、中国やロシアなどが上げられる。

当然、この三国やその他の国の仲は良いとは言えず、大戦は起きていないもの、お互いに何百年も砲口を向き合っているくらいであった。

そんな彼らが、技術の進歩と共に開けた、空中、海中に次ぐ新たな戦域を無視しない訳がない。

各国は次々に対人工衛星用の武装衛星を打ち上げし、時間が経つと対地攻撃に特化した対地攻撃衛星なども登場した。

しまいには原子炉を搭載した物や、人工隕石を降らせる巨大な物までが実用化される。

人類は宇宙空間すらも戦場に変えたのだ。

しかし日本国は憲法や民意という鎖にガツチガチに縛られていたため、宇宙空間における防衛という分野では他国よりも何歩も遅れていた。

技術的には可能でも、日本国は明らかに他国の領土を脅かすような兵器を配備できない。

衛星に搭載できるとすれば、『対火星生物用』や『必要最低限』を謳った『小型熱光線砲』くらいである。

しかし当然ながら、これだけでは宇宙空間における日本国の安全は守れない。

そんな中、とある研究者が紅茶を片手に思い付いた。

「武装なんかしなくても、人工衛星自体を兵器にすりやあええやんー」まさに逆転の発想から生み出された、現代の『特攻兵器』。それは対地攻撃用の武装を搭載せずとも、いつでも敵国の領土を壊滅に追いやる画期的な手段であった。

すぐさま防衛省はこれを承認。

数世紀前に編み出された『徘徊型自爆ドローン』の発想の応用で『徘徊隕石』が生み出されることとなる。

その概要は、世界でもトップレベルの技術力を持ちつつも、敵国への攻撃方法が限られる国にしか真似できない、まさに変態兵器（クワック兵器）であった。（真似出来ないとは、コスト的な意味で。これをするくらいなら核搭載のICBM（大陸間弾道ミサイル）を配備した方が良い）

『人工隕石（衛星）落下攻撃』

文字通り人工衛星を落下させ、物理的なエネルギーのみで敵国の軍事施設（軍事施設だけとは言っていない）を破壊する兵器構想。

ロケットの技術が発達した現代、打ち上げられる物体の大きさや重量が大幅に増えたことや、宇宙空間での戦闘行為が危惧されるため、ほとんどの人工衛星は巨大化、武装化を経た。

その中でも日本国の人工衛星の大きさや重量、武装の少なさは突出している。

日本国の人工衛星の重量は脅威の100トン。

その重量の90%以上は内部の精密機械を覆う特殊な合金で出来た殻によるものであり、積極防衛を謳う日本国は他国の軍事衛星の攻撃による被害を軽減するための装甲だと説明した。

どれだけハイテクな時代になっても、ただ飛来してくるだけの金属塊がどれだけの脅威かは各国の軍人も理解している。

しかし日本の金属塊はやり過ぎだった。

ザツと計算してみた結果、落下エネルギーは数百年前に広島に投下された原爆に匹敵する。

しかもそれは空中で爆発するのではなく、そのまま落下してくるのだ！

加害範囲は原爆に劣れど、地下鉄や簡易防空壕、地下深くに建設されたシェルターでさえも、これの前では無意味！

おまけに日本国は「それ」の軍事転用の意思は認めておらず、彼の国があれを打ち上げた理由はあくまで気象観測であるため、表立って非難することはできない。

——と言うのが、世界的に噂されているネット都市伝説であった。

しかし火のないところに煙は立たぬ。

日本国はいざとなれば「衛星」を任意の場所に好きな時間で落下させる事も可能だったのだ。

何度も日本を救った『神神の怒風槌』が、グラ・バルカス艦隊を襲う。

グラ・バルカス帝国 東征艦隊

『あーあー、再び日本国の瀬戸です。グラ・バルカス艦隊司令アルカイド応答せよ』

しばらくすると、レーダーも無線も使えない艦橋に、再び瀬戸の声が響いた。

アルカイドは「また降伏勧告か？」と顔に笑みを浮かべる。

彼は頭の中で、どんな言葉で断つてやろうと妄想をしていたのだ。

「艦隊司令アルカイドだ。また貴様が、何用だ？ 『グレードアトラスター』はどうした？」

『グレードアトラスター』は俺達の降伏勧告を無視し、北上を続けている。もうあんたらはおしまいだ。1隻も助からない』

またこのハツタリか。と、同じく通信を聞いているラクスタル艦長は思う。

『だから冥土の土産にしちやあしよぼいが、あんたらの連絡機能を回復させてやる。戦友に最後の別れを告げるが良い』

瀬戸は続ける。

『タイムリミットは…5分だ。ちなみに海洋のど真ん中で出来ねえと思うが、本国への連絡はさせねえぞ？ そこはキツチリと制限するかな。じゃあ、よいい始め』

通信が切れると同時に、他艦との通信が回復する。

やはり日本国は電子技術は帝国より優れている。だが、戦うのを恐れているようだ。

「ふっ…はっ！ ハツハツハ!!」

艦橋が笑い声に包まれた。

嘘もここまで堂々としていれば、もはや面白いときえ思えてくる。レーダーは相変わらず使えないが、周囲に敵らしき姿はない。

たった5分で空母機動部隊を含む（すでに艦載機はほとんど無いのだが）大艦隊を全滅させるなんて無理に決まっている。

『グレードアトラスター』艦長ラクスタル君、聞こえるか？ そのまま北上を続けてくれ。先に連合艦隊を全滅させ、カルトアルパスを火の海にしてやれ』

『日本国の重巡洋艦はどうしましょう？』

「あの真つ白な奴か。鹵獲できれば良いが、そんな暇はないだろう。サクツと沈めてくれ」

『了解しました』

彼らは気付いていない。

いや、気付く由もない。

すでに超高空から破壊の火の玉が迫っていることに。

遡る事少し前――

カルトアルパス沖　海上保安庁有人巡視船『しきしま』

敵との交渉が失敗に終わり、カルトアルパス沖で停泊する『しきしま』から、本国の『宇宙作戦隊』に支援攻撃を要請した瀬戸は、双眼鏡でカルトアルパスがある北の方を眺めていた。

「あいつら連合艦隊ようやく追いついて来たな。ミ帝の艦に魔信を送れるか？ ムーでも良い」

「ミ帝に繋がりました。どうぞ」

彼は魔信器を手に取り、話しかけた。

「こちら日本国海上保安庁有人巡視船『しきしま』船長瀬戸です。神聖ミリシアル帝国艦隊応答せよ」

『こちら神聖ミリシアル帝国南方地方隊の巡洋魔導艦隊司令のパテス

だ。戦果を独り占めにしようとする強欲な日本国が何用かね?」

旗艦『ゲイジャルグ』に搭乗する彼の声は、怒りにも呆れにも似た感情を孕んでいた。

「その節は大変申し訳ございません。敵航空機200機は全て撃墜したのでご安心を」

『…本当か? それは素晴らしい』

やはりまだ怒っている。

『ところで沿岸部の一般人は全員避難させたぞ。来るんだな? 高波が』

「はい、世界連合の各艦にも転覆しないよう伝えてください」

『承知した。そこまで言うのなら、日本国の力を見せてみよ』

怒りがある程度期待へと変わり、通信が切れる。

瀬戸はミ帝が言うことを聞いてくれるのか心配していたが、帝国の上層部は思ったよりも優秀なようだった。

「よし、始めるぞ! 気合い入れてけよ!」

「了解!!」

彼はマイクを手に取り、すでに近くまで来ている世界連合にもスピーカーの音が聞こえるように音量を調節した。

『これより敵艦隊に攻撃を行う! 日本国科学呪文式賛美歌、詠唱開始!!』

そして彼はスイッチを押し、その海域にとある音楽が流れ始めた。

43話：フオーク海峡海戦ⅠⅤ

世界連合艦隊　　神聖ミリシアル帝国　　南方地方隊　　巡洋魔
導艦隊旗艦『ゲイジヤルグ』

日本国の巡洋艦との通信が終わり、ミ帝の魔導艦隊司令であるパテスは、横にいるニウム艦長に問う。

「ニウム艦長、日本国はいったい何をするつもりだと思う?」

「さあ：全く予想が付きません。『超広空域制圧攻撃』なる魔法も初めて聞きました。味方航空機の撤退を促したということは、無差別範囲攻撃でしょうか?」

「でも日本国に魔法は無いと聞いたぞ」

「そうなんですか。じゃあ我々にとって未知の分野となりますね」

日本国は科学だけで発展を遂げてきた不思議な国であるらしい。

科学という分野ならばムーもそうであるため、彼らはムーの艦隊司令に日本国がどのような攻撃をしたのか、そしてするのかを聞いてみたが、失敗に終わった。

曰く、全く見当もつかないと言う。

『超広空域制圧攻撃』に関しては、ムーは日本国の巡洋艦が大量の対空魔導砲のような物で「弾幕」を張ったのではないかと予想していた。「ムーも分からないとなると、日本国独自の物か…」

「そもそも『超広空域制圧攻撃』で敵の飛行機械を落としたのでしょうか? それとも、これからその魔法が起きるのでしょうか」

「分からない。それは戦後に聞いてみる他ない」

2人はしばらく雑談を続ける。

それからしばらくすると、日本国の真っ白な巡洋艦から、魔導拡声器のような物で大きくしたと思われる、瀬戸の声が聞こえてきた。

『これより敵艦隊に攻撃を行う!　日本国科学呪文式賛美歌、詠唱開始!!』

「二なツ、なんだそれはツ?!?!」

それは魔法文明にとっても、科学文明にとっても、完全に未知の物

であった。

それもそうである。これはハツタリなのだから。

だが、このハツタリはとんでもない勘違いを起こすと共に、日本国の最終兵器を隠蔽することに成功した。

「かッ…科学呪文？　じゅツ…呪文式賛美歌？　聞いた事が無いぞ?!」

古の魔法帝国の遺産を研究しているため、魔導技術では世界最先端を誇る神聖ミリシアル帝国の人間ですら、そんなものは聞いた事が無い。

「呪文や詠唱と言っていることから予想するに、魔法ではないか?!」

「いいや！　科学呪文だと言っていただろう?!　恐らく魔法文明と科学文明が手を取り合ってこそ生まれる「なにか」だと思うぞ！」

「いや、魔力反応が感じられない！　やはり完全に科学の産物ではないのか?!」

瀬戸の目論見通り、世界連合に参加している各国の艦隊は大混乱を極めていた。

神聖ミリシアル帝国やムーは日本国が『人工衛星僕の星』という空から全てを見渡す「目」を配備しているのを知っている。

だが、いくら友好国とは言え、無数の目の一つを失う代わりに空から攻撃できるといふ最終手段を知られる訳にはいかない。

そのため瀬戸はややこしい言葉を言い放ち、人工衛星の落下という事実を上手く隠蔽しようとしたのだ。

「目論見通りですか？　船長」

「ああ、最高だ。まさかこれほどまでに混乱してくれるとは思わなかったよ」

「人が悪いですね。じゃあ動画を再生しますよ」

「頼む」

脳内のチップとスピーカーを無線で接続し、副船長はダウンロードしておいた動画を再生し始めた。

「ん…？　待て！　何だこの音楽は？」

混乱を極めていた艦隊に、とある音楽が流れ始める。

それは現代日本人なら人生に1回は聞いた事があるであろう、あの曲だった。

『母なぐるく大地のく　ふとこころにく』

大地讃頌

1962年に、大木惇夫の作詞、佐藤眞の作曲により書かれた「混声合唱とオーケストラのためのカンタータ『土の歌』」の終曲である。「懐かしいなあ！　中学生の時に歌ったこれを、まさかこんな所で大音量で流すとは思わなかったよ」

「私も歌いましたよ、これ。懐かしいなく！　我らく人の子のく喜びはあくるく」

『大地くを愛せくよく　大地く_に生くきくるく』

未だ流れ続ける未知の曲に、連合艦隊の面々は度肝を抜かれながらも、聞き入る。

それはパテスとニウムも同様であった。

「これは日本国の賛美歌でしょうか？　日本人は神ではなく、大地を愛すのですね」

「まあ日本国には八百万やおよろずの神がいるらしいからな。大地もその1つなのだろう」

しかし1つの曲としては良いのだが、呪文詠唱にしては遅すぎる。

神聖ミリスリアル帝国ではとうの昔に高速自動呪文詠唱を実用化しているため、違和感は拭えなかった。

「…遅いな。賛美歌と言っていたが、賛美歌自体が呪文なのか？」

「その可能性はあるかもしれませんが。我々に真似できそうな物ならば、我々も賛美歌詠唱式の魔法を研究するべきでしょう」

世界最先端、世界最強というプライドなどとは言っていられない。他国に優れた物があるならば、我々も真似をするだけである。

パテスは魔信機を手に取り、問う。

「日本国よ。これは何分ほど続くのだ？」

『ええと…3分です』

「そうか、教えてもらい感謝する」
通信を切る。

「3分か…威力が低ければ研究案はボツだな」

「確かにちよつと長いですね。早める事は出来ないのでしょうか？」

彼らは考察を進めていく。

これから高波が来るなんて事は、すっかり忘れていた。

グラ・バルカス帝国 東征艦隊旗艦『ベテルギウス』

「アルカイド司令、あの…ちよつと来てください。艦長も」

「なんだ？」

このタイミングで海上の観測を行う人物から、着いて来るように言われる。

彼は日本国の艦隊でも来たのだろうかと考えた。

だが、まずは自分の目で見ないことには始まらない。

2人は言われるがままに着いて行き、艦橋付近の見張り台に到着した。

「…何も見えないではないか」

「いいえ。司令、上です」

「上え？」

彼は空を見上げる。

彼の視界に燃え盛る火の玉のような、炎を纏う石のような物体が写った。

「なんだあれは？ まさか日本国の攻撃ではないだろうか？」

「さあ…？ 隕石ではないでしょうか？」

彼らの常識からすれば、隕石を降らすなんて不可能である。

そのため、これが日本国の宣言通りの攻撃だとは判断しなかったのだ。

「段々大きくなっていないか？ 付近に落ちたら転覆する可能性もあるぞ」

「そうですね…。一応退艦の用意はさせておきましょう。内部にいる

よりかは、助かる確率が高いはずです」

「そうだな。いつでも退艦できるように伝えておけ。他の艦にも発光信号で退艦用意の命令を伝えろ」

「了解」

口にこそ出さなかったが、アルカイドは微かな不安を感じていた。もし日本国の言う事がハツタリではなく、本当だとしたら？

状況的に考えて、この艦隊はあれの直撃を受けることになる。

直接的な被害を受けなくとも、その衝撃波や、引き起こされる巨大な波によって艦が損傷、沈没する恐れさえあるのだ。

艦に直撃した場合、鉄の塊が一瞬で木端微塵にもなるだろう。

「艦長、進路を少しだけズラしておこう。他の艦もだ」

「え？ 分かりました…」

グラ・バルカス艦隊は念の為、お互いに距離を取りながら、針路を東に向ける。

それが焼け石に水程度の効果すら無いことは、誰も知らない。

同時刻――

世界連合艦隊

巨大な火の玉の姿は、世界連合も確認していた。

「おい！ なんだあれは！」

こちらはグラ・バルカス艦隊とは違い、火の玉が炎を引いているのをハツキリと確認できている。

中にはその姿を後世に残そうと、魔写を撮ろうとする者もいた。

ミ帝艦隊の旗艦『ゲイジヤルグ』に搭乗するパテスは、未だ流れ続ける音楽に耳を傾けながらも、驚愕の表情を浮かべていた。

「あれは隕石か?! まさか日本国は隕石を降らす魔法を開発したと言うのか！」

「司令！ 落ち着き下さい！ そんなことが出来るのは神以外におり

ませぬ！」

「バカものッ！ 賛美歌は神に捧げる歌だろう?! 日本国は神の力を借りて隕石を降らしておるのだ!!」

「まさか……そんなことが……いや、有り得ませぬ！」

彼と同じように考えている者は、他の艦にも居た。

それは日本国のロデニウス大陸における伝説を知っている者ばかりである。

曰く、現地のエルフが祈りを捧げたところ、太陽の印を掲げた太陽神の使者が救いに来た、と。

曰く、彼らは自らを日本国の者だとおっしゃった、と。

日本国は太陽神の使者！

そして彼らは神の力を借りて、隕石を降らしているのだ！

流れる曲は最後のクライマックスに入る。

隕石の放つ光が雲を妖しげに輝かせ、その場にいる全員がその光景に、感動に似た「何か」を憶える。

「ああ…… 神話の到来だ！」

「ラヴァーナナル帝国よ！ 見てるか！ これが太陽神の使者の力だ！」

古の魔法帝国は進み過ぎた文明ゆえに驕り高ぶり、ついには神に弓を引いたとされている。

それに神々は怒り、彼の国が支配するラティストア大陸に大隕石を落とそうとした。しかし彼らは国全体に結界を張り、大陸ごと未来へ転移して隕石から逃れたと神話では語り継がれている。

それはまさに、異界の驕り高ぶった侵略者を打ち払う、神々の怒りそのものであった。

その美しくとも残酷な光景に、ある者は膝をついて祈り、またある者は感動に打ち震える。

豪炎を纏う物が、人工物であるとも知らずに。

「瀬戸さん、あいつら何をやっているのでしょうか？」

「さあ…… この世界の宗教じゃないか？ 火星に行った日本人の言葉を思い出すな。ええと名前は……」

へたとえ火星に神がいなくても、地球にはいる

人は天を見て祈る。天は死者の世界であり、神のいる世界だからである。

そして人類がそれを意識するとき、あらゆる地の教えにおいてもほぼ例外なく、高くそびえ、天と地を繋げ、祈りを見届ける物が『宇宙樹』や『宇宙軸』と呼ばれ、聖性を帯びる。

象徴的なものでは『塔』や『神木』や『十字架』。広義には『靈峰』や『龍』や『柱』や――

「落ちるぞ。総員衝撃に備え」

「おオ…!! 神よ…!」

「なんだあれはツ!!」

「すまない…」

「貴艦に武運を…」

「戦友よ、仇は取るぞ。安らかに眠ってくれ」

流れる曲は最後の締めを迎える。

『稲妻』や『流星』を見て、人々は想った。

神を、先祖を、時に…仲間を――

――ドオオオオオオオオオオ………

世界連合の面々の視線の先が、太陽のように輝き、直後に巨大な水しぶきが水平線の遥か向こうに姿を現した。

それに混じる人工物も、彼らは認識する。

「あれは…軍艦…?」

それは、恐らく日本国の情報にあった敵の空母機動部隊なのだろう。

遠くで轟く爆音と、沈黙だけが海域を支配する。

神の御業を見た後で、陽気に笑える者はいなかった。

44話：フオーク海峡海戦Ⅴ

グラ・バルカス帝国 『グレードアトラスター』

『総員高波に備え！ 貴重品の固定も急げ！』

『外にいる者は内部に避難しろ！ 急げ急げ！』

グレードアトラスターは艦内、甲板共にパニックを起こしていた。

日本国の勧告を無視して北上した結果、あろうことか、彼の国は隕石を降らしたのだ。

隕石の大きさやトン数は不明だが、それが後方の空母機動部隊を含む東征艦隊から僅か数十mの地点に落下。

海面は大きくうねり、複数の艦がとてつもない量の水を被り、転覆。何とか転覆を免れた艦も想定を遥かに上回る高さの波に持ち上げられ、揺さぶられ、甚大な被害を被る。

そして未だ被害は受けていないものの、『グレードアトラスター』も津波への対応に追われていた。

「シエリア殿、艦橋も安全とは言えません。どうか安全な所に避難を！」

「わ…わかった！」

艦長であるラクスタルは飛ぶ鳥を落とす勢いで指示を次々に出し、操舵手は波が来ると思われる方向へ艦を斜めに向ける。

その動きの迅速たるや、彼らが帝国の最大最強の戦艦に乗り込む精鋭であることが伺える。

『艦長！ 巨大波が来ました！』

「総員衝撃に備えッ!!!」

ラクスタルは手すりに掴まり、水平線を睨む。

そこには駆逐艦を丸ごと飲み込みそうな高さの白波が立っていた。

「波高はッ?!」

「恐らく20m前後かとー!」

「20……! 耐えられるのかッ……?!」

波は刻一刻と迫っており、船員達はやれるだけの事をする。

しかし圧倒的に時間が足りない。

「甲板にいる者は全員、艦内に避難させました！」

「各種砲弾の固定強化完了！ 安全装置もくまなく調べました！」

ジワジワと壁が迫り来る。

うるさいはずの艦内が、酷く静かに思えた。

「来るぞお！ 気を付けろ!!」

——ゴゴゴゴゴゴ……

65000トンもある巨艦が持ち上げられ、まるで惑星の重力が狂ったように、船体が傾く。

ギギギと船体が軋むような音が発生し、固定していない備品が床を転げ落ちる。

そして一瞬だけ全員が重力を失い、次の瞬間に床に叩きつけられた。

「……………助かった…のか？」

「次が来るぞ!! 耐えろ!!」

しばらくすると、再び同じことが繰り返される。

次は波の程度が低かったのか、1回目ほど酷くはなかった。

しかし…

『また来るぞ！ 捕まれ!』

波は何回も、何回も『グレードアトラスター』を襲い、その度に乗組員達は痛い思いをする。

しばらくして警戒態勢が解かれると、船員達は過度の緊張と恐怖から解き放たれと喜び、ヘトヘトになりながらも立ち上がった。

「助かった…!」

『グレードアトラスター』

乗組員約3600人

死亡：9名

重傷：61名

軽傷：332名

大量の水を1度に被ったため、甲板にあるほぼ全ての備品が破損。対空砲も何基かが破損。艦の戦闘力に影響無し。他、目立った損傷無し。

結果：小破

ラクスタルはホツと一息つき、立ち上がった。

運が悪ければ、今ので転覆、もしくは沈没していたかもしれない。あの高波に耐えるとは、さすが帝国の最新鋭の戦艦だけはある。

「艦長、東征艦隊は恐らく全滅しました。この海域にいる帝国の戦力は我が艦のみです。どういたしましょう?」

「当初の予定通りに行くぞ。我が艦のみで海峡を封鎖し、世界連合を打ち破る。その後にレイフオリアまで帰るぞ」

「……日本国はどうしますか?」

「この世界では魔法を行使するには魔力が必要らしい。あれ程の大魔法だ。そう何発も行使出来ないと信じよう。それに、奴らはもう我が艦を攻撃できまい」

周りの空気が冷たくなる。

それも当然だ。もう一度あんな攻撃を受けてみる。どうやっても助からないのは目に見えている。

「…なぜ隕石攻撃はもうないとお考えになられるのですか?」

「じゃあ、なぜ日本国は『グレードアトラスター』ではなく、後方の艦隊を狙ったと思う? 目下「番近いの」の脅威は我々のはずだろう?」

副艦長は少し考えた後、気付いた。

「はっ……! 距離が近すぎるから……!」

「そうだ。そして今、世界連合の奴らも波への対処に明け暮れているはずだ。そこで疲弊したところを叩く!」

流星はラクスタル。『グレードアトラスター』の艦長に選ばれるだけの事はある。

だが、彼が1つだけ忘れていたのは、敵はまだ航空戦力を出していないこと。

そしてもう1つの誤算は、さっきの波も、世界連合の所に着くまでには、だいぶ威力が弱まっているのだ。

人工衛星
隕石が落ちてきたとは言え、その重さはせいぜい100トン、速度は音速の数倍。

数十年に数回、地球に落ちてきては、世界を震撼させる物に比べれば、かなり小さく、軽く、そして遅いのである。

それでも落下地点付近の被害が甚大になるのは変わりないが、多少離れてしまえば、その被害は微々たるものと言っても良い。

実際、世界連合の面々は高波が来ると聞いていたが、来たのは複数回に及ぶ2m〜5m程の高波。

小舟にとつては転覆するのに十分な高さだが、ある程度まで発展した技術で建造された軍船にとつては、そこまでの脅威ではない。

「ふう〜我々はこの程度で済んで良かったな。沿岸部は大変な被害を被るだろうが」

『しきしま』の船長瀬戸は、津波が思ったよりも低いことに安堵していた。

「津波は水深が浅い所ほど高くなりますからね。ミ帝に沿岸部の避難警報を解除させないように伝えておきましょう」

「おう、頼んだ」

彼はレーダーのスクリーンを見る。

そこに『グレードアトラスター』と思われる点は顕在であった。

「流石にこんくらいじゃあ『大和(もどき)』は沈まないか。しかも、まだ北上を続けているぞ。闘る気らしい」

「となると…当初の作戦通り行くのですね？」

「そうだ」

瀬戸はマイクを手を取った。

『世界連合に参加する各国にお伝えします。我が国が行った先程の攻撃により、敵は「グレードアトラスター」の1隻のみとなりました』

これを聞いた世界連合の面々は震撼すると共に、上層部に日本国と早めに国交を結ばせようと決意する。

そして日本国から敵艦の正確な位置情報を提供された航空戦力を

持つ国々は、追撃戦に移行した。

少なくとも、彼らは「追撃戦」だと思っていた。

相手を手負いの獲物だと思っていたのだ。

「瀬戸さん、なぜ敵の正確な位置を教えたのですか？　彼らが壊滅するのは分かっているでしょう？」

「いやいや、我々だけが戦果を独り占めにする訳にはいかないからな。なんなら彼らに倒してもらえば良い」

これは外務省への配慮でもあった。

もし日本国だけで敵を討ち滅ぼしたとなると、各国から「新参で文明圏外国のくせに強欲」と思われるのは想像に容易い。

それこそ「日本脅威論」なんて出たら最悪だ。

ならば、ここで味方に戦果を譲ってしまおう。

我々は敵を攻撃したが、残っている敵がどれだけ疲弊しているのかは知りません。後はご自由に。

全滅したら骨は拾っておきますよ！

そう、これからグラ・バルカス帝国と戦うことを考えると、彼の国が強いという事を各国に知ってもらわなければならない。

敵はVT信管を使用しているとの情報もあったため、恐らく味方の航空戦力は大打撃を受ける。

そうなったら、功を急いだ世界連合は敵に向かって突撃し、大損害を被るはずだ。

『しきしま』がこの戦場で生き残り、なおかつ日本国の顔に泥を塗らないようにするには、世界連合が疲弊したタイミングを狙って、戦う必要がある。

これから『しきしま^{日本国}』が必然的に戦わなければならない状況を作り出すのだ。

「魚雷は鹵獲できましたが…さっきの津波で半分程が勝手に走り始めた通信が入りました。残った魚雷は15本で、あれを『大和』と同等だと考えると、とても数が足りません」

「沈めるのは無理ってことか？　じゃあミ帝やムーにやってもらおうぜ。その方が日本のダメージは少ないだろ」

「いやいや…。あれが『大和』に勝てると思いますか？ 衛星からの動
画を見るに、中破もいつていないと思いますよ」

「……………無理そう」

瀬戸を含む『しきしま』の乗組員達は、日本国の勝手に死んでいく
数多の人間に対し、手を合わせる。

政治的な配慮がなければ、彼らが死ぬことはなかっただろう。

それでも、彼らはその道を選ぶしかなかった。

日本が生きる時代、世界は、強ければ良いと言う単純なものではな
いのだ。

『こちら神聖ミリシアル帝国、敵艦に対し、航空攻撃を行う』

『我がエモール王国も風竜騎士団を発進させようぞ』

『我が国もマリ^ムンを爆装させて発艦させます』

ムーの空母から複葉機の『マリン』が、ニグレート連合の竜母から
は『ワイバーンロード』が、神聖ミリシアル帝国の航空基地から制空
戦闘型天の浮舟『エルペシオ3』、爆撃型の『ジグラント3』、そして
エモール王国の風竜騎士団22騎が飛び立ち、『グレードアトラス
ター』のいる海域へと真っ直ぐ向かう。

「すっげえ光景だな…」

「ワイバーン」に「風竜」に「複葉機」に「ジェット機もどき」が空を
飛んでいる光景は妙にチグハグな感じがして慣れない。

だがこの世界の者にとっては、世界の強国が一丸となって異界の蛮
族を叩きに行く、素晴らしい光景に見えただろう。

逆に『グレードアトラスター』からはどう見えただろうか。

「ラクスタル艦長！ 敵の航空機約130機、トカゲ約100匹を確
認しました！ 我が艦に攻撃をするものと思われます！」

未だにレーダーが使えないため、視界を使ってでしか敵の確認がで
きないこの艦は、敵が接近していることに気付くのに遅れていた。

すぐさま艦内にブザーが鳴り響き、数多の対空砲が空へと向けられ
る。

『総員、対空戦闘配置!!』

45話：フオーク海峡海戦VI

『総員、対空戦闘配置！』

グラ・バルカス帝国『グレードアトラスター』の各員は、転移して初めてマトモな相手と戦える事に興奮していた。

転移してから相対した敵航空戦力はトカゲワイバーンくらいしかいなかったもので、中には腕の衰えを心配する者もいる。

「やつと敵らしい敵が出てきたな。あれに日本国の航空機はいないよな？」

「いないらしいぞ」

「よかった。じゃあ用心するのはミ帝くらいか」

見慣れたトカゲに、見慣れない細いトカゲ。

そしてグラ・バルカス帝国の若者からすると、彼らのおじいちゃん世代が乗っていたような複葉機に混じって、プロペラのないミリシアルの航空機が飛ぶ。

彼らからするとプロペラのない航空機は未知であり、敵としての期待値は高かった。

しかし――

「なんだこいつら？ 呆気なさすぎるぞ」

帝国の技術の結晶とも言える『近接信管』の前に、エモールの『風竜』やムーの『マリリン』、ミリシアルの『エルペシオ』と『ジグラント』でさえも全くと言って良いほど、歯が立たなかった。

対空火器が火を噴く度に多くの命が海の藻屑となっていく、十数分もすると、生き残った敵は撤退する。

ワイバーンは全滅、風竜も19騎が撃墜。

爆装を施した『マリリン』と『ジグラント』の奮戦も虚しく、爆弾の命中弾は3発のみ。

他に上げられた戦果と言えば、『風竜』『エルペシオ』『マリリン』の機銃掃射によって甲板上の人員を数人倒せただけだった。

『グレードアトラスター』

主砲、副砲ともに顕在。

高角砲は防楯があつたため、機銃掃射による損害は軽微。しかし敵の爆撃によって複数基が損傷。

爆弾や機銃掃射により人員22名が死亡、89名が重傷を負い、軽傷者数は300人を超える。

結果：中破

『世界連合』

ワイバーンロード：全滅

風竜騎士団：19騎が撃墜され、生き残りの1人が炸裂する対空砲の破片によって負傷。

マリリン：大半が爆装をしていたため速度や機動力が低下。最初に敵の対空主砲弾の直撃を受け、結果的に半分以上が撃墜される。

エルペシオ：12機撃墜

ジグラント：9機撃墜

「拍子抜けだな。日本国が強すぎるのか？」

「どうだかな。1部の技術は帝国よりも優れているようだが、直接手を出してこないあたり、やっぱ弱いんじゃないの？」

「さっきの隕石はどうなるんだよ？」

「さあ？ 観測技術だけは優れていて、事前にここに落ちると分かってたんだろ」

「なるほど？」

だいぶ暴論だが、旧世界でも新世界でもグラ・バルカス帝国は最強であると盲目的に信じ込んでいる彼らは、先程の隕石で東征艦隊が壊滅した事は偶然だろうと考えていた。

日本人はきつと敬虔な信徒のように跪き、当たるように祈っていたんだろうな。というのが彼らの総意である。

証拠に、あれ以来似たような攻撃はされていない。

「日本国の艦は技術は凄いが、大したこと無いに賭ける」

「おいおい、あんな小口径砲しか積んでないのが大したことある訳ないだろ。何ならケイン神王国、ミ帝、ムーの方が脅威じゃないか？」

「それもそうだな」

進み過ぎた科学は魔法と見分けがつかない。

後に、彼らは日本の恐ろしさを身を以て体験することとなる。

神聖ミリシアル帝国 南方地方隊巡洋魔導艦隊 旗艦『ゲイ
ジャルク』

「なん…だと…?!」

魔信機から入る戦況報告に、艦隊司令のパテスは慌てていた。

世界連合自体は烏合の衆とは言え、その航空戦力はかなり卓越した物があるはずだ。(ワイバーンを除いて)

なのに、彼らの結果は惨憺たるものだった。

帝国の戦果は機銃掃射による敵複数人の殺害、武装の損傷、そして爆弾が1発命中したのみ。

爆弾の命中弾数に至ってはムーの方が多く、エモールは風竜による機銃掃射(仮にそう呼ぶ)で帝国と遜色ない戦果を上げられている。

彼は自分の耳が信じられず、何回も報告を聞き直したり、耳に細い棒を突っ込んだりした。

しかし結果は変わらない。

「司令、落ち着いて下さい。我らは数が少なかったのです。それを他国も分かっています。このくらいで世界最強の名が傷つく訳がありません」

「う…む…そうだな…。しかし、敵にもう少しだけでも損傷を与えられなかったのか? 『ジグラント』は15機もいたのだろうか? もう少し命中弾があっても…」

「どうでしょう。そこはパイロットらの練度不足と考える他ありません。早急の課題ですな。そもそも戦闘航行中の戦闘艦を航空機が撃沈するのは無理でしょう?」

いかな航空戦力を以てしても、戦艦は沈められない。

これが神聖ミリシアル帝国……というよりは、この世界の常識であった。

「そうだな……そうだった。世界最強だと高を括っている場合ではないな」

第零式魔導艦隊は全滅させられ、すでに世界最強の顔は、半分潰されたも同然。

その汚名を返上するには、艦隊戦に勝つしかない。

しかし帝国の最精鋭、最新鋭の艦隊が負けている事を考えると、舐めてかかれる相手ではなかった。

勝てれば良いが、もし負けたら？

そうなった場合、世界最強のブランド名は瞬時に価値を失うであろう。

属国は大量に離反し、今まで積み上げてきた物が全て崩れ、経済的な打撃はとんでもない額となり、世界最強の名は過去のものとなる。

「いや、落ち着け……落ち着くん。相手はたった1隻、こちらは巡洋魔導艦が8隻。おまけにムーや日本国も付いている」

パテスは深呼吸をして脳に酸素を巡らせてから、命令を下す。

「これより我が艦隊は神聖ミリシアル帝国の名において、未開の蛮族を滅する！ 全艦、全速前進！」

魔導機関が音を立てて震え始め、地球にはあらざる形状の艦が海を裂いて進む。

それは破滅の行進。その矛先を向けられた全ての国は震え上がり、平伏する。

艦隊の国籍は神聖ミリシアル帝国。

「古の魔法帝国」の遺産を解析し、世界最強の座まで登り詰めた国である。

グラ・バルカス帝国 『グレードアトラスター』艦橋

ラクスタルは『グレードアトラスター』の艦橋から、北の水平線を見つめていた。

どこまでも広がる大海原は蒼く美しく、日の光を受けてキラキラと輝いている。

そして彼は、視界の端に映った小さな違和感に気付く。

それと同時に、敵発見の報告が入った。

「艦長！ 敵艦を目視で確認！ 神聖ミリシアル帝国とムーの艦隊です！」

「数は！」

「ミ帝は巡洋艦クラスが8！ ムーは戦艦(?)が2と巡洋艦が12隻です！」

「多いな…」

「まだ増えます！ 外輪船7隻！ 帆船も複数隻を確認！」

外輪船や帆船を戦力から除外しても、敵は大艦隊。

『グレードアトラスター』は自身の46cm砲に耐えられるレベルの装甲を持っているが、それでもミ帝やムーの大口径砲は十分な脅威になり得る。

「ラクスタル艦長、勝てますか？」

「勝つき。でなければ、今は亡き東征艦隊に面が立たん」

日本国の真つ白な艦がないのは不気味だったが、今はそんな事を考えている余裕はない。

彼は無線機を手に取り、叫んだ。

『総員戦闘配置！ 繰り返す、総員戦闘配置!!』

再び艦内にブザーが鳴り響き、乗組員が慌ただしく動く。

その全員が、これからが本番なのだと理解していた。

「刮目せよ！ これが世界に冠たるグラ・バルカス帝国の最新鋭戦闘艦『グレードアトラスター』の勇姿だ!!」

3基の46cm3連装砲が動き出す。

それらはゆつくりと、されど力強く旋回し、砲口を世界連合へと向ける。

「まずは小手調べだ…！」

弾種榴弾^{通常弾}

目標前方の世界連合艦隊！ 撃

てエツ——!!!」

最大射程約42kmもの砲が轟音と共に火を噴き、破壊の鉄槌が打ち出された。

後刻——

日本国海上保安庁 有人巡視船『しきしま』

「味方艦隊、被害甚大です」

「神聖ミリシアル帝国艦、2隻がレーダーロスト。46cm砲を受けたものと思われます」

レーダーのスクリーンを見ながら、職員が戦況を報告する。

『しきしま』は「先程の大規模科学魔法によりエネルギーを失ったため、エネルギーの回復を優先する」と出任せを言って、後方で待機していた。

幸いにも他国は「魔力の回復も本当なのだろうが、あえて戦果を譲ってくれている」と都合の良い解釈をしてくれていたおかげで、心証悪化は免れていた。

「流石は世界最強の艦だ。最新のシミュレーションではアイオワ級より強い（タイマンで勝つ確率が高い）とされているからな」

「相手の弾は弾けるが、相手はこちらの弾を弾けないという範囲がアイオワより広いつて事ですよね」

「あくまで確率の話だな。ミ帝やムーの艦はアイオワ級戦艦より弱いから、数が揃った所で遠距離から一方的に殴られて終わりだろう」
実際、そうだった。

『グレードアトラスター』の砲弾はミリシアルやムーの艦船の装甲を易々と破るのに対し、彼らはろくなダメージを与えられていなかった。

ムーに関してはそもそも砲弾が届いておらず、ミリシアルも最大射程に近い位置で撃ち合っているため、なかなか命中弾を出せずにい

る。

片や『グレードアトラスター』にはフラグストーンという主砲の射手がおり、彼は帝国で最も高い命中率を叩き出すという熟練の腕を存分に振るっていた。

電波妨害を受けているためレーダー照準が使えない中、彼は百発百中に近い驚異の命中率を続々と叩き出す。

一際大きな光点から放たれる小さな点は味方艦へ吸い込まれるように画面上を移動し、光点を1つ、また1つと消していくのだ。

その神業的な命中率に『しきしま』の瀬戸はゾツとするような寒気を憶えた。

今は電波妨害をしているから良いものの、『しきしま』は大和砲がギリギリ届く海域にいる。

この距離でそう運悪く命中するとも思えないが、もしレーダー照準の使用を許していたら、いきなり沈んでいた可能性も無くは無かったのだ。

「…危ない危ない。もう少し離れておこう」

「護衛艦ならともかく、『しきしま』の装備では46cm砲の砲弾を撃ち落とせませんからね」

「なぜ護衛艦隊じゃなくて巡視船を連れて来たのか。全くもって謎だよ」

護衛艦隊を連れて来ていたら『グレードアトラスター』の主砲は火を噴かずに海の底だっただろう。

護衛艦隊が来ていたら、死なずに済んだ人が大勢いたというのに。

瀬戸はどこにもぶつけられないストレスを理性で無理やり抑え込んだ。

「…世界連合は？」

「数は半分近くまで減りました。ミリシアル艦は全滅、ムーも残り数隻しかいません」

「そうか…じゃあ、世界連合に撤退するように伝えてくれ。後は任せろとな」

これから瀬戸は、かなりセコいことをする。

それはもう死力を尽くして戦った世界連合から見たら、美味しい所を奪っただけのカス野郎となるくらいセコい事だ。

作戦の大まかな概要を説明すると、これから『しきしま』は船体には一切攻撃をせずに『グレードアトラスター』に白旗を上げさせる。もしそれを世界連合の面々が見たらどんな思いをするか、想像するのは容易い。

俺達が戦った意味はどうなるんだ！

そんな方法があるなら最初から使え！

当然こうなる。

そのため瀬戸は世界連合が全滅するか、撤退するタイミングを狙っていたのだ。

だが、自称世界最強のミ帝がいる限り、撤退は有り得ないだろう。しかしミ帝がいないのならば、「後は任せろ」とでも言って撤退を促すことは出来る。

要は世界連合に見られなければ良いのだ。

『日本国よ。殿しんがりは任せたぞ』

ムーから通信が入る。

「瀬戸さん、世界連合が撤退を始めました」

「よし…作戦開始。対空砲火を掻い潜り、移乗攻撃を仕掛けよ」

46話：フオーク海峡海戦Ⅶ

『グレードアトラスター』艦橋

「ラクスタル艦長、敵が撤退を始めました」

「……そうか」

彼はホツと息をついた。

帝国の技術の結晶である『グレードアトラスター』を誇りにも思うが、それよりも何倍もの敵に打ち勝った事への安堵の方が強かった。「損害は？」

「ミリアルルの蒼白いイナズマを引く曳光弾（？）5発に被弾、ムーの巡洋艦にも1発もらいました。全て装甲が弾き返したため艦自体の損傷はほとんどありませんが、爆発によって火災が発生しました。現在消火活動中です」

主砲、副砲も多少の被害を受けたが、未だ顕在。

対空火器は両舷とも多くが損壊しており、艦の防空力はかなり失われている。だが、修理を施せば直る物もあるので、そこまで悲観することはない。

まだ中破だ。

あれほどの敵を相手に中破で済んだのだから、まずはそれを誇るべきだろう。

「よし：ダメコンが終わったら世界連合を追撃、日本国の派手な巡洋艦も沈めて厄介なレーダー妨害を解いた後、敵航空戦力がいなかった場合のみカルトアルパスに艦砲射撃を行う」

「了解しました」

先程の戦闘で日本国の艦は出てこなかった。

やはり、彼の国は我々と戦うことを恐れている。帝国の方が強い！

隕石落としには度肝を抜かれ、一時期は降伏する事も考えたが、ラクスタルはすっかり自信を取り戻していた。

『あーあー。『グレードアトラスター』応答せよ』

戦闘指揮所から艦橋に戻ると、もはや聞き慣れた男の声が艦橋に響く。

ラクスタルは完全に舐め腐った口調でそれに応答した。

「おやおや、我々が怖いあまり戦闘に参加しなかった日本国か。で、口だけは達者な貴様らが何用かね?」

『え?』

「惚とほけて虚勢を張ろうとしなくて良いぞ? 貴様らは我々と戦うことを恐れ、先程の戦闘に参加しなかったのだろうか?」

『…いいやそれは違う。俺達は外交的な配慮のため、味方に戦果を譲ろうとしただけだ。断じて腰を抜かした訳じゃない』

「そうかそうか。ま、これから死にゆく者の戯言として受け取ってやろう。で、何用かね?」

いつでも倒せる弱者に喧嘩を売られ、瀬戸は怒るを通り越して呆れ返っていた。

『内容はシンプルだ。降伏しろ、さもなくば艦内が血の池地獄になるぞ』

ここまで虚勢を張れるとは、日本人というものは相当凶太いのだろう。とラクスタルは思う。

彼の返答もシンプルだった。

「言っただろう? 我々の解答は『バカめ!!』だ!!」

ラクスタルはたった3文字の短い暴言に今までの不満とストレスを全て詰め込み、吐き出した。

そして相手に反論をさせることなく通信を強引に切らせ、清々しい表情を浮かべた。

「ふう…」

しかしそれも束の間。

「艦長! 前方に未確認飛行物体7機を確認!!」

「なっ…! 撃ち落とせるか?!」

「無理です! 高度が低すぎて生き残った対空火器では狙えません!

そもそも目標が小さすぎます!」

「小さ過ぎるウ?」

ラクスタルは艦橋の窓に駆け寄り、目を細める。

日の光を反射してキラキラ光る海面に、確かに飛行物体のような物体が見えた。

しかし、違和感。

形状を見る限り、あれは航空機ではない。

そしてワイバーンでも竜でもない。

ラクスタルを含め、目の良い者達は最初は見間違いか幻覚を疑った。

しかし300m程の所で、彼らは確信する。

——あれは人間だ！

「バカな?! 人間が空を飛んでいるぞ!!」

「艦長落ち着いて下さい! そんな事があるはずがございません!」

「いや! 間違いない! まさか艦内に乗り込んでくる気か?!」

そして彼はハッと気付く。

〈降伏しろ、さもなければ艦内が血の池地獄になるぞ〉

まさかとは思うが、あれは日本国の生物兵器か何かか?

! いや、そんな事は有り得ない。彼の国は我々を恐れているのだぞ

「艦長! 指示を!」

「ッ! 消火は済んだな?! 総員、艦内に退避! 外へと繋がる全

ての扉を封鎖し、臨時的に陸戦隊を編成しろ!」

「まさか...! 艦内で戦闘を...?!」

「いや、敵が乗り込もうものならミンチにしてやる...! 主砲発射用意!」

戦艦の主砲発砲時のブラスト圧は、甲板上の人間や搭載航空機などに甚大な被害を与える。

特に『グレードアトラスター』のモデルとなる『大和型戦艦』の46cm砲発射時の衝撃波は凄まじく、試算の結果、その衝撃波は甲板上のどこにいても人体に致命傷を与える圧力と判明した。

「退避完了! いつでも撃てます!」

「まだだ……！ まだ撃つなよ……！」

窓から敵を凝視し、彼は撃つタイミングを見定めた。

駆逐艦1隻よりも重いと言われる砲塔がゆっくりと左舷側に回り出す。

「まだだ……」

敵は姿がクッキリと見える距離まで近付いてる。

背中から羽が生えているが、やはりどう見ても人間だ。おまけに、カルトアルパス港で見た日本国の軍人と同じような服装をしている。

「——帝国を舐めるなよ！ 撃てエ!!!」

ドドドオツ!! ドドドドドツ!!!

9門もの46cm砲が爆炎を噴き、轟音が鳴り響く。

大量の煙のため視界が遮られるが、ラクスタルは勝ちを確信していた。

彼は敵が艦から10〜20mの所まで接近した時に、主砲を発射させたのだ。

「はっはっは！ ……ざまあみろ転移国家の蛮族が！」

これで助からない生物はいない。

もちろん、爆圧を避けられる生物もいない。

少なくとも、彼はそう思っていた。

「艦長！ 右舷甲板上に敵複数人を確認！ 扉が破壊され、敵が艦内に侵入しました！」

「なんだと?!」

有り得ない。まさか爆轟に耐えたのか？

それとも避けたのか？

疑問は無限に出てくるが、ラクスタルは理性でそれを抑える。

「陸戦隊は編成出来てるな?! 艦内陸戦用意！」

陸戦隊とは海軍内部で結成される、陸上戦闘部隊のことである。

国や世界にもよるが、海軍艦艇には陸戦武装をし、上陸作戦や停泊場所での警備を担うための部隊が置かれている。

その呼び名は様々で、「陸戦隊」とも「海兵隊」とも呼ばれるが、グ

ラ・バルカス帝国では陸戦隊であった。

成り立ちとしてはどちらも同じで、帆船時代に敵の艦船に乗り込み、白兵戦を行った部隊が元である。

『グレードアトラスター』にも少数ではあったが、陸戦隊は存在していた。

だが、彼らはそもそも艦船で戦う事を前提としているため、銃を持つての戦闘は初めてである。

そもそも、彼らは艦内で戦闘を行う陸戦隊など聞いたことがなかった。

『艦内陸戦用意！ 敵を殲滅せよ！』

陸軍の物よりはある程度短くなっているが、それでも狭い艦内で小銃でまともに戦えるとは思わなかった。

この狭さ、まるで塹壕。

彼らの脳裏に、前世界で数十年前に行われた塹壕戦の様子が浮かぶ。

銃よりもシャベルや拳の方が強い、泥と血にまみれた殴り合いだ。

しかし塹壕のように狭いと言っても、やはりここは艦内。どのような戦闘が行われるか、全く予想がつかなかった。

ドンッ！ ドドドオンッ！！

ついに敵との戦闘が始まる。

開始のゴングは、味方の発砲音からであった。

グレードアトラスター艦内 有人巡視船『しきしま』 特別戦闘隊

発砲音が鳴り響き、鉛玉が鋼鉄の壁にぶつかり火花を散らす。

『しきしま』特別戦闘隊の敵艦へ移乗した者達は、艦内へと続く扉を持つてきた指向性爆薬で破壊、艦内に侵入し、敵と銃撃戦を行っていた。

すでに変態は解け、生身の彼らだが、不審船に突入する訓練では優秀な成績を残しているため、戦闘は概ね順調だった。

しかし…

「ああもう！ 敵が多いな！」

「口より手を動かせ！ テラフォーマーを相手にするよかマシンだろ！」

『テラフォーマー対火星生物 大口径 反動制御システム短機関銃』の弾丸が物陰ごと敵をぶち抜き、艦内が赤く染まる。

それでも敵の数は次から次へと増え、死体の山が積み上がり、障害物は増える一方だった。

「クソッ！ あいつら死体と机を重ねてバリケードにしてやがる！」

弾が貫通しにくい！」

「爆薬だ！ 指向性の奴でも良いからバリケードを破壊しろ！」

「艦内で爆弾を投げるのか?!」

「戦艦がそう簡単に沈むかよ！ 早く！」

爆薬が投げ込まれ、爆風と共にバリケードが木端微塵に破壊される。

制圧射撃で生き残った敵を掃討し、ようやく少しだけ前進出来たと思ったら、今度は倍の数の敵が待ち構えており、再び戦線は膠着状態となった。

「なるほど、死んだ奴の銃を拾って加勢している奴がいるな。だから弾幕の量は変わらないのか」

「このままでは埒が明かないな…。よし、俺が殺る」

彼らのうちの1人が注射薬を取り出し、それを首筋に刺す。

彼のベースは『オニヤンマ鬼蜻蜓』。その機動力と動体視力には目を見張るものがあるが、艦内は狭すぎるため、事故を起こす危険性が高い。

だが火星に赴き、生き残った日本人ボクサーの証言と、最新のシミュレーションによると、『オニヤンマオニヤンマ』の機動力と動体視力ならば艦内でも空戦を行えるとの結論が出た。

「人為変態…！」

変身を終え、愛刀を取り出し、彼は敵の射線に飛び出した。

何人もの敵による弾幕を見切り、回避し、もはや生身の人間では対処不可能な速度で、ドローンにも不可能な軌道で、艦内を縦横無尽に飛行する。

これがこの手術の醍醐味。

これが各国の軍が「被手術兵」を採用する理由。

数秒後には彼らの周辺から生命が消え、人間だったモノが血の池を構成する。

グレードアトラスターの陸戦隊は全滅し、その残骸を踏んで彼らは前進を続けた。

「…ていうか俺らの目的って何だっけ？ 虐殺じゃないよな？」

「力の一部を見せ付けて、敵が降伏しやすい状況を作り出すんだよ。

……………あッ」

彼らは気付く。

わざわざ艦内から艦橋まで行かなくとも、彼らには空を飛ぶための羽があるのだ。

「いゝこと思いついちやった…☆」

突然陸戦隊との通信が途切れ、艦橋にいる者達は焦っていた。

敵はどう見ても改造人間か人外であるが、陸戦隊がそう簡単にやられるはずはない。

しかし依然として陸戦隊からの応答はなく、冷たい空気が流れる。

「陸戦隊応答せよ！ 応答せよ！ 誰か状況を報告できるやつはいないのか?!」

まさか全滅？

こんな短時間で？

「艦長、どうお考えになられますか？」

「…航空機や艦船などの兵器ならば、技術差による圧倒は理解出来る。しかし、歩兵は所詮銃を持つか持たないか…それほどまでに力の差はつかないはずだ」

そう、歩兵は銃を持つか持たないか。

今回の相手に関して空を飛べるが、それを艦内で出来るとは思えない。

そこまでの差はないはず…

——ガシャーン!!!

突如艦橋の窓が割れ、近くにいた将校がガラス片によって怪我を負う。

その割れた窓から、2人の敵が飛び込んで来た。

「——なっ?!」

背中からトンボみたい薄い4本の羽が生え、眼球は人間のそれとは違う。

そして片方は刀、もう片方は軽機関銃程の大きさの銃を持っていた。

「動くな！勝手に動かれると命の保証はしない！」

相手の言葉を見殺し、即座に何人かの将校が片手拳銃を構え、発砲する。

しかし2人の敵は一瞬で姿を消し……いや、人間の目には追えない速度で移動し、発砲した将校達は拳銃だけを破壊された。

「つぎ動いたら殺す」

「ヒイツ！」

危うく死にかけていた将校達は腰を抜き、ズボンを濡らす。

ラクスタルは腰の軍刀に手を当てながら、口を開いた。

「グラ・バルカス帝国『グレードアトラスター』艦長ラクスタルだ。貴様らは日本国の者か？」

「いかにも、俺達は日本国海上保安庁 有人巡視船『しきしま』の特別戦闘隊だ。今、この場で艦長に降伏を要請する」

「…断つたら？」

「まあ艦長名義で降伏するまで殺陣が続くかな。演劇じゃなくてガチの方だけだ」

ラクスタルは考える。

「貴様らは…人間なのか？ それとも人外か？」

「人間だよ。そんな事を聞いてどうする？」

「なぜ人間が空を飛べる？」

「変身したからかな」

「……」

彼は考えた。

敵がここを直接襲った理由は？

ずっとは変身していられないから？ それとも敵の数が多すぎるから？

恐らく両方だ。だが、理由としては前者の方が強い。

彼は自らを人間だと言い、ハッキリと飛べるのは変身したからと言った。

彼がそういう生物なのではなく、変身したのならば、何かしらの時間制限はあるはずだ。

「ふっ……私の返事は『バカめ！』だ！ 艦長である私が降伏しない限り、帝国軍人は戦い続ける！ 言っておくが、重要防^{バイタル}御^{バート}区画の扉は非常に強固だぞ?! いくら貴様らが強かろうとも、あそこの扉を時間内に破壊することは出来まい！」

ちなみにここでの会話は伝声管を通じて各所に聞かれているため、艦長の意図を察した各所長達は、すでに防水扉の封鎖を始め、徹底抗戦の構えを取っていた。

「……だそうですねよ瀬戸さん。どうしますか？」

『困ったなあ！ 平和を愛する日本人としては、これ以上の犠牲は出したくないのだけど！』

今の会話が聞かれていたのか、瀬戸が通信で会話に割り込む。

『こちら「しきしま」船長瀬戸だ。艦長さん聞こえる？ どうしても降伏しないと云うなら、外見てみ。左舷の方』

「あ？」

ラクスタルはゆっくりと左舷が見下ろせる窓に近付き、驚愕した。

「……魚雷ッ?!」

船体から僅か500mの地点で、7本もの魚雷が白い航跡を引いていたのだ。

それらは『グレードアトラスター』へと真つ直ぐ向かっており、全てが直撃コースである。

「…あれが直撃したら、艦内にいる貴様らの仲間も無事では済まんぞ…」

『ああ大丈夫、そいつらはすでに退避させてあるから。魚雷に攻撃されても大丈夫なようにね』

あの量の魚雷が命中した場合、すぐに逆側へ注水を開始しても、間に合わずに転覆、沈没する可能性が高い。

特に艦内にいる帝国軍人はすでに隔壁を封鎖し、立てこもってしまっているので、ほとんどが逃げられずに溺死するだろう。

「……………」

彼は生唾を飲み込み、決心した。

降伏しようがしまいが、もうすぐ魚雷が直撃し『グレードアトラスター』は沈む。ならば、この艦と運命を共にするまで。

「…………その要求は、ことわ——」

「艦長！ 魚雷が旋回しています！」

「はあ?！」

左舷方向に目をやると、確かに魚雷が旋回していた。

それも同じ所をずっとグルグルと周回しており、まるで艦長の判断を待っているかのようだった。

『言っておくが、降伏すれば魚雷はぶつけない。でも断ると言うのなら——』

瀬戸は一息おいてから、続けた。

『ぶつけちゃうよ? 拾った魚雷!!』

「…………くっ!」

名誉か、3500人もの仲間の命か。

大日本帝国なら迷わずに前者を選んだだろうが、彼はグラ・バルカス帝国軍人。

「…グラ・バルカス帝国『グレードアトラスター』は艦長ラクスタルの名において、日本国に降伏する」

フオーク海峡海戦の決着がついた瞬間であった。

47話：戦勝国の戦後処理

翌日――

神聖ミリシアル帝国　カルトアルパス　帝国文化館

『これより先進9ヶ国会議を再開いたします』

議長席が並ぶ舞台を中心として同心円状に席が設えられた場内に、会議の再開を告げるアナウンスが流れる。

今回話し合うことはもちろん、グラ・バルカス帝国の今後についてと、鹵獲した敵艦の分配である。

鹵獲された艦は2隻。『グレードアトラスター』と、巨大波で多大な損傷を受けながらも、何とか沈没を免れていた東征艦隊旗艦『ベテルギウス』である。

ちなみに『グレードアトラスター』の全乗組員約3400人は身柄を拘束され、艦は無人のままカルトアルパスに停泊している。

だが『ベテルギウス』はあまりにも損傷が酷いため、生き残った数百人は退艦、海上を漂流中に救助され、カルトアルパス沖に放置されていた。

『ではまず、今海戦で最も活躍した日本国からどうぞ』

世界最強国家であるミリシアルや、列強ムー、エモール王国を差し置いて、新参でしかも文明圏外国である日本が発言する。

それを快く思わない者もいたが、実際にグラ・バルカス帝国を一蹴してみせたのは日本国であるため、誰も不快感を口にすることは出来なかった。

「我が国としましては調査用に『グレードアトラスター』があれば十分と考えます。残りの1隻につきましては、当事国同士で話し合ってください」

甲板は壊滅的な状況であるが、艦自体は無傷であるため、どの国も『グレードアトラスター』を欲している。

しかしどの国も反対することはできない。

日本国は平和主義だが、逆らおうものなら何をされるか（だいたい

予想はつくが）分からないからだ。

だが、残りのもう1隻が欲しいかと言われると、そうでもない。

『ベテルギウス』は、今や海に浮かぶだけの鉄クズと化しており、どれだけの旨みが残っているかさえ不明だからだ。

むしろ、あんなスクラップを押し付けられても困るとい国が大多数であった。

「我が国は内陸国であるため、艦船は必要ない」

最初に声を上げたのはエモール王国。

それを機に、続々と意見を表明する中小国達。

「我が国は機械文明には疎く……」

「技術差があまりにも開き過ぎているので……」

だが、スクラップであろうと『ベテルギウス』を欲している国もいた。

ムーとミリシアルである。

最終的に『ベテルギウス』の所有権は神聖ミリシアル帝国とムーのどちらかに絞られた。

機械文明であるムーからすると、鉄クズであろうと「技術艦」は喉から手が出るほど欲しい。

片やミリシアルからすると、強大な敵を討ち取ったという象徴として「見せしめ敵艦」を欲していた。

お互い1歩も譲らないまま、時間だけが過ぎていく。だが、それも長くは続かなかった。

「2国だけで話し合っても結論が出ないようなので、ここは1つ、他国の意見も聞いてみたらどうでしょう」

それを聞き、ミリシアルの面々は戦慄する。

すでに世界最強のネームブランドには亀裂が入っており、彼らはこれ以上の「敗北」は何としても避けたかったのだ。

そこで持ち出された多数決（のようなもの）の話。

敵の戦艦は機械文明の物であるため、調査をさせるなら間違いなくミリシアルではなくムーである。

だがこの多数決でムーに負けた場合、詳細をよく知らない人々は、

神聖ミリシアル帝国ではなくムーが選ばれた。つまりムーの方が強い？ と勘違いする恐れもあった。

だが彼らは、世界最強の看板を支える重鎮達。

追い詰められたら騒ぐだけの無能とは違い、彼らは頭をフル回転させ、最も国益に適う手段を模索する。

「そうだ！ ここは1つ、ミリシアルとムーが共同所有をするというのはどうだろうか？」

ミリシアルの目的を薄々感じ取っていたムーだけでなく、普段のミ帝なら絶対にしないような提案に、参加国は驚愕する。

だが、話を続けるミリシアルの提案に筋は通っていた。

『ベテルギウス』は沈没寸前であり、ムーまで曳航させるのは難しい。なら1番近く、そして技術レベルが高いミリシアルが所有、調査をするべきだが：あいにく我が国は機械文明の技術には疎く、ムーほど恩恵は得られないだろう。そこで、あの艦はミリシアル領の浅瀬に曳航、浅瀬に座礁させ、我が国とムーが共同で所有をすることを提案する」

ムーの目的は所有ではなく調査、願わくば艦を所有すること。

そしてミリシアルの目的は艦を所有、願わくば調査をし、その技術を吸収すること。

お互いが1歩も引かなければ、話は平行線を辿っていただろう。

だがこの提案ならお互いが納得できるし、当事者同士の話なので、他国も異論を唱えられない。

何より解析が完了し、修復が出来た暁には強力な固定砲台が手に入るのだ。

「分かりました。そういう事なら、それで手を打ちましょう」

ムー側も沈没寸前の艦を自国まで曳航できるとは考えておらず、調査さえ出来るならばとこの案に賛成する。

『では次の議題に参ります——』

「や〜つと終わりましたね。近藤さん」

近藤の部下である井上が伸びをしながら彼に話しかける。

先進9ヶ国会議は特に難なく終わり、彼らは帰国の途についた。

「そうだな。だけどもまさか、3700人（グレードアトラスター）だけでなくベテルギウスの乗務員も含む）もの捕虜を押し付けられるとは思わなかった」

「まあ、その数ならロウリアとパ皇戦の収容所で事足りるでしょうし、中には外交官もいるらしいので、日本の力を知ってもらうには良い機会でしょう」

捕虜の中には先進11ヶ国会議で世界に宣戦布告を行った外交官、シエリアも含まれていた。

彼女が言うには、彼女を含めて数人は軍人ではなくただの外交官であるため、日本国の法律と常識に照らし合わせた場合、彼女らは本国に送り返されるだろう。

どちらにしろ送り返すのは決定事項であるが。

グラ・バルカス帝国に日本の本当の姿を知ってもらうには好都合であるからだ。

「瀬戸さん、お疲れ様でした。まさか本当に勝てるなんて思いませんでしたよ」

「おう！ 約束、忘れてねーだろうな？」

「もちろん覚えてますとも。じゃ、帰りの護衛もよろしくお願いします」

「ドーンと任せとけ！」

【フォーク海峡海戦】

グラ・バルカス帝国東征艦隊

『グレードアトラスター』：中破、拿捕される

『ベテルギウス』：大破、拿捕される

その他：全艦沈没

世界連合

ミリシアル艦隊：全艦轟沈

ムー、『ラ・カサミ』大破、巡洋艦2隻中破、その他（空母は含めない）全艦轟沈

エモール王国：風竜18騎撃墜

その他の国：ミリシアルとムーの艦が優先的に狙われたため、半分は損傷軽微で生還。それ以外は轟沈。

結果：防衛が成功したため、世界連合の勝利。

中央暦1642年5月12日――

ムー　首都オタハイト　海軍本部会議室

魔法ではなく、科学の明かりが灯る首都の省庁区画に国会議事堂に次いで重厚な建物が2つ存在していた。陸軍本部と、海軍本部だ。

その海軍本部の上位階級しか入れない会議室において、カルトアルパスでの海戦の緊急報告会が開かれた。

会議には海軍の主要幹部、外務省幹部、情報通信部情報分析課の技術士官マイラス、そして戦場をその目で見た参考人として『ラ・カサミ』副艦長シットラスも参加している。

「それでは、これより緊急会議を開催します」

進行役が会議の開始を宣言し、続けた。

「皆さんご存知の通り、先日、神聖ミリシアル帝国カルトアルパスにおいて先進11ヶ国会議が開催されました。事の発端は初日の会議中、新興国グラ・バルカス帝国が全世界に対して従属を呼びかけ、後日、その呼びかけに応じなかった場合の実演として、カルトアルパスへ攻撃を加えようとなりました」

この海戦は結果だけ見れば世界連合の勝ちだが、各国、しかも世界の強国の最新鋭艦隊が受けた損害は決して無視できないものであり、その圧倒的強さを世界に知らしめることに成功したという点ではグラ・バルカス帝国の勝ちでもあった。

特にミリシアルとムーの艦隊が受けた被害は甚大で、彼らの無力さ

を浮き彫りにさせることに成功したという点でも、グラ・バルカス帝国はその目的の半分を完了させたも同然である。

おまけに彼の国は第2文明圏全域にも宣戦布告しており、突如として現れた国家存亡の危機に、軍幹部は頭を悩ませた。

それとは別に、友好国ではあるがその脅威は決して無視できないと言ふ点で日本国もまた、彼らの頭痛の種となっていた。

「次に戦闘推移について説明をします。先手に回ったのはグラ・バルカス帝国で、彼の国は飛行機械を200機発艦させたと報告されます。ですが、これらは世界連合が接近を確認する間もなく、日本国の巡洋艦に全て撃墜されたと思われれます」

「……?!?!」

会議室に動揺が広がる。

「待て待て待て！ どうやって200機もの航空機をそんな短時間で撃墜できるのだ?!」

「詳細は不明ですが、後日、ミリシアルがその海域で敵飛行機械らしき残骸とその搭乗員と思われる焼死体、水死体を発見したようなので、嘘ではないのは確かです」

会議室にさらなる動揺が広がっていく。

それはさておき、進行役は続ける。

「そして日本国が敵航空機を撃滅させた後、皆さんご存知の通り彼の国は『日本国科学呪文式賛美歌』を詠唱し、敵艦隊に隕石を降らせました。この攻撃(?)により、敵の戦闘可能艦はレイフォルを単艦で滅ぼした『グレードアトラスター』のみとなったようです」

一旦は冷静に話を聞いていた彼らだが、この報告が事実であると知り、彼らは騒がずにはいられなかった。

それも当然、彼らの常識からすれば、人間が隕石を降らせるなど有り得ないからだ。

いったいどれほどの魔力量が必要かも分からない。

「それは魔法か？ 日本国に魔法はないと聞いたが？」

「詳細は不明ですが、日本国の外務担当がハッキリと日本国に魔法はないと証言しておりますので、科学の産物だと思われれます」

「じゃあその科学呪文、賛美歌とやらは何だね？」

待っていました！　と言わんばかりに、情報分析課のマイラスは立ち上がり、参加者の疑問に答えた。

「それは恐らくは情報漏洩を免れるためのブラフかと。情報分析課は日本版『僕の星』^{しもへ}である人工衛星を落下させたのではないかと睨んでおります。打ち上げる事が出来るならば、落とすことも可能かと」
「なるほど……人工隕石か！」

実現に何十年、何百年かかるかはさておき、これならば我が国も真似できそうだと参加者達の顔が明るくなる。

「続けます。日本国が天災攻撃^{隕石落下}を行った後、『グレードアトラスター』と、日本の艦を除く世界連合艦隊が衝突いたしました。各国の損害に關してはお手元の資料をご確認ください」

彼らはチラツとムーの損害のページだけを見て、顔を暗くした。

我が国の最新鋭の艦隊がこれ程までに痛手を負っていたとは信じられず、最初聞いた時は何かの間違いだろうと思ったのだ。

だが『グレードアトラスター』がミリシアルの艦を優先的に狙っていたため、これでもまだ被害が少ない方である事に、彼らは気付かない。

「そして世界連合と『グレードアトラスター』の砲戦が終わった後、何かしらのエネルギーを回復し、再び動けるようになった日本国の巡洋艦が殿^{しんがり}となり、『グレードアトラスター』との一騎打ちに挑みました」
そして会議進行役は一息おいてから、続けた。

「結果は日本国の圧勝。驚くべきことに、彼の国はミリシアルの魔導艦隊が勝てなかった相手を一つの被害も受けずに降伏させたのです」
にわかには信じ難い。

だが、真実なのだから信じない訳にもいかない。

「…日本国はどのように『生ける伝説』^{グレードアトラスター}を降伏させたのだ？」
「詳細は不明ですが、捕虜は皆一様に『化け物』が艦内に侵入した。応戦した陸戦隊が奴らに全滅させられた。降伏しないなら魚雷で沈めると脅された……と証言しております。魚雷とは海中を進む爆弾みたいな兵器だそうです」

「…その『化け物』とは通称『魔人』と呼ばれる日本国の軍人か？」

「詳細は不明ですが、そうだと思います」

「艦内に侵入して100人も殺害…？ そんなことが可能なのか…？」

「魚雷か…。我々もそれについての調査が必要だな…」

その後、様々な意見や情報が飛び交い、会議が終わるのは明け方となった。

この会議で決められたことは多岐に渡るが、特に陸軍と海軍の上部組織である統括軍本部では、対グラ・バルカス帝国について、日本国と綿密に連携を取っていくという方針が定められた。

その目的はグ帝との戦争に勝つためでもあるが、非常に強い味方から技術を吸収するという目的もある。

グラ・バルカス帝国編Ⅰ

48話：敗戦国の戦後処理

フオーク海峡海戦から数日後――

グラ・バルカス帝国　　帝都ラグナ　　帝王府

この日、帝都ラグナにあるニヴルズ城の一室で、王莉^{れい}庁幹部職員が冷や汗を流しながら帝王グラルークスにカルトアルパス沖の戦闘結果を報告していた。

「――東征艦隊は神聖ミリシアル帝国とムーに鹵獲された旗艦『ベテルギウス』を除いて全滅、『グレードアトラスター』も日本国に鹵獲されました」

「なんてことだ」「やはり戦力の個別投入は良くないな」と周りからヒソヒソと会話をする声が聞こえる。

特に最新技術の結晶でもある戦艦を鹵獲されたのは非常に不味い。技術レベルの程度から考えてムーやミリシアルがすぐに帝国の技術を吸収する事はないだろうが、それでも「技術の塊」が敵の手に渡ったことを看過することはできない。

帝王グラルークスはそれを聞いて怒るわけでもなく下々を導くのも上に立つ者の役目とでも言いたげな表情で鷹揚に話した。

「…最新鋭戦艦を2隻も鹵獲されたのは手痛いが、やはりあの程度の戦力では世界最強の連合艦隊を相手にするのは厳しかったか。軍は少々、この世界の事を蛮族だ蛮族だと舐めすぎていたようだな」

あの日戦場にいたグラ・バルカス帝国人は3000人以上が生きているが、全員が捕虜として拘束、収容されているため、今のところ誰一人として帰っていない。

そのため彼らは、送り込んだスパイ経由で報告書を作成、帝王に報告をしているのだった。

もちろんスパイからの報告だけで十分に正確な報告書が作れるとは言えない。

特に今回の主戦場は海であり、スパイも公にされている情報くらいしか知り得ないため、戦況推移の正確な把握は困難を極めていた。

「誰でも良い、今回の敗因は何だと思う?」

帝王グラルクスの突然の質問に、会議出席者達は返答に困る。

そんな中、軍幹部が挙手し、発言した。

「今海戦の敗因は敵艦隊の数が多いのに対し、我が方の艦が少なかったからであると思えます」

確かに東征艦隊はカルトアルパス沖海戦の前に、ミリシアルの艦隊と交戦しており、損耗していたはず。

いくら帝国の艦が強いからと言って、そのような状態である程度の技術力を持つ敵を相手に連戦は厳しかったのだろう。と参加者達は考える。

「そのようだな。いくら最大最強の戦艦である『グレードアトラスター』がいても、ミリシアルやムー、日本国の戦闘艦が束になってかって来た場合、帝国艦隊でも負ける事があると知れたのは大きい。この経験を次に活かさない手はないぞ?」

ようするに帝王は「次からは相手を舐めず、徹底的に潰すつもりで戦え」と暗示しているのだ。

叱責を受けず、むしろ励まされた事に参加者達、特に軍人は感激する。

「とりあえずは生き残った捕虜達だ。外交官でも軍人でも誰でも良い。優秀な帝国民を敵の手から救い出すのだ!」

「はっ! 仰せの通りに!」

グラ・バルカス帝国はまだ世界征服を諦めていない。

彼らは新世界の人間を「ただの蛮族」から「舐めてはいけぬが所詮は蛮族」というイメージへとシフトさせ、ひとまずは捕らわれた帝国民と2隻の戦艦の奪還を方針に掲げることとなった。

ムーの首都オタハイトにある日本国大使館で朝田は朝のコーヒーを楽しんでいた。

透き通るような青空が広がり、涼しく乾いた風が吹く。鳥はさえずり、この前の世界会議の1件が嘘のように、人々の平和な日常が始まる。

だが、今日のコーヒーは苦い。

いや、コーヒーは苦い物なのだが、味の話ではない。

彼は嫌な予感を感じていたのだ。

そう、休日が無くなりそうな予感が…。

しばらくすると誰かが大使館内をドタドタと走る音が聞こえ始め、朝田は顔をしかめる。

「ああクソッ！ この世界に来てから何故こうも嫌な予感が毎度毎度的中する?! 魔法でも身につけたか?!」

「朝田さん！ ムー国より至急の連絡が来ています！」

扉をバタンと開け、部屋に飛び込んできたのは彼の部下だった。

「なんだ?! 世界はまた俺の休日を潰そうとしているのか?!」

「いえ、オタハイト沖にグラ・バルカス帝国の戦艦1隻が確認されました！ その戦艦は戦時外交旗を掲げているらしく、グラ・バルカス帝国大使が乗船しており、訪問目的は日本国外務省に対する用件があるとの事です！」

「また俺の仕事か…」

また忙しくなることを覚悟しつつ、朝田はグラ・バルカス帝国大使を日本大使館へ呼ぶよう手配する。

そして数時間後、朝田達から見たらかなり古い日本車に乗せられて、グ帝の大使達は日本国大使館に到着した。

グ帝の大使達が会議室入ると、すでに8人の男が座っていた。

日本国外務省グラ・バルカス帝国担当の朝田と、ムー担当の御園^{みその}、そしてその他の職員である。

そしてグラ・バルカス帝国の方は外務省事務次官パルゲールと大使

ダラス、ゲスタ、その他の職員であった。

「本日は遠い所を御足労いただき、まことにありがとうございます」

これに帝国の面々は拍子抜けしたような表情を浮かべた。彼らはてつきり、先の海戦で勝った日本国は尊大な態度を取ってくるだろうと予想していたのだ。

本来ならそのような「粹いきがる弱者」を見て楽しむつもりだったのだが、全く逆の対応をされたため、彼らは戸惑う。

しかし帝国の強さを盲目的に信じ込んでいるため、彼らは日本の礼節を弁えた態度を盛大に勘違い。「ああ、戦うのが怖いから、負けた時に少しでも良い待遇をもらうために、こうやって下に出ているのだな」と行き過ぎた妄想をする。

「外務省事務次官のバルゲールだ。先の海戦で運良く勝った日本国よ、お前達が我が国の民を捕らえているのは本当だな？」

もはやこういう態度には慣れていているため、朝田は表情一つも変えずに返答する。

『むさし』と『ベテルギウス』の乗組員と、シエリアさんを含む外交官達の事ですね？ はい、確かに我が国が全員の身柄を確保しております」

「ムサシ…？ 何を言っておる？ 『グレードアトラスター』のことか？」

『グレードアトラスター』の今の艦名です。『むさし』は現在、船籍を海上自衛隊に置いているので、海自の命名規則に従って名前をつけました」

それを聞き、愛国心が異常に強いダラスは怒りを憶える。

グラ・バルカス帝国海軍の顔とも言える戦艦が、他国の海軍に船籍を置かれているだけでなく、名前をも勝手に変えられていたからだ。

だが、彼は尊敬するシエリアの身に何かあつたらいけないと、ここはグツと我慢した。

「では『ベテルギウス』はどうなのだ？」

『ベテルギウス』は現在、どこかに曳航されています。他国の事は分かりかねますので、これ以上は答えられません」

「貴国が所有している訳ではないのだな？」

「はい」

ポーカーフフェイスと言うか、鉄面皮とも言うか、朝田は全く表情を変えない。

否、この場にいる日本人は誰一人として表情を変えないのだ。

「では貴国が拘束しているグラ・バルカス帝国臣民全員の解放と、むさ……我が国の戦艦の返還を要求する」

「いいえ。一部の要求はのめますが、戦艦の返還をすることは出来ません」

「…その一部とはどういう事か。説明をしてもらおう」

もともと戦艦の返還は無理のある要求だったため、拒否されるのは想定内であった。

「我が国は宣戦布告をして来た国の民であろうと、人権を尊重します。そのため軍人ではない、一般人…この場合は外交官ですね。外交官達を貴国に帰す用意をしています」

それを聞いてダラスだけでなく、帝国の面々の顔が一気に明るくなる。

彼らが身柄を確保されているのは『グレードアトラスター』に搭乗していたからだろう。なら、海戦の詳細もある程度は分かるはずだ。

だが、それでも軍事に詳しい者も欲しかった。

「軍属の者はどうするつもりだ？ 彼らを返す事は出来ないのか？」

「はい、貴国は我が国を含めた全世界に宣戦布告をしました。戦争状態にある国の軍人をどうして返す事が出来ましょうか？」

満足のいく結果ではないが、ここで騒いだりしたら外交官の返還もしてもらえなくなるかもしれない。

外交官を返してもらえるだけでも良しとしよう。とグラ・バルカス帝国の面々はそう思うのだった。

「…分かった。日本国はグラ・バルカス帝国の外交官の全員を祖国に帰す、という事で良いな？」

「はい、返還に少し時間はかかりますが、そのへんはご容赦願いたい」
「承知した。日本国が話の通じない蛮国じゃなくて良かったよ」

朝田は小馬鹿にされたような気分だったが、ここで噛み付いても色々と面倒なことになるだけである。

彼はその後、傲慢な態度を増長させていくグラ・バルカス帝国の連中に今までと同じような態度で接し、会議を早々に終わらせた。

49話：旧太平洋武力衝突事件

中央暦1642年7月10日――

神聖ミリシアル帝国　　帝都ルーンポリス　　アルビオン城

魔法文明の頂点に立つ神聖ミリシアル帝国。

その中で最も栄えている帝都ルーンポリスは、科学ではなく魔法の明かりが灯る「眠らない魔都」の異名を持つ大都市である。

そんな栄華を極めたる都の中心、皇帝ミリシアル8世の居城アルビオン城では、世界の行く末を左右する会議が始まろうとしていた。

「これより緊急帝前会議を開催します。まずは皇帝陛下よりお言葉を賜ります」

宰相に促され、老いたエルフの男が口を開いた。

「余は…怒りを抑えきれぬ」

冷たい怒気をはらんだ声が会議場内に響く。

皇帝の怒りはもつともであった。

グラ・バルカス帝国という文明圏外の新興国によって海軍主力艦隊である第零式魔導艦隊が全滅し、主催する先進11ヶ国会議は一時中断され、さらには世界連合の前で世界最強のミリシアル艦隊が沈められたのだ。

カルトアルパス沖での戦いには勝ったのだが、グラ・バルカス帝国が存在したために、ミリシアルはその威厳を失い、おまけにカルトアルパスの港湾施設は津波によって破壊され（これは日本国の攻撃の余波だが、日本は敵ではなく味方であるため、被害は全部グ帝のせいにした）、ミリシアル8世は憤怒の形相を浮かべた。

ちなみにカルトアルパスは事前の避難によって津波による死傷者はゼロだが、施設への被害はかなりのものとなっている。

「世界の長たる神聖ミリシアル帝国を辱めたあの国、奴らは異世界より出現したと言うが、我ら帝国をずいぶんと見くびっているようだな…！」　余は世界の導き手たる神聖ミリシアル帝国の長として、この世界と人類を強烈に侮辱したグラ・バルカス帝国に神罰を下すことを宣

言する！」

彼は続ける。

「我が国を中心として世界の有力国の主力部隊を結集して『世界連合』を組織し、第2文明圏からグラ・バルカス帝国勢力を叩き出せ！ 掃討後、態勢を整えて奴らの本土…帝都を焼き払うのだ！」

前置きがヒートアップして戦闘宣言までやってしまったが、逆に話が早くて都合がいい。

まずは国防省長官であるアグラが挙手し、起立する。

「第1から第3艦隊は魔導連合艦隊として準備を完了しており、陛下のお言葉一つで出撃可能です。戦闘用天の浮舟を運用するための空母も多数配備しておりますので、第零式魔導艦隊の二の舞にはならないかと」

ちなみにミリシアルの最新鋭の艦隊であった第零式魔導艦隊の敗因はエアカバーが無かったことであると考えられていた。

「ところで今回の作戦については第3文明圏は外すということではないのでしょうか？」

アグラのこの疑問には、軍務大臣のシュミールパオが応じた。

「ええ、今回は早期殲滅という陛下のご意志もあるため、合流するだけで時間がかかる第3文明圏は除外する結論に至りました」

ミリシアル8世もこの点は承認しているが、色々な意味で気になるあの国だけは別であった。

敵だけでなく、世界をも震撼させた我らが日本国である。

「日本国はどうなのだ？ 彼の国の『科学魔法』なる物はたった1発で敵の艦隊を壊滅に追いやったと聞いている」

ルーンポリスからも灼熱の炎を引く隕石は見えていた。

まさかとは思ったが、あれが意思を持った攻撃であると知った時は恐怖を憶えたくらいである。

「それに、報告書に書いてある事が事実なら、日本国の巡洋艦は対艦、対空攻撃能力にも優れているらしいではないか。打診だけでもしておいて損はなからう」

漁夫の利を狙っただけとも取れるが、ミリシアルの魔導艦隊8隻、

ムーの艦隊十数隻で勝てなかった相手を単艦で、しかも無傷で降伏させた実力は本物だろう。

彼の国を敵に回したら恐ろしい事この上ないが、味方となれば頼もしい限りである。

「なるほど、あの隕石落下攻撃で支援だけでもしてもらえば、世界連合の負担もだいぶ少なくなるでしょうな」

「うむ。……よもや、敗戦を重ねるような無様はあるまいな？」

皇帝陛下は険しい表情のまま、念を押すように問い、続けた。

「この戦いは単に文明圏外国が牙を向けている程度のものではない。列強とそれに反する国の戦いでもない！ この戦は魔法すら持たぬ者らの国と、魔導文明の頂点に立つ我が国のものである！ 軍務大臣！ 決して負けは許されぬぞ！」

「はっ！ 聖帝ミリシアル8世陛下の御名において、必ずや勝利を！」

「御身に勝利を！ 聖都に栄光を！」

会議出席者が一斉に立ち上がり、皇帝に敬礼する。

彼らが退室したのち、ミリシアル8世は誰にともなく呟いた。

「日本国…グラ・バルカス帝国……。場合によっては、古代兵器の使用も考慮せねばなるまいな」

中央暦1642年10月3日――

沖縄南東約400km 旧太平洋 海上

水面から1本の潜望鏡が覗いていた。

その視線の先には、正面を向いた小型の艦がある。

その船は駆逐艦よりやや小さく、形は異様、窓すらなく、どこに人が乗っているのかさえ分からないような船であった。

だが日本の旗を掲げているため、一目で日本国籍だと分かる。

「ふむ…見つけたぞ。日本軍の艦船だ。ずいぶん小さいが」

グラ・バルカス帝国第2潜水艦隊所属、シータス級潜水艦『ミラ』の

艦長は口元を弓なりに曲げる。

新世界にはグラ・バルカス帝国の力を以てしても把握しきれない数多の無人島があり、グ帝は見つかりにくい位置の無人島に燃料補給のための秘密基地をいくつか作っていた。

そして潜水艦『ミラ』はその補給所をいくつも経由して、ようやく日本国近海にたどり着いたのである。

ちなみに日本国は人工衛星でグ帝の基地をすでに見つけていたが、これらを攻撃しないのは、まだ調査が進んでおらず「攻撃したら民間人が巻き込まれるかもしれない」「宣戦布告はされたが、まだ明確な攻撃をされていないしな…」という理由だった。

「乗っている日本人が哀れですね。いきなり撃沈されれば何が起こったか分からず、さぞや混乱するでしょう」

「皇帝の御意思だ、仕方あるまい。我らの矢は東の果てまで届くということを知らしめねばならん。我々はその先鋒となる」

実際にあの船には誰も乗っておらず、これから撃沈されかける哀れな人間は『ミラ』の方である事は、まだ誰も知らない。

「ところで、ここは随分と灯浮標とうふひょう（海に浮かぶミニ灯台みたいなやつ）が多いですね」

「ああ、それにしても小さいがな」

「確かにめちやくちや小さいですね」

「どこの潜水機か、分かったか？」

「無人潜水機のカメラに『日の丸に十字架』が写りました。グラ・バルカス帝国の潜水艦と思われます」

「へえ：艦なのか。ところで無人か？ それとも有人なのか？」

「第二次世界大戦時レベルの潜水艦なので有人だと思われれます。エンジン音にほとんど掻き消されていますが、艦内から誰かが歩く音も聞こえますし」

「まじか、こんな遠い所までご苦労なこった」

東京都にある防衛省本部では、敵国の潜水艦への対応が行われている。

『ミラ』の存在は日本側に筒抜けだった。

2日前、南西諸島付近に配置された潜水機音響監視システムが音量を発する大きめの潜水機を探知した。

大型所属不明機は沖縄から南東方向約500kmの海域をゆっくりと北上しており、防衛省は政府から国籍を確認するように指示を受け、付近の無人哨戒艇を派遣して対応に当たらせたのだ。

「あれだけの大音量を発し、しかもこれだけ至近距離に近付いて潜望鏡深度まで浮上しているのを見ると、隠れるつもりがないのか？」

「さあ？ 700年も前の潜水艦の事なんて分かりませんよ。バレてないと思ってるんじゃないですか？」

「そんなバカな…」

「ビーツ！ ビーツ！」

突然ブザーが鳴り、画面に『魚雷による攻撃を受けているAttack on Torpedo』と表示がされる。

そのような通信を出したのは、敵潜水艦への対応に当たった無人哨戒艇であった。

「よし、沈まない程度に痛めつける。貴重な情報源だ」

「了解」

潜望鏡を覗いていた『ミラ』艦長が、日本の艦の異変に気付く。なんと、彼の艦船は『ミラ』の目の前で止まったのだ。（目の前と言っても1km程離れている）

「まさか感づかれたか？ ふっ…潜水艦の存在に感づいたのに、停船するとはバカめ！ 魚雷発射ア!!」

すでに魚雷発射管に注水されていた海水を押し出すように、魚雷のスクリーンが回転し始める。

無誘導の魚雷が発射され、雷跡を引きながら眼前の敵に向かう。

しかし魚雷が敵船に当たるとはなかった。

「魚雷、外れました！」

「なんだと?! 駆逐艦より小さいとは言え、なんて加速性能だ！」

『ミラ』艦長が舌を巻いた。

副長も同じように目を剥いている。

「ん? なんだこの音——」

——ズズン!

突如船体に衝撃が走り、各所に浸水、火災が発生する。

衝撃で転倒し、負傷する者もいた。

「なんだ?! 事故か?!」

「いえ! 敵の攻撃です!」

攻撃を行ったのは『ミラ』の周りにユラユラと浮かぶ、無数の灯浮標であった。

『海上浮遊型スマート機雷』

日本近海に無数に浮かぶ、ソナー、レーダー、高性能望遠カメラ、通信機器、小型ミサイル、小型魚雷、防衛用機関砲、人工知能AIを搭載した半自律機雷。

太陽光、風力、波力発電とあらゆる発電機能と大容量のバッテリーも搭載しており、半永久的に稼働し、備え付けられたスクリーンとGPSによって自らの位置を修正する事も可能。

機雷と言っても衝撃を受けたら爆発するのではなく、敵を攻撃する際には搭載している小型ミサイル、小型魚雷を発射する。これらは対無人機を想定しているため、威力は微妙（28世紀基準）。

領海、空に入った物体が国籍不明でもいきなり攻撃したりはしないが、敵が『テラフォーマー火星生物』だった場合、2桁く3桁のミサイル魚雷が飛ぶ。

「各所浸水! 多数!!」

「火災発生! 消火急げ!」

「スクリーン大破! 航行不能です!」

「6人負傷! 1人は意識不明!」

艦長は今の攻撃が偶然(?)艦尾の、しかもスクリューに当たり、船体への損傷が少ない事に感謝した。

それと同時に敵が魚雷を持っていた、それも潜水艦に当てられるような高性能の魚雷がある事に驚愕する。

魚雷を持っている潜水艦を保有している可能性があるからだ。特に今回の件に関しては、日本国が潜水艦を保有している可能性が極めて高い。

これが帝国の今後の戦略に大きく影響するのは確実だ。

だが、彼はこの情報を本国に持ち帰れない事を悔やむ。

「航行不能となつては…:…どうにも出来ないじゃないか。仕方ない、浮上しろ」

艦長の命令を受け、乗組員達は涙を呑んで船体を浮上させる。

甲板に出た彼らを待つていたのは、砲口を向ける、無数の灯浮標であった。灯浮標の数はさつき確認した時よりも増えており、尚も続々と集結中であるらしかった。

しばらくすると先程の小型艦が『ミラ』に接近し、スピーカーで話しかける。

『こちらは日本国海上自衛隊です。貴船の国籍と航行目的をお教え下さい』

おおよそ人間の声とは思えない機械の声に彼らは驚いたが、艦長は勇気を振り絞って答えた。

「グラ・バルカス帝国海軍、シータス級潜水艦『ミラ』だ。航行目的は…通商破壊だ」

『分かりました。皆様を輸送する船を手配しておりますので、しばらくお待ちください』

まるで降伏させることを前提としていたような無機質な声に、彼らは得体の知れない何かを感じる。

30分もすると今度は小口径の砲が多数搭載された白い船がやって来て、『ミラ』の乗組員達は全員が身柄を拘束された。

「これが日本国の軍艦か? 船体の割に武装が心もとないな…」

「所々で技術力の高さが伺えますが、こんな小口径砲しか搭載してい

ない艦が『グレードアトラスター』含む東征艦隊に勝てた理由が気になりますね…」

そして彼らは本国まで移送され、後に『グレードアトラスター』の乗組員達と同じ捕虜収容所に連行された事によつて東征艦隊が敗北した理由を知り、驚愕する事となつた。

50話：シエリアの訪日記録

フオーク海峡海戦より約2週間後――

日本国 東京都

カルトアルパス沖での海戦から約10日後、私を含めた数人の外交官達は、来賓として日本国の実質的な首都である「東京」に来ていた。そこは帝国の誇る高さ100m以上のビル群がちっぽけに見えるてしまうほどの巨大な建築物の数々がそびえ立ち、帝国のそれと比べて乗り心地が非常に良く、しかも無人で目的地まで走ってくれるという先進的なデザインの自動車が高速道路と呼ばれる空中回廊を埋め尽くし、いつか本国で見た超重爆撃機よりも大きそうな航空機が空を飛ぶ（しかもあれは民間機なのと言う）異世界だった。

自動販売機と呼ばれる無人の購買屋に、新幹線と呼ばれる音速に近い速度で走行する列車（もはや列車と呼んでいいのかすら分からない）、そして『9代目東京タワー』と呼ばれる高さ1200mの電波塔。東京は他にも想像を絶する数々の物ばかりであった。日本国という国は私が思っていた以上に技術が発達している先進国である。

この国は危険だ。
非常に危険だ。

先日、あの場で全世界に宣戦布告をしてしまった自分を呪いたい気分だ。

神聖ミリシアル帝国やムーならともかく、これほどの技術力に支えられる軍隊と戦ったら、帝国軍がどうなるかは目に見えている。

実際、精鋭揃いの東征艦隊が敗れたのだから全面戦争になったら帝国は確実に負けるだろう。

「どうですかシエリアさん、東京は」

『9代目東京タワー』の展望台から無限に広がっていきそうな灰色の風景を眼下に、日本国の外交官である田中が私に尋ねた。

「ふっ…祖国の首都がちっぽけに見えるてしまうよ。旧世界でも新世界でも世界1位の大都市に間違いないとは思っていたのだが…」

仲間の外交官も、日本国のあまりの発展度に言葉が出ないようであつた。

ちなみに軍人はこの場にはいない。私達からすれば同じ捕虜でも、日本国からしたら軍人ではない私達はあくまで一般人であるらしい。そして本国に送り返される前に、少しでも日本国を見て行つてくれという日本政府のよしみで私達は東京観光に勤しんでいるのだった。拘束された時にはどんな酷い事をされるのかとビクビクしていたが、幸いな事に日本国は敵国の人間に町の観光案内をするくらい、平和ボケしているらしい。

東京から少し離れた場所に收容されている捕虜達は、捕虜なのに艦内よりも良い飯を食わせてもらっていると感激している程だ。

：純粋な優しさか、強者故の余裕か。

少なくとも旧世界ユグドでの祖国世界最強や、この世界の神聖世界最強ミリアル帝国強とは違つた強さを持っているのは間違いない。

それを一面コンクリートの風景が物語っている。

「いい国だな。祖国がここに至るまで何百年かかるだろうか」

「講和に至り、国交を結べば数十年まで短縮する事はできますよ」

「それは残念だな、皇帝陛下がこの場に居てくれたら実現するだろうに」

早期に講和を結べれば、祖国は数十年でこの国に追い付き、追い抜かせる。

だがそれは叶わず、祖国は焼け野原からスタートする事になるだろう。

それが残念で仕方がない。

この日は東京を一通り観光し、映画鑑賞がしたいという私の要望を『TOOTAYA』という映画やドラマの録画媒体を貸し出している店が解決してくれた。

帝国からしたら非常に画期的な録画媒体であるDVDやBDなる物も日本国では骨董品であるらしいが、将来ムー等の友好国に輸出するために生産ラインやサービスが復活して来ているらしい。

私はホテルのテレビで1晩ぶっ続けて日本国の映画を観賞し、ここ

でも日本国の技術力の高さに驚かされた。

まずテレビが非常に薄く、画質、音質共にが非常に良いのだ。なにより白黒ではなくカラーであり、画面が途切れたりカクついたりしない。

映画鑑賞を趣味としている私にとって、その夜は最高の夜となった。

「おはようございますシエリアさん？　昨夜はずいぶんとお楽しみになったのですね…？」

危なかった。せつかくの敵情視察の機会が、映画鑑賞で台無しになる所だった。

まさか気付いたら夜明けだったとは、これも日本国の手の策略か？

日本国恐るべし。

「本日は静岡県で行われる富士総合火力演習を見学しに行きます」

「ほう、日本国の陸軍か…」

敵国の首都の視察も重要であるが、やはり何よりも重要なのは軍隊の視察であろう。

海軍の恐ろしさは『グレードアトラスター』の敗北でしっかりと味わったし、この機会に陸軍の強さを測れるのは好都合だ。

一個人としては、自衛隊が本当にゴジラを倒せるのか知りたい所である。

「それにしても一般市民が軍…いや、自衛隊の演習を見れるなんてな。私達にとっては非常に有難いが」

「一般公開は1966年から…まあ700年くらい前からやっていますよ」

「……………」

日本国からしたら、我々は1900年代の技術レベルらしい。

つまり、我々はこれから700年後の軍隊の姿をお目にかかるの

だ。

そして演習が開始された。

私はその技術差に圧倒され、息を呑む。

戦車、装甲車、航空機、パワードスーツと呼ばれる二足歩行兵器、どれも大きな脅威だ。

歩兵に至っては全員が脳内の電子機器によって、迫撃砲や小銃の異常な命中率を叩き出していた。

特に、ドローンと呼ばれる無人兵器群は驚愕の一言に尽きる。

帝国軍がこれと対峙した場合、それから放たれるミサイルと呼ばれる誘導ロケットに、帝国軍は為す術もなく全滅するだろう。

仮に帝国軍が大量の対空兵器を持ち出してあれらを全滅させても、無人であるおかげで、日本国はパイロットという貴重な人材を失う事がないのだ。

どれだけ短時間で航空機を製造できても、パイロットの育成には非常に時間がかかるため、航空機が無人と言うのは画期的だ。

だが、私には気になる事があった。

「ところで田中殿、『グレードアトラスター』に乗り込んで来た『化け物』はいないのか？ 日本国には、あれに似た軍人がいるのだろうか？」

そう、応戦した陸戦隊を全滅させたあの『化け物』だ。

後で調べた所によると、全員が異常な切れ味を有する刃物に斬殺されていたらしい。

狭い艦内で無数に放たれる小銃弾を避けながら、それを成し遂げる戦闘力はどんな兵器よりも脅威となる。

それが数人いるだけで、敵の戦艦や空母を無傷で鹵獲する事が可能となるのだ。

「あー『被手術兵』の事ですか。彼らの中にも何人かは居ると思いますよ」

「本当か?! あの中にあの化け物がいるのか?!」
「いえ、種類が違うと思いますよ。少なくともここにいる人達は陸上での戦闘を想定していると思うので、船に乗り込んで戦える人は少ないと思います」

「そ、そうか」

あの『化け物』にも種類があつて、中には艦に乗り込んで戦える者もいるが、中にはそれが出来ない者もいると。

これは貴重な情報だった。それでも日本国に勝てるとは思えないが、祖国が強硬手段に出た場合の被害は減らせるかもしれない。

「その『被手術兵』というのは、どれくらいの種類がいるものだろうか？」

「まあ数百万種ですかね。もつといえるかも？」

「……………」

これには私だけでなく、他の外交官達も僅かに残っていた戦意をポツキリと折られてしまった。

それ以前に普通の兵器群と戦つて勝てる気がしないが、数種ならともかく、数百万種もいるのでは具体的な対策の立てようがない

勝てない、絶対に勝てない。

この日、私達は祖国に帰ったら宣戦布告の取り消しを上に乗申する事を心に誓った。

怖気付いた訳では無い、ただ、心の底から祖国の未来を憂いているだけなのである。

51話：日本国緊急閣僚会議

中央暦1642年7月15日――

日本国 東京 首都官邸

異世界に転移してからとはいうものの、何度目か分からないほど開かれている緊急閣僚会議。

あまりにも頻繁に開かれているため、彼らの感覚も「緊急」に麻痺してきていた。

「それでは会議を開始します」

だが緊急とは言え、今回の会議は日本国にとって目下的、直接的な害はないので、全員が冷静であった。

「先日、神聖ミリシアル帝国から『中央世界と第2文明圏で連合艦隊を作り、世界に宣戦布告をしたグラ・バルカス帝国をムー大陸レイフォール沖合から駆逐する。具体的な戦闘に入る時期は約6ヶ月後。ついでには日本国も参戦可能か』という問い合わせの書簡が届きました」

ようするに参戦依頼だ。だが執務室が騒然とするのも無理はなかった。

よほど戦力に自信がなければ、6ヶ月という短い準備期間で本格的な武力衝突は決定できないからだ。

「カルトアルパス沖での海戦に勝ったから高を括っているのか、それとも艦隊が全滅したのを忘れているのか？」

「プライドの問題でしょう。世界最強のネームを傷付けられたからには、何としてでも汚名返上がしたいのでしょうか。前世の隣国と同じですよ」

「なるほど、つまりはパーパルディア皇国と同類って事で良いんだな？」

純粹に戦争に勝つのが目的なら、もう少し準備期間をかけても良さそうなものである。

しかし大多数が戦ったら絶対に勝てると思いの底から思い込んでおり、おまけに一刻も早く勝って名誉を回復したいと思っているのなら

ば話は別だ。

それこそ過去のパ皇のように、勝ち急いでしまうのである。

「で、現実問題『6ヶ月後』に護衛艦隊は間に合うのか？」

「移動に1ヶ月かかると仮定しても間に合いますね。だいぶ余裕を持たせてますが…編制はAIを使えば数時間で終わりますし、燃料や弾薬、物資の積み込みも数日で終わります」

「ミリシアルは1ヶ月以内の回答を求めているが、それでも護衛艦隊群の派遣は可能という事だな？」

「ええ、様々なコストを鑑みても十分可能です。ただ…」

「…ああ、それは分かっている。何度も言わなくていい」

それはここにいる者なら何度も考えた事である。

「戦果を上げすぎる事による対外関係の悪化』だろうか？ 今でこそ無いが、第3文明圏から『日本国脅威論』が出たのもそれが原因だろうな」

そう、軍事力が国の地位や発言力に直結するこの世界ならではの問題だ。

いや、それは旧世界でも同じなのだが、この世界は特にそれが顕著なのだ。

「つまり、我々が強すぎると」

「そうだ。木造船ならともかく、相手は第二次世界大戦レベルの相手なのだぞ。700年前の敵とは言え、砲弾や爆弾が直撃でもしてみろ！ 装甲の薄い現代艦では大損害は免れん！ 派遣した人員の安全を考える以上、我々は戦闘になったら全力で敵を屠らねばならないのだ！」

「で、全力を出したら敵は全滅。今度は味方からの心証が悪化する、と」

「そうだ！ 安全第一を謳って日本国単独で敵を殲滅してしまつたら、どうなる?! 世界連合の意味がなくなるな！ そうしたら味方から何と思われるだろうなあ？ 『日本国は強欲だなあ…。待てよ？

グラ・バルカス帝国が存続している内は良いけど、その後に国益を脅かすのは日本国ではないか？』だろうよ！」

ゲームに例えてみれば分かりやすい。

例えば強力なラスボスとその配下が徘徊するダンジョンに、数人の仲間が潜入するとする。

だが、仲間の1人がそこにいるモンスターを全て倒してしまつたら？

当然、他の仲間はおもしろくない。おまけに、モンスターをたつた1人で殲滅した奴は新参者ときた。

しかもそれだけでなく、そのダンジョン攻略が国の威信をかけたものだったら？

少なくとも戦果を独り占めにした奴への心証は悪化するはずだ。

更に言えば、これは2度目なのである。

「じゃあ世界連合とは最初から別に行動して、彼らが撤退する時に殿として…」

「2度目は通用しないだろう、規模が規模だ。カルトアルパスのように『敵を退けたぞ！ やつたー！』では済まないのではないか？」

「少なくとも『日本国は敵を疲弊させるための捨て駒として世界連合を利用したのではないか？』と疑われるだろうな」

「じゃあ形だけでも参加して、ミサイルを撃ち尽くしたら撤退する、と言うのは…」

「それで世界連合が勝てれば良いな。負けたら日本国だけが損害無しで撤退したことになるが」

外務省は世界との歩調もなるべく合わせてたいと考えていたが、日本国は他国との技術差があり過ぎるため、足並みを揃えるというのがそもそも難しい。

虎とライオンならともかく、象と蟻では歩調は絶対に合わないのだ。

それを言つたら帆船と内燃機関で動く艦が混合している世界連合もそうなのだが、日本は別格過ぎるのである。

「ちなみにミリシアルもこれが性急であるということは十分に理解しています。今回はあくまで中央世界と第2文明圏のみで対応可能とも言っていますし、『地理的に遠いこともあり、出なかつたからと言つ

て日本国が不利益を被る事はない』との一文も添えられています」

なら、日本国が取る選択肢は1つとなる。

「では、日本国は『地理的に遠いため、今回のような性急な作戦には対応しきれない』と言う事で参加を断ろう。もちろん方便だが、仕方あるまい」

「異議なし」

「異議なし」

日本国の方針は決まった。

もちろん、神聖ミリシアル帝国とムーがいるからと言って、世界連合がグラ・バルカス帝国に勝てるとは思っていない。

参加するという方針を取っていれば助かる命も大勢あっただろうが、世知辛い世の中である。

「そういうえばムー国戦艦の改修案はどうなんだ？ これも政治的な物件だろうか？」

もちろんその戦艦とは、先の海戦で大破した『ラ・カサミ』の事である。

これのどこが政治的な理由かと言うと、西の守りとしてムーの面子を立てる必要があるからだ。安直に日本の兵器を受け渡しても、日本の兵器だけが脅威と見られるのは好ましくない。

ムー自体が侮れない相手であると敵に認識させなければ、抑止力として機能しないのだ。

そのための『ラ・カサミ』改修案である。

これを日本国が改修してムーに返せば「日本の技術がムーに渡された」と世界は見るだろう。そして改修後に『ラ・カサミ』が戦果を上げてくれれば、ムーの評価はより磐石のものとなり、それが第2文明圏安定化のプロセスとなる。

「ああ、それを第二次世界大戦程度の技術力を持つ敵に対し、優位性を持って戦えるようにする…だったか？ 修理して改修するより1から造り上げた方が安上がりなのだが…」

「なんなら『ラ・カサミ』と称して『むさし』でも送り付けちゃいますか。第二次世界大戦程度の技術力を持つ相手でも十二分に戦えます

よ。維持費がバカになりませんから厄介払いには丁度いい」
執務室に笑い声起きる。

しばらくすると防衛大臣が挙手をした。

「それについては防衛省が説明いたします。近々、ムー国に対して技術流出防止法の一部が緩和されるのはご存知の通りでしょう。それを踏まえた改修案はすでに完成しております。ですが、物理的な問題で世界連合との合流は間に合いません」

物理的な問題なら、それは仕方ないなど皆が納得する。

しかし改修案に目を通して気付いたのは、換装する兵器は全てが骨董品なのであった。

「これは…『10式戦車』に『155mm自走榴弾砲』？ いつの物だ？」

「21世紀初頭です。他にも『CIWS』や骨董品の『中距離多目的誘導弾』やレーダーやらも載せる予定です。多少の改造はしますが」
「よくそんな物が残っていたな。600年前の物じゃないか」

「設計図が残っていただけです。戦車なんて基本構造はほとんど変わりませんので、AIに任せたら数週間で製造できますよ」

「なるほど。他には…対潜能力も付与するのか！それでもムーまでの道中で沈められるのは怖いな。護衛艦隊群も随伴させるか。反対のある者は挙手してくれ」

特に反対意見もなく、閣僚らは頷く。

本会議において、日本国政府は世界連合の参加を拒否する事と、戦艦『ラ・カサミ』をムーへ送り届ける名目で、1個護衛艦隊群及び補給艦を護衛任務に就ける事に決定した。

特に後者は先日の『しきしま』のように中途半端な戦力を送っては日本人の生命を危険に晒す事がないようにと、入念に準備が進められた。

52話：小さくて大きな「歴史のif」

中央暦1643年1月5日――

神聖ミリシアル帝国 港町カルトアルパス

日本国の天災攻撃の余波で壊滅的な被害を出したカルトアルパス。世界流通の要となるこの港町は、海峡の最奥にあったがために津波の威力が集中し、一時は復興は不可能とさえ言われる被害を出した。しかし、この港町が失われたら困るといふ人は多かった。

激動の1642年が終わり、新年が明けた今でも生々しい爪痕が残っているが、世界各国から集まった人々の努力により、この町の復興は着実に進んでいる。その中には当然、日本国の技術者の姿もあった。

この町は傷ついた神聖ミリシアル帝国の威信そのものであり、数多くの国に助けられる世界最強の姿でもあった。

そして今日、1643年の始まりとともに、反撃もまたここから始まる。

世界連合艦隊出陣のこの日、町はお祭り騒ぎとなった。

世界の強国が集い、見える範囲だけでも250隻を超える大艦隊が結成される。

フォーク海峡を一望する両側の山から眺めると、それは実に壮大な眺めであった。

『出港――ッ!!』

艦隊の姿は港に住まう民、港を活動拠点とする人々に勇気を与える。

世界史上最強の連合艦隊は、西方に展開する異界の軍、グラ・バルカス帝国海軍を滅ぼすために、勇ましく出港していった。

ア

グラ・バルカス帝国情報局の中に存在する技術部は、敵国の技術水準やそれを元にした戦術に関する研究機関である。

だが「国家の転移」という未曾有の大事件が起こってからは、この技術部は弱体化の一途を辿っていた。

理由は至極単純、新世界の敵は非常に脆弱で、分析なんかしなくても勝てるからだ。

だが、情報技官であるナグアノは自分の部署が「穀潰し」だの「税金泥棒」だの何を言われようが大して気にしていなかった。

いくら軍部から重宝されず、周りから冷たい目で見られても、敵の分析は必要だと考えていたからである。

そして先日のカルトアルパス沖の海戦での東征艦隊の敗北を受けて、彼の部署に大量の仕事が回ってきた。

彼らにとっては転移以来初の大事な仕事であり、同時に廃部の危機から部署を救う光明であった。

「ナグアノ、ようやく俺達が活躍する時が来たな！ まさに我が世の春だ！」

「そうだな。だが入ってくる情報が少なすぎる。これはキツイ仕事になるぞ」

「それもそうだな。まずは……ムーから始めよう」

「ムーか。神聖ミリシアル帝国の次に脅威とされている国だな」

机の上に広げられた資料を拾い、ナグアノは真剣な面持ちで写真を見る。

コーヒーの入ったカップに口をつけながら、彼は分析を始めた。

「……ムーの場合、海と空ならさしたる脅威ではないな。だが、現時点で方が一が十分に起こり得る強さではある。何十年か経てば立派な脅威となるだろう」

「東征艦隊がこの国の艦船に負けたとは考えにくい。ナグアノ、お前は どう思う？」

「砲撃戦の場合、駆逐艦や巡洋艦なら撃ち負ける事もあるだろうな。」

だが航空優勢はほぼほぼ確実だろうし、この世界で潜水艦と魚雷を持つているのは我々だけだ。その分有利ではあるだろうな」

「なるほど。やはり真に警戒すべきは神聖ミリシアル帝国か」

魔法という訳の分からない技術で発達してきた国、神聖ミリシアル帝国。

科学という分野が通用しないため、ここの分析は困難を極めるだろう。そう考えながら、ナグアノは分析を続ける。

実際に東征艦隊が負けているため、有効な戦術を見つけ出すことが出来れば大手柄である。

彼らの仕事は責任重大であった。

夕方――

影の色が濃くなり、空がオレンジ色に染まる頃、ナグアノの仕事は終わった。

同僚は先に帰っており、部屋には彼1人だけである。

「さてと、そろそろ帰るか――」

書類をまとめ、冷えたコーヒーを飲み干す。

立ち上がり、帰る準備をしている時だった。

扉が開き、ナグアノはその作業を一旦中断する。

入って来たのはレイフォールの現地人。情報局が雇ったスパイであった。

「ナグアノさん、ムーにある日本国の本屋、紀×国屋書店で興味深い書物を手に入れました。目を通しておいて下さい」

スパイが渡したのは、1冊の本。

本の題名はムーの言語で書かれており、情報局員であるナグアノも一応は読める。

本の題名は『武器×兵器の歴史』であった。

「日本国? ……ああ、あの国か」

カルトアルパス沖の海戦で他の国の艦隊が多大な損害を被る中、唯一この国の艦だけは無傷であり、しかも後の会議で『グレードアトラスター』を押収した国だ。

ロデニウス大陸で撮られた写真で艦の武装を見る限り、こんな豆鉄砲にあの最新鋭艦が負けたとは考えにくい。いったいどんな卑怯な手を使ったのだろうか。

隕石を降らした？ そんなのはデマか妄想だろう。

とにかく明らかにされている交戦記録を見る限りは、世界が団結して戦おうという時に、漁夫の利を狙うようなクズ国家だ。

双方が受けた損害の状況を見るに、『グレードアトラスター』を含む帝国艦隊は最初にミリシアルとムーの艦隊と交戦。その後、疲弊している所を日本国の艦に負けたのだろう。

だが、1つ引つかかるのはやはり、艦の武装だ。

駆逐艦ならあの小口径砲でも十分な損害を被るはずだが、ある程度の装甲を持った巡洋艦や戦艦なら被害を受けこそすれ、沈没は考えられない。

「ある程度の戦闘力はあるはずなんだがな……」

彼の国は何かを隠しているのかもしれない。そして、これを読めばその隠された謎が見つかるかもしれない。

彼は椅子に座り、本を読み進めた。

（これは……民間企業の本なのか？ 紙は光沢があつて上質だし、誌面も妙に洗練されているし……）

めくるページの全てがカラーで、写真や図面は非常に鮮明。ただの雑誌にしては文章も情報量も異常に高品質であり、それとなく技術水準の高さが伺える。

「ふむふむ……日本国がいた世界では火薬はこのように作られたのか……。銃の登場で騎士の時代が終わったのは俺達と同じだな」

自分でも気付かないうちに、ナグアノはこの本にどっぷり引き込まれていた。それほどまでに異世界の歴史は興味深く、おもしろかったのだ。

そのため、彼がとあるページを見つけるまでには相当な時間がか

かかってしまっていた。

一昔前のグラ・バルカス帝国、もしくは現在のムー国の物に酷似した兵器類が掲載されているページの次の見開きである。

「あ…ッ！ 『グレードアトラスター』?!」

なんとその見開きには、グラ・バルカス帝国の戦艦である『グレードアトラスター』の写真が載っていたのだ。

「な…なぜ帝国の最新鋭艦が?!」

ナグアノは本を凝視する。その時間がどれほど続いたのか彼には分からなかった。

「…いや、これはそっくりだが『グレードアトラスター』じゃない！

まさか——」

震える手で文章を読み進める。

そして彼は核心に至った。

「——日本国艦か!!」

時代は「第二次世界大戦」と表記されており、運用者は大日本帝国海軍。

艦名は『大和型戦艦1番艦 “大和”』。

日本国がいた世界では世界最強の戦艦であつたらしい。

その事実にあ堵しながらも、彼はふと我に返る。

「いや待て待て！ 落ち着けよ俺…！ 日本国もこれ程の戦艦を持っていただと…?!」

新たに湧いて出てくる疑問。

文面から察するに、この戦艦が存在したのは過去。しかし、この異世界の常識は一通り覚えたナグアノだが、異世界のさらに異世界である日本国の暦だけは未だ知ることが出来ておらず、残念ながら、現状では彼にこれが今から何年前の物なのかを知ることが不可能であった。

しかし——

「過去に存在したのは事実なのだろう。ならばなぜ、日本国は、このような貧弱な武装の巡洋艦しか持っていないんだ？」

日本国艦の写真を取り出し、見てみる。

何度見てもやはり、武装が貧弱に見えて仕方がない。

そこで、彼は考えられる理由を紙に書いてみることにした。

殴り書きで書かれたのは3つ。

①：文面から考えるに、この「世界大戦」以後の日本国は戦争を経験していない。つまり平和な世界になったか、戦う必要性が薄くなった。

②：「世界大戦」で敗北し、牙を抜かれた。

③：小口径砲ばかりに目が行ってしまうが、実はそれ以上に強い武装が存在する

①と②はどことなく似ているような印象を受けた彼だが、ここでナグアノはこの2つが矛盾するという事実気が付く。

それを説明するにあたり、まずは①ではなく②を解説していこう。まず②だが、彼はとある事実を知ってから日本国が現在も存続していることを不思議に感じていたのだ。

グラ・バルカス帝国のそれまでの常識では、戦争に負けた国は問答無用で併合、もしくは植民地、属国化というのが定石である。そのため彼は日本国は「世界大戦」に勝ち、相手国を併合したのだろうと思っていたのだ。

だが、次のページにグラ・バルカス帝国の『ヘルクレス級戦艦』に酷似している日本海軍の『長門型戦艦』が、かつて敵国であったアメリカ合衆国が行ったという「なんらかの実験」を前に、何隻もの艦船と並べられているのを見、事実が事実と矛盾することに気付いた。

この写真を見る限り、日本国は戦争に負けたらしい。その証拠に、ハッキリと『アメリカを含む連合国に降伏し、戦争に負けた』と記載されているのだ。

和平なら国が続くのも分かるが、負けたのだ。

戦争に負けたのに、なぜ国が存続しているのだ？

「…考えても仕方ないな」

過去がどうであれ、日本国が現在進行形で実在しているのは間違いないのだ。

そのため、彼は②は一旦保留とした。

次に①だが、日本国が「世界大戦」以降は大国同士の戦争を経験していないのも間違いない。

だが、そうして戦う必要がなくなったかと言うと、これもどうやら違うらしい。

日本国は転移直前までも、隣の大国に領土を脅かされていたのだと言う。

そのような状況で軍事力を強化しないのは考えにくい。

だが戦争に負けた国が軍事力の強化をするとすると、①と②が相反することになるとも彼は気付いた。

そもそも戦争に負けたのに国が続いている時点で、グラ・バルカス帝国に生きる者からしたらおかしいのである。

「待て…… まずは状況を整理しよう」

再び、彼は鉛筆を滑らせる。

出た結論はこうであった。

戦争に負けたが、日本国は存在している。その事実から見て日本国が1つの国として独立、存在しているのは間違いない。

なら、軍事力の強化もおかしくない。

「②の選択肢はなくなつたな。日本国はどういう訳か戦争に負けたのに国として存続し、おまけに牙も抜かれていない。……何かしらの制限が存在するらしいが」

彼は続ける。

「なら①か③だが、①は「隣の大国の脅威」が存在していた事情から考えて、戦う必要がなくなつたとは考えにくい。軍事力に制限がかけられていたとしても、最低でも武器兵器の改良、精強化くらいはするはずだよな？」

俺ならそうする。

ならば③が有力か？

「……とりあえず本を読み進めるか」

現時点では考えていても仕方ないので、彼は再び本を読み進める。

次のページは、読むだけで寒気がしてくるような話だった。

「学徒出陣？ ひめゆり隊？ 総動員体制？ 神風特別攻撃隊……？」

帝国も敗北寸前となったら、このような手段を取るのだろうか……」
大量の爆薬を積んだロケットに人間を積み、敵艦に体当たりさせる
『桜花』。

『回天』と呼ばれる人間魚雷、特攻艇『震洋』。

いずれも「非常に強い愛国心」が生み出す狂気の世界だ。

本当にこんな物があつたのだろうか？

この文書の日本人と同じように、グラ・バルカス帝国人も非常に強い愛国心を持っている。

祖国が危機に瀕したのならば、自ら棺桶に乗り込み、狂気と愛国心と爆薬を抱えて、敵軍へと突撃する事も十分に有り得るだろう。

幸運にも帝国はまだまだ安泰だが、考える気が失せるような話だ。

「…『V1ロケット』？ 改良型もあるらしいな。日本国の同盟国が開発したのか」

思わぬ所で棚からぼた餅が降ってきたと、彼は喜ぶ。

小さいが、それらのエンジンのおおまかな図面もあるので、これは是非とも帝国も実用化を成し得ねば。

「対艦型の『Hs293』？ これは素晴らしい！ 誘導爆弾か！」
他にも次々と出てくる新たな兵器構想の数々に、彼は大出世を確信する。

すると同時に、再び我に返った。

日本国がこの『Hs293』を配備しているのであれば、東征艦隊が負けたのも頷ける。

だが、これは航空機から発射される物であるため、帝国艦隊を敗北に至らしめた物はこれではない。

③の答えはまだまだ先に存在する。

彼はページをめくる、めくる、めくる。

『近接信管』は日本国の敵国が開発したのか……ん？ 『ジェット戦闘機』……？」

プロペラが無く、その姿は神聖ミリスリアル帝国の軍用機に似ていると言われれば似ているかもしれない。

だが機体性能がミリスリアル之物とは隔絶している事に彼は目を白

黒させる。もし彼の国の戦闘機がこれ程のスペックを有していたなら、例外なく空は制空権ミリシアルのものになってしまっただろう。

「魔法と科学の差か？ それともこの情報が間違っているのか？」

少し心残りはあるが、とりあえず彼はページをめくり続ける。

「気球爆弾？ 『超大和型戦艦』？ 氷山空母？ これはこれは…」

苦笑いをしつつ、めくる。

「日本国にも細菌兵器の概念はあるのか。これは要注意だな」

ページをめくる。

「潜水艦…?! 日本国も保有しているのか?!」

めくる。

「この兵器はおもしろいな。ロマンに溢れている」

めくる、めくる、めくる、めくる。

そして遂に、彼は恐ろしいものと対面する。

『「原子爆弾」だと…?! まさかこんな恐ろしい物がツ?!」

高濃度のウランやプルトニウムを無理やり合体させ、原子核の分裂によるエネルギーで強力な爆発を引き起こす原子爆弾。

構造的には単純なこの爆弾は、たった1発で瞬時に数十万人を死に至らしめるといふ、まさに「恐るべき悪魔の兵器」に違いない。

だが記載されている情報を見る限り、これも③の答え——東征艦隊を敗北させた兵器——では無かった。

日本国はこの爆弾を2発も落とされたトラウマからか、この兵器類の製造、所有を現在進行形で一切禁じているからだ。

そして、彼は気付いた。

「まだ先があるのか…? これよりも恐ろしいものが…?!」

ページはまだまだ余っているのである。

今までそれらしき物が登場していない事から考えるに、③の答えはこの先だ。

彼はそう確信すると共に、強い好奇心と恐怖を感じる。

この先は帝国が未だ経験したことのない未知の領域。

中には『原子爆弾』よりも恐ろしい物も存在するのだろう。

ナグアノの手は異常に冷たくなり、つまんだままの紙面は汗で濡れ

ていた。

「……ええいままよー」

帝国の本であれば紙が千切れてしまいそうな力で、彼は未知の世界へと踏み込む。

目は無意識に閉じられてしまい、彼が「それら」と対面するには数秒のラグがあった。

「……………これは……」

彼が目にしたのは、兵器を語る上で避けては通れないのが技術の発展。

高速演算装置『コンピュター』の開発。

トランジスター、集積回路(LSI、IC)の開発による『コンピュター』の小型化、低価格化。

ロケット技術の進歩による『スプートニク1号』と呼ばれる世界初の人工衛星。

そしてそれらから生み出される前時代より更に強力で、凶悪な兵器の数々。

『原子爆弾』よりも強力な爆発範囲と威力を持つ『水素爆弾』。これらの爆弾を積んで大陸間を飛び越え、敵国を攻撃する『ICBM』。

大陸間弾道ミサイル

「イージスシステム？ 艦による防空戦闘？ 日本国がいた世界は航空主兵論が普及したのか？」

そして遂に、彼は核心へと至った。

「あー、『P-15』?! 艦対艦ミサイル……」

洋上に浮かぶ艦艇から発射され、敵艦へと自ら向かっていく超兵器。他にも空中発射型の物や、地面から発射される物もある。

もし日本国がこれ、もしくはは似ている兵器を配備していたら？

「いや、配備しているのだろう。あの東征艦隊が少しの損害も与えられずに負けたんだぞ」

それを裏付ける証拠として、日本国の艦艇を撮った写真の中に、本書の「イージス艦」にかなり似ている艦艇があったのだ。

前部に一門しかない小口径砲、のっぺりとした船体。

後方の「ヘリコプター」と呼ばれる垂直離着陸が可能な機を発艦さ

せるための甲板。

これだけ証拠があつては、もはや疑いようがない。

日本国は技術で帝国を上回っており、このままでは帝国は負けてしまふ！

「いや……まだだ！　まだ追いつける!!」

ページをめくると後はもう後書きしかなく、ナグアノはそれなりの希望を抱いた。

本を読む限り、日本国は『水素爆弾』や『大陸間弾道ミサイルICBM』の類は保有しておらず、現状ではそれらを迎撃する術すべしかないらしい。

よかった！　本当によかった！

十数年の差があるが、これら2つがないのであればまだ勝機はある！

彼は本を閉じ、大急ぎで報告書の作成に取り掛かった。

ところで、彼がなぜ「十数年の技術差」しか無いと判断したのか解説しておこう。

それは、本の解説が西暦2000年よりも前で終わっており、ナグアノは日本国の技術はその程度だと思つてしまつたからである。なぜもつと先まで紹介しなかつたのかは出版社の人間に聞くしかないが、そんな些細な事のために、グラ・バルカス帝国は日本国の力を大きく見誤る事となるのである。

歴史というのは奇妙なもので、時に非常に些細な事が歴史を大きく変えるような事柄へと発展することがあるのだ。

「不死の秘薬の爆発」「幻を神託と信じ、フランスを救つた少女」「3日の猶予で新大陸を発見した探検家」「新大陸より伝わつた貧者のパン」「僅かな投票数の差で処刑された国王」「金鉱発見による人々の殺到」「運転手のミスにより暗殺された王位継承者夫妻」「美大落ちの独裁者」「1人のトイレ休憩による戦争勃発」などなど。

グラ・バルカス帝国のスパイが手に取つていた本が、ナグアノに渡つた本が現代の日本国に関する事であつたならば、グラ・バルカス

帝国も勝ち目は無いと見て、早期に戦争が終わっていたかもしれない。

だがそれも叶わず、この日もまた、別の選択肢であれば世界の命運が大きく変わっていただろう。「非常に小さく、大きい」事柄が起こっていたのだった。

53話：バルチスタ沖大海戦

グラ・バルカス帝国 帝都ラグナ 帝国軍本部

旧世界でも、転移した後でもその版図を拡大し続けている大帝国、グラ・バルカス帝国。

その強大なる国の都では、軍の幹部が集まる会議が開かれていた。会議には「帝国の三将」と名高い

○帝都防衛隊長 ジークス

○帝国海軍東部方面艦隊司令官 カイザル

○帝国海軍特務軍（旧監察軍）司令長官 ミレケネス

も参加しており、特に「帝国の軍神」と呼ばれるカイザルの発言に軍部は注目していた。

彼の意向によっては軍そのものの方向性を修正することも有り得る。それほど彼の影響力は大きい。

「こ、これより会議を始めます」

軍の若手幹部が進行を務める。

帝国人なら知らない者はいないだろう軍神カイザルを前に、彼の唇はカサカサに乾燥していた。

「お手元の資料はご覧いただいたかと存じますが、スパイからの情報によると異界の連合軍が本日、神聖ミリシアル帝国カルトアルパス港から出港しました。旧式艦約250隻に加えて、ミリシアルの空母も数隻確認しています。敵軍は第2文明圏を目指している模様です」

「…大艦隊だな」

先の海戦でグラ・バルカス帝国軍でも精鋭中の精鋭である東征艦隊が世界連合艦隊を相手に敗北した。

相手艦隊のほとんどは戦力に数えられないような旧式艦であったが、最新鋭の戦艦群が負けたのは事実であり、その数を聞いただけで会議室に緊張が走った。

「本来ならば帝国特務軍が対応すべき事案ではありますが…ミリシアルやムーの艦もかなりの数が確認されています。日本国の艦は確認

されていませんが、特務軍だけでは荷が重いかと」

「連戦だったとは言え、実際に精鋭揃いの東征艦隊が負けたのだ。主力を出さねば負けるぞ」

敵の主力艦隊、それも最新鋭と思われる艦隊を難なく屠^{ほぶ}れた東征艦隊でも、連戦になると負ける。敵を蛮族と舐めてはいけぬ。

世界連合は難無く打ち倒せる「獲物」^{征服対象}ではなく、「敵」^{脅威}である。

「海軍東部方面艦隊に西部方面艦隊の一部を加えましょう。西に敵：というか人が住めるような場所はありません」

「そうだな、西部方面艦隊の一部を東部艦隊に編入しよう。そして増強した東部艦隊、特務軍艦隊で敵を叩く。これに異論は？」

異を唱える者はいない。

これにて軍の方針は決まった。

「———そういえば、次の海戦に『グレードアトラスター型戦艦』の2番艦は出られそうか？」

軍を統括する者はカイザルの問い掛けに対し、「待ってました！」と言わんばかりにハキハキと答える。

「はい、グレードアトラスター型戦艦2番艦『クイーン・テンセンス』の実戦投入は十分に間に合うと試算されました」

「おお…!!」

何の事はない。

『グレードアトラスター型戦艦』は元々、複数隻建造される予定だったのだ。

「では次の海戦の旗艦は『クイーン・テンセンス』にしよう。勝って『グレードアトラスター』^姉の弔いをさせてやろうではないか」

「そいつあ面白い！ 大賛成だ！」

「異議なし！」

たまにそんな冗談を飛ばしながらも、彼らは真剣に会議を続ける。そんな中、外務省の高官とパイプのある人物が、とある提案をした。

「…そうだ、本国艦隊から一部を引き抜いて、これを別働隊として追加したい。彼らには東部方面増強艦隊が艦隊戦を行っている間に、ムー国首都への攻撃をしてもらう」

「なるほど、各国に対する心理効果を狙ったものですか？」

「話が早くて助かるな。そうだ、世界連合艦隊を撃破することは…恐らく可能だろう。だが外交的には、もう一手あると好ましい」

「私はその案には賛成だが…都市への艦砲射撃か。なら、あの部隊が適任だな」

「ああ…『死神イシユタム』か。まあいいんじゃないか？ 帝国の力を見せつける良い機会だろう」

転移前の世界ではグラ・バルカス帝国の占領地護衛艦隊であった本国艦隊第52地方隊。通称イシユタム。

占領地に対する他国からの奪還作戦を防ぐ役割を担うのはもちろんのこと、占領地が少しでも謀反を起こせば、戦艦数隻を含む圧倒的な火力を以て鎮圧する。

弱きを一方的に破壊、蹂躪する任を負っているため、指揮官も士官も一兵卒に至るまで、粗暴な者達が集められている。

それが恐怖の部隊「死神イシユタム」。

新世界に転移してからは長らく本来の任務を行えていなかったため、彼らは喜々として任務をこなしてくれるだろう。

何より彼らが沈んでも誰も悲しまない。

「ではそちらの作戦も並行して行うということにしよう。彼らは粗暴だが実力は確かだ。敵の防衛艦隊が出て来るだろうが、ムーの艦隊なら善戦してくれるだろう」

先の海戦では負けたが、戦争には勝つ。

そんな決意を胸に、彼らの会議は終了した。

数週間後――

レイフォル沖

グラ・バルカス帝国海軍

東部方面増強艦隊、

帝国特務軍艦隊

神聖ミリシアル帝国が発起人となり、中央世界と第2文明圏の有力

国が連合艦隊を組んで、レイフォルへと向かっている。

第2文明圏侵攻の足掛かりとなる旧レイフォル地区は、グラ・バルカス帝国にとって本土と同等の重要性を持つ拠点である。敵連合艦隊の動きを掴んだ帝国海軍は、空母機動部隊による打撃及び、戦艦等の打撃力による艦隊決戦を行うべく、レイフォル西側地区に集結していた。

新たに東部方面艦隊に配属された、帝国でもっとも強力な超大型戦艦『グレードアトラスター型戦艦』2番艦『クイーン・テンセンス』の艦橋で、艦隊司令カイザルは海を眺める。

「…すごいな」

海を覆い尽くさんとするほどの艦艇数がそこにあった。

海軍西方方面艦隊の一部を編入した臨時東部方面増強艦隊と帝国特務軍の連合軍が総力を結集して展開していた。

戦艦19隻、空母18隻、重巡洋艦25隻、軽巡洋艦29隻、駆逐艦200隻近く。そして潜水艦も100隻近くが今作戦に参加している。

「負けるとは微塵も思っていないが、やはり不安だな。ミリシアルやムーはどれほど強いのだろうか」

ここでネタバレになるが、これから起きる海戦でグラ・バルカス帝国は問題なく勝利する。

それも当然、原作での艦数はこれより少ないのにも関わらず、大勝利をしているからだ。もちろん艦艇数が増えれば、この勝利はますます揺るぎないものとなるだろう。

もちろん神聖ミリシアル帝国の空中戦艦『パル・キマイラ』に何隻か沈められるが、それさえ居なければグ帝の被害は微々たるものである。

なのに何故、彼らは過剰な戦力を連れて来ているのか？

カルトアルパス沖海戦の情報があまりにも少な過ぎるため、敵の実力を正確に計測できていないからであった。

「連戦で疲弊していたとは言え、東征艦隊を打ち負かすほどの敵です。司令、どうか油断なさらぬように」

「それはもちろんだ。とは言え木造船や外輪船はさすがに大丈夫だろう。問題はミリシアルとムーだ。今回敵の中に日本国がないのは幸いだっただな」

先の海戦での双方の被害状況を見るに、日本国は初めから漁夫の利を狙っていたのだろう。いや、そうとしか思えない。

そうでなければ帝国の誇る戦艦、しかも2隻を無傷で拿捕するなど不可能だ。

「憶測でものを言うのは何だが…東征艦隊はミリシアルとムーの連合艦隊との砲撃戦に何とか辛勝し、その後は無傷の日本艦隊に打ち負かされたに違いないだろう。1隻と言うのは何かの間違いじゃないかと俺は考えている」

「なるほど…！ 卑怯な国ですね。許せんせん」

「ああ、卑怯だ。だが帝国に勝ったのは事実だ」

そう、腐っても何とやら。連戦で疲弊していたとは言え、『グレードアトラスター』を含む帝国軍艦隊に勝てる程度の実力は持っていることが伺える。

「司令、報告します。艦隊より1時の方向、250km先の海域に敵の大艦隊を発見。第1次攻撃隊、発艦準備に入ります」

「ついに戦闘だな…。気を引き締めろよ」

のちの歴史書に「壮絶な戦い」と記録されたバルチスタ海域の戦い、バルチスタ沖大海戦が幕を開ける。

54話：ムー国オタハイト防衛戦

中央暦1643年2月5日　バルチスタ沖大海戦の最中――

ムー　商業都市マイカル　とあるホテル

『ラ・カサミ』をムーへ無事に送り届けるといふ大事な仕事を終え、海上自衛隊の第4護衛艦隊群の隊員たちはムー国政府が用意してくれたホテルで過ごしていた。

しかし、彼らはただ、だらけている訳ではない。

来るべき時に備え、英気を養っているだけである。

群司令の三浦は本国から人工衛星経由で送られてくる資料を見ながら、ムー国産のコーヒーを口にしていった。

「空母機動部隊か…」

偵察衛星が現在録画中の動画には、ムー大陸南端を航行中の空母6隻を含む艦隊が映っていた。

旗と兵装、そして上空を見上げる人間の顔から判断して、グラ・バルカス帝国所属には間違いなさそうである。

敵の目的はムー国首都かマイカルを火の海にすることだろう。

心理的効果、経済への直接的な打撃を見込める沿岸部の大都市は、艦砲射撃するには最高の獲物だ。

「ん…？　艦隊を2つに分けたか。両方攻撃するつもりか？　欲張りめ」

戦場の最前線で隊を2つに分けるといふのは暴挙である。

作戦遂行にあたって必要な戦力を考慮して振り分けているのだから、これでは目標達成が困難になるのは誰にでも予想できるだろう。

「いや…相手の技術レベルを見て、分けても大丈夫と考えたのか？　それとも片方が陽動…？」

後者は正解である。

この世界のグラ・バルカス帝国は現時点では異世界の勢力を雑魚だとは考えておらず、むしろミリシアルやムー、日本を強敵認定していたのだ。

まあそれも、バルチスタ沖の海戦が終わるまでなのだが。

「群司令、本国から連絡です」

「ああ、もう見たよ。『ムー国マイカル市には多数の日本人が在住し、現地に進出した企業もある。これを守るは自衛隊の責務であり、第4護衛艦隊郡はマイカルの邦人をグラ・バルカス帝国の脅威から護衛せよ』だろう？」

「はい、でも…これだとムーの首都が…！」

そう、日本国政府はマイカルを守れとは言ったが、首都を守れとは言っていない。

しかしそこにはこんな理由があった。

「いや、首都は『ラ・カサミ』に任せろってことだろ。これ以上は日本が出しやばる訳にはいかない」

「なるほど…！ でも、彼らは勝てますかね？」

「勝つき、ヤバそうだったら支援してやればいい。友軍の火力支援という名目でな」

三浦は冷えてしまったコーヒーをグイッと飲み干し、脳内に埋め込まれたチップを起動した。

『悪いが休みはお預けだ！ 全艦出港準備！』

その通信はすぐさま全隊員に届き、1時間もしないうちに第4護衛艦隊群はマイカルを出港した。

少し前――

ムー国南側海上 グラ・バルカス帝国 本国艦隊 第52増強地方隊

雲一つない快晴、静かな海。海面はキラキラと輝き、澄んだ青色の中を禍々しい艦隊が黒煙を吐きながら進む。

艦隊の名はイシユタム。

帝国の力を全世界に知らしめることを主目的とする艦隊だ。

「諸君。今回の任務の主目的はムー首都への艦砲射撃だ」

旗艦オリオン級戦艦『メイサ』の艦橋で、艦隊司令のメイナードは作戦の説明をしていた。

相変わらず顔色の悪そうな彼はゆっくりとした口調で続ける。

「敵は当然、それを阻止しようとするだろう。戦う相手はムー艦隊と予想される。見た目は旧式だが、ミリシアルと協力して東征艦隊を打ち負かした敵だ。油断はできない」

「司令、ならば首都攻撃は厳しいではありませんか？」

その質問を聞いた彼は表情を変えずに、一息ついてから口を開いた。

「その通りだ。首都は国の心臓部、敵がここを守らない訳がない。そのため我々は艦隊を2つに分け、片方には首都攻撃に見せかけた陽動をしてもらい、片方は陽動に釣られて防衛の手が薄くなった都市を破壊する」

場が小さくザワつく。

しかし敵の都市を攻撃するならばこれが最適解に近いように思えるため、ざわつきはすぐに収まった。

「司令、攻撃目標は？」

戦艦『メイサ』の艦長オスニエルが小さく手を挙げる。

メイナードは不敵な笑みを浮かべ、彼の質問に答えた。

「ムーの第2の心臓、マイカル。我々は商業都市マイカルを火の海にする！」

「くはは……さすがメイナード司令、首都攻撃が陽動なんて……いいですねえ、えげつないですねえ」

こうしてグラ・バルカス帝国本国艦隊第52増強地方隊は、ムー国の南側で隊を2つに分けた。

ムー国に恐怖と破壊をもたらすべく、彼らは北へと進軍するのだった。

ムー国 首都オタハイト

第2文明圏でもっとも栄えている国、列強ムー。

その中でも特に繁栄を築いている街が、首都であるオタハイトであった。

そんなオタハイトの中心部、王城の近くに建つムー統括軍軍司令部の総司令室は騒然としていた。

「敵艦隊の状況は？」

「はっ！ 日本国からの情報によると敵艦隊は空母6隻を含む計40隻。それがたつた今、二手に別れたようです」

「別れただけ？」

「はい、どうやらオタハイトとマイカルを時間差で攻撃するようできて…オタハイトに向かって来ている艦隊は計14隻。戦艦1隻、空母2隻、巡洋艦4隻、小型戦闘艦7隻です。残りはマイカルに向かっているとの事」

司令は少しの間熟考してから、口を開いた。

「……マイカルにいる日本軍は？」

「はい、参戦する意思を表明しています。彼らなら大丈夫かと」

「そうだ——」

その瞬間だった。

「空軍から入電！ 首都オタハイト東側約200kmの位置において敵艦隊を発見！ 大型戦艦1、戦艦4隻、空母2隻、小型戦闘艦7隻の艦隊が首都方向に向けて進行中！ なお、大型戦艦は全長200mを超えている模様！」

「なっ…!!」

先の海戦は日本国と神聖ミリシアル帝国がいたから勝てたようなもの。

しかし、今回はそのどちらもない。

日本軍もいるにはいるが、彼らはマイカルで手一杯だろう。

…勝てるか？

いや、我々は勝たねばならない。

敵艦はムーのものよりも遥かに強く、これに勝つには数を揃えなければならぬ。

だが時期が時期だけに、今ムー国にはオタハイトとマイカルを同時に守る戦力はない。例え主力が揃っていても敵艦隊を撃退するのが関の山だろう。

だが、親切にもマイカルを守る任は日本国が引き受けてくれるとのこと。

ここで我々が負け、首都が火の海にでもさらされたら、列強としてのメンツが立たない。

だが日本国は友好国を守るだけでなく、列強としてのムーの立場をも守ってくれているのだ。

「首都防衛に全力を尽くせるように配慮してくれているのか…」

司令は周りに目配せをする。

全員、同じ気持ちであるようだった。

「首都付近の全艦隊を集結しろ！ 『ラ・カサミ』を旗艦として敵艦隊を撃退する！」

後刻――

ムー国 マイカル市 東側沖合約100km海上

海上自衛隊が所有する史上最大の護衛艦、いずも型護衛艦。その2番艦である『かが』のCIICで、幹部が群司令である三浦に報告をあげていた。

「首都を攻めていたグラ・バルカス帝国艦隊は『ラ・カサミ改』を旗艦とするムー国艦隊及び航空隊によって撃破されたようです。ムー側の被害は甚大のようですが、首都攻撃はこれで回避されました」

結果的に言えば、ムーは首都防衛戦には勝った。

戦いは苛烈を極めたとの報告も入っており、グラ・バルカス帝国艦隊の分遣隊は全艦が、ムー側は『ラ・カサミ改』ともう1隻以外は全

て水底に帰したとのこと。

「死んだ人間たちには申し訳ないが：これでムーの立場は守られた。戦況を聞く限り、バルチスタ沖の海戦でプラマイゼロだけどね。でもこれで第2文明圏はしばらくの間は安泰だ」

安泰とは言っても首の皮一枚で繋がっている状況だけどね、と彼は付け加える。

「さて、そろそろやりますか。敵さんに繋いで」

「了解しました」

海上自衛隊第4護衛艦隊群旗艦『かが』は、グラ・バルカス帝国艦隊に対し、無線電波を発した。

同時刻――

グラ・バルカス帝国本国艦隊第52増強地方隊

「?! ン…これは…!!」

ペガスス級空母『シエアト』の艦橋では、無線通信士が困惑していた。

軍が使用している周波数帯の回線に、突然他国からの呼びかけがあったからである。

『こちら日本国海上自衛隊、グラ・バルカス帝国艦隊応答せよ』

艦橋に聞き慣れない人間の声が響く。

その場にいる人間は当然、混乱した。

『メイナード司令!』『日本国海上自衛隊』を名乗る男から無線が!」

「慌てるな! 敵はわざわざ自分の位置を教えるようなアホだ。私が時間を稼ぐ! その間に敵の位置を割り出せ!」

それからメイナードはひとつ咳払いをし、返答をした。

「私はグラ・バルカス帝国本国艦隊、イシユタム本隊艦隊司令メイナードだ。日本国よ、要件はなんだ?」

『やっと思答したか。手短に伝えるからよく聞け、直ちに引き返せ、さ

もなくば撃沈する』

メイナードも日本国の存在は知っていた。

先の海戦で損害無しで『グレードアトラスター』を鹵獲するという奇跡を起こした国だ。

どんな卑怯な手を使ったのかは想像もつかないが、大方他国の艦隊との殴り合いで疲弊したところを狙ったのだろう。

「はっ！ 漁夫の利で勝利した腰抜け国家が我々を沈める？ なんと滑稽なことだ！ 手負いの戦艦を倒す実力はあるようだが、我々は26隻の大艦隊。貴様らに負けるつもりなどない」

『漁夫の利…？ 貴殿らは何か勘違いをしているようだ。「グレードアトラスター」と「ベテルギウス」以外の艦船を沈めたのは我々だ。断じて漁夫の利ではない』

声の持ち主は続ける。

『あと、「グレードアトラスター」を降伏させたのは海上自衛隊ではなく海上保安庁という警察組織の船だ。貴殿らの最新鋭戦艦は自衛隊より戦力に劣る警察に負けたのだ。これが分かっただらさっさと引き返せ』

もはや嘘もここまで堂々としていれば面白いものである。

警察組織が所有する程度の船に戦艦が負けるはずなどない。

「ふっ…！ 断る!!」

メイナードによって強引に通信が切られ、交渉は決裂した。

55話：日本国マイカル沖防衛戦

日本国海上自衛隊第4護衛隊群は、第4護衛隊と第8護衛隊からなる。

そのうち第8護衛隊は佐世保を母港とした4隻の護衛艦が所属しており、その中でも艦歴の若いあきづき型3番艦『すずつき』のCIで、艦長の衣川きぬがわは画面に表示される敵艦隊の状況を眺めていた。

「艦長、グラ・バルカス帝国空母から艦載機が飛び始めました。発艦目的は偵察かと」

「そうか…」

20世紀と28世紀の技術はもはや比べようがない程の差がある。言うなれば、グラ・バルカス帝国海軍は大艦巨砲主義という「時代遅れの武器」で「未来兵器」という恐るべき怪物に立ち向かうドン・キホーテだ。

まだ起こってすらいない戦闘の結果は誰の目にも明らかで、それ故に敵が哀れであった。

「旗艦『かが』より入電、敵艦隊攻撃が決定されました。対水上戦闘用意！」

数十年前に起こった『テラフォーマー』による大規模な日本本土侵攻によって、当時、それまで数百年間 戦火を知らなかった日本人の意識は大きく変わったと言われている。

それから時が経ち、再び日本国民が平和を謳歌し始めるようになった頃、異世界転移という前代未聞の大事件が起こり、新世界で起きた数々の事件によって日本人は再び目覚めた。

戦わなければ勝てない。

戦って勝つことよつてのみ、ヒト人類は生きる事が許されるのだ。

新しい世界は未熟であるが故に、この絶対的普遍弱肉強食の真理が浮き彫りになっている。

これを忘れてしまっているがために「武器などいらぬ！」「自衛隊なんていらぬ！」と叫ぶ「平和を愛する人々売国奴は許さん（スパイを除く）」がいるのだが、彼らがそうも言っていられなくなったのは言うまでもな

い。(言論の自由があるのは良い事だ)

日本人は4人の尊い犠牲を対価に、太古の時代から続く真理を思い出したのだ。

「とは言え…圧倒的過ぎる勝利は思うところがあるな。相手が
テラフォーマー『ゴキブリ』じゃなくて残念だよ」

アラームが鳴り響くCIC。

衣川はそっと目を閉じ、これから逝くことになる敵兵達人間に黙祷する。

そして彼はゆつくりと目を見開き、冷たく、無機質な表情で指示を出した。

「対水上戦闘用意!!」

「了解ッ！ CIC指示の目標、グラ・バルカス帝国軍!! 『AI』人工知能による敵の未来位置を予測！」

「各部対水上戦闘用意よし！ ……艦長、指示を」

「…うむ」

衣川は一息置いてから、続けた。

『AI』人工知能による全自動攻撃始め！」

『――攻撃を開始シマス』

無機質な合成音声合理性の塊が艦内に響くと同時に、『人工知能』に操られた鋼鉄の艦は、破壊の矛先を対象へと向ける。

すぐさま艦中央部から小さな煙が吹き上がり、斜めに設置された対艦ミサイル発射筒から最新の対艦誘導弾が飛翔した。

煙の量は非常に少なく、見栄えに劣る。

数秒も経たないうちに破壊の槍は音速の壁を超え、哀れなグラ・バルカス艦隊へと向かって行った。

『763式艦対艦誘導弾』

日本が開発、配備した純国産の大型艦対艦誘導弾。

大きさの割に炸薬量は少ないが、防御力が高く、レーザー等による迎撃は困難。そのためミサイルでの迎撃が必須となる。

重量はかなりあるものの、極超音速で敵艦の装甲を貫き、大損害を

与える。

レーダー上に艦対艦誘導弾が連続して飛翔する様子が映し出され、1発で戦艦をも屠^{ほぶ}るとさえ言われる（自衛隊で）最強の誘導弾が極超音速でグラ・バルカス艦隊を破滅^{いざな}へと誘う。

——この時点で、勝敗はすでに決していた。

艦隊司令メイナードは空母『シエアト』艦橋から前方を睨む。

青白く、気分の悪そうなその顔は、いつにも増して険しかった。

「……敵はまだ見つからないのか?!」

両腕を組み、苛立ちを隠しきれていない様子で彼は聞く。

「はい……算出した位置の全てに偵察機を飛ばしてはいますが、敵の発見には至っておりません」

誤解のないように言うと、彼らは日本国とのやり取りの最中に、発信源の割り出しには成功していた。

彼らが困っているのは、発信源が1つではなかったこと。

それらは帝国艦隊から5 kmも離れていない地点だったり、中には何千キロと離れているものさえあった。

「あの短いやり取りの最中に敵がこんな距離を移動していたとは考えにくい。そんなのは帝国空軍で最速の戦闘機を以てしても不可能だ。あるか無いかは別として、どれか1つが正解だと考えるしかないな」
「常識的な距離以外の物は索敵範囲から除外しています……それで索敵する地点は3桁を超えそうです。我々の常識の範囲外に敵がいる可能性はありますが……」

「……日本国め、いったい何をしやがった?!」

臨時的に艦の各部から多くの計算要員が集まり、彼らは利き手の外側を真っ黒にしながら、計算用紙とにらめっこを続ける。

海図に刺されるピンの数が増え続ける横で、計算用紙の量が一向に減らない様子は哀れでさえもあった。

そんな中、メイナードはそこから少し離れた場所で手を組み、ただ1人、熟考を続けていた。

「電子…戦? …レーダーの照射による電波妨害…無線による遠隔からの操縦…」

顔色の悪さでは軍内部で1位2位を争うであろう彼が、尚も険しい顔でブツブツと呟いている様子はおどろおどろしくもあった。

しかし、大抵そのような時間は長くは続かない。

突如、彼の青白い顔は何と形容すべきか見たことのない色に染まり、周囲の人間を驚かせた。

「敵は…日本国は…我々の遙か上を行っている…?」

「し…司令?」

一応だが、グラ・バルカス帝国にも電子戦のような概念は存在している。

しかし帝国が過去に経験したそれらは、現代の地球で行われているような本格的なものではなく、せいぜいレーダーの照射等による電波妨害によって、敵間で行われる通信の妨害程度のものであった。

そのような前例しか無いがために、中にはその重要性に薄々勘づいている者もいた——メイナード司令もその1人であった——が、帝国軍人で電子戦をハッキリと「電子戦」という言葉に変え、輪郭を見い出せた者はいなかったのだ。

だが今回の日本国による一方的な電子戦が、彼が長年培った経験と知識で作り上げた、いわばメイナードだけの軍事ドクトリンの有効性を証明する。

彼は帝国軍人の誰もが見つけ出せなかった、一欠片のピースを手にし、完成することのなかった、しなかつたであろうパズルを完全に手にすることができたのだ。

「まずい…」

瞬間、メイナード司令の周囲から音が消える。

世界の全ての色が白黒へと変わり、彼は狼狽えた。

日本国は帝国が経験していない戦争をも経験している…!?

完成したパズルを手に、理性と勘と呼ぶべきものの両方が同時に警

鐘を鳴らす。

それは旧世界では連戦連勝、唯一無二の強さを誇っていた帝国軍の軍人が、経験したことのない感覚であった。

「まずい……！ まずいぞー！」

彼の思考を要約し、言葉にすると、こうだ。

（日本国の行動は、彼らが我々の常識の範囲内の敵なら自らの位置を敵に知らせるような愚行だ。だが、我々は敵の位置を発見できていない。つまり——）

「敵は我々の常識が通用しない強さである事が危惧される!! 総員、直ちに戦闘配置!!」

「司令!? それはいったいどういう……」

「うるさい急げ！ 貴様、日本国の艦の写真を見たことがあるか!？」

「ハッ!? 日本国艦の写真でありますか？ あの小口径砲しか積んでいない……?」

「そうそれだ！ よくよく考えてみる！ 仮に、仮にだぞ。『グレートアトラスター』が連戦で疲弊していたとしても……どんな痛手を負っていたとしても、あんな小口径砲を前に降伏するか!？」

「……………いいえ」

メイナード司令の言う事は理解できる。

先のカルトアルパス沖海戦でグラ・バルカス帝国海軍の東征艦隊は敗北し、『グレートアトラスター』は日本国の戦利品となった。

だがこれを受けてグラ・バルカス帝国の人々、特に軍事に詳しく、写真で日本国の艦を見たことがある者は誰もがおかしいと思ったのだ。

日本国の戦利品になったということは、日本国艦隊が多大な戦果を上げたということ。つまり東征艦隊は日本国にやられたのだ。

先程メイナード司令と通信をした日本軍の者は「我々が沈めた」と言っていたが、駆逐艦ならともかく、それなりの装甲がある巡洋艦や空母、自身の砲弾に耐えられるよう設計されている戦艦があんな小口径砲なんかに沈められるのだろうか？

スパイによると旗艦『ベテルギウス』は何とか撃沈は免れたものの、大損害を受けて戦闘後に鹵獲され、『グレートアトラスター』もある程

度の損害を受けた後、日本国の降伏勧告に応じたらしい。

だが、あんな豆鉄砲でそんなことが可能なのか？

しかし、あまりにも入ってくる情報が少ないため、グラ・バルカス帝国ではこの議題はすぐさま忘れ去られ、負けたという現実だけが議論の対象となっていた。

「失礼ながら、司令は何を言いたいので？」

「私が言いたいのは……！ 様々な可能性を検討すべきだ！ あの小口径砲は欺瞞……真の刃を隠すためのカモフラージュに過ぎず、日本軍はあの『グレートアトラスター』ですら太刀打ちできない兵器を隠し持っているかもしれないのだ！」

「そんなバカな」と、今までのグラ・バルカス帝国軍だったらその可能性を一蹴していただろう。

だが、今回ばかりはそれを匂わせるような事情があるのだ。敵が魅せた『自身の位置情報の隠蔽、もしくは欺瞞』である。

通信相手がずっと同じ人物だったのは周知の事実。

敵が複数の発信源から通信を送っていた可能性も否定はできないが、それを行おうものならば、膨大な人員と資源の浪費に他ならないため、考えにくい。

なにより、この説を否定する1番の理由がある。

敵からの通信はノイズがほとんどなく、音声は全く途切れていなかったのだ。

「なんとしてもこの情報を伝えなければ！ 急ぎ打電を！」

「司令、その……先程から無線が使えません。これも日本軍の仕業でしようか……？」

メイナードはしばらく絶句した後、ますます狼狽えた。

「いかん！ なんとしても誰かが帰ってこの説を説かなければ祖国が滅びてしまう！ 航続距離が1番長い機を用意しろ！ 急げえッ！！」

「ははは………。司令、冗談が御上手ですね……？」

その瞬間であった。

『監視台から報告！ 一時の方角から飛し——』

——カッ!!!

刹那、メイナード司令は光に包まれ、肉片となって深い海の底へと沈んで行った。

グラ・バルカス帝国海軍の本国艦隊、第52増強地方隊は全艦が轟沈。偵察に上がった複数の戦闘機を除き、部隊は文字通り消滅。

後にムー近海で救助された戦闘機乗りの1人はこう証言したと言
う。

「26隻全ての艦において数秒の誤差もなく同時に爆発が起こり、1分も経たないうちに艦隊が消滅した」

56話：伝播する恐怖

「号外!! 号外!!」

のちの歴史書に「壮絶な戦い」と記録されたバルチスタ海戦の翌日。その日の朝、各国で出回った号外は世界の人々を震撼させた。

『世界連合軍敗北』

世界最強と謳われる神聖ミリシアル帝国と、それに次ぐムーを含む世界連合艦隊が、文明圏外に位置するグラ・バルカス帝国の艦隊に敗北したという前代未聞の大事件。

それは人々を一瞬困惑させた後、彼らの顔を見たことのない青に染め上げるのに十分な衝撃であった。

「おいおい…嘘だろ…!」

「あの神聖ミリシアル帝国が…負けた…?」

民衆を青ざめさせたのはそれだけではない。

ミリシアルはその数少ない切り札である古代兵器『バル・キマイラ空中戦艦』を2隻もこの海戦に投入していたらしいのだが、そのうちの1隻がグラ・バルカス帝国艦隊の旗艦『クイーン・テンセンス』の砲撃により撃墜されたのだと言う。

これが偶然なのかどうかはさておき、『クイーン・テンセンス』とはレイフォルを単艦で滅ぼした『生グレード伝アトラス説ター』の同型艦である。

それが今度は古の超兵器をも倒したともなると、もはやこの艦に勝てる国など、この世界には存在しないように思われた。

当初はグラ・バルカス帝国を「思い上がった蛮族の国」と侮っていた人々も、その認識を大きく変えることとなる。

恐れ、恐怖、畏怖。

もしかしたらグラ・バルカス帝国によつて世界が滅びるかもしれない。

最強の国が負けるとはそういう事なのだ。

「な…なぜだ!! この前は勝ったじゃないか?!」

「空中戦艦もムーもいたのに…! グラ・バルカス帝国はそんなにも

強いのか?!

正史では損害状況だけを見れば痛み分けて終わったこの海戦だが、この世界線ではそうは行かなかった。

グラ・バルカス帝国が出撃させた艦艇数は正史の約1.7倍。増強された艦艇は空母や戦艦の割合が高く、これは彼の国が異世界の人間を「未開の蛮族」と侮らなかつた結果であつた。

フォーク海峡海戦で最新鋭の艦を含む東征艦隊が敗北したという事実が、かえつてグラ・バルカス帝国の人々に警戒心を抱かせ、裏目に出たのである。

もちろんミリシアルやムーが敵を侮っていたと言う訳でもない。

フォーク海峡海戦でたった1隻相手に多大な損害を出したこの二国も「敵は強い」と学んでおり、少しばかり急だったものの、全力で敵を屠る準備をしていたのだ。

…にも関わらず、世界の導き手たる列強が、文明圏外の国を相手に敗北した。

両国の上層部が受けた衝撃は大きかつただろう。ミリシアルに至つては古代兵器を2隻も出撃して負けたのだから、何人か倒れて病院送りとなつていても何ら不思議ではない。

そして今回の海戦で「世界最強」が敗北した事を受け、世界で初めてグラ・バルカス帝国に降ることを決定した国が第2文明圏で出たという。

それ程までに世界連合艦隊敗北の報が与えた衝撃は大きく、世界各国に恐慌の波は伝播して行く。

その波に呑まれたのは、日本国も例外ではなかつた。

「人々の不安を煽る事に腐心する機関」は毎日のようにバルチスタ沖の海戦で大切な人を亡くした（真偽は定かではない）遺族の元へと殺到し、果てはデッチ上げのストーリーを作り上げて人々の涙を誘う始末。

SNSがとうの昔に普及していた時代だから良かったものの、歪曲されていない事実を知ることのできる媒体がなければ日本経済は大きく乱れていただろう。

それでも一部の情弱層はこれに動揺し、各地でトイレットペーパーや非常食を大量に買い溜めするという現象が発生したと言う。

第2文明圏 ムー 日本国大使館

第2文明圏の東側に位置する列強序列2位であるムー国。在ムー日本大使館では、緊急の会議が開かれていた。その会議の内容はもちろん、「バルチスタ沖大海戦」についてである。

「先日行われた異世界連合、グラ・バルカス帝国間で行われた海戦についてですが、双方の損害状況は配布資料の通りです」

新世界連合確認被害

○第2文明圏竜騎士団約700騎 喪失

○世界連合艦隊（ムー含む）約315隻（全艦艇数の3分の2に当たる） 喪失

○神聖ミリシアル帝国艦隊

・約120隻（ミリシアル艦隊の9割） 喪失

・空中戦艦1機 喪失

・航空戦力 90%以上喪失

グラ・バルカス帝国確認被害

○艦艇 約50隻 喪失（このうちの45隻は空中戦艦による被害）

○航空兵力 300機以上（全て空中戦艦による被害） 喪失

○潜水艦の損害無し

双方ともに大きな被害が出ているが、世界連合の被害の方が断然大きい。おまけにグラ・バルカス帝国側の損害のほぼ全てが空中戦艦に

よるのだと言う。

ミリシアルがこの兵器を投入していなかったら、グラ・バルカス帝国の損害状況は完全にゼロか微々たるものになっていたのだろう。

「なんと言うか……これは戦いと言うより一方的な虐殺ですね。連合艦隊は壊滅に近いのに……グラ・バルカス側は被害が少ないですし、被害の9割以上がミリシアルの航空戦艦によるものですか」

「この世界の人は『空中戦艦』と呼んでいるそうだ。人工衛星が撮った映像を防衛省が解析したらしいが、中国の旧型『九頭龍』の方がよっぽど強いとの結論が出たらしいぞ」

『くずりゅう
九頭龍』

テラフォーマーズ12巻に登場する中国の中型有人戦略宇宙艦。

名前の通り9本の触腕型のフレキシブルアームを備えており、広範囲制圧用のレーザーキャノンが付属。クラスター爆弾による空爆も可能であり、極めて高い火力を有する。奥の手として中性子兵器「大? 鏢」と自爆装置も内蔵されており、艦長が死ぬと自動で自爆するようにセッティングしてある。

地球と火星間を往復することが可能な移動能力を持ったため、地球上なら補給無しでどこへでも行けると思われる。

(分からない人は『テラフォーマーズ 九頭龍 画像』で検索！)

「じゃあ自衛隊なら十二分に対処可能ですね。安心しました」

「問題なのはこの超兵器しか戦果を挙げられず、あまつさえ撃墜? 撃沈? された事です。世界のパワーバランスが一気にひっくり返りかねませんよ」

その通りである。

ミリシアルの切り札的兵器——実際は古の魔法帝国の兵器なのだが——である空中戦艦でしかまともな戦果が挙げられていないのは大問題であった。

異世界からの来訪者である日本国やグラ・バルカス帝国はともかく、この世界の人間で古の魔法帝国を知らない者はいない。

最強の代名詞である魔帝。ミリシアルはその威を借りているだけなのだが、その兵器でしか戦果が挙げられず、あまつさえそれが撃墜されたとなると、人々はどう思うだろうか？

この損害状況が表すのは「古の魔法帝国ラヴァーナールの兵器でしかグラ・バルカス帝国に傷をつけられない」と同義である。

グラ・バルカス帝国はミリシアル艦隊を壊滅させ、古の魔法帝国の兵器をも撃ち落とした。

イコール
||

「グラ・バルカス帝国は古の魔法帝国よりも強い？」

こう思う人が出て来ても何ら不思議ではない。

実際、ミリシアルですら勝ち目が無いと思ったのか第2文明圏の1国がすでにグラ・バルカス帝国の軍門に降ったのだ。

「世界の敗北」という強い不安がミリシアルの栄光を地に追いやり、小国は藁にもすがる思いで強国の庇護という安心を求め。

彼らは海戦の結果を受けて、ミリシアルよりもグラ・バルカス帝国側についた方が得だと考えたのだ。

「これからグラ・バルカス帝国側に付く国も増えるでしょうね。我が国も宣戦布告を受けているのですから、早めに参戦しないと大変な事になりますよ？」

「…かつてヒトラーの増長を促したのはイギリスとフランスの弱腰な宥和政策のせいだ。戦うのが怖くとも、戦うべき時に武器を持たないといけないのは上層部も分かっているはずだ」

「…となると、我々が出来ることは上からの指示を待つのみですね」

「そうだな。日本政府を信じるしかない」

会議は微妙な空気を最後に終わった。

これから忙しくなるのは間違いないのだが、上からの指示がない限り勝手に動くことは出来ないのである。

だがやはり、公式な会議では無いため多少適当でも構わないのだが、会議がこんな短時間で終わるのは示しがつかない。

「ところで『空中戦艦』が自衛隊でも十分対処可能と仰ってましたが――」

それを見兼ねたのか、若手の新人が口を開く。

「自衛隊とグラ・バルカス帝国以外に対処できそうな国は無いのですか？ 来たるべき魔法帝国の復活に備えてと言いますか……」

「ああー。確かにそうですね、それこそ議論すべきでしょう。それで……そんな国います？」

部屋にいる全員が今回の海戦に関して最も詳しい者に目を向ける。目を向けられた男性は資料を片手に、まずは皆の誤解を解くことから始めた。

「ええと……まずは皆さんの誤解を解かねばなりません。結論から言いますと、グラ・バルカス帝国が件の空中戦艦くだんを撃墜できたのは完全に奇跡です」

「????」

一同の頭の上に「？」が浮かぶのを見て、彼は説明しておいて良かったと安堵する。

大昔に古の魔法帝国が開発し、現在は神聖ミリシアル帝国が研究、配備している『空中戦艦バル・キマイラ』。

防衛省からの情報によるとこの艦艇(?)は海面数百メートルを時速200km以上で飛翔する円盤型の有人兵器であり、数百年前のイージス艦に搭載されていた『CIWS』や『単装速射砲(艦砲)』に近い兵装を複数基配備している。

おまけに現在の自衛隊が有する『改良型燃料気化爆弾』に匹敵する威力の爆弾(超大型魔導爆弾ジビル)を複数搭載しており、水平線の向こうにいる敵艦隊へと真っ直ぐ向かっていたのを見たところ、レーダーかそれに近い物も装備しているとの事だ。

「そして防衛省が人工衛星からの映像をさらに解析したところ、この『空中戦艦』はそれなりの装甲があり、魔法によるシールドも張るため、第二次世界大戦時の対空火器のような小口径砲は全く効かない事が判明しました」

とまあこの世界の技術水準からしたら、スペックを見る限りは攻防ともに非常に強力で優秀な兵器である。

そう簡単に落とされるはずが――

「——にも関わらず1隻が撃ち落とされた…と」

ある程度軍事に関心がある職員が呟く。

「はい、戦闘中に件の『空中戦艦』がグラ・バルカス艦隊へと無謀な接近をしたらしく…近辺のグ帝艦隊を総動員したと思いきつるべ打ちを食らい、超たまたま偶然奇跡的に『クイーン・テンセンス』が放った砲弾が命中したそうです。さすがに46センチ砲には耐えられなかったようで、空中で木端微塵になりました」

そうだ。

いくら『空中戦艦』^{バル・キマイラ}の全長が260.2mもの巨体であろうと、海面数百メートルを時速200kmで飛翔しているのであれば、誘導装置もないただの砲弾に当たる訳がないのである。

にも関わらず、今回は奇跡的に当たってしまったのだ。

この砲弾が当たっていないければ、グラ・バルカス帝国側の損害は何倍にも膨れ上がっていただろう。もしかしなくても、世界連合軍が勝つ事は十分に有り得たのである。

「この前のムー国新聞見ました？ 『新たな伝説の誕生か!?!』と書かれてましたよ」

「俺もそれ見ましたよ。連中、よっぽどショックだったようで——」

——ボタン!!

会議室の扉をノックもなしに開け、大使館員が飛び込んで来る。

よほど急いで来たのか、額には汗が滲んでいた。

「会議中失礼します！ ムー国外務省の課長が大至急、大使にお会いしたいとお見えになりました。可能な限り早く会いたいとも…」

本省職員の課長級がアポなしで直接来訪する。

そのような前代未聞の事態が緊急でない訳がなかった。

「…恐らくあの事でしょう。時間を作っておいて良かったですね」

外交官御園^{みその}は情報収集も兼ねて、ムー国外務省列強担当部課長オーディグスとの会談に望んだ。

57話：迫り来るは戦火の足音

約30分後――

ムー駐在日本大使館　応接室

ムー国の外務担当オーデイグスたちの急な来訪――日本国側はこれを予想していたが――により、日本国の外交官御園は直ちに会議を終了させ、彼らを応接室へと通した。

アポなしの急な来訪だと言うのに、まるで自分らが来ることを分かっていたような迅速な対応にムー国の面々は目を丸くする。

しかし彼らが持ち込んで来たのは緊急を要する案件だ。

オーデイグスは驚く暇すら惜しいように、コホンと咳払いをしてから意識を切り替えた。

「我々の突然の来訪にもかかわらず、会議の場を設けていただいて感謝します」

ムー側の挨拶に日本側も応える。

「こちらこそご足労いただき、ありがとうございます。緊急を要するようなので単刀直入に聞きますが、グラ・バルカス帝国陸軍の集結についてですね？」

それを聞いた御園の対面に座る外交官達――オーデイグスを始めとするムー国の人々は飛び上がって驚いた。

なにせ、まだ伝えてもない要件を相手が知っていたのだから。

「そ…それは…?! いったいどこから…!」

オーデイグスは驚きの感情を前面に押し出して狼狽え、真つ先にスパイの存在を疑った。

相手は前世界からの友好国である日本国だ。彼らがムー国に敵対しない限り、スパイを送る意味など――

「ああ、ご安心ください。日本版『僕の星』^{しんせつ}で得た情報を元に、そろそろムー側から接触があるだろうと予想しただけですので」

御園の冷静な回答でいくらか冷静さを取り戻したのか、ムー国人の皆がホッと安堵の表情を浮かべる。

「な…なるほど…いやはや、貴国の技術を前には機密も何もござい
ませんな。話が早くて助かりますが…」

オーデイグスは顔を引きつらせながら笑い、念の為に説明もしてお
きましようと言ってから話を続けた。

「先日、ムー国の北西、旧レイフォル領国境付近にグラ・バルカス軍が
集結しているのを国境守備隊の隊員が確認したと報告がありました」

ここまではご存知でしょうと彼は付け加え、オーデイグスは日本側
が領くのを確認してから更に続ける。

「そしてムー陸軍は帝国軍の量と国境付近のインフラの悪さからその
場での水際防衛では分が悪いと判断し、急遽国境から約20km地点
にあるアルーという名の街に防衛線を敷くことにしました」

ここまでもご存知でしたか？ とオーデイグスは再び付け加え、日
本人の1人がうっかり領いたのを見てしまい、彼は閉口して沈黙す
る。

この事実から照らし合わせるに、空が見える場所は言わば、全てに
おいて日本国の目が存在するということだ。その事実には彼は冷や汗
が止まらなかった。

そして数秒後に静寂を破ったのは御園だった。

「現在アルーの街に避難指示は出しておられるのでしょうか？」

「はい、街の住民にはすでに避難指示を出しておりますが…いかなせ
んインフラが悪いため、避難は遅れていると聞いております」

「それは…不味いですね」

グラ・バルカス軍がいつ動くか全く不明の現状、一般人には一刻も
早く避難をしてもらいたいが、インフラの悪さが大きな障害となつて
いる。

御園は突如戦火に巻き込まれる罪のない人々を想像し、歯痒い思い
をした。

「日本国自衛隊は此度のような事態を想定し、いつでも動けるように
準備をしておりました。必要とあらばいつでも友軍の支援行動を開
始できます」

遙か未来の技術を持つ超技術国家からの軍事的支援。

帝国の脅威が目の前に迫っているムーは特に、普通なら喜んで頼りにするだろう。

だが、オーデイグスはそれを聞いて複雑な表情を浮かべた。その顔は苦しんでいるようにも見える。

「今回我々が来訪したのはその……その事についてですが——」
ぎこちなく口を開き、鉛のように重い言葉で彼はムー政府の意向を伝えた。

「自衛隊の支援は……必要……ありません……」

「二なっ……?!!!」

これを聞いた日本の外交官達は少なからず動揺した。

それも当然だろう。傲慢にも聞こえるが、ムーがやっているのは自ら命綱を断ち切るような行為なのだから。

「それは——」

「誤解のないように説明しておく……!」

御園の発言を遮るように、オーデイグスが口を開く。

「私個人としては日本国の支援は必要不可欠であると思っています。それが無ければ我々がグラ・バルカス帝国に勝つ事は叶わないでしょう」

彼は早口に弁明を続ける。

「ですが他国より宥和政策に力を入れているとは言え、ムーにも列強としてのプライドはあります。日本国の方々にもこれはご理解頂きたい」

列強のプライド——それは現代の日本人にとっては馴染みの無いものだが、強大な国力を以て民を養うこの世界の国々列強にとって、外間は何よりも大切だった。

軍が壊滅した事で全ての属国が離反した国がいたのが何よりも証拠だ。

「なるほど、ではムー軍はまさか……」

恐れていた事態が現実の物となる。

御園は嫌な汗が背中を伝うのを感じた。

「はい、ムー政府は他国の力を借りずに単独でグラ・バルカス軍を退け

るつもりの方です」

「……………!!!」

これには日本側も絶句する事しか出来なかった。

技術差はたった数十年とは言え、第一次世界大戦レベルの国と、第二次大戦レベルの国では兵器の性能は段違いだ。

かつて過去に猛威を振るった塹壕戦術に頼ったばかりに、最新鋭の戦車と航空機による電撃戦を前にたった1ヶ月で降伏した国が存在するように。

「それは……勝算はあるのでしょうか？」

御園は恐る恐る聞いた。

「それは我々が負けるのを前提としているのでしょうか？」

「……………これは失礼、発言を訂正させていただきます」

「いえ、お気になさらずとも私もムーに勝ち目があるとは思っていませんから。何より技術も歴史も我々の遙か先を行く世界から来た日本国がそう言うのなら、我々は敗北以外の道はないのでしょうか」

そして少し間を置いてから、オーディグスは「こちらをご覧ください」と懐から一枚の紙を取り出して机の上に置いてみせた。

「これは…電車の運行表でしょうか？」

「我が国では鉄道と言いますがね…。現在アルーの街付近に向かう鉄道はダイヤが乱れまくりで、この運行表は糞の役にも立ちません。いえ、尻を拭くことくらいには役立ちますかね」

部屋に静寂が訪れる。

場を和ませようとしたのか、それでも滑ったオーディグスは顔を多少赤くしてから咳払いをした。

「それで…何故ダイヤが乱れているのでしょうか？」

御園が聞く。

これに対しオーディグスは包み隠さずハッキリと返答した。

「兵員や物資の輸送のためです。ムー陸軍は強大な敵を単独で退けるには数が必要と判断し、現在アルーの街へと向かう全てのルートが軍関係の物で溢れているようです」

「全て…ですか？」

「はい。今現在鉄道の混雑率は300%を超え、屋根に人や荷物を乗せる始末だと聞いております。道路も軍人で埋め尽くされ、上空から見ると蟻の行列に見えるらしいですよ。まあ、それほどの大軍が現在アルーへと向かっています」

日本人は前世世界のインドの列車を頭を思い浮かべた。

それでもしなければムー単独で防衛は難しいのだろうか、これでは物資の補給が足りなくなつて敵が来る前に軍が干からびる未来が見える。

上層部にかつてインパール作戦を強行した大日本帝国の将校のよ
うな人間がいるのではないかと御園は危惧した。

これでは守れる物も守れなくなつてしまう。

しかしムー政府がハッキリと手出し無用と言っているのなら日本は何もできない。

御園は胃がキリキリと痛むのを感じた。

それを見かねたのか、オーディグスは口を開いた。

「これで会議は終わりですが…実はここからが本題なのです。これからの発言は外交官としてでは無く、私個人の言葉だと思つてください」

それを聞き、御園達は彼の言葉を一字一句聞き漏らすまいと耳をすませた。

「先程も言ったように、どれだけ数を揃えても私はムー陸軍が勝てるとは思いません。きつと防衛線は破綻するでしょう。私が言いたいのは——」

彼は独り言を言うように小さく呟いた。

これからの発言は政府の方針に真っ向から反するため、外交官としては看過できないからである。

「私見ですが、防衛線が破綻する直前にムー政府から日本国へ秘密裏に支援要請が届くでしょう。単独で戦うと豪語してても、やはりムーの上層部は日本国の力を信じているのです」

「そうですか…」

御園は嬉しい反面、複雑な気持ちだった。

友好国に頼られるのは願ってもない事だが、防衛線が破綻するだろう直前に自衛隊を送っても戦況をひっくり返すのは極めて困難だろうからだ。

「ですが先程も言ったようにムーとて列強のプライドがあります。我々が強国としての顔を保つことは我が国民にとっても、世界秩序にとっても大変重要な意味を持つのは日本国の方々も理解しておられるでしょう。

無理難題なのは重々承知しておりますが、列強であるムーはなるべく単独で敵を退ける必要があるのです…」

「ようするに——」

「おっと、それ以上は言うてはいけませんよ。あくまで私の独り言なのでね。では、私達はこれで退散するとしましょう」

「……わかりました。御足労いただきありがとうございました」

ようするにムー陸軍が単独で勝てれば良いのだが、彼らの戦況が悪くなってしまった場合、自衛隊は極秘裏にアルーの街を防衛しているムー陸軍と合流、協力し、帝国軍を退けなければならないのだ。

この場合、援軍として送られる自衛隊員は限りなく少数である必要がある。

ここで大規模な援軍を送ってしまうと「また日本国のおかげか」と内外に見られてしまい、防衛戦の成否に関わらずムーの権威と栄光は失墜してしまい、結果的に世界秩序の乱れを引き起こす恐れがあるからだ。

オーデイグス達が部屋から退室したのを見てから御園は呟く。

何としてでも友好国を助けない日本国としては、選択肢はあつて無いようなものだ。

「……魔王を倒した部隊を呼ぶべきか」

世界会議でも、バルチスタ沖の海戦でも、ムーはマトモな戦果どころか大損害を出している。

オーデイグスが暗示するように、ここで日本が出しゃばってしまうとムーは内外への体裁が保てなくなってしまうのだろう。

今後の事を考えると、自衛隊は限りなく少数の精鋭部隊でアルーの

街防衛を成功させるしかない。

：敗北寸前のムー陸軍とその陣地というお荷物を抱えて。

しかも剣や弓で武装した前時代的な敵ならともかく、相手はそれなりに進んだ技術を持つ軍隊。

数百年の技術差があるとは言え、それを少数で、しかもお荷物を抱えた状態で相手取るのは非常に危険で無謀ではあるが、それが最もムーと世界にとって望ましく、日本にとっては友軍を助ける唯一の道なのであった。

バルチスタ沖大海戦の後刻――

グラ・バルカス帝国レイフォル自治区情報局技術部　レイフォル出張所

前例のない大規模な海戦に勝利し、民が街の至る所で祝杯をあげる中でも、グラ・バルカス帝国の軍部の兜の緒が緩むことは無かった。

この日は情報局に軍上層部が集まり、海戦についての会議が行われていた。

「知つての通り、今回の海戦で帝国は転移後初の勝利を収めた。そう言っても過言ではなからう」

列強レイフォルには勝ったが、技術差がありすぎる敵が相手では勝利したとは安易に言えない。

技術レベルが近い、もしくは同等以上の相手に勝利して初めて、帝国は勝ったと言えるのだ。

今回も世界連合艦隊は大部分が前時代的な船ばかりであり、艦載機による攻撃で脅威となる艦船はあらかた沈められたものの、それでもムーやミリシアルの艦隊が脅威だったのには変わらない。

おまけに神聖ミリシアル帝国は空中に浮かぶ戦艦というバケモノを投入した。

数は確認されている限りたったの2隻だが、その2隻の戦艦だけで

もグラ・バルカス海軍を全滅に至らしめる力を有していた。

「諸君、此度の海戦に勝てたのは『奇跡』だ。そうは思わんかね？」

「異議なし！」

「異議なし！」

「異議なし。『クイーン・テンセンス』が放った砲弾が奇跡的に命中したから良かったものの、それが無ければ敗北していたやもしれん」

「片方が落とされたことでもう1隻が撤退してくれたのも奇跡と言う他あるまい。もし撤退していなかったら…考えたくもないな」

今回は空母艦載機や潜水艦による一方的な攻撃でムーやミリシアル艦をあらかた沈められたのと、『クイーン・テンセンス』砲手の神技とも言える技量によって帝国海軍は救われた。

だが、今後の方針を神技のみに頼る訳にもいかないのだ。

「今後は技術でイレギュラー空中に浮かぶ戦艦な敵を倒さなければならぬ。誰か案のある者は？」

艦隊司令長官が辺りを見回す。

そこで手を挙げたのは1人であった。

「司令長官、イレギュラーな存在は空に浮かぶ戦艦だけではありませんせん！」

手を挙げ声を上げたのは情報局のハミダル。ナグアノの上司であった。

「…情報局のハミダルよ。それはどういう事か？」

「それについては説明するより、実物を見て貰った方が良いかと」

ハミダルはそう言い、後ろで控えていたナグアノに合図を出して彼を起立させた。

艦隊司令という軍のトップにかなり近い人間や、その他の高位の人間に囲まれた彼は見るまでもなく緊張していた。

「情報局のナグアノです。私が先日手に入れた本について語らせていただきます」

「…本だと？」

イレギュラーな存在について説明するのになぜ書物が出てくるのか、周りにいた人々は思う。

それを見てナグアノは少し恥ずかしい思いをしつつも、例の本を取り出した。

「こちらは『武器、兵器の歴史』という題名の、日本国の本です。雇った現地人のスパイがムーにある日本国の書店で買ってきました」

そして彼は本の内容を見せ、時折日本国のいた世界の歴史も混じえながら、本に記載されている兵器についての説明を始めた。

大国との戦争。日本国はその頃には時代遅れとなってしまうた大艦巨砲主義や総動員体制、神風特別攻撃隊で徹底抗戦をしたものの、無差別爆撃でほとんどの都市を、超高威力爆弾で都市を2つ焼かれて降伏。

日本国の同盟国も当初は隔絶した技術力で他国を圧倒したものの、敗北したということも付け加える。

特に『グレートアトラスター』に酷似した戦艦『大和』や零式艦上戦闘機の存在はその場にいる人間を大いに驚かせた。

そして、大戦後——
兵器を語る上で避けては通れない技術の発展。

高速演算装置『コンピューター』の開発。トランジスター、集積回路（LSI、IC）の開発による『コンピューター』の小型化、低価格化。

ロケット技術の進歩による『スプートニク1号』と呼ばれる世界初の人工衛星。

そして進んだ技術から生み出される、前時代より更に強力かつ凶悪な兵器の数々。

『原子爆弾』よりも強力な爆発範囲と威力を持つ『水素爆弾』。

これらの爆弾を積んで大陸間を飛び越え、敵国を攻撃する
大陸間弾道ミサイル
『ICBM』。

「……………!!!」

軍の上層部が感じた衝撃はとも言葉では言い表せない。

まさか極東の小さな島国が、そんなイレギュラーな存在だったとは思わなかったのだ。

「我々は…そんな国に宣戦布告をしてしまったのか…」

そう思うのも当然だ。

この本にある通りの兵器を彼の国が持っていた場合、帝国本土はすでに焼け野原になっていただろう。

日本国が大陸間弾道ミサイルという超兵器を自ら持つ事を禁止していたのは帝国にとってはこれ以上ない幸運だ。

「技術局長よ、日本国に追いつくのに：何年かかる？」

技術局長が艦隊司令の問いに応える。

「そうですね：最低でも10年は必要です」

「最低でも：か。思ったよりは少ないが：」

「ええ、極秘事項ですが：この際仕方ありませんね。実は記載されている兵器群の中には我々が現在研究中の物に似たものもありますので。最低でも10年です」

場が騒然とする。

ということとはつまり、あの超兵器群の中に近々開発される物もあるかもしれないということだ。

これなら世界征服も容易い：と考えると同時に、日本国の存在が頭をよぎる。

夢物語が現実には敵として存在するのだ。

「：これは帝王御前会議案件ものだ。ここで会議し合っても何もできない。それよりも今は、今後の事について話し合おうではないか」
会議の場にいる中では実質トップである艦隊司令長官がナグアノに座るように指示を出し、会議が再開する。

そして今日のこの会議では、現在は最優先の目標であるムー国の国力を弱らせるために他国との交易や通商破壊作戦、そして陸軍によるムー攻撃準備が並行して行われることとなった。

58話：民間船舶の防人

中央暦1643年2月17日――

第2文明圏　ムー大陸東側海上

どこまでも続く青く広大な大空。

気持ちの良い潮風が吹く大海原に、白く延びる1本の航跡。

今日のような日には船の甲板で日光浴でもしたくなるだろう。

しかし、日本国籍の大型自動車運搬船『DRIVE NEW WORLD』の操舵室はピリピリとしていた。

「間もなくムーに到着するが、油断はするな。引き続き対水上監視を厳げんとなせ」

船長の山口優まことが船員に呼びかける。

問題なく作動しているレーダーは付近に艦船が存在していないことを示すが、それでも気を緩める訳にはいかなかった。

その理由はいくつかあげられるが、最たるものは何と言ってもやはり、グラ・バルカス帝国の存在だろう。

この国の説明をするのは簡単だ。

日本国民の間では俗にG11ガイレンと呼ばれる世界会議で全世界に対して宣戦布告をした頭のおかしい国である。

ネット上では「まだパーパルディア皇国の方が立場を弁わえている」と揶揄されるくらいだ。

そんな日本人には舐められまくりのグラ・バルカス帝国だが、一応の事ながら世界を相手に戦える程の力はあったらしい。

ネットニュースで「バルチスタ沖海戦　世界連合艦隊　敗北」の見出しを見た衝撃は今なお忘れられない。

しかも両陣営の損害比を見る限り、グラ・バルカス帝国が圧勝したのは誰の目にも明らかであった。

世界会議で世界連合が勝てたのは、世界最強と言われる神聖ミリシアル帝国でもムーのおかげでもなく、日本の巡視船がいたからだっただのだ。

少なくとも、日本がこの世界に存在しなかったらグラ・バルカス帝国の世界征服も十分可能だっただろう。

とにかく、グラ・バルカス帝国が海戦で圧勝したことでこの世界に元からいた列強国家の権威が落ち、海賊行為が急増したのは言うまでもない。

そのほとんどは木造の帆船であるため、ミリシアルやムー、日本の船なら大抵の場合は大丈夫だろうが、その一方でそれ以外の要因で消息を絶った民間船も増えているのは無視できない。

その要因とは何か。

グラ・バルカス帝国の「潜水空母」による航空攻撃である。

日本国の人工衛星がその姿をハッキリと捉えた事によって判明したことであった。

「——レーダーに反応が現れました！ 例の『潜水空母』が海面に浮上したのだと思われます！」

レーダーを見ていた船員が叫ぶ。

画面を見ると、先程までは何も存在しなかったはずの海域に、1つの光点が表示されていた。

「レーダーの反応が増えました！ 航空機と思われる反応が1つ！ 時速約450kmでこちらに接近中！」

しばらくしてから再び、船員が叫んだ。

グラ・バルカス帝国の『シータス級潜水艦』から水上戦闘機『アクルックス』が飛び立ったのだ。

この恐ろしい知らせを聞き、船員達はパニックに——

「狼狽えるな！ 急いで『一警護』の者に報告しろ!!」

——ならなかった！

『株式会社 一警護』

テラフォーマーズ第18巻にて解説される日本企業。

「個人から国家まで契約者の財産を力づくで奪う」ことを理念とする。

一昔前の時代では、秘密裏に存在していた「地球警備部」という部門が地球に潜伏する『テラフォーマーズ』の駆除を行っていたが、その

脅威が無くなった今では民間警備会社では珍しい「手術を受けた警備員」による警護で名を馳せている。

過去に何度か日本を救っているため、その知名度と信頼度は非常に高い。

日本とムーの両国政府は二国間の活発な交流、交易を強く望んでおり、今後も日本政府によるムーの優遇は続くだろう。

だが、この世界は地球よりも広大で、ムーへの道のりは非常に長い。海運業会はシーレーン（海上交通路）の防衛強化を切実に願っており、それは日本政府も重々承知していたが、この世界が広すぎるために海自の手が回っていないのが実情だ。

そこで、日本政府の出した結論はこうである。

『道中の安全は一警護はしごめを頼ってくれ』

なるほど確かに、金さえ払えば契約者の財産を力ずくで守る彼らは船の防人には打って付けた。

おまけに雇われる警備員は手術と戦闘訓練を受けているため、その能力面でも安心である。

その実力や如何に、ドクロの旗を掲げた帆船、ワイバーン程度なら過剰防衛の域だ。

「まあ、戦う相手が航空機とは聞いてないがな……」

船内から出てきた黒いスーツを着た屈強な男達が呟く。

グラ・バルカス帝国の航空攻撃によって沈んだ民間船は多いが、彼の国の航空機による日本国籍を有する民間船への攻撃は今回が世界初の事例だったのだ。（『しきしま』は例外とした場合）

「――人為変態……」

各々が変身薬を取り出し、首筋から薬液を体内に押し込む。

彼らは武器の携帯、所持をしていない。

出来ないのではなく、その必要がないのだ。

簡単な攻撃ではビクともしない硬い外皮。

素手で猛獣を圧倒する怪力。

人間の生み出す機械では再現不可能な機動力を生み出す翼^羽。

それに多種多様な生物の持つ能力が合わされば、武器を持たずともヒトは一騎当千の兵器となる。

「頼んだぞ……」はしめ「警護！」

羽を広げ、大空へと飛び立つ警備員。

その後ろ姿は非常に頼もしく、船員たちは大きく腕を振って彼らの武運を祈った。

後刻――

潜水艦から飛び立った1機の特殊攻撃機『アクルックス』は海と空の青色に挟まれて洋上を飛行する。

それを操縦するパイロット、アストル・ヒースコードは自分がつけられた役職に不満を抱いていた。

「クソがッ!! なんで俺がこんな所で!!!」

どこに行こうが窮屈で狭く、澱んだ空気が逃げられない潜水艦の中は否が応でもストレスが溜まるものだ。

彼は常日頃から溜まっていた鬱憤を全て吐き出すように、大空で一人寂しく怒鳴り散らした。

「ああ、クソ……」

飛行機乗りになれたのは良かった。

良かったのだが、まさか戦闘機ではなく通商破壊が主任務である水上偵察機のパイロットに配属されてしまうとは……。

今の自分がやっている事と言えば、暗い潜水艦の一室でひたすら待機し、敵の民間船が発見されたら航空攻撃で撃沈するだけだ。

これでは単なる「弱いものいじめ」ではないか。

敵との華々しい航空戦はどこへ消えた？

つい先日起こったというバルチスタ沖の海戦では、ミリシアルの『空中戦艦』なるものに味方のパイロットが大勢犠牲になったと聞くが、戦闘機乗りを全うして逝った彼らが羨ましい。

それでも帝国軍人たるもの、皇帝陛下より授けられし機期待体を無下に
する訳にはいかない。

「……悪いが覚悟しろよー!」

翼下に取り付けられた2発の60kg爆弾。

帝国の軍艦はおろか、ミリシアルやムーの軍艦が相手でも威力が不足気味なのは否いなめないが、今回も爆撃目標は民間船舶だ。

いつも通り、汚い花火を噴き上げて沈んでくれるだろう。

彼はそう思っていた。

「——なんだッ?!」

自機に真正面から突っ込んでくる「何か」を発見し、彼は脳が判断するよりも速く、操縦桿を折れるほどに傾けた。

鉄が軋む音と共にコックピットの視界は瞬時に反転する。

今まで見えていた大空は大海原へと変わり、彼は今の一瞬で機体が軽くなったのを感じていた。

「フロートが無い! まさか破壊されたのか?!」

体勢を立て直して旋回しつつ、彼は状況確認で機体下部のフロートが根元から無くなっている事に気が付く。

この機体には特殊攻撃機『アクルックス』なんて大層な名がつけられているが、元々は『アンタレス型艦上戦闘機』にフロート（浮舟のような艀装）をポン付けしただけの機だ。その強度はたかが知れている。

敵の攻撃、もしくは今の急な機動でフロートが外れ落ちてしまったのだろう。

それでも飛行は可能……というより、むしろ空中での速力や機動性は上がるので戦闘面に関しては何も問題ない。

問題なのは、これでは着水ができない事だ。

着水自体は可能なだろうが、胴体部分のフロートが無い状態で着水なんかをすると、折りたたみ式の両翼が折れ、大惨事になるのは目に見えている。

「……ありがとよ。邪魔な荷物を取り外してくれて!」

アストルは爆弾を空中で投棄し、コックピット内で呟いた。

すれ違ったのは間違いなく敵だ。

一瞬しか見れなかったが、その全容も把握した。

「まさか最初で最後の航空戦の相手が『空を飛ぶ人間』だとは思わなかったぜ。だがな……負ける気はしない！」

もう潜水艦に戻ることにすら叶わない身だ。

なら最後くらい、華々しく散っても良いだろう？

——ヴウウウン!!!

フロートを失ったことで軽くなった機体は本来の高い機動性を取り戻し、エンジンはパイロットの気持ちに呼応するかのよう^にに猛々しく唸る。

4基の機銃が弾丸をばら撒き、曳光弾を混じえたそれは光線のように空へと消えて行く。

お互いに鋭い軌道を描いて乱舞する航空機と人型の影。

現実には絶対にありえない光景だが、ここは『竜』と『レシプロの複葉機』、同じく『レシプロの単葉機』、『ジェット機に似た魔法の航空機』と『本物のジェット機』、そして『改造人間』が乱戦を繰り広げる異界の空。

一瞬の油断も隙も許されないこの大空の戦いでは、参加者パイロットと参加者パイロットはお互いを死地へと落とし合う。

少しのミスも許されない空戦は永久とわに感じられた。

「!!!」

とは言え、人間の作り出す航空機では再現不可能な軌道で飛行する相手に、前に飛ぶことしか出来ない前時代的な航空機で挑むのは無謀もいい所であった。

失速したのを見逃すまいと、羽の生えた人間はアストルの操縦する機体に肉薄し、コックピット前部に取り付く。

そして取り付いたまま腕を引き——

——パリンッ!!

防弾仕様のガラスを素手で貫いた。

おおよそ人間の成せる業では無いが、骨質の外殻のようなもので覆われた鋭利な手はガラスのコックピットを難無く打ち貫き、アストル

の胸に深々と突き刺さる。

「あ…ガッ…？」

胸を貫かれたと言うのに、アストルは酷く冷静だった。

アドレナリンの出過ぎで痛みを知覚出来なかったのもあるだろう。

それ以上に、夢にまで思い描いていた航空戦を繰り広げる事が出来た事への喜びが強かったのだ。

そして、彼は最後まで帝国軍人であった。

「お前も…道連れだ…！」

両腕に万力の様な力を込めて、彼は己を貫いた腕を掴んで離さないまま、操縦桿を足で蹴り倒して機体を急降下させる。

祖国の敵を己の命と引き換えに滅ぼす事が最大の誉れだと言わんばかりに。

再びエンジンが大きな唸りを上げ、ドップラー効果によつてその音は甲高く海上に響き、機体は海面に向かって真つ逆さまに飛翔する。

「祖国よ永遠なれ!!」

叫び終わるや否や、海上に大きな水柱が立ち上がった。

——しばらくして海面に無惨な姿となった飛行機の残骸が浮かび上がり、それらの回収が行われた。

大きな損傷を受けてはいるものの、何とか原形を留めているパイロットの遺体も回収されたとの報告も上がった。

「いつだって敵にしたくないね…。ああいう…：…死んでまで戦う理由のあるヤツはな…！」

落ちる直前まで腕を掴まれていた一警護の警備員が呟く。

すんでのところでは拘束を振り解けたから良かったものの、落ち行く機体から離脱するのが少しでも遅かったら、彼も無事では済まなかっただろう。

「最初は俺たちの空戦能力の高さを見せつけて…大人しく降伏でもしてくれないと考えていたが…：…。忘れていたな、俺たちの先祖も圧倒

的な国を相手に玉砕覚悟で戦っていたのを…」

いつの時代でも、戦っているヤツらはそうなのだろう。

圧倒的な強者を相手にしても臆さず立ち向かい、勝つまでやる、死んだら呪う。

人類にとって闘争とは単なる「今の自分の生存の為」ではない。

世界は違えど、戦っているヤツらは皆そうなのだ。

そして結果だけ見ても、あのパイロットは国同士の戦争で大きな役目を果たしていた。

「潜水艦の方は潜航して逃走したか…。こりやあ、航空機と『改造人間』の戦闘記録が敵に流れてしまったなあ…」

一警護はしごの手術を受けた警備員とは言え、戦闘機との戦い方は知らない。

彼らは先程の空戦で時間を稼がれ、一部始終を見ていたであろう潜水艦に逃げられてしまったのである。

これからグラ・バルカス帝国にもたらされるであろう情報が彼の国にとって良くも悪くも非常に大きなものになるのは言うまでもない。

これによってグラ・バルカス帝国が「日本国には勝てない」と和平交渉でもしてくれれば万々歳だが――

「最悪の気分だ…」

勝てないと分かっているても、戦うヤツらは多いのだ。

59話：終わりの始まり

日本国 東京都 首相官邸 総理執務室

日本国籍の自動車運搬船『DRIVE NEW WORLD』がグラ・バルカス帝国軍の潜水空母による襲撃を受けた日の夕方頃。

東京都にある首相官邸には全閣僚とその関係省庁の幹部が集められ、世界情勢に関する緊急対策会議が開かれていた。

「――以上がバルチスタ沖海戦での双方の被害状況となります。この資料は我が国の人工衛星による海戦の観測映像を分析したものでありますので、間違いはないと断言できます」

防衛大臣による海戦の概要説明が終了する。

その場にいる皆が世界連合艦隊の被った損害の大きさ、それに対するグラ・バルカス帝国の被害の少なさに顔を真っ青にしていた。

「これは……！ グラ・バルカス帝国の圧勝ではないか……」

誰かが震えるような声で呟く。

「実際にその通りであります。世界連合はまさしく完敗したのであります」

防衛大臣の補足により、会議の場に冷ややかが空気が流れ始めた。

現在この場にいる人達の中で最も軍事に詳しい防衛大臣がハツキリと「完敗」と言うのだから、全くその通りなのだろう。

世界連合は戦闘でも、国内外へのアピ^{世論誘導}ール合戦でも文字通り完全に敗北したのである。

「これは……不味い事になるな……」

この世界は西暦で言えば20世紀前半水準、武力が正義を語る世界だ。

そんな世界で最先進国とされていた神聖ミリシアル帝国や、それに次ぐムーが新参の国に負けたという事実が世界に与える影響は計り知れない。

戦闘でボロ負けし、世界最強のプライドと看板を粉々に打ち砕かれた国を見限る国がこれからはいつ現れてもおかしくないのだ。

「——とは言え、まだ致命傷ではありません。これからムーが勝てば良いのですから」

青ざめたままの彼らを前に、防衛大臣はお構い無しにニヤリと笑う。

彼のその発言に、会議に参加している人々が驚いたのは言うまでもない。

すでに神聖ミリシアル帝国とムーの（それと有象無象を足した）連合軍がたった1国を相手に負けているのだ。

軍事に関しては素人の彼らでも、ムーが単独でグラ・バルカス帝国に勝つのは不可能であると容易に想像できよう。

「はっはっはー。まさしくその通りですな防衛大臣！」

防衛大臣の発言に応答するように笑い、鷹揚に話し始めたのは外務大臣であった。

皆の視線が外務大臣に集まる。

「防衛大臣の言う通りです。ムーが単身でグラ・バルカス帝国軍の撃退に成功したら……それはもう、悲劇が一転して喜劇となり、世界を照らす希望の光となります。」

かつて敗北続きだった連合軍の心に火を灯した『ダンケルクの戦い』のように「

「なんだと…?!」

彼らが最初に感じたのは戸惑いと不安。

そして大いに募った焦燥感がそれらの感情を急速に怒りへと変容させ、彼らは立ち上がった。

会議の場に怒号が飛ぶ。

「防衛大臣ともあろう御方が！　ムーとグラ帝の戦力差を理解していないとは何とも滑稽な話だな?!」

「ムーが単身で勝つのは不可能だと我々も知っているぞ！」

「自衛隊の援助も無しにアルーの街が守れるもんですか！　まさか今更海外派遣が怖いとか言うのではありませんね?!」

その場にいる防衛省、外務省以外の人間が激昂するのも無理もない。

軍事に疎い彼らとて、グラ・バルカス帝国軍が相手では、ムーが世界の希望となるのは力不足であると知っていたのだ。

おまけに、ムーは今の日本にとってはかけがえない友好国だ。

もし彼の国がグラ・バルカス帝国の手に落ちれば、安全保障上の問題だけでなく、経済的な危機が津波のように押し寄せて来るだろう。彼らはそれも知っていたからこそ、罵詈雑言や野次を飛ばしているのだった。

建前上は友好国を助け出すため、本音は自国と間接的な自分の利益を保持するために。

「…私がいつ、自衛隊はムーへの援助をしないと仰いましたか？」

防衛大臣はにべもなく言い放った。

「え？」

罵倒の嵐は一瞬で止まり、一同は再び困惑する。

「……ということはつまり、自衛隊はムーへの軍事的支援に前向きである？」

「はい、必要とあらば何時でもムーへの援助を開始する事ができます」
防衛大臣は素っ気なく答える。

「ししし…しかし！ 外務省によると、ムー政府は日本の援助は必要ないとおっしゃって…！」

防衛大臣のフォローを入れるように答えたのは外務大臣であった。

「防衛省の方々、そして自衛隊の方々にはムー政府から援助要請が入った時のために準備をしているのです。万が一という事もあるのでね」

「そ、そうですか…」

具体的には分からないが、この行為にもそれなりの理由があるのだろう。

これ以上何を言っても意味がないとわかり、先程まで野次を飛ばしていた人々は大人しく席に戻った。

「では、これから自衛隊の国外派遣があると考えてよろしいのですかね？」

「はい、ムー政府から要請があればですがね」

「要請が入ると踏んでおられるので？」

「ええ、まあ」

来るかもわからない支援要請を準備して待つ。

一見すれば骨折り損かもしれないが、防衛大臣の堂々とした態度に一同はそう言う事ならば、と納得した。

「しかし、今のムーの世論では大規模な援軍は好ましくないのでは？」
「それは防衛省も重々承知しております。ですので、自衛隊が本格的に介入するにはまず、ムーが単独でグラ・バルカス軍に勝つ必要があります。」

しかし、ムー単独では勝てないと皆さんも知っておいででしょう。そこで我が自衛隊の出番です」

彼は続ける。

「ようはムーがほぼ単独で勝ったとアピール出来れば良いのです。そのため、自衛隊のムー陸軍支援部隊には小隊規模(約30〜50人)しか送りません。」

この人数なら日本の力が目立ちませんし、現場以外にはムーがほぼ独力で防衛を成し遂げたと見られるでしょう」

なるほど、確かにこれなら今のムーの世論でも大丈夫そうだ。

しかし小隊規模という少数の援軍で圧倒的劣勢の戦況を覆せるものなのだろうか？

「防衛大臣、その小隊と言うのはもしや…」

ある人物が尋ねる。

答えはほとんど予想できていたが——

「——ええ、かつて魔王を倒した『被手術兵』部隊です」

後刻——

グラ・バルカス帝国領 レイフォル地区 東側 バルクルス基地

ムー国の国境の町アルーから西側約30kmに位置するグラ・バルカス帝国陸軍の最前線基地バルクルス。

そこでは空に砲口を突き付けるように砲兵隊が並び、戦車のエンジンが足踏みをするように低く唸っていた。

上空では陸軍航空隊が旋回し、兵士達はいつでも戦闘を開始できるように完全装備状態で待機をしている。

「ボーク君、帝国陸軍は強い」

物々しい雰囲気を生しながらも、整然と並ぶ精鋭陸軍第8軍団。

そんな壮観な光景を眺めながら、旅団長のガオグゲルは部下の第4師団長ボークに話しかけた。

「はっ、その通りであります！」

「その中でも君の第4師団は飛び抜けて強い。君たちにかかる期待は大きいぞ」

「ははっ！ 我が第4師団は帝国最新鋭の戦車を主体とした完全に機械化された機甲師団であります！ 未だ前時代的な塹壕戦術に頼るムー軍など、容易く蹴散らしてみせましょう！」

ボークは意気揚々と答えた。

グラ・バルカス帝国軍は皇帝陛下の御旗の元に戦うため、士気は極めて高い。

例え世界を敵に回す事になっても、百万の敵を前にしようとも彼らは恐れず、陛下の御意志ならばと狂喜として死地へと突き進む。

しかし――

「ダメだぞボーク君、どんな蛮族が相手でも油断だけはするなよ。そのような気の緩みが陛下の命に直結すると思いなさい」

「は、はい……！ 失礼いたしました！」

この世界のグラ・バルカス帝国は非常に冷静であった。

陸軍にとってライバルとも言える海軍の、しかも最新鋭の戦艦を含む艦隊が負けたのだから、彼らも少なくとも油断はしていなかった。

「どんな前時代的な相手でも、我々は臆さず油断せず心を込めて殲滅する。それに今回の相手はムーだ。負けるつもりなど毛頭ないが、厳しい戦いになるかもしれない。

何度も言うが油断だけはするなよ」

「ははっ！」

情報によると、ムーは第一攻略目標であるアルーの町付近に軍を集結させているらしい。

敵の激しい抵抗が予想されるため、ガオグゲルは少しだけ不安だったが、頼もしく敬礼する部下の姿に彼はニコツと笑った。

「……時にボーグ君、君の師団では兵にストレスがたまっていないか？」

「…はい？」

ボーグは質問の意味が分からず、素っ頓狂な声で聞き返す。

「ボーグ君、今回のムー侵攻作戦では、こちらにも少なからず犠牲者が出るだろう。それは兵達の精神衛生上よろしくない」

ガオグゲルはゲスのような表情を浮かべた。

「なので、私は君たちが敵国人をどう扱おうが、全く咎めるつもりはない」

「……はっ?!」

ガオグゲル軍団長の発言が理解出来ず、ボーグ師団長は石像のように固まった。

だってそんなことは戦時国際法で――

「ここには前世界のような戦時国際法など存在しない。勝った暁には兵士たちの好きなようにさせたまえよボーグ君」

「――なるほど、そういうことですかあ!」

それを聞いたボーグの顔がにやけた。

ずっと忘れていたが、この世界に戦時国際法などない。

占領治下では何をしても法律上は何も問題がない事になる。

例え掠奪をしようとも暴行を加えようとも罪に問われないのだ。

「その前に「仕事終わらせるぞ。さあ、偉大なる祖国の地を敵の骸^{むくろ}で埋め尽くそうではないか」

ガオグゲルが手を叩き、臨戦状態の兵士たちはより一層気を引き締めた。

「……攻撃開始!」

「て——っ!!!」

ガオグゲルの合図とともに、砲兵隊に号令がかけられる。

一斉射によって放たれた無数の砲弾は弧を描くように飛翔し、ムー陸軍が居座る防衛陣地へと降り注いだ。

この日、グラ・バルカス帝国はアルーの街に砲撃を開始、侵攻を開始させた。

それはムーにとって、地獄の陸戦が幕をあげた瞬間であった。

60話：地獄の釜が蓋を開く

後世の人々は誰もが口を揃えて言う。

アルーでの防衛戦はムーにとって最良の日だったと。列強である我がムーの栄光の太陽が再び登り始めたようだったと。

しかし歴史の書を紐解くと、当初アルーを防衛するムー陸軍は覆しようないほど絶望的な劣勢状態だったと記されている。

どのようにして彼らは死の淵から這い上がってきたのか。

あれほど優勢だった帝国軍はどのようにして全滅したのか。

その日、戦場で何があったのかは定かではない。

ただ一つだけ確かなのは、ムー陸軍は途方もない数の代償を支払い、アルーの街を侵略者の魔の手から退けたということだ。

ムー建国以来の長い歴史を俯瞰しても、未曾有と言える犠牲者の数は新聞の一面に大きく取り沙汰され、一部では陸軍は悪魔と契約したのではないかとも噂された。

血と臓物の雨に打たれ、泥濘の園そのを這いつくばった兵士はあの日の事を多くは語らない。

しかし、あの戦場で生き延びた兵士は口を揃えてこう言う。

「あの日のアルーは地獄そのものだった」と。

これから放送される映像は、あの激戦を生き残ったとあるムー兵士に対して行われた貴重なインタビュー記録である。

「これよりインタビューを始めます。まずは今回の取材を快諾してくれたR氏へ感謝の念を表明すると共に、戦場で亡くなった大勢の兵士達、民間人、敵味方を問わずご冥福をお祈り申し上げます」

椅子に座ったままインタビューアールは長い黙祷を捧げる。

対面に座るR氏は包帯の巻かれた腕が痛むらしく、顔をしかめていた。

「では早速ですが本題に入りましょう。R氏、単刀直入にお聞きしますが、あの日……アルーの街では何があったのでしょうか？」

R氏は表情を変えずに沈黙する。

「…軍機により答えられない事があるようですね、これは失礼しました。事の経緯を私に教えてもらえますか？」

R氏はゆっくりと口を開く。

「最初…俺がアルーに着いた時には、すでに町は廃墟になっていた…。砲声と銃の発砲音がうるさくて…血の臭いが酷かった…！ どこもかしこも味方の死体だらけで、中には一般人のもあった…」

R氏は続ける。

「俺はしばらく町を歩いていたんだ。そしたら帝国軍の砲撃が始まって…俺はすぐに近くの壕に飛び込んだんだ…！

隣を歩いていたはずの戦友の姿が見当たらないと思ったら…：…あいつはその時点で死んでいたんだ…」

「それはお気の毒に…。貴方が助かったのはすぐに塹壕に飛び込んだからでしょうか？」

「それもあるけど…俺が助かったのは単純に運だ。そのすぐ後に帝国軍の航空攻撃が始まったが、壕に避難してても死んだやつは大勢いる」

「砲撃の直後に敵の飛行機械による攻撃があったのですか？」

「そうだ、砲撃後に航空攻撃が来るのは毎度のことだ、俺たち兵士には定期便って呼ばれていた。毎回味方が大勢死んで、どこかしらの味方陣地が突破される悪魔の定期便だったけどね…」

怯えたような表情でR氏は嘲る。

腕の怪我は戦闘後に初めて気が付いたらしく、いつ負傷したのかは本人でさえ分からないと言う。

「航空攻撃が来ると言うことは、制空権は敵の手中にあったと言うことですね？」

「そうだ、敵の飛行機械は恐ろしく強かった。数では勝っていたはずのマリンがバタバタと落とされるんだ」

墜落したマリンに押し潰された味方もいる、と彼は付け加えた。

「そのような状況からよくムー軍が逆転できましたね？ 貴方の話を聞く限り、ムーに勝ち目はなさそうですが…」

R氏は何も言わない。

「…失礼しました。ムー陸軍はどのようにして帝国の魔の手を退けたのでしょうか？」

R氏は黙ったまま、何も言わない。

それを見かねたインタビュアーはしばらくしてから、ある一枚の写真を拡大した画像を取り出してカメラに見せた。

「…こちらは『アルーの町防衛戦』で反攻に出たムー軍がグラ・バルカス帝国の野戦軍を壊滅させ、陣地を占領した後の写真を見やすく拡大したものです。R氏、これに見覚えは？」

それはグラ・バルカス軍の陣地であった場所に存在する高台に、ムー国旗を突き刺している人物と、その周りで歓喜するムー軍人らの姿を写した写真であった。

R氏は黙ったまま、ゆつくりと頷いた。

彼はまさにその現場にいた張本人なのだから。

インタビュアーはR氏が頷いたのを見ると、今度はカメラに向かって話しかける。

「皆様、この人物の付近をよく見てください。旗を突き刺している人間の顔と服を隠すように画像の乱れが入っております。そのせいでこれが誰なのか我々には判別できません。

私にはこれが意図的なものに見えますが、現場にいたR氏はこの人物が誰かお分かりですか？」

R氏は再び沈黙する。

インタビュアーは核心に迫るように問いたました。

「公には出来ない何かか隠されているのですね？」

R氏は沈黙を維持したまま、目を逸らした。

そしてR氏が再び口を開いたのは、インタビュアーがしばらくカメラに向かって話し続けた後だった。

「お前らに何がわかるんだ…！」

R氏は立ち上がる。

その表情は半ば錯乱しているようにも見え、何かを察したスタッフが駆け付けける。

「あの戦場には！ お前らには絶対理解できないものがあるのだッ！何も知らない癖によくもベラベラと！」

テープはここで終了する。

国境からほど近く、平野が多い高原のやや小高い丘に作られた町アルーは現在、大勢の軍人によって人口が飽和状態と化していた。

張り巡らされた塹壕や無数の機関銃陣地によって町は無機的な色合いへと様変わりし、薪の代わりに戦闘物資の詰まった木箱が至る所に散乱している。

一挙に押し寄せた人の波は未だ留まるところを知らず、逃げ遅れた一般人の避難は時間が進むごとに困難さを増していた。

それでも市民が不平不満を言わないのは、列強である祖国の軍隊に絶対の信頼を寄せていたからであろう。

ムーが建国されて以来、この地を守ってきた彼らならグラ・バルカス帝国の脅威も何とかしてくれるだろうと、どこか甘く考えていたのである。

いつ帝国軍の侵攻が始まるかもわからない不安な状況で、彼らは祖国の力を信じ、心の拠り所としていたのだ。

——ヒュルルルル……………

ムー時間午前5時15分35秒、まだ太陽が東の低い位置にある明け方。

降り注ぐ砲弾の爆発に端を発するようにグラ・バルカス帝国軍の侵攻作戦が開始された。

61話：絶対防衛線アルーI

中央歴1643年6月5日(木)

気温：明け方は寒かった

天気：晴れ 犬の形の雲が1つ

場所：アルー防衛陣地、最前線の壕内

朝食は腐りかけのジャガイモとほぼ水のスープ。不味かった…

今日の天気は晴れ。やや雲が多い空に、時々爆弾の嵐。砲弾は霰あられのように降り注ぎ、敵飛行機械の機銃の雨が戦友の頭を貫く。

汚い字で申し訳ないが、寒さで手がかじかんでいるので許してほしい。

まあとにかく、これがアルー戦線の日常だ。

事の顛末は…これを読んでいる人なら分かるだろう。

3日前にグラ・バルカス帝国の軍隊が俺が今いる場所、アルーに攻めてきたんだ。

ハッキリ言おう、奴らは強い。

ムー陸軍が世界に誇る連射銃(地球で言うWW1時代の設置するタイプの機関銃)も対魔獣砲(地球で言う対戦車砲。ムーでは敵が使役する魔獣に対しての使用を想定していたため、この名称が付けられた)も敵の装甲を持つ戦闘車——戦車と呼ぶらしい——には焼け石に水ほどの効果も無かったのだ!

小銃弾はおろか対魔獣砲弾をも弾く装甲、その速力は不整地でも人が走る程度に速く、攻撃力も高い。そんな怪物の突撃を止める方法を我々は知らない。

一応、地雷——対歩兵地雷を改造した即席の物であるため威力不足——や深めの落とし穴——労力の割に成功率は低い——で対抗している兵士もいるが、どちらも足止めになれば御の字だ。

我々の決死の抵抗も虚しく、敵戦車は味方陣地を次々と突破、攪乱し、それに付随した敵歩兵——驚くべきことに敵は一人一人が携行式の連射銃を持っているため、単発銃しかないムー兵はほぼ打ち負けるのだ——が周囲のムー兵を圧倒し、掃討後に橋頭堡を築く。

橋頭堡は周囲の防御が固められ、それが時間を経て陣地と姿を変えた頃には、空軍と砲兵が機能していないムー陸軍にとっては難攻不落の要塞と化す。

そして陣地確立後、敵砲兵が前進し、前線に取り残されたムー兵が射爆されるのだ。

取り残されたムー兵には後退の道しか残されておらず、彼らは降り注ぐ砲弾と戦車による電撃的な速度の包囲殲滅に怯えながら撤退する他ない。

地上は劣勢、一方で空はどうだろうか？

列強であるムーの最新鋭戦闘機『マリリン』も敵の飛行機械には遠く及ばず、最悪な事に制空権は「常に」敵の手中にある。ムー空軍結成以来の大事件だ。

それがどのくらい最悪かと言うと、ムーの陣地上空で敵偵察機がアクロバット飛行をする始末だ。練度が高いため見て飽きないのが腹立つが、あのカトンボを一刻も早く対空班に叩き落としてもらいたい所だ。

：：：そういえば、こちらの対空陣地はほとんど壊滅しているんだっ

た。
それも仕方がない。対空兵器の発砲炎は遠くからでも非常によく目立つため、一度でも位置を特定されたら直後に嵐のような砲弾が襲いかかってくるのだ。

発砲しなかったのと、日本国から購入した非常に精巧な偽装ネットにより僅かに生き残った対空陣地も、今は敵の反撃を恐れて沈黙しているため、俺達ムー陸軍は常に上空の敵に見られることとなる。これでは立って歩くだけでも良いのだ。

夏までには帰れると言ったやつは誰だ？

確かに白い骨片になったら帰れるだろうな！ 生きて帰れるとは言っていないってオチか!?

敵航空機による補給路への攻撃と、元々のインフラの悪さが相まって補給は大幅に遅れており——まあ補給を受けるはずの兵士はほとんどが補給を受ける前に戦死するため、そこまで深刻な問題は発生し

ていない——戦闘物資は味方だった物から拝借できるので量には困っていないが、食糧はかなり不足気味だ。

補給が追いつかないのに増援の兵士が次から次へと到着するため、食糧不足は時間を経る毎に深刻になるだろう。

まあ、その頃まで自分が生きていられるとは思えないが。

そうこうしているうちに、古参兵から定期便と呼ばれる敵の砲撃が始まり、俺は生き残りたい一心で仲間の死体の影でうずくまった。

近くに着弾した

怖い

ようやく砲撃が終わった。

もし降伏できたら、どれだけ楽だろうかと思ふ。

だが戦地に立つ兵士である以上、国防の任を投げ出す訳にはいかない。俺の後ろには家族と恋人が住む国があるのだ。

もう会う事は叶わないかもしれないが……

目の前で航空機から落とされた爆弾が炸裂した。

ついに俺の番だ、この特有の地響きは戦車が近くにいることを示している。

てきかもう目のまえまで来ている。

となりにいた味方がうたれた、もう逃げる気力もない

さいごにかぞくとシオンに伝えのあいおーはぶ（文字が乱れているため読解不能）

『名も無き兵士の手記より』

同刻――

日本国首相官邸

「さて、ムー政府から極秘裏に接触があったとの事ですが……」
防衛大臣が切り出す。

その場にいる全員が如何いかんともし難い表情を浮かべた。

「単刀直入に言いましょう。ムー政府からの依頼により、自衛隊の海外派遣が決定いたしました」

日本という国が異世界に転移してから早数年。

ロウリア王国の侵攻による『クワ・トイネ食料危機』『クイラ地下資源危機』を始め、パーパルディアによる『ニシノミヤコの悲劇』、グラ・バルカスの『世界会議の戦い』等など、これまで多くの苦難があった。そのような日本国を翻弄する異世界の荒波から、これまでも、これからも国民の衣食住を守り抜くであろう自衛隊がヒーローのように扱われるのは当然の道理である。

幾度にも及んだ自衛隊の海外派遣。それもこれも全ては日本国民の自衛隊に対する厚い信頼の上で成り立ってきた。

しかし――

「リスクが大きすぎる……！ いくら友好国のためとはいえ、国民の同意も得ずに自衛隊を送り出すなど……！」

そう、送り出す隊員の数が少数とは言え、今回の自衛隊海外派遣は極秘任務であり、ムー人だけでなく日本人も（主に日本人経由での情報漏洩防止のため）情報を隠匿される対象なのだ。

もし万が一海外派遣の隠匿が公になった場合、自衛隊が創設以来800年も培ってきた信頼は一気に汚泥へと叩き落とされるだろう。

だが、意外にもこの問題は歴史に精通した大臣の一言で解決する事となった。

「なら、ムー派遣部隊には一旦自衛隊を辞職してもらって、一般人になってもらうのはどうでしょう？」

迷 名案である。

ちなみにこの手法だが、前例が全くない訳でもない。例を上げるな

らば、1900年代半ばに起こった朝鮮戦争が妥当だろう。

当時、北朝鮮に加勢した中国人民解放軍は全員が法的には一般人、つまり義勇兵として扱われ、中国は韓国や米国を始めとする国際社会を敵に回すことなく、実質的に戦争に正規兵を差し向ける事に成功したのだ。

今回の日本の件については、たまたま集まった数十人の一般人集団が、たまたま国外に赴き、たまたまそこで戦闘に巻き込まれた（巻き込まれたについては拡大解釈が適用される）ため、外にも中にも法的には何も問題はない。

そもそもこの世界に国際法なる物は存在しないのだ。

斯くして、偶然にもムーに滞在していた元自衛隊員達は、ムー国における活動を開始する事となった。

中央歴1643年6月6日――

グラ・バルカス帝国陸軍 第8軍団傘下第1師団 前線指揮壕

その日もこちら側に多少の損害は出たが、別段変わった事など特に無かった。

敵は今まで通り、こちらの機甲師団に対しては落とし穴や地雷で対抗し、航空機相手には発砲せず、非常に精巧な偽装ネット――あまりにも偽装能力が高いため、ムーのではなく、ミリシアルの魔法技術による物だろう――でやり過ごしていた。

強いて言うなら、死体の振りをしてこちらの兵を油断させ、背後から奇襲を仕掛けられる事案が相次いで発生したくらいだ。

それでも初日と変わらず敵の抵抗は常軌を逸した激しさを見せ、泥沼のようなゲリラ戦術で我が軍の侵攻速度は当初の予定より大幅に遅れた。

だが、それも今日か明日で終わるだろう。

攻略目標であるアルーの町は目と鼻の先にあり、そこもすでに我が

砲兵の火砲管制圏内だ。

戦術上、今のアルーを占領する意味はないが、それでムー国の戦意が折れてくれれば後の作業がずっとやりやすくなるかもしれない。

少なくとも、そう信じたい。

「……それにしても敵が多いな!!」

倒しても倒しても、敵兵が無限に湧いて出てくるのだ。

前線の優秀な頭は死んだのか、そもそも元から存在しなかったのか、ムー陸軍にろくな戦術がないのが唯一の救いだが、余りにも数が多すぎる。

捕虜に対して行った尋問では、恐ろしいことにまだ何万人もの後続が続いている事を聞き出せた。

敵の上層部は何をとち狂ったのか、師団単位の戦力を束にして逐次投入し、人海戦術で数十年の技術差を埋めようとしているのだ！

質で大幅に勝っているためこれまで何とか優勢を保ってこられたが、単純な数の暴力がこれ程までに恐ろしいとは思わなかった。

寝ても覚めても人の波の相手をしなければならなかったため、兵らの疲労は相当なものになっているだろう。そろそろ休憩時間が欲しいものだが…

「師団長、戦域全体で急に敵が後退しました。この戦いが始まってから初の出来事に兵らは戸惑っております」

「後退だと？ 攻撃をしていないのか？」

「はい、こちらを誘引してからの反転攻勢の可能性も考えましたが…どうも動きが妙なんです。こんなの、素人が見ても罠だと判断します。意図が明らか過ぎるのです」

「確かに…この動きはどう見ても罠だな」

おまけに絶望的な戦況に嫌気が差したのか、単純に夜が近いからなのかは定かではないが、現在どの地域でも敵の動きは比較的落ち着いている。

敵の急な統制の取れた動きに、グラ・バルカス帝国軍の将兵らは皆が警戒を強めていた。

「ガオグゲル軍団長は何と？」

「このまま敵を半包囲下に追い込み、明日の明け方に総攻撃を仕掛けるとの通信が入りました」

「…そうか」

この戦いが始まってから、帝国軍は常に優勢を保ってきた。

敵の苛烈な抵抗でこちらにも少なくない被害が出ているが、彼我の損害比は目も当てられない惨状になっているだろう。

遠い異国の地で、弾薬制限下でよくここまで戦ってくれたものだ。だが、それもついに明日で終わる。

アルーさえ攻略できれば、この戦闘も終わるのだ。

「わかった、進軍して敵を半包囲下に追い込むぞ。だが警戒を怠るな」「了解しました」

こうしてグラ・バルカス陸軍は後退した敵を追うように駒を進め、日没までにアルーの町を半分包囲するような形までムー軍を取り囲んだ。

その間、一度の発砲もゲリラ的戦闘も起きず、帝国軍は一滴の血を流さずに先程までムー軍のいた陣地を獲得した。

「罫にしては奇妙だ。この大規模後退に意味はあるのか？」

「こちらを油断させておいて夜襲に持ち込む気かもしれません。夜なら空襲と砲撃の精度も大幅に落ち込みます」

「うむ、各員敵の動きに警戒するように！」

だが、その日に夜襲は無かった。

今までは仮眠する事すら許されない頻度で夜襲が来ていたのにも関わらず、不気味なことにその日の夜だけは一度も戦闘が起きなかったのだ！

「嵐の前の静けさというやつか…？ 不気味だな…」

アルー近郊に、久しぶりに静かな夜が訪れた。

砲撃跡で草木一本まで吹き飛ばされた泥濘の園。発砲する音も虫の音色すら聞こえず、耳が痛くなるような静寂さと死臭だけがこの空間に充満していた。

「…補佐官、幹部将校を集めろ。仮眠していたら叩き起こせ」「はっ！」

敵のあまりにも急な消極的行動。

これは次の日に大規模作戦が行われる事を予知するのに十分な判断材料であるが：隠す気のない畏に警戒こそすれ、困惑しない人間はいないだろう。

僅かに残った記録媒体によると、各前線司令部では夜通し作戦会議が行われたという。

だが彼らの奮闘も虚しく、戦況の変化は太陽が登るよりも早く、その姿を現し始めた。

「師団長！ 大規模な通信障害発生！ 前線と連絡が取れません!!」

「電気系統も機能しません！ 誰か！ ロウソクを持ってこい！」

「なっ——」

まず最初に発生したのは、司令部一帯で発生した全ての電子機器、電気系統の故障。

電線に過剰な電流が流れ、全ての通信系統がシャットダウンしたのだ。

そして——

「前線から口頭伝達！ 『ムー軍の一斉攻勢を確認。急ぎ防衛陣地を築き、防御戦闘を行う』です！ すでに各地で戦闘が発生しており、我が軍やや劣勢！」

「な……！ わ、我々が戦っている相手はムーではないのか!？」

偶然か、それとも必然か。

いや、間違いなくこの瞬間を狙った攻撃だ。

この未知の現象発生時、付近で飛行していた『アンタレス』は全機が墜落したのは目視で確認した。恐らく、司令部と同じように電気系統が故障したのだろう。

問題はその後だ。

こちらが制空権を喪失した直後に飛来した敵航空機によって、現在制空権を完全に奪われているのだ。これが計画的反抗でないか誰が言えようか。

そして無線も使用不能となり、目視圏外から間接射撃を行っていた砲兵は完全に機能不全に陥った。

制空権を奪われ、支援砲撃もなく、頭を切り離された胴体は各々が最善の選択肢を選んで敵の迎撃を行うも、昨日と打って変わって状況は完全に逆転。

グラ・バルカス陸軍は空から機銃と砲弾に襲われ、陸からは人海戦術による人の波に翻弄される事となる。

しかし、これはムー陸軍と自衛隊の連合軍による反撃の第1段階に過ぎなかった。

62話：絶対防衛線アルーII

ピーー!!

大口径砲が連続して着弾する音に混じって、笛の音が鳴り響く。それに応えるかのように敵兵が塹壕から一斉に飛び出し、銃剣の刃を白く輝かせながら、こちらを抹殺せんと泥の荒野へと駆け出す。

一方こちらは戦車の周りに土囊どのおうを積んだだけの簡易的なトーチカを中心に防衛陣を設け、敵が掘った塹壕に身を隠しつつ、敵の迎撃を行う。

とは言え、砲兵や航空機の支援がない即席の陣地など、多少毛の生えた泥山と大差ない。

おまけに無線、有線通信の復旧の目処は立っておらず、各方面に展開している友軍との連絡手段は壊滅状態にある。

という事はつまり、我々は従来の戦い方が全く出来ないということだ。

グラ・バルカス帝国陸軍の強さの秘訣は、戦車と航空機の集中運用による電撃的な速度の機動包囲作戦だ。

今まで有機的な連携を以て敵の陣地を突破し、包囲殲滅を行ってきたが、これには無線による味方間の連携が不可欠である。

無線が使えない現状、我々是一个の孤立した部隊として、津波のように押し寄せる敵の相手をしなければならぬのだ。

「敵数が多すぎる！ 弾薬制限を全面的に解除！ ありつたけの鉛玉をぶち込んでやれ!!」

そんなこと言われなくても分かっている。

皆が生き残りたい一心で引き金を引いているのだ。

硝煙の立ち込める泥濘の地獄に、機関銃と小銃、砲声と爆音が奏でる地獄の音楽祭が開かれる。

テンポの早い音楽家には爆弾と砲弾の野次が降り、泥と楽器が肉片と共に空へと舞い上がる中、僅かに残った観客は死屍累々の泥地を突破し、ステージ目前へと上り詰めた。

「敵襲！・ 敵襲——!!」

即席の陣地ではやはり、この数の敵を相手を食い止める事は無謀であつた。

この『敵襲』とは通信手段が壊滅した直後に決められた合図で「陣地付近まで敵が浸透し始めた」という事だ。

「白兵戦用意！・ 着剣!!」

速やかに銃身の長い小銃の先に銃剣が取り付けられる。

短機関銃を装備している者はその必要がないため、今も発砲音は続いていた。

銃剣を付け終わり、再び銃口の列が火を噴く。

今のたった数秒の間にも、敵との距離は目と鼻の先まで縮まっていた。

ヒュルルル——

そして、最悪のタイミングで敵の砲撃が始まってしまった。

敵の迎撃をしなければならぬのに、我々はこれから一旦戦闘を中止し、伏せて神に祈る事を強いられるのだ。

だが、いつもなら小隊長が「砲撃が来るぞ！」だとか「伏せろ！」とか言うのに、今回そのような命令が無いという事は、砲撃を無視してでも発砲を続けろという事なのだろう。

つまり、小隊長は被害の拡大を承知で敵の迎撃を選んだのだ。いや、そうせざるを得なかったのだ。

次の瞬間、運悪く壕内に飛び込んで来た砲弾が炸裂した。

爆心地付近にいた味方は空高く吹き飛ばされ、飛び散った破片が周囲の味方をズタズタに切り裂き、戦友の遺体が重く押し掛ける。

耳の奥がキーンと鳴り響き、視界が極端に狭まった。

：そんなこと気にしてられない。

覆い被さってきた死体を押し退け、小銃を握り締めて再び敵へと照準を向ける。

砲撃で機能しなくなった箇所には、やや後ろで待機していた味方戦車がかバーとして入り、穴が埋められた。

…それから何時間が経つたのだろう。

終わりの無い防衛戦闘にようやく終わりが見えかかってきた時に、そいつは現れた。

「なんだ彼奴は!? 銃が効かない!!」

誰かがそう叫んだ。

最初は何かの勘違いだろう、枯木を人と間違えて撃つたのだろうと思っていた。

「走ってる走ってる! こっちに来てる!!」

「撃て撃て! 撃てえ!!」

しかし、何かの間違いにしては味方の叫ぶ声が多い、あまりにも多すぎるのだ。

味方の異様な雰囲気を感じて、私は生唾を飲み込む。

次に見たのは、付近の銃火器が一齐に、ある一点を狙う光景だ。

人の目にも曳光弾を交えた濃密な弾幕がハッキリと認識でき、銃口が向けられている生物を目にした時、初めて異常事態が起こっているのだと知覚した。

何やらオレンジがかつた赤色の、人間大の生物——人間のような形をしていたが、人間の姿ではなかった——が、太い両腕で顔をガードするように、一直線にこちらへと走っていたのだ!

身を隠す場所がない荒地を生身でだ!

今まで散々、同じような場所を走っては銃火の前に倒れるムー兵を目にして来たのだから、すぐ顔を背けてしまったのは理解して欲しい。

これだけの弾幕が張られているのだから、すぐに決着が着くと思っていたのだ。

だが、そうはならなかった!

奴の腕——胴体や足もだが——は相当に硬いらしく、人間であれば一瞬でミンチになるであろう弾幕が効いていないのだ!

何やら外皮の破片のような物体が腕から剥がれ落ちているが、それ以外に目立った損傷も無く、我々はその時点で奴の足を止めるに至らなかったのだ!

この異常事態には、ちよつとやそつとじや動揺しない熟練兵もがパニックを起こし、半ば狂乱的に、矢継ぎ早に新たな銃口がその生物へと向けられた。

しかし銃弾が効かない！

その怪物は足を止めるどころか葉巻形のタバコを啜えており、余裕綽々であった。

ドオン！！

瞬間、腹に重く響くような音が張り詰めた空気を叩いた。

戦車だ。味方の戦車がその砲口を怪物へと向けていたのだ！

攻撃目標が人間大の小ささであるため、いきなり命中とまではいかなかったが、砲弾は奴の腕を擦り、バチツという音を立てて左腕を吹き飛ばした。

「ガードが崩れたぞ！ 斉射！ 斉射——！！」

たちどころに弾幕が張られ、奴はありつたけの銃火を浴びる。

鉛の弾頭がガキンガキンと硬い物体に当たった時のような音を立てて潰れ、怪物は顔を隠しながらも再び突進を始めた。

怪物との距離があつという間に縮められ、弾幕の密度はますます濃くなっていく。

だが、小口径弾がいくら寄り添った所で先程の戦車砲の一撃のようにはいかないのだ。

頼みの綱である戦車砲もちよこまかと動く人間大の生物を照準に捉えきれず、至近弾はあれど、命中弾はあれから皆無である。

そしてついに、怪物は鉄条網が張り巡らされるエリアへと侵入した。

数で劣るグラ・バルカス帝国軍がここまで持ち堪えられたのは、ひとえにこの鉄条網のおかげである。

ムーに鉄条網は無いのか、それとも単純に準備不足であったか、相手がムー兵ならここは今まで完璧な不可侵領域であったのだ。

だが予想していた通り、あの化け物が相手では鉄のイバラもそこらの野草と大差ないようだ。

おまけに、ここまで接近されると射角の問題で急激に弾幕の量が

減っていくため——まあ撃ったところで効果はないのだが——陣地内部への侵入は比較的容易となる。

ガガガガ!!——バキバキッ! グシヤ!

そして怪物の姿が戦車と土囊の影で見えなくなつてから少し経つた後、金属が折られる異様な音が耳に入り、先程までフルオートで射撃していたはずの機関銃の一つが、突然魂を失つたようにピタリと止んだのだつた。

背筋を冷たい汗が流れる。

キュルルルと戦車のキヤタピラが泥を撒き散らし、超信地旋回をしながら怪物がいるのであるう方へとその砲口を向ける。

そしてドンと戦車砲が放たれ、一瞬だけ辺りが静かになった。

「……………やったのか!？」

次の瞬間であつた。

戦車の車体が傾いたかと思うと、何トンもの重さの戦車が宙を舞つたのだ!

そしてその鉄塊は我々の防衛陣地の一番守りが硬い場所…部隊長のいる場所を直撃し、残っていた弾薬が衝撃で暴発したのか、派手に吹き飛んだ。

「う——」

私は自分の目が信じられなかつた。

だが、脳が考えるよりも早く、恐怖が口から漏れ出てしまつていた。「うわああああ!! 化け物だああああ!!」

ムー兵を倒す任務を放棄し、私は怪物を照準に定める。それは私だけでなく、付近にいた帝国兵の皆が同様であつた。

禍々しい赤あかだいたい橙と白色の模様がハッキリと見える距離だ。190cm以上はありそうな巨体に向けて無数の銃口が向けられ、鉛玉が発射される。

吹き飛ばされたはずの左腕もいつの間に再生したのだろうか。

狭い塹壕内に硝煙の臭いが充満し、硬い甲殻に弾かれた弾丸が泥の壁に食い込んだ。

「効かない! こいつ銃が効かねえ!」

「…御託はいいから撃ち続けろ!!」

——が、全ては無駄だった。

この生物兵器が敵として存在している時点で、我々に勝ちの目はないのだから。

「…う、うおおおおお!!」

だが我々は帝国軍人。敬愛する皇帝陛下の名にかけて、死んでも任務を遂行せねばならない。

弾の切れた銃を握りしめる。先に銃剣の付いた銃を前に思い切り突き出し、私は怪物へと全速力で突撃した。

ガコンツ!

「痛ッ…てえ——」

結果は分かっていた。銃が効かない生物に銃剣程度で何が出来るんだ、と。

怪物は俺の攻撃に目を丸くしていたが、全く効いている様子はないかった。

初めて見たその顔付きは、ヒノマワリ王国の人間にそっくりであった。

「ヒノマワリ人か…?」

私は思わず聞いてしまった。

「いや…:…日本人だ…」

怪物は俯きながらそう言い残すと、そのままどこかへと立ち去って行ってしまった。

再び敵の波状攻撃が始まり、後方で控えていた戦車が次々とひっくり返されるのを目にする。

発砲音も減り、我々は負けたのだと認識した。

「へ、へへ…:…日本ってこんな強かったのかよ…」

ジンジンと痛む手を押さえていると、今度は背中に何か熱い物を感じ、そのまま地面に押し倒された。

ムー兵だ。

敵がすでにここまで来ていたのだ。

馬乗りの状態で、明らかな恐慌状態の新兵に何度も何度も刺突され

る。
薄れ行く意識の中、最後に聞いたのは味方が上げる悲鳴ばかりであつた。

グラ・バルカス帝国陸軍 第8軍団傘下第1師団 前線指揮壕

「無線はまだ直らんのか!!」

コンクリートで補強され、半ば地下に埋まる形で存在するグラ・バルカス軍の前線指揮壕では、師団長の怒号が響いていた。

ここでは通信手段の迅速な復旧及び、バイクを使った駅伝方式での指揮が試みられていたが、どちらも未だ成果らしい成果は挙げられていない。

ここから前線側へと数キロ程移動した所には砲兵陣地が存在しており、そことの有線通信すらも繋がらないのだから、師団長の焦りも当然であろう。

「ダメです! 全回線途絶!」

「機械の故障ではありません! 第三者からの妨害です!」

飛ぶ鳥を落とす勢いで復旧作業が続けられるも、前線での戦況は刻一刻と悪化しており、皆が額の汗を拭う。

その時であつた。

「——む?! 何だこの音は!」

遠方で雷鳴が轟くような音が耳に入り、全員が作業の手を止める。砲兵が砲撃を開始したのだ。

それから数分後に到着した口頭伝達班による戦況報告は砲兵陣地の壊滅という最悪の事態が起きている事を知らしめた。

63話：絶対防衛線アルーIII

現代戦における情報伝達の重要性を知っているだろうか。

現代でなくても良い。カルタゴのハンニバルや中国の項羽、フランスのナポレオンやナチスのマンシュタインが活躍した時代でも良いのだ。

いつの時代でも、戦争で勝利を収めるために情報というのは不可欠なのである。

例えば指揮系統が存在しない万の軍勢と、緊密で有機的な連携を取り行える数百の部隊が戦った場合、ほぼ100%の確率で後者が勝つだろう。

情報伝達による連携が、その戦闘力に天と地ほどの差を与えるのだ。

特に現代という時代は、その重要性が著しく目立っている時代なのでもあると思う。

戦車や航空機、ミサイルなどのハイテク兵器が全て電子ネットワークによる情報伝達を基に成り立っているのは周知の事実であろう。それは軍事だけでなく一般社会もだ。

軍事的観点における陸地での活動権、制海権、制空権の次——人類は争いの領域を電子の海にまで拡大し、電子戦という目には見えない戦場で戦っている。

相手のパソコンにウイルスを送り込み、情報を盗むのも良し。ハッキングしてネットワークを使い物にならなくするのも良し。

敵地上空、高高度で核爆発を起こし、大規模な^{電磁パルス}EMP攻撃でインフラを完全に麻痺させるのも良し……。

電子部品の塊でもある現代兵器、そしてドローンという無人兵器が確立されつつある現在、それらへの対抗手段はやはりレーザー砲かEMP兵器なのではないかと思う。

強力な電磁パルスの前では、1発何億ドルもする高性能ミサイルですら一瞬で産業廃棄物と化し、電子機器を焼かれた機械は例外なく同じ末路を辿る。

範囲はそれだけには留まらず、電気を使うありとあらゆる物がゴミになるのだ。軍事的観点で言うところの航空機、戦車、輸送車両、無線などの通信手段——特に現代では、通信手段への攻撃は十分に致命傷となり得る。

この日、この世界で何度目かのEMP攻撃がグラ・バルカス帝国陸軍に対して行われた。

自衛隊が配備する現代兵器と違い、グラ・バルカス帝国の兵器や機械類は電磁パルスに対する防護策など用意されていない。

その暴威はありとあらゆる電気の通り道を伝い、電子部品の回路を寸断し破壊。無線を始めとする通信手段はほぼ完全に途絶し、司令部と前線が切り離される。

地下に存在する前線指揮壕では、唯一の光である電球を失った直後、新月の夜にも勝る真の闇が彼らを一瞬で盲目にした。

外にいた兵士がロウソクを持って来なければ、彼らは永久に闇を彷徨う事になっていただろう。

「師団長！ 電線に大電流が流れたらしく、回路が焼き切れています！」

「こんな魔法攻撃は初めてです！ 神聖ミリシアル帝国の秘密兵器がもしかかもしれません！」

小さな灯りを頼りに、次々と上げられる悲鳴のような報告。

回路が焼き切れたというのは本当らしく、後で確認すると電球のフィラメント（電気が流れて光る部分）もが切断されていた。

「バ…そんなバカなッ！ 回路を焼き切る攻撃だど!？」

神聖ミリシアル帝国を始めとする新世界の魔法文明を侮っていた訳ではないが、まさかここまでとは思わなんだ。

先の海戦でミリシアルは空中戦艦などと言う化物兵器を投入してきたと聞いた。最初はどんなプロパガンダだと小馬鹿にしていたが、あながち嘘では無さそうである。

「…少々魔法文明に対する認識を改める必要があるな。このままでは我々が敗北しかねん」

「師団長、このままでは戦線が崩壊してしまいます。これ以上の被害

は看過できません。軍団長に撤退の意見具申を……！」

撤退という二文字を聞き、師団長は歯を食いしばった。

この攻撃の目標がここだけとは考えにくい。恐らく他の場所にいる将校も同じような思いをしているのだろう。

本来ならガオグゲル軍団長の指示を仰ぐのが正しいのだが、無線が機能していない現状、上の指示を待っているだけで我々は後手へ後手へと回ってしまうのだ。

彼は覚悟を決め、命令を出す。

この選択の成否がどうであろうと、何もしないよりはマシだと信じて。

「……ガオグゲル軍団長なら戦力の分散による各個撃破は避けるはずだ！ これより第1師団は戦術的に後退する！ 他部隊と合流した後、敵戦力を撃滅するぞ！」

命令が出された直後、走行可能な車両に口頭伝達員が乗り込み、エンジンがかかる。口頭伝達とは何とも原始的な手法だが、現状これしか方法が無いのだ。

「師団長、彼は前線まで辿り着けますかね？」

「補佐官、それ以上は言うな」

最も恐れている事態、それは命令を受け取るはずの前線部隊がすでに壊滅している事である。

その可能性が全く無いとは言い切れないが、練度も装備も申し分ない彼らならきつと……大丈夫なはずだ。

「ところで……彼らにも口頭伝達を思い付く知能はあると思いますが、そろそろ砲兵陣地から連絡が来ても良い頃のはず——」

補佐官が自身の腕時計を見る。

次の瞬間、2人の間に流れる時計の針が止まった。

——ゴロゴロゴロ……

この遠方で雷鳴が轟くような音……帝国軍人なら忘れもしない、味方砲兵陣地が砲撃を開始した音だ。

砲兵というのは航空機や前線の観測部隊、無線を活用した弾着観測という支援があつて初めて、間接射撃によって丘の向こうの見えない

敵を攻撃できるのだ。

それらのサポートが機能していない今、砲兵が発砲したと言う事はつまり――

「――有視界による直接射撃か!? 敵がもうそんな近くまで!」

「まさか前線部隊は……!」

そのままかであった。

直後に到着した伝令の口から、彼らは前線部隊が壊滅したと言う事実を突き付けられる。

「報告ッ!! 第1師団の前線展開部隊は壊滅した模様! そして砲兵陣地が敵軍への直接射撃を開始! 敵はすぐそこまで来ています!!」
前線で戦い、壁となる部隊がない砲兵と言うのは酷く脆弱である。

彼の陣地が陥落するのはもはや時間の問題であり、第1師団は実質的に、すでに全戦力を失ったも同然であった。

「クソツたれのミリシアルめ! 魔法とか言うデタラメ技術を使いやがって!!」

木製のイスが蹴り飛ばされ、コンクリートの壁に当たって派手に砕ける。

部下達はすでに撤収する準備を進めており、指揮壕内はアリの巣をつついたように慌ただしく動き始めた。

「師団長! 物に当たってる場合ではありません! 急ぎ撤収の準備を!」

「分かっている! 死んで逝った兵らには申し訳ないが、我々だけでも逃げ延びて情報を持ち帰るぞ! 撤収だ、撤収!」

師団長が喝を入れ、将兵らは一層慌ただしく動く。

軍人となつてから初めて経験する撤退戦。祖国の軍隊が負けたという事実にいささか動揺もしていたが、刻一刻と変化する戦況の中で何もせずにはいられなかったのだ。

重要な書類だけがカバンに吸い込まれるように消えて行き、不要な物は野外に集められて焼却処分される。

紙に付着したインクは勢いよく燃え、晴天の空に真っ黒な汚れを撒

き散らして灰となった。

「師団長！ 全工程完了まで20分かかります！」

「いや10分だ！ 10分で終わらせる！」

最新鋭の大砲とは前線に張り付く部隊がいなければ酷く脆弱な上に、観測手と通信手段が無ければただの木偶の坊。なのに鈍重で移動が遅く、さらには敵に奪われるのは何としてでも避けたい荷物でもある。

敵と運悪くエンカウトしてしまった場合、人員だけなら逃げるのは可能かもしれないが、無断で高価な技術の塊を易々と敵へと渡した失態を上が許すはずがないのだ。

なので命令がない以上、砲兵はその場を動けないのである。

だが槍や弓しかない未開の原住民ならまだしも、旧式とは言え銃で武装し、統率の取れた軍隊が相手では、砲兵が単独で陣地防衛を成し遂げるのは、とてもではないが不可能である。

「砲撃音が続いているうちはここは安全だ！ 急げ！ 仲間の死を無駄にするな！」

無情にも、ぜんまい時計の針は進む。

いつ止むかも分からない味方砲兵の生命線、ここからは見えない位置で必死に戦っている仲間の存在に、彼らは一層奮起した。

第1師団傘下砲兵陣地――

視界を埋め尽くす人の海。

前世界にも畑から人が採れると揶揄される国はあったが、この光景を見てしまったては揶揄する気持ちすら起きない。

地平線まで続く人影……いくら肉ごと土を耕そうと絶えることのない人、人、人。旧式ではあるが全員が銃を持っており、下手な鉄砲数撃ちや当たるの理論で、狙って当たるはずのない距離から放たれた弾丸が、こちらの人員を偶然撃ち抜くのだ。

その全てが完全な偶然であるはずなのだが、発砲する人数が多ければ偶然は偶然ではなくなるらしい。一昔前の戦列歩兵が妥当な具体例だろう。

「撃てえ!!」

端から順に、並んだ砲口が火を噴く。

どこに着弾しようと1発1発全てが敵兵を爆殺し、自分が装填した砲弾が人命を奪っているのだと目視で認識してしまった兵は次第に狂って行く。

幾度も幾度も繰り返される装填作業、繰り返し奪われる人命、狂気
の笑みを浮かべながら砲弾を運ぶ兵士達。

時々耳元を掠める銃弾の音は、今まで何とか持ち堪えられた兵の精神にトドメを刺すようだった。

それでも、我々はここから動けない。

上からの命令が来ない以上、戦う装備がある限り戦わなければなら
ないのだ。

「撃てえ!!」

喝を入れるように、叫ぶ。

端から順に並んだ砲口が火を噴き、ムー兵の若き芽を刈り取った。

「装填急げ！ 増援部隊が来るまで持ち堪えるぞ！」

中央暦1643年6月2日、アルーの町とバルクルス基地の間の
たった30キロを奪い合う大激戦が幕を開けた。

血で血を洗う、生き馬の目を抜くという言葉が似合うこの戦場で、
どれだけの命が散ったのかは誰にもわからない。

ムーが大人しくここを手渡してしまえば、これだけの犠牲は出な
かったのにと帝国兵らは思い、グラ・バルカス帝国がすぐに宣戦布告
を取り消せば、これだけ死なずに済んだのにとムー兵らは思う。

しかし双方の希望は虚しくも衝突し、両陣営は強烈な火花を散らし
て、意地でもこの地区を敵から奪還しようとして激しく殴り合った。

そして6月6日、短期間で方を越える犠牲者を出したこの戦闘に、
終止符が打たれる事となる。

日本国が極秘裏に派遣した、元自衛隊員だけで構成された『被手術

兵部隊』。そのうちたった1人の隊員が投げた、10にも及ばない数の野球ボール大の機械が――投擲に適した人類の骨格構造、猛禽類の視力と強力な握力、胸筋に支えられて――グラ・バルカス帝国陸軍第8軍団の指揮系統を直撃したのだ。

その機械は着弾後、人体にほとんど影響は無いが、機械類に致命的な影響を及ぼす威力の電磁パルスを放出、付近のあらゆる電子部品を破壊。

通信を遮断された帝国軍はその戦闘力を著しく低下させ、ムー陸軍に圧倒される事となった。

通信手段を奪うだけで、軍隊というのは簡単に戦闘能力を消失するのだ。

「あと…もう一押しって感じか？」

戦線の後方に位置するムー軍の臨時指揮所で、一帯のムー軍の指揮を一任された元自衛隊員が呟く。

アルーの町を防衛するムー軍の指揮官はほぼ全員が敵の猛攻の最中に戦死していたため、彼らの指揮系統は一時的にだが、全て彼の手に乗ねられていたのだ。

彼は日本から持ち込んだ通信機器を手に取り、スイッチを押した。

「こちらアルーコントロール。ホークアイ01、戦況を報告されたし」
『アルーコントロール、こちらホークアイ01。眼下の敵砲兵陣地の抵抗が激しい。ムー陸軍だけでの攻略は困難、すでに数百人が死亡』
特殊な電波を用いての、元自衛隊員間のやり取りが行われる。

同等以上の技術を持つ国家が相手に存在していたら、間違いなく作戦がバレるであろう暗号化されていない通信。

だが技術レベル的には何世紀も格下であるグラ・バルカス帝国、ムー、その他新世界の国々相手には絶対に傍受されない、日本国だけの秘匿通信を彼らは行っていた。

「アルーコントロール了解、ムー空軍に対地攻撃を要請す」

通信機を手にしつつ、近くのムー兵に目配せを送る。

先程の通信を聞いていたムー兵は即座に、戦域に展開している空中待機遊撃戦力へと無線通信を行った。

『こちらホークアイ01、たった今砲兵陣地に多数の対空兵器を確認した。ムー空軍では十分な損害を与えられない可能性有り』

「アルーコントロール了解。ドラゴンフライ01から05に通達、送信した座標位置まで急行した後、敵砲兵陣地の対空能力を半壊せよ」
『ドラゴンフライ了解、これより敵砲兵陣地を攪乱す』

命令を授かり、甲高い音を響かせながら、羽の生えた隊員は飛翔する。道中で帝国兵を見かけては空から奇襲をかけて排除し、前へ前へと突き進む彼らの姿はどう見えただろうか。

ムー兵の目には侵略者に正義の鉄槌を下す存在に映ったらしく、彼らが空からの強襲で敵兵を排除する度に大きな歓声上がり、士気はみるみるうちに上昇して行った。

敵軍を圧倒しているという優越感、絶望的だった戦況を自分たちが覆しているという高揚感が、彼らの足を前へ前へと運ばせる。

「空襲——!!! ミリシアルの生物兵器!! 対空砲火急げ!」

その者達の姿を目にし、帝国軍の対空兵器が砲口を空に向ける。面妖な空を飛ぶ人影に対し、彼らはミリシアルの生物兵器と誤った呼称をした。

進みすぎた科学はもはや魔法と見分けがつかないのだ。

「目標、飛翔する人型生物! 対空迎撃開始!!」

肉眼にもハッキリと認識できる曳光弾の飛翔跡。対空砲が青空に黒い花を咲き散らし、それらをかき消すように光跡が飛ぶ。

この量の弾幕、相手がムーの『マリン』なら撃墜できたかもしれないが、この程度で『被手術兵』を墮とせると思ったら大間違いである。西洋ではドラゴン不吉フライ虫と呼ばれるトンボの複眼は、昆虫類最多の約2万8千。

視力と引き換えに得た驚異の動体視力に加え、常軌を逸した飛行性能を持つこの生物を、軍隊組織に改造人間を採用する国は例外なく、真魔物つ先にこの生物をベースに兵士に強化を施す。

手術を終えれば、空を飛ぶ生物相手の空戦では無敵の兵器が誕生するからである。

そしてこの動体視力と飛行能力は空戦だけでなく、対空砲火を掻い

潜って強襲を仕掛ける時にその真価を發揮する。

ただでさえ被弾面積が小さい上、通常の航空機では有り得ない軌道で肉薄して来る相手に、肉眼で照準を定めて狙い撃つ手法など無意味に等しい。

「まさか！ あいつら近接攻撃を仕掛ける気か!？」

スラリと抜かれた刀身が白く輝いたように見えた。

実際は光が反射しないよう黒く塗られているのに、何十年も繰り返されたのだらうその一連の動作は、飛びながらも、対空砲火を掻い潜りながらも美しかった。

——スツ

人型生物は音もなく着地した。

こちらに小銃の類が無い事を知ってから知らずか、奴は背中から生える4本の透明な羽を畳み、抜き身の刀身を構える。

迷彩柄の服に白地に赤丸の旗章が刺繍されており、一目で日本軍の者だとわかった。

こいつ、強いぞ…!

俺自身が剣術を習っていたから分かる。

真顔のようで、覇気のある顔。その所作一つ一つが彼が鍛え抜かれた武人である事を物語り、一太刀のうちに戦友の首を切り落とした剣筋は少しもブレていなかった。

ヘルメットやシャベル、そこらの石や鉄パイプで武装し、全方位から襲い掛かる味方を次々と斬り伏せる姿ですら、美しく見える剣技。

俺は掘削用の長めのシャベルを手にし、彼の目の前に堂々と立ちただかった。

もちろん時間稼ぎだ。それとは別に、個人的に彼と戦ってみたい気持ちもあつたが。

「グラ・バルカス帝国陸軍第8軍団第1師団砲兵隊所属、ヘンリーフォーンノイシュヴァンシュタインだ！ 貴殿の名は何だ！」

それに、彼に勝てば陣地防衛の成功率は跳ね上がるだろう。

生きて帰れる確率も僅かに上がるかもしれない。

「…秋津龍司元二等陸尉。日本人だ」

何よりも恐ろしい刀の切先がこちらを向く。

対峙して初めてわかるこの圧倒的な威圧感、紛う事なき強者を前に唇が乾き、手汗がにじむ。

時間稼ぎのため、とりあえず話しかける。

「日本軍がなぜここに？ ミリシアルはいないのか？」

「教える事はできない。それよりも時間が無い、私から行くぞ」

「時間稼ぎすらさせてくれないのかよ……！」

彼は武人のような高潔な性格の持ち主でもあったが、敵として目の前に立ち塞がる人間を問答無用で叩きのめす冷徹な軍人でもあった。

冷酷ではなく、冷徹だ。ひたすら任務のために合理的な判断を下すことのできる素晴らしい軍人であった。

反面、その剣技は人間離れをしているのに、非常に人間らしい。

ただ速いだけでなく、剣速を変化させる目に捉えにくく対処しづらい軌道。フェイントから一転、恐ろしい速度で飛んでくる刃は無数の斬撃が襲い掛かってくるようである。

手持ちの武器がシヤベルでは、その軌道を逸らして防ぐのが精一杯であった。

……いや、手持ちにちゃんとした剣があってもこの人には勝てないだろう。

「見事でした——」

言い終わるより前に、視界の上下が反転する。

斬られた事すらほとんど感じず、最後の最後までその腕前に驚かされてばかりであった。

「ドラゴンフライ02より01へ、少し遅れたが制圧完了」

『ドラゴンフライ01了解。目標破壊後、所定の位置にて待つ』

「ドラゴンフライ02了解、以上」

通信を終え、彼は飛び立つ。

それから数秒後、設置された爆薬が起爆し、第1師団傘下の砲兵陣地に存在する対空兵器は弾薬と共に黒い煙を噴き上げて燃え上がり、スクラップと化した。

64話：絶対防衛線アルーⅣ

「空襲——!!! 敵機襲来!!!」

けたたましいサイレンと共に、拡声器が発する悲鳴のような警告が
大気を揺るがす。

砲撃音ばかりが繰り返し耳に響く状況、突如鳴り響いたサイレン音
には新鮮さすら覚えたが、そんな呑気なことは言ってられなかった。
「クソツ…… どうやって使うんだよこんなの！」

ミリシアルの魔法使いか魔人と思しき人物らの襲撃により、元から
いた対空班の人員が全滅している以上、航空攻撃の対処には、なけな
しの人員を抽出して対空兵器を稼働させなければならぬ。

が、長年大砲に付き添って来た彼らにいきなり路線変更をしろとは
無茶な話であり、その仕事効率はお世辞にも良いとは言えなかった。

確認された敵数は『マリリン』が30機以上、その他には恐らく旧式
機であろう機影が20機。局地戦における対地攻撃にしては過剰な
戦力のような気もするが、敵は確実にこの砲兵陣地を潰すつもりでい
る。

対して、こちらはバラバラに配置された3基の対空機銃だけ。おま
けに練度が新兵同然と来たら、その結果は目に見えていた。

射撃はともかく、弾倉の取り替えすらもおぼつかない無力な我々は
容易く爆弾の直撃を受け、第1師団の砲兵陣地はその対空能力を完全
に喪失。

空の敵に抗う術すら失った彼らに、航空機が襲い掛かる様はまさし
く「ワンサイドゲーム」だった。

抵抗する事すら、白旗を掲げる暇すら与えない掃射が戦意も、兵器
も、人員をも粉碎し、爆弾はその威力を惜しげも無く解放する。

爆風、破片、肉が巻き散らされ、グラ・バルカス帝国の将兵は蜘蛛
の子を散らすように後ろへ後ろへと敗走し逃げ惑う。

そしてムー兵は怨敵を逃すまいと、ドツと押し寄せた。

ムーの単発銃は敗走兵を背面から精確に射抜き、銃で撃たれはしな

かったが体力の限界が訪れた者は、追いついたムー兵に捕まり、命乞いをする間もなく銃剣で串刺しにされる。

もはや泥水か血液かもわからない水溜まりに足を浸し、汚れが染み付いた兵服で、ムーの若者は荒れ果てた荒野をただひたすらに、泥のように駆けた。

『太平の海は過去なり！ 太平の海は過去なり！』

無線兵が敵味方識別用の符丁をキャッチし、それを声高らかに謳う。

侵略者を圧倒しているという優越感、逆境を覆しているという高揚感、そしてムーに住まう者なら誰もが知っている偉人の言葉は、限界まで酷使された彼らの身体を再び奮い起こし、追撃戦へと移行させる。

「敵野戦軍は潰走している！ 掃討せよ！」

走る、走る、走る。

戦友の、敵の屍を越えて、彼らは前へと突き進んだ。

グラ・バルカス帝国陸軍 第8軍団 第1師団

師団司令部：撤退準備中

歩兵第1連隊：全滅

歩兵第20連隊：全滅

歩兵第26連隊：全滅

歩兵第54連隊：全滅

搜索第1連隊：通信途絶により行方不明

工兵第1大隊：全滅

野砲兵第1大隊：壊滅（敗走中）

その他の戦闘支援部隊：一部が司令部と共に撤退準備中。その他は全滅もしくは行方不明

装甲に守られた車内においても鳴り響く激しい機関銃の音。戦車砲

が轟かせる強い空気の振動が、人の鼓膜を太鼓のように強く叩き続ける。

葉茨の地面に落ちる音色すら聞き飽きてしまう程の連戦。されど連勝し続ける部隊の名は、グラ・バルカス帝国陸軍が誇る第8軍団第4師団。

前世界においても、新世界においても現在連戦無敗を誇る無敵の機甲師団である。

「ボーグ師団長…やはり敵による電波妨害の可能性があります。近隣の部隊とは何とか通信できますが、他師団とはノイズが酷くて無理です。」

「軍団司令部との通信に至っては完全に遮断されています」

やや青白い顔で無線通信士が報告する。

何を隠そう、この機甲師団の強さの秘訣はボーグ師団長の陣頭指揮…つまり、無線の発達した時代ではあまり推奨されない、将軍本人が前線で指揮を取る方法を採用しているからでもあった。

「ふむ…」

ボーグは不安そうな部下の報告を頭に入れつつ、タバコに火をつけた。戦場では非常によく目立つタバコの白い煙は、装甲指揮車の換気口を通じてモクモクと空へと立ち上り、風に掻き消される。

明け方に戦闘が始まってから陣地前方に鎮座する戦車は常に機関銃の火を噴かせていたが、その射撃音もしだいに止み始め、彼はついに終わったかと帽子を被り直した。

「ただの電波妨害にしては妙だが…無線を多少やられたくらいで我が機甲師団が負けるはずがない。なあに、すぐに優秀な工兵が通信を復旧させるさ」

ボーグは蜂の巣にされたムー兵の山を見て鼻で笑う。

最新鋭の戦車を主体とし、歩兵は末端に至るまでが装甲車などの車両に搭乗している第4師団。機械率100%であるこの機甲師団——おまけに将軍が直接指揮しているため、無線が遮断されても戦える——が歩兵のみのムー軍にそうそう負けるはずもなく、脅威なのは時々襲来する敵航空機くらいなものである。

おまけに通信網の異常が起きてからは、ボーグの指示で付近に展開していた同師団の部隊が続々と集結しているため、敵の物量に押し負けて各個撃破される心配もなかった。

「それに、下劣で野蛮ではあるが優秀なガオグゲル軍団長殿の事だ。無線がぶつ壊れたと分かったら、すぐにでも後方のバルクルス基地に連絡員を寄越すだろうよ。」

直に要請を受けた帝国空軍が制空権を奪取するはずだ。そうなたら我々の勝利は確定したようなものだろう」

ボーグは軍団長との通信が遮断されても尚、勝ちを確信していた。自分の指揮する連戦不敗の機甲師団と、優秀な祖国の軍隊に絶対の信用を寄せていたのだ。

「現在、軍団長の指示は仰げませんが…。どういたします？　ボーグ師団長」

同車両に搭乗する部下が聞く。

答えはもう、わかりきっていた。

「もちろん、我が祖国のように前に突き進むのみよ。敵の波状攻撃もようやく終わったようだしな」

ボーグは意気揚々と答え、タイミングよく全ての発砲音がピタリと止んだ。

久しぶりに耳が休まる静寂の時間が訪れ、彼は警戒しながらも車外に出る。

久しぶりの外の風は清々しいようにも感じられたが、硝煙と焼け焦げた鉄のような臭いの混じった大気が鼻をつく。

澱んだ風が足元を流れ、彼は存在しない木々がザワザワとざわめくような胸騒ぎを感じた。

戦闘が終わったと言うのに、己の本能のようなものが警鐘を鳴らす。

これはまるで…そう、あの「夜」と同じ匂いだ。

「…おーい…ゴミがまだ2匹も残っているぞー！」

目障りだ！ さっさと始末してくれ！」

いつからそこに居たのか、防御陣地の先頭に立つ戦車の前方、15

0メートルほど離れた場所に、*「彼ら」*は立っていた。

大勢の屍の上に立つその姿は、心霊と勘違いしてしまいそうな程におどろおどろしく、不気味でもあり、多くの将兵の背中を冷たい汗が流れる。

「あ、動い——」

反射的にそう叫んだのは近くの戦車兵か、車内に座る部下か：はたまた自分か。

脳がそれすらも認知する前に、2人の幽霊のような人物付近の空間が歪み——正確には一瞬だけ歪んだように見えたのだ——直後に、轟音がその場にいる帝国兵の鼓膜を直撃した。

まるで脳を直接殴られたような衝撃。耳を抑えたのはボーグも例外でなく、訳も分からないまま部下に手を引かれ、彼は装甲に保護された車内へと入った。

ガガガと機関銃の唸る音が戦闘開始の合図を告げる。

『こちらハウンド16、前面装甲が大破！ 運転手が死亡！ 戦車長の意識不明！』

椅子に座って無理やり落ち着きを取り戻すと、ノイズ混じりの、悲鳴のような通信がなおも耳鳴りのする耳に入った。

先程の攻撃で、先頭の戦車が1台走行不能となったようだ。

「敵は何だ！ ムーの魔法使いか!？」

ボーグは冷静さを取り戻し、無線器に向かって叫ぶ。

このような攻撃：ただの人間が戦車の装甲で最も硬いはずの前面装甲を、たったの一撃で破碎するなんて魔法以外に考えられなかったのだ。

続々と入る損害報告、敵はかなり手練の魔法使いのようであり、常人ではあり得ない速度で走っては、銃弾や戦車砲の直撃を避けているらしい。

『国籍不明！ 攻撃の正体は強力な衝撃波と思われます！』

「なんだと——」

再び轟音が響く。

スクラップと化した戦車がひっくり返り、その付近にいた兵士が宙

を舞うのが目に入る。ボーグは自分の目を疑った。

人間を数人吹き飛ばす威力に加え、何トンもある戦車をひっくり返すなんて、どれほど強力な衝撃波だと言うのだ。

「てっ…戦術的撤退だ！ 戦車を殿として…あ、おい！ 勝手に逃げ——」

指示を出したのも束の間、今度は逃げる装甲車^敵を逃すまいと強烈な爆風が巻き起こった。自分の知る兵器、武器とは明らかに異質な攻撃…先程の衝撃波とは全く別種の攻撃…その熱量は車内に居ても熱い程なのに、全身が震える。

過酸化水素とハイドロキノンの化学反応により発生した、指向性の高温毒ガス。奇しくもその噴射システムは、人類が何万年も経てようやく作り上げたロケット^{技術の結晶}の発射方法と全く同じであった。

数センチにも及ばない『ミイデラゴミムシ』が人間大のサイズとなった時、その威力はロケットの発射さながらの大爆風を巻き起こす。

100度に達する濃い水蒸気の煙が晴れた時、ボーグは戦慄した。

つい先程まで走っていたはずの装甲車が、何度も何度も横転し、大地に打ち付けられた痕跡を残して鉄クズと化していたのだ。

そして、この煙が拡散してからが『ミイデラゴミムシ』をベースとした『被手術兵』の真骨頂である。

噴射時に発生したベンゾキノン——水蒸気に含まれる化学物質はタンパク質と化学反応を起こして結合し、外敵の皮膚や粘膜を化学的に侵す非常に危険な代物である。

つまりは、これの含まれる水蒸気を吸い込む、もしくは皮膚で触れただけでも深刻なダメージを負うのだ。

白い蒸気の塊はどんどん拡散していき、グラ・バルカスの兵らを襲っては、あらゆる表皮を変質させ、痛みを伴う皮膚炎を引き起こした。それは外気に触れる食道や肺も例外ではなく、ベンゾキノンに侵された食道は腫れて膨張し、呼吸を阻害する。

「毒ガスか!? 防護マスクの装着を急げ!!」

しゃっくりをするような音を口から漏らし、のたうち回る戦友を見

てすぐさまガスマスクが装着された。これで何とか呼吸困難は免れたとしても、外気に触れた素肌は炎症を起こして腫れあがる。

「こんな魔法攻撃…!! もう1人の方も化け物かッ!!」

今や祖国の領土となったレイフォルにも多くの腕の立つ魔法使いがいるとは聞いていたが、このレベルの怪物の存在を聞いた事はない。恐らくはミリシアルが送った選りすぐりの義勇兵か、ムーの最終兵器だろう。

ムー人はグラ・バルカス帝国人と同様に、異世界から転移したという特性上魔法は使えないと聞いていたが…。何にせよ、こうも接近されては小回りの効かない戦車では太刀打ちできない相手なのには違いない。

「後退！ 距離を取って迎撃するぞ！」

地球に存在する戦闘模範書に「戦闘用車両が『火星生物』テラフォーマーか敵対的な『被手術兵』改造人間に遭遇した場合、即座に見晴らしの良い場所まで移動し、総力を以てこれを迎撃すべし」とある。戦車では機動力の高い歩兵を捕捉できないからである。

ボグが出した命令は、奇しくもその最善の方法と全く同様であり、それは純粹な移動速度では大多数が戦車にやや劣る『被手術兵』相手には有効な手段であった。

…が、それは不整地でもある程度の速力が出せる現代戦車に限った戦術である。

加えて、手術を受けた自衛隊員はベースになった生物の能力をフル活用できるように日々鍛錬を積んでいるため、その機動力は戦闘期最速の戦車ですら舌を巻く速度まで到達しているのだ。

そもそも――

「ガスが…！ 毒ガスが煙幕の役割を果たしていて、何も見えません！」

「視界不良で追突事故が多発！」

「落とし穴が大量に掘られているぞ！ こんな深い穴を敵はいつの間にか…！」

「さつき通った所にも落とし穴があるぞ！ 気をつけろ!!」

——彼らは1両たりとも、帝国軍を逃すつもりは無かった。

前に進めば衝撃波、後ろに逃げれば高温高圧の毒ガスが待ち受け、それを何とか突破しても、今度は落とし穴地獄が広がっている。

その落とし穴というのは古典的だが、戦車を始めとする車両相手には非常に有効であった。

ハマれば履帯やタイヤが損傷し、穴から抜け出すための作業を行うにも、外は直に触れたらアウトの毒霧が立ち込めているのだ。そして視界が悪い中を強引に後退しようとする車両との接触事故により、状況はますます悪化する。

車両を捨てて、敗走兵は半ば暗中模索の状態で逃げ惑う。

対車両用の落とし穴と思いき、地面の凹み。車外に出て注意深く観察すれば引つかかる事は無いし、人間程度の重量なら上に乗っても大丈夫そうである。

が、彼らは進んだ先に対人間用の落とし穴が隠されているとは考えもしなかった。

「ぎゃああああ!!!」

地面を踏み抜いた誰かが穴に落下する。

ただ落ちただけと言うのに、尋常ではない大きさの悲鳴があがった。

「杭だ！　穴に落ちたら串刺しにされるぞ!!」

落とし穴に落ちた仲間を救助しようとした将兵がそう叫んだ瞬間、全敗走兵の足が止まる。

地雷は一瞬で死ぬか、もしくは五体満足では済まないだろうが地表で怪我をする分、敵であれ味方であれ救助はされやすいだろう。それは生還の可能性もあるということである。

しかし、この落とし穴はそうもいかない。落ちたら最後、暗い穴の底で激痛に苛まれながら死を待つしかないのだ。

パツと見は何もないはずの泥の荒野が、一瞬で地雷原よりも恐ろしい地獄と化した瞬間であった。

ここを進む訳にはいかない。だが、今も怪物が暴れる戦地に戻りたくはない。

そうなるに当然、敗走兵の足は止まる。
動かない標的を空から狩るのは非常に容易かった。

自衛隊員が持ち込んだ対地攻撃用のドローン群、数十機が全自動で掃射を行う。もはや戦う意志のなくなった兵を掃討する仕事をドローンに任せることで、数少ない貴重な戦力を他の戦域に送り込むことができるのだ。

煙幕で視界が悪くとも、赤外線を駆使して帝国兵が精確に撃ち抜かれる。

もはや何に攻撃されているのかすらわからないまま、大多数の兵は彼岸へと旅立って逝った。

自衛隊ムー派遣部隊、ムー陸軍合同で行われた、敵機甲師団の殲滅戦は長くはかからなかった。

グラ・バルカス帝国陸軍第8軍団、第4師団。今まで全戦無敗を誇った無敵の機甲師団の最初の敗北は、第4師団の全戦力消失という悲惨な結果に終わった。

彼らは元自衛隊員数名の強襲によりその戦力を大幅に削られ、その直後に到来したムー陸軍の人海戦術によって全滅したのだ。

現時点で他の戦域でもすでにムー軍による掃討戦が完了しており、帝国側に僅かな生き残りはいたものの、グラ・バルカス帝国陸軍第8軍団はその戦闘能力をほぼ全滅させられるまでに至っていた。

第8軍団は残す所、第4師団長ボーグを除く各師団の師団長、そして軍団長ガオグゲルと彼らの近くで行動する幹部将校のみとなり、自衛隊員の手にかかれば、逃げる彼らの殲滅は事後処理程度の労力ではなかった。

そして――

「走れ！ 攻略目標はすぐそこだ!!」

各師団司令部攻略後、ガオグゲル軍団長がいた軍団司令部跡地に、ムー兵が突入した。

中はもぬけのからであつたが、敵軍本部に到達したという事は名実共にムーの勝利を裏付けるハッキリとした証拠であつた。

「ミウラさん、旗はぜひ貴方がやってください」

「俺達が生きて勝てたのは、支援に来てくれた日本人のおかげです。それに、貴方は俺達新兵を率いてここまで一緒に走ってくれたじゃないですか」

「戦車を素手でひっくり返したの、すごく痛快でした。またムーに来てくださいね」

地下本部の上に存在する小高い丘では、熟練兵がいなくなり、新兵ばかりのムー軍に半ば強引に旗を渡される一人の日本人の姿があつた。

彼は最初は遠慮したものの、しばらくしてその小高い丘に、ムー国旗が突き立てられた。

その周りでムー兵は大いに沸き上がり、従軍記者のカメラがフラッシュを焚いた。

その光景を切り取った写真は、しばらくムー国が単独で侵略者を打ち払った証拠として誇示されたが、戦後に発覚した情報により、ムー国と日本国の友好の証として博物館に展示されたと言う。

65話：馬鹿皇太子 棺桶に片足を突っ込む

ムー王立新聞【戦時版】

中央暦1643年6月7日

勇猛果敢なる我が軍を前にグ帝敗走！

敵軍為す術もなく全滅

「祖国を讃えよ」

昨日、中央暦1643年6月6日の日没後、ムー軍広報官が正式に、精強なるムー陸軍がアルーの土地を侵略者の魔の手から守り抜いたと発表した。

この戦闘の勝利を受け、敬愛する国王陛下は「大いに喜ばしいことだ。兵らの奮闘で祖国の地が守られた。彼らに最大級の賞賛を送る」と述べられた。

なお、この戦闘に際して、友好国を助けんと駆け付けた数十人程度の国際義勇軍も戦闘に参加しており、陸軍元帥は彼らの勇敢な行動に感謝の意を表明している。

戦闘が開始されたのは中央暦6月2日の明け方頃、卑劣なるグ帝軍からの奇襲砲撃で、我が軍は中程度の被害を被った所から戦闘が始まった。

しかし優秀なるムー陸軍第5軍団、【検閲済み】はすぐさま体勢を立て直し、反撃を開始した。我が軍の持ち直しの早さに、グ帝軍は急に大砲を後ろ向きにして射った程の驚き方であった。

だが敵国も精鋭を送ってきたらしく、動揺したのも束の間、すぐさま我が軍の動きに順応した作戦を取り、「戦車」という秘密兵器で暫くはムー軍を圧倒した。

こうして戦線は一進一退の膠着状態に陥り、時にはアルー近郊まで敵部隊が迫ったものの、友軍を助けんと駆け付けた第32軍団、【検閲済み】【検閲済み】により膠着状態は解消され、最終的に

は動員された予備役軍団の活躍と少数の国際義勇軍の協力により、アルーの地から侵略者が一掃された。

戦闘終結後、アルーの防衛を担っていたムー陸軍は進撃を続け、元ヒノマワリ王国領内に存在するグラ・バルカス帝国のバルクルス基地まで数キロの所まで歩を進める事に成功した。

我が軍の快進撃に愚グ帝軍は萎縮したのか、現時点ではムー国とグ帝間の戦闘は発生しておらず、ムー陸軍は「勝って兜の緒を締めよ」と言わんばかりの慎重な姿勢を見せている。

この戦闘で発生した死傷者の数は現在公表されていないが、國民軍は敵側の1個軍団を返り討ちにし、これを全滅するまでに至ったため、この戦闘の結果が敵に与えた影響は少なくないと我が社は見ている。

オタハイト沖で敵艦隊を返り討ちに！

新たな漁礁が出来たと漁師大喜び

「無名の大英雄」

アルーからの吉報を公に発表した数分後、軍広報官は、今年2月初旬に起きたバルチスタ沖での悲惨な海戦とほぼ同時刻に、我が国の首都オタハイトと、経済都市マイカルの両東岸沖でもムー海軍とグ帝海軍間の海戦が起こっていた事を明らかにした。

記者の「なぜ海戦から数ヶ月経った今頃になってようやく発表したのか」という質問に対し、広報官は「國民がパニックにならないようにするため」と発表を控えていた理由を明らかにした。

オタハイト沖の海戦には、旗艦『ラ・ゲージ』からなるムレス艦隊司令の首都防衛艦隊と、世界会議の海戦で損害を被ったものの、改修

を受けて帰って来た『ラ・カサミ改』（艦長ミニラル）、そしてムー空軍機316機が出撃したと公表されている。

結果的にオタハイトとマイカルは無事だったものの、この海戦ではムーとグ帝の両陣営に甚大な被害が出たとも発表された。オタハイト防衛艦隊と敵艦隊は全滅し、海戦終結後には大破した『ラ・カサミ改』だけが洋上に浮かんでいたという。

なお、改修を受けた『ラ・カサミ改』は多数の新兵器を搭載しており、その強力な対空対艦攻撃力により、単艦で敵艦隊の大多数を撃沈するという海戦史における金字塔を打ち立てたと言われている。

また、この二つの戦闘に勝利したことにより世論は一気に高揚した。国王陛下は「これからムーの反撃が始まる」と述べられた。これは国際会議やバルチスタ沖の戦いで低迷していた国民意識の快復を図ったものと見られている。

また、マイカル沖で発生した海戦では、来訪した日本国艦隊とグラ・バルカス帝国艦隊が交戦し、日本国が勝利した模様。

「――父上、なぜバルクルス基地への視察をお認めにならないのですか!？」

グラ・バルカス帝国の帝都ラグナ。その中心部にあるニヴルズ城では、深夜遅い時間であるにも関わらず、とある男性がその父親に向かって駄々をこねていた。

190以上はありそうなガツシリとした身体に、赤みを帯びた髪の毛。

その名はグラールカバル。グラ・バルカス帝国第1皇太子にして、現帝王グラールクスの実の息子である。

彼、グラールカバルが主張するように、皇太子殿下には1つの不満が

あった。

父親がどうしても前線視察をお認めにならないのである。

「カバルよ、それはバルクルス基地が今現在どういう状況なのかをわかった上での発言か？」

我が子の愚直ぶりに若干呆れつつ、グラルークスはやや皮肉っぽい口調で問う。

するとカバルは自慢げに、威風堂々とした佇まいで意気揚々と答えてみせた。まるで100点のテストを親に見せる子供のように。

「もちろんですとも、父上！ 先日、ムー攻略作戦の先鋒である陸軍第8軍団が、第一攻略目標近郊でムー陸軍部隊と交戦し、敵数個軍団と引き換えに全滅したのですよね！」

その戦闘以来、大規模な武力衝突は起きていないものの、バルクルス基地の目と鼻の先まで敵軍が迫っている状態であります！」

あれは数日前の出来事であった。

アルー侵攻部隊が壊滅……いや、ほぼ全滅したと最悪の報せが耳に入り、帝王を始めとする帝国臣民がわかりやすく動揺したのはまだ記憶に新しい。

それはもう、海千山千の知り合いがドカドカと帝王府に乗り込んできては、口々に「この戦争は大丈夫なのか」と聞きに来る程であった。

……が、そんな青天の霹靂とも言える事象を聞いても、動揺しない御方がここに1人。

誰であろう、グラールカバルである。

「父上！ 第8軍団は敗北しましたが、彼らは1個軍団と引き換えに敵の5個軍団近くをすり潰せたのです！ 帝国は今回の戦闘には負けましたが、戦争には勝つでしょう！」

まさしく机上の空論。安全な後方で、敵味方の損害を書面上の数字でしか見れていない弊害が、わかりやすく目の前に表れている。

そんなカバルの言葉を聞き、グラルークスはわかりやすいため息をついた。

「カバル……まさか、お前はバルクルス基地なら落とされまいと盲信しているのではあるまいな？」

カバルは物事を覚えることは得意だが、情報の重要性をどこか過大評価している節があり、何でもかんでもを鵜呑みにしてしまう傾向がある。

恐らくは『我が国が世界を統べるだろう！』などと言う味方のプロパガンダに酔いしれているのだろうな、とグラルークスは思う。

それを国威発揚用のプロパガンダだと気付かない辺り、我が子であろうと厄介な存在だ。

「盲信？　いいえ父上、これは祖国に対する厚い信頼です！　野戦軍は負けてしまいました。基地は顕在であります！　なればこそ、次の戦いに備えて我々皇族が現地へ赴き、前線の兵らを鼓舞するべきなのです!!」

再び、グラルークスは大きなため息をついた。

カバルの言っていることが、完全には間違っていないからである。知っての通り、グラ・バルカス帝国の臣民は無条件で皇族を神の如く崇拝している。それはもう皇族の姿を一目見ただけでも涙を流す者もいる程であり、彼らが直々に危険な前線に出向いたとなれば、現場の士気は間違いなく上昇するのだ。

完全には間違っていないからこそ、ダメだと強気に言えなかったのだ。

「息子よ、考えを改めろ。バルクルス基地がいくら鉄壁の防御力を持つとは言え、最前線である以上非常に危険であることに何ら変わりはない。

敵が弱い蛮族でないのは知っておるな？　お前が死ぬ可能性は十分にあるのだぞ？」

グラルークスは、帝王という誰もが恐れ憧れる役柄上、外面は冷静を装っていたが、内心では必死に愛息子の愚行を止めようとしていた。

次期皇帝としては心許ないが、それでも彼は我が子を愛し、その身を自分のこと以上に強く案じているのだった。

だが、親の心子知らずとはよく言ったものだ。

「はい、父上！　前線が危険なのは重々承知しております！　だから

こそ、そのような場に皇族が赴く事の意味が増すのです！」

カバルはその表情をピクリとも変えず、背筋をピンと伸ばして要求を押し通す気でいたのだから。

それでも、今だけは子を思う父として、グラルークスは最後の説得を試みた。

「もう一度言う…カバルよ、考えを改めるんだ。

皇族が訪れるとなると、現場は相応の負担を強いられるのだぞ…？」

次期皇帝候補である以上、最前線勤務がどれほど多忙なのかを知らないとは言わせん！ お前はただでさえ多忙な最前線に、次期帝王の来訪という大きな負担を課すのか?!」

これで思い留まってくれたら、とグラルークスは真つ直ぐな願いを込め、口調強めに目の前に立つ我が子を威圧する。

しかし、帝国臣民であればどんな重鎮もが萎縮する傑物帝王の覇気も、カバルからしてみれば屁でもなかったのだ。

「父上、すでに現場には最小限の歓迎で良いと伝えてあります。私を止めても無駄ですよ？ 皇太子権限で行きますからね」

皇太子権限とは、若き日のグラルークスが制定した皇太子用の超法規的権限である。

これがあれば皇太子は帝王、元老院の許可なく行動することができるため、現帝王グラルークスとして、自分の息子を止めることは出来なかった。

「カバル！ この愚か者が!!」

激昂した彼のその顔は、1国の王というよりも子を叱責する父親という称号が似つかわしかった。

「これが最後の忠告になるぞ！ バルクルス基地は現在、最前線の中の最前線だ！ 大怪我を負おうが死のうが、全てが自己責任で完結する世界は貴様が思っているようなフィクションの世界ではないのだぞ!？」

貴様のその態度は、それらを全て承知の上での態度なのだな!？」

が、そんな父親の必死の説得も虚しく、カバルは平然とした顔で彼

に応えた。

「父上、私の貴方様に対する態度は、それらを全て承知の上での態度に違いありません！　どうか私を行かせてください！」

敵が強いのは今回の敗北でハッキリしました！　そんな強敵を相手に民が必死に戦っているのに、私だけが安全な後方でぬくぬくと暮らすなんて…私には出来ない!!」

まるで自分が前線に赴く事を天命だと確信したような顔に、グラルクスは思わず腑抜けた表情を浮かべてしまった。

血気盛んなこの若者は、どうあつても前線に行くつもりだ、と。

「その顔、承知したと受け取ります！　では！　行ってまいります、父上！」

お辞儀もせず、カバルは部屋を飛び出して行ってしまった。

もはやこうなってしまった彼は誰にも止められず、付き添いの従者達は帝王陛下にペコペコと頭を下げながら、カバル殿下を追い掛けていった。

「バツ…！　おい、カバル!!」

子を思うグラルクスの声は、二度とカバルの耳には届かなかった。

66話：馬鹿皇太子 土に帰す

日ノ本之新聞【号外版】

中央暦1643年6月21日

西暦2775年XX月XX日

陸自 新設実験部隊で実戦演習か

完全無人で敵基地制圧を

「無人化の波はついに陸上へ」

本日午後過ぎ、防衛大臣は陸上自衛隊に新設された陸上総隊隷下の実験部隊「装甲機械兵群」を用いての敵基地制圧作戦の実行を開始したと公表した。

この作戦は、我が国を含めた全世界に対し宣戦布告をしたグラ・バルカス帝国の陸上基地に対して行われるものであるとの情報もリークされ、新世界の住人から『第二文明圏』と呼ばれるムー大陸近郊から、侵略勢力であるグラ・バルカス帝国を追い出す計画の第一段階であるとの発表もなされた。

防衛大臣が口にした敵基地とは、ムー大陸の元ヒノマワリ王国領内に存在するバルクルス基地であると見られている。

同基地の近郊では先日、ムー陸軍とグラ・バルカス帝国陸軍間の大規模な戦闘が行われており、その期間は約1週間という短い戦闘であったにも関わらず、防衛省の調べによると総死者数は15万人を超えるとの結果が出されていた。

この戦闘でムー陸軍は敵野戦軍の司令部を制圧後、バルクルス基地から約3kmの地点まで歩を進めたものの、直後にバルクルス基地から出撃したグラ・バルカス帝国軍による猛攻で基地から約6km地点まで後退しており、小競り合いは現在も続いている。

今作戦は我が国だけでなく、ムーを含めた『第二文明圏』の国家が多数参加しているため、バルチスタ沖大海戦の汚名返上の意味もある

と我が社は見ている。

新型護衛艦は宇宙戦艦!?

新世界では極めて高い抑止力となる見込み

「SFが現実」

同日、官房長官は新世界における覇権国家の多さ、国際社会の未熟さから起こる新たな戦争を危惧し、高い抑止力を持つ特別護衛艦（見た目や大きさは戦艦に似せる模様）の建造を計画しているとも発表した。

これらは、我が国が新世界に転移してから経験した数々の軍事的衝突は、相手国が我が国の実力を正確に把握していない事が最大の要因だと言う指摘によるものであり、野党は砲艦外交の再来だと糾弾している。

当初の計画では、国際会議中に起こった海戦の結果により、我が国がグラ・バルカス帝国から押収した戦艦『グレードアトラスター』（現在名むさし）の船体を流用する案も出ていたが、それではグラ・バルカス帝国の技術力も誇示する形にもなってしまうとの意見もあったため、『グレードアトラスター』は今までと同様に大和ミュージアムでの一般公開の続行が決定された。

同刻――

ムー大陸

元ヒノマワリ王国領内

バルクルス基地

「本当に来てしまわれた……」

皇太子を乗せる車から真っ直ぐと伸びる真つ赤なカーペット、その両側に並ぶ精鋭陸軍兵の中の誰かが呟いた。軍の音楽隊の優雅な演奏が響く中にも関わらず、その声はハッキリと皆の耳に届き、聞こえた誰もが俯く。

それは軍幹部の耳にも届いてたはずだろうが、肝心の幹部は真つ青な顔で震えており、注意や叱責をすることでどころではなかった。

車の扉がゆっくりと開かれ、中から男が現れた。

鋭い目付きに、身長185cm以上はありそうなガツシリとした体軀の彼は、衣装も相まって威風堂々とした態度でカーペットを汚す。

「出迎え、苦勞!!」

そう発したのは、栄えあるグラ・バルカス帝国の皇族、第1の皇位継承権を保有する皇太子、グラ・カバルであった。

帝国臣民にとっては神にも等しい帝王グラ・ルークスの息子である彼は、まさしく神の子。本来ならその一挙手一投足に感激し、生涯のうちにその威光を目にできた事に滂沱の涙を流す者もいるのだが、ここではそれも行かなかった。

(なんだ…? 第1皇太子である私が来たと言うのに、反応が薄いぞ…?)

何しろ、ここは最前線の中の最前線であるバルクルス基地。言わば超が付くほどの危険地帯であり、いつ敵からの攻撃に晒されても何らおかしくない場所なのである。

彼らにはもはや、グラ・カバルが目の前に居る事に緊張しているのか、敵からの攻撃に怯えているのかすら分からなかったのだ。

「皇太子殿下、此度はバルクルス基地まで御足労——」

ガオグゲル軍団長亡き今、皇太子殿下への御挨拶は副司令ガイアが担当している。

その光景は胸がザワつくような思いだった、と生き残りの兵士は後に語ったとされている。

その時だけ、第8軍団長ガオグゲルが「アルーを攻略した暁には現地の女性を無償で提供してやる」と散々豪語していた姿が懐かしく思えたのだ。

「おい…、なんだこの音は…?」

「は——?」

直後、基地司令塔が閃光に包まれた。

耳を塞ぐ程ではないが、中にいた人達は助からないであろう威力の爆炎が黒い煙と共に空を濁し、数秒遅れて到達した突風が小さな土埃を発生させた。

最初は誰しもが事故だと思った…いや、願った。

これが彼らの対応の遅さに拍車をかけたのは言うまでもない。

哨戒機の察知圏より低い高度から哨戒網をすり抜け、例えレーダーに引っ掛かったとしても、小鳥と間違えてしまいそうな大きさのそれ。

空に溶け込むような色と模様、プーンと鳴る羽音は極微小であり、例え人間の真上を飛んだとしても気付けやしないだろう。

基地に襲来したのは、千を下らない数の自爆する羽虫型の飛行物体の群れ。

渡り鳥のような糸乱れぬ編隊飛行をしているが、その生物に在らざるあまりにも寸分狂わぬ動きで、すぐに鳥や虫では無いとわかった。

あまりにも無機質、あまりにも異常。

初めて見る「個」も「心」も無い攻撃に、これが明白な殺意を持った攻撃だと認識するのには、10秒も掛かってしまった。

「で、殿下ー！ ーこちらへ！ 地下司令部へ一時避難をー」

緊急事態を意味するサイレンが鳴り響くも、時すでに遅し。

バルクルス基地の指揮系統は壊滅的な混乱を見せ、軍としての動きは完全に麻痺。滑走路は猛烈な勢いで燃え盛る炎で使用不能となり、全てのレーダーやアンテナがガレキに埋もれる鉄クズと化した。

こうなってしまうってはもう、後は赤子の手をひねるようなものである。

「な、何が起こって…!?!」

カバルの目の前で、小銃を空に向けた兵士が爆殺される。熱気を帯びた突風に混じる、微かな血の臭い。

カバルはようやく、自分がどこに居るのかを理解した。

「こ、これが戦場か！ 私は…俺は今まで何も解っていないかった！何も理解していなかった!!」

助けを求める声が、怒号を発する声が、誰かの泣き叫ぶ声が、無情にも爆音に紛れて掻き消される。

衝撃波の発生する度に瓦礫が降り注ぎ、燃え広った炎はカバルが通るはずだったカーペットを焼く。

「殿下、ここなら安全です！ 急いでください！」

生きた心地がしない地獄を死に物狂いで走り、ようやく地下司令室に着いた時、安堵したカバルは膝から崩れ落ちた。

肺がただひたすらに酸素を求めている。心臓は今までに無い程に脈動し、生の実感を全身へと伝える。

「ひとまずは助かった…のか？」

カバルが無事に避難し終えたのを確認すると、ガイアは基地司令としての責務に努め始めた。

まずは基地の状況を確認する事から始めなくてはいけない。幸いにも、地下司令室には無線や有線を使わずとも各陣と交信を可能とする伝声管も張り巡らされている。

これにより、次第に現在の基地の全貌が明らかになっていった。

「兵員6割が死亡…?! さらに敵第二波を確認だと…?」

伝声管を伝って耳に入ってきたのは、あまりにも衝撃の事実。ガイアはすぐ傍にカバル皇太子が居るというにも関わらず、つい声を漏らしてしまった。

「ば、バカな！ 栄えある帝国軍が一瞬でそんな被害を…!」

カバルも思わず立ち上がり、声を荒らげる。

しかし、いくら泣こうが喚こうが、この状況が改善する事は無い。

『敵第二波、来ます！ 複葉機300、ワイバーンが200！ 地上の人員の避難は概ね完了!』

伝声管を伝い、更に悲鳴のような報告が届いた。

先程の攻撃は要所と兵員のみを狙っていたようだが、今度は違う。敵は基地を完全に破壊し尽くすつもりだ。

しばらくするとズズン、ズズンと地面が揺れ始め、振動の度に地下室の天井からパラパラと小石が降った。

この爆撃がこの地下室に届くことはないだろう。それは敵とて承知しているはずだ。

この爆撃が終わり次第、地上戦力が投入されるだろう。

そうなる前に、皇太子殿下だけは何と少しでも脱出させなくては。

「殿下、精鋭兵30人を護衛につけます。急ぎ非常用脱出トンネルで基地外へ避難してください」

「あ、ああ。すまない…」

ガイア副司令の強気な口調に、カバルは一切反論する事が出来なかった。

そうこうしている内にも、日本と第二文明圏連合軍の作戦はガイアの読み通り、地上戦力による制圧段階へと移行して行く。

第1段階はドローンでの奇襲攻撃による敵基地防衛設備や人員の破壊。第2段階は第二文明圏連合軍による航空攻撃。

そして第3段階は、陸上自衛隊に新設された実験部隊による基地制圧だ。

『報告！ 敵歩兵約300人が接近中！ 地雷原に突入！』

ここからの報告が、悪夢の始まりであった。

『対歩兵地雷、効力を認めず！ 繰り返す、効力を認めず！』

『なんだ彼奴ら！ 火の海をもともせず突っ込んで来るぞ！』

『地下への出入口が突破されました！ 小銃弾の効力を認めず！ ものすごい進軍速度です！』

矢継ぎ早に飛び込んで来る、絶望的な情報。

時計の秒針が1周をする間もなく戦況は激変し、ガイアの必死の戦闘指示も、敵の進軍速度には全く追い付かない。

「て、敵は同じ人間のはずだろう!? 何故こんなにも容易く帝国兵が負けるのだ!?!」

航空機や戦車ならば、技術による圧倒は理解出来る。

しかし歩兵は所詮、銃を持つか持たないかであり、それほどまでに力の差はつかないはずだ。

そもそも、この世界に我が祖国よりも高い技術力を保有する国は存在しないはず…。

「…あの噂が本当だったって事か？」

最近、帝国兵の間でまことしやかに噂されている話がある。その噂は主に、同じ転移国家である日本国についてだ。

曰く、日本国は帝国よりも遥かに進んだ未来技術を保有している。

曰く、日本国の兵は薬剤の注射により怪物のような能力を得ていると。

曰く、日本国を敵に回しては絶対に勝てないと。

そして、つい最近出てきたこんな噂がある。

曰く、アルー攻防戦で陸軍第8軍団を壊滅に追い込んだのは、日本国であると。

ガイアは当初、その噂をオカルトの類だと鼻で笑っていたが、今となってはそれが現実味を帯び始めている事に恐怖していた。

「おい、今すぐ殿下をお連れして逃げろ！」

「了解しました…副司令は如何なさいますか？」

「私は最後まで抵抗してみせる！ 早く行け！」

嫌な予感がする。

この壁の向こう側から、何か恐ろしい何者かが近付いていると本能が訴えているのだ。

戦況を聞いている限り伝わって来るこの感じ…何と形容すべきか、今回の敵には人間を人間と認識していないような冷たい空気を感じる。

どんなに人を殺し慣れた人間でも、命を奪う瞬間は必ず何かしらを考えるはずなのだ。

まるで殺す事を何とも思っていないような……それこそ、自分の意思を持たない『機械人形』のような。

直後、何者かがガイアの居る部屋の扉を突き破り、強引に中へと入り込んできた。

その物の姿を見た時、ガイアはギョツとした。

「は、ははは！ まさか本当に機械人形だったとは！」

ギョロつとした無機質で赤い大きな目がこちらを向く。

人間よりもやや大柄で、戦車をそのまま人型に変えたような無機質な見た目だ。手に該当する部分は重機関銃のような大きさの銃が装着されており、注意深く見ると、表面にある無数の弾痕が亡き帝国兵の奮闘を物語っていた。

「狙いは私か？^{司令官} それとも殿下か？ だが残念、ここには帝国兵しか居らんよ」

ガイアは手榴弾の安全ピンを抜き、目を閉じた。

緊急避難用に掘られた暗い洞窟。足元すら見えない闇の中で、心臓は張り裂けんばかりに拍動し、地下の冷えた空気が肺に流れ込む。

手足は全て万力で思い切り締め付けられているような感じがし、筋肉が悲鳴を上げているのが容易にわかった。

「残りどれくらいだ！ どれくらい走れば外に出れる！」

「あと1kmで外です！」

たった今後方で聞こえた爆発音：私を逃がしてくれたガイア副司令は無事だろうか？

息が切れ、服の下は汗にまみれる。

朦朧とした頭で、カバルは走馬灯にも似た光景を見た。

『最前線は何が起こるか解りませぬ、御再考を！』

バルクルス基地へ行く事を、必死で止めようとしたお付きの顔。

『行くのは止めておけ、皇族が行くとその準備のために兵を割くことになる』

外面は平静を保っていたが、内心は必死に止めようとしていた父上。

それら全てを振り切って、自分の考えを押し通し、私は今ここにいる。

引き返す機会はあった。

進言も何度もされた。

しかし、自分は来てしまった。

来ることが前線の兵のため、祖国の為になると信じて……しかし、現実はどうだったであろうか。

ただイタズラに皆の足を引っ張り、今は敗兵のように逃げ惑っている。

聞く耳を持たなかった自分が悪いが……悔やんでも、悔やんでも、いくら後悔したって時間は戻らない。

「殿下！……この角を左で——」

先行して角を曲がった兵の声が途絶える。

発砲音こそしなかったが、微かな硝煙の臭いが自然と足を止めた。

「殿下、下がっててください」

護衛の兵士達が発する雰囲気、そこに敵がいるのだと確信した。私は予備の小銃を渡され、後ずさり、生唾を飲む。

3、2、1の合図で角を飛び出て行った兵達は、たった数回の発砲音を発して消息を絶った。

次は、自分の番だ。

「パパ——」

後悔先に立たず。

カバルはその身をもって思い知った。

各国の報告書

【ムー国】最重要友好国である日本国についての簡潔な報告書

日本国

公用語 日本語（事実上） 首都 東京（事実上） 最大の都

市 東京都区部

・政府

天皇

内閣総理大臣・ 蛭間超時

国会衆議院議長 《調査不足のため不明》

国会参議院議長 《調査不足のため不明》

最高裁判所長 《調査不足のため不明》

・暦

グレゴリウス暦（通称西暦）

現在は西暦2775年

・面積

総計・377,988.12km²

・人口

総計（中央暦1643年）約2億3000万人

・建国

現時点ではヤムート政権より以前の記録がほとんど残っていないため、ヤムート政権発足時を建国の年と見なす。しかし日本国では日本神話による初代・神武天皇即位の日が建国の日とされている。

日本国（にほんこく、にっぽんこく）、または日本（にほん、にっぽん）は、中央世界から見て極東、第三文明圏の東に位置し、日本列島および南西諸島・伊豆諸島・小笠原諸島などからなる民主制国家であり、異世界からの転移国家でもある。首都は東京都とされている。

気候は四季の変化に富み、国土の多くは山地で、人口は沿岸の平野

部に集中していた。近年は人口の過集中への対策として山地の開発が進み、自然は失われつつある。国内には行政区分として47の都道府県がある。

列強序列第4位であったパーパルディア皇国との戦争に容易く勝利し、昨年の先進11カ国会議において正式に列強国の仲間入りを果たした。その直後の対グラ・バルカス帝国戦においては単艦で目を見張る程の戦果を挙げ、全世界にその存在を大きく知らしめた。

歴史

日本国の前身は、我がムー国がこの世界に転移する前の世界（以下地球）で最も親密であった国ヤムートであり、そのヤムートが1万年超の時を経て変化した姿が現在の日本国である。

地球における歴史は説明が非常に長くなるため、今回はその大部分を省略し、地球で二度にわたって起きた「世界大戦」という名の大戦争時代（日本の暦で1900年代前半）（現世界の技術水準に非常に近い時代と言われている）以後の約800年間の歴史を説明をする。

・21世紀（日本の暦で2001～2100年）

この時代の日本で特筆すべき点は、『インターネット』と呼ばれる地球規模の情報通信網の急速な普及だろう。

日本国においてのその普及率は、世紀の半ばにさしかかる以前にはほぼ100%の水準となり、22世紀を目前とした時期に『7G』と呼ばれる第7世代移動通信システムが導入された。

また、この世紀はネットの強化だけでなく『ドローン』と呼ばれる無人航空機や『人工知能』（説明が難しいが、機械が人間と同等かそれ以上の知能を獲得する技術）の発展も目覚ましく、その利用は軍事だけでなく民間にも浸透し、農業の無人化による高効率化や物流網の更なる強化等、現在でも多岐にわたる。

その他、この世紀に日本国に起こった事としては、少子高齢化の改善や全体的な温暖化、戦後失われつつあった「日本人としての誇り」「愛国心」がSNSの普及によって取り戻され、それをいわゆる「世直し大臣」が後押しした事で日本国が精神的に「強く」なった事である。

また、2030年代に日本国と我がムー国がかつて存在していた『地球』という名の惑星から程近い『火星』という惑星のテラフォーミング計画が始まったのは今の日本を語る上で避けては通れない。

現世界にも存在する「ゴキブリ」という昆虫と「品種改良された苔」が宇宙空間を航行する飛行機械によつて、『火星』を人類が居住可能にするために送り込まれたのである。

※我がムーでも日本国の協力の下、インターネットの導入を目下検討中であるが、しばらくは民間ではなく軍事的に利用されるとの予想がされている。ミリシアル帝国やエモール等は魔法文明国であるため、これを導入するには早くても30年は必要と見られている。また、食糧面や地下資源面で日本国を支えるクワ・トイネ王国やクイラ王国では、すでにネット回線が浸透しつつあるとの調査結果もある。

・22世紀〜26世紀

地球全体で何百年も技術革新が起こっていない、いわゆる停滞期、もしくは暗黒時代。大同土の対立はあったが、平和ではあった。

2577年に火星探査のために数人のパイロットが火星へと送り込まれ、全員が死亡するという事故が発生。この時に、日本国で俗に『火星生物』^{テラフォーマー}と呼ばれる「異常進化を遂げたゴキブリ」の存在が確認され、その身体の一部のみが地球へと帰ってきた。それは地球に次なる技術革新の可能性をもたらし、いわゆる『火星生物』が持つ特殊な臓器を人間に移植し、人間の各身体機能を強化させる『バグズ手術』を誕生させた。

そして20年後の2599年、『バグズ手術』を受けた15人の若い男女が火星に降り立ち、『火星生物』と戦闘、無事に地球に帰って来れたのは男性2名のみであった。

・27世紀

2610年、先述の火星調査時に火星に取り残された宇宙空間を航行する飛行機械が地球に飛来、即座に撃墜されるも、地球はそれに乗ってきた『火星生物』の侵入を許してしまう。

2620年3月4日に、前述した『バグズ手術』と同形態の手術を受けた軍人や一般人からなる『アネックス1号』という名の大規模な

火星調査隊が火星に向けて出発。火星は大国間の代理戦争の戦場となり、大勢が死亡したが、「ゴキブリ」を異常進化させたらしき「ウイルス」の大量確保に成功。これにより『バグズ手術』の手術成功率は大幅に上昇した。

2622年、『火星生物』による大規模な日本侵攻が発生。大勢の死者を出しつつも、現在の総理大臣のおおじに当たる日本国の502代内閣総理大臣蛭間一郎氏の奮闘と、世界各国から駆けつけた地球軍によりその侵攻は食い止められた。

これがきっかけで、今の日本国民は大規模な軍拡にも理解を示すようになる。

・28世紀

この世紀に起こった事は主に、幾度の駆除を経て『火星生物』^{テラフォーマー}の根絶宣言が発せられた事、『バグズ手術』が民間にも広がり、被手術者が大幅に増えた事、そして日本国がこの世界に転移した事の3つである。

だが『火星生物』の根絶というのは、あくまで自然界には存在しないという事であり、研究所には存在するという事である。当然、現在の日本国にもそれは存在しており、脱走を許した場合は時を経て甚大な被害を生み出すと言われている。

そのような事態を初期段階で解決、もしくは『火星生物』による日本侵攻のような事態に備え、手術を受けた一般人は緊急時における『火星生物』及び『主に火星生物を含むテロ組織』との戦闘行為、それらの殺傷行為が認められる。日本国の鳥取砂丘に密かに上陸したパーパルディア皇国軍は拡大解釈で後者として認識され、民間人の高齢男性により鎮圧された模様。

(列強とは言え、日本国はもちろん我が国目線でも前時代的な技術体系しか持たないパーパルディア皇国軍事組織がどのようなにして上陸に成功したのかについては目下調査中である)

文化

・食

日本の国土は大部分が温帯に属し、南北に長く、海洋に囲まれているため、四季がはつきりしており降水量も多い。そのため、魚介類や海藻、野菜や山菜、果物など様々な食品が自然の恵みとして得られる。また、稲作の導入、仏教や鉄砲の伝来、鎖国や文明開化、第二次世界大戦などを経て、様々な異なる食文化の影響を取捨選択した独自の食文化が成り立っている。

・ 建築

日本は山林が多く、木造建築が伝統的に用いられてきた。現在では都市を中心として高層建築物も立ち並ぶ。

現在の日本で最も高い建築物は「9代目東京タワー」であるらしく、その高さは1000mを優に超えると言う。

・ 娯楽

日本国の娯楽の多さはムー国民だけでなく、すでに全世界の知るところである。それは地球でも同様であったとの報告が出ている。

転移以後の日本では21世紀〜22世紀の古典を中心とした古典復興運動が盛んなようであり、我がムー国でも最近はアニメファンと呼ばれる人達による、俗に「聖地巡礼」と呼ばれる日本旅行が盛んとなっている。最近になって開通した日本ムー間の航空路線——軌道上を音速の倍の速さで飛行するため日帰りも可能——はそれに拍車をかけている。

治安維持

日本国内の治安維持は、主に警察が担う。先述の『バグズ手術』を悪用した犯罪も稀に起きるため、警察組織の人間は他職業と比べて比較的手術を受けた人間が多いらしい。

警察以外では、沿岸警備隊の機能を有する海上保安庁が存在する。日本国の海上保安庁とさえ世界会議の海戦でグラ・バルカス帝国艦隊を破滅に追い込んだ白い悪魔『しきしま』が有名であろう。『しきしま』艦長の瀬戸氏が最近、我がムー国のテレビに出演した事もあり、その偉業はまだ記憶にも新しいはずだ。

とにかく、これの証明するように軍隊ではない——正確に言うとは

本国には軍隊組織は存在しないが、ここでは日本国の軍隊と呼称させてもらう——一介の警察組織が、我がムー艦隊では手も足も出ないだろう艦隊よりも強いのである。

つまりどう言うことか。

我が国の軍事専門家の一部は「日本国は全世界を相手にしても圧倒できる軍事力がある」と唱えているが、それも最近流行りの都市伝説のような眉唾ものでは無いと言うことである。日本軍が一般公開している資料は別途用意しておこう。日本国の軍事力についてはこれだけしか書けないのは大変申し訳ない。

報告書を出す身としては相応しい態度ではないが、日本国の軍事力は今でさえも秘密のベールに包まれているのだ。これは決して調査不足ではない。

我が国の諜報機関にも協力を申し込んだのだ。むしろ最も力を入れて調べた分野なのである。

なのに我々は、その真の軍事力の尻尾を掴むどころか探し当てる事さえも出来なかつたのだ。

正規ルート以外の方法で日本国に入国しようとした諜報員は、軒並み海上保安庁に見つかり、遭難者として送り返された。

正規ルートに入ったとしても、まるで常時監視されているのではないかと思うほどに、公に出来ない活動を開始した瞬間に怪しげな民間人——恐らく日本の防諜部に属する人間だろう——に話しかけられるのである。

日本国の真の力は、その経済力、政治力、軍事力ではない。我々では到底太刀打ちできそうにない情報力である。

この報告書を書いている私でさえ、日本国の『僕の星』の監視下に置かれているのではないかとさえ思う。

空が見える全ての場所は例外なく、日本国の「目」が存在しているという事を念頭に置いてほしい。

そして誓ってほしい。

何があっても、あの国と敵対してはならないという事を。

・とにかく絶対に敵対してはいけないのは理解した。

b y ムー国王ラ・ムー陛下

・この報告書は不完全だ！ 日本国のすごい点はもつとたくさんあつてだな、軍事だけでなくそれを下から支える経済力やその他あらゆる云々が（以下長すぎるため省略）

b y 情報分析課技術士官マイラス氏

【神聖ミリシアル帝国】新興国日本について

日本国

公用語 日本語（事実上） 首都 東京（事実上） 最大の都

市 東京都区部

・政府

立憲君主制

・面積

エモール王国よりは大きいとの情報が入っているが、我が帝国の足元にも及ばない。

・人口

その面積から考えるに、1000万人未満と推測

・建国

この国と初めて接触したのはクワ・トイネ公国の竜騎士である。接触時とほぼ同時期に、例の「魔帝復活騒動」が起きたのは、何かしらの因果関係があると考慮している。

日本国とは中央世界より見て極東、第3文明圏の外側に位置する新興国である。

列強であったパーパルディア皇国や、西側の蛮族国家であるグラ・バルカス帝国に勝てる程度の力を持ち、蛮族の新興国としては似つかわしくない軍事力を有する。

ムー国と同じ科学技術国であるらしく、彼の国の外交官が来訪した際、その者らの魔力を密かに計測したデータを見る限り、魔力を有する人は極僅かか、皆無である。世界に冠たる我が帝国との国交はあるが、民間の交流はほぼ皆無に等しく、我が国の諜報員が鋭意調査中である。

軍事

・軍隊

日本軍は自らを軍ではなく「自衛隊」と認識しており、他国へのい

かなる侵略をする事はないと自負している。これは過去の敗戦を教訓に、憲法で軍の保有を禁じているためである。

その全貌は定かではないが、自らの首を絞めるような三流国家の軍隊に我が帝国軍が負ける訳がないため、調査は行われていない。

・魔人

我が国が日本国の存在を初めて認識したのは、魔帝の遺産であるとされる「魔王ノスグーラ」を日本軍が討伐した直後である。当時、情報局員のライドルカ氏が現地へ赴き、その戦いぶりを纏めた報告書は誰にも信じられなかったが、彼の報告書にもあった『魔人』なる存在は日本国と親しき仲にある文明圏外の蛮国、クワ・トイネ公国とクイラ王国では公に認知されているらしく、そちらの調査は鋭意進行中である。

・讃美歌が呪文となる魔法

世界会議の際に起きた海戦では、日本国の艦が「日本国科学呪文式讃美歌」を詠唱、隕石を落下させ、グラ・バルカス帝国艦隊を壊滅に追いやった。

この「讃美歌」というものを唱えた直後、日本国の艦艇は何かしらの動力源の回復に努めていたため、連続して隕石を落とせると言う訳ではなさそうであるが、高火力広範囲の魔法攻撃を約3分で行えると言うのは、我が帝国の力を以てしても大きな脅威に違いない。

現在我が国を始め、エモール王国やその他の準列強国はこぞって「讃美歌が呪文となる魔法」の研究に尽力しているが、これと言った成果は皆無である。

来るべき魔帝戦において、日本国は大きな役を演じる事となるだろうが、戦後は神聖ミリシアル帝国の統治体制において大きな障害となるであろう。今のうちに総力を以って日本国を攻撃、併合し、その力を我が帝国の物とするべきである。

コメント

・なんだこの報告書は！これを書いた前時代的な思考の無能を今すぐ解雇しろ！日本国の調査は最も力を入れろと言ったはずだ！

b y 神聖ミリシアル皇帝ミリシアル8世

・敵を知り己を知れば百戦危うからず…。いくら世界最強の神聖ミリシアル帝国として、調査を怠るなんて恐ろしい怠慢であり、利敵行為でもある。とても不愉快だよ。

b y パル・キマイラ2号機艦長メテオス氏

・一部の軍事専門家が日本国を過大評価している節があるが、この報告書を書いた人物と比較すると、そちらの方がよっぽどマトモに見えるてくるね。

b y 神聖ミリシアル帝国 国防省長官アグラ氏

・なんか机の上に放置されてる書類を見てみたら、うちの国の事が書かれてた。こんないい加減な報告書が存在する国が世界最強とかアタオカ過ぎんだろ w w w

しかも日本の奥の手の「先制防衛・偵察衛星の機械的故障による落下事故」を魔法と勘違いしてるし、この国の調査体制はザルか!?!?

b y とある国の諜報員

「グラ・バルカス帝国」最大警戒対象国日本

単刀直入に記そう。我がグラ・バルカス帝国が新世界でも世界制覇を志すにあたり、最も警戒すべき国は「ムー」でも「神聖ミリシアル帝国」でも「古の魔法帝国^{ラヴァーナ}」でもなく、極東の転移国家である『日本国』であるべきである。

理由は言わずもがな、彼の国と我が国の軍事技術の隔たりは、多く見積もって50年以上、少なく見積もっても20年近くの差があるからだ。これをわかりやすく感覚的に説明するには、グラ・バルカス帝国軍とムー軍の技術差が妥当であろう。日本国と我が国の技術差はその程度離れているのである。

だが、たかが数十年と侮るなかれ。その僅か数十年の差が帝国海軍の最新鋭戦艦『グレードアトラスター』を旗艦とした帝国艦隊を冷たい海の底へと沈めたのだ。

我が国が世界制覇を完遂するには、まずはこの国の技術力に否が応でも追いつかなくてはならないのである。そのためにも、我が国と現在戦争状態にある日本国を含めた世界各国と停戦し——もちろん時間稼ぎである——その期間中に日本国に大打撃を与えうる戦略的秘密兵器の製造を完遂するべきとの旨を、皇帝陛下に意見具申をするべきであると将官は愚考する。

概要は以下の通りである。

第1段階 『奇妙な戦争作戦^{Phoney War}』

外交部主導で世界各国と停戦協定を結ぶ。もちろんこれは一筋縄では成功し得ないため、第一に最も交渉がやりやすいであろう日本国と停戦協定を結び、以後は日本国に仲裁人となってもらおう。

また、いきなり停戦を提言すると敵国に何かあるのではと勘繰られてしまうため、停戦前に「皇太子殿下を殺害した日本国への懲罰攻撃」を大義名分にし、主に旧式の艦艇による大艦隊を日本国へ向けて攻撃させる。この懲罰艦隊が日本海軍を食い破り、日本本土への攻撃を成功させれば儲けものであるが、高い確率で懲罰艦隊は壊滅すると予測

する。大艦隊が壊滅に追い込まれば、我が帝国が停戦を提言しても何ら不思議ではない。

もちろん懲罰艦隊の人員は「イシユタム艦隊」と似た編成がなされる。我々は彼らの戦訓を後の対日本戦の試金石とする。

そして懲罰艦隊が壊滅した直後に、日本国との停戦交渉に入る。彼らは十中八九「第2文明圏からの撤退、及び他国との即時停戦」を条件にしてくと予測されているため、後者はすぐにでもするつもりであるとの旨を伝える。

日本国は「国際法に乗っ取った世界平和及び紛争の平和的解決」を国是としているため、前者は「利害関係があるため、今すぐは難しい。各国との和平交渉が叶った後にゆっくりと調整したい」等と伝えれば停戦交渉は上手く進むであろう。

また、日本国の仲裁があつたとしても我が国との停戦交渉が難航する国もあるだろうと予想されている。今作戦の最優先目標は「実質的な不戦状態」であるため、それさえ達成できれば無理に条約を締結する必要はない。交渉が難航し、長期化しても、実質的な不戦状態を生み出せば目標達成である。

なお、程度にもよるが、我が国が何からの形で不利益を被るような内容での不戦状態は原則認められない。

第2段階『象牙の塔作戦』

今作戦は第1段階と並行して進められる作戦である。象牙の塔という言葉の通り、現在建設中の地下極秘施設に帝国中から集めた頭脳明晰かつ愛国心溢れる科学者や技術者に新兵器の研究開発に専念してもらおう。

最も重点的に研究がなされる兵器は下記の通りである。

・原子核分裂連鎖爆弾／弾頭
ウランやプルトニウムなどの元素の原子核が起こす核分裂反応を使用した超高威力爆弾。

この兵器は帝国技術開発部により数年前から遅まきながらも進められていた研究だが、例の「ナグアノレポート」による触発のおかげ

で、すでに実験段階に迫りつつある。後の課題は小型化と実用化だけであると言っても過言ではない。

・各種誘導弾

わかりやすいように言うと「飛行爆弾」もしくは「航空魚雷」である。

無誘導のロケット弾は我が国にも存在するが、それらの長射程化と高威力化。そして弾頭を替えられる事により汎用性も確保し、おまけに誘導装置も取り付けて精度を高めるのが最終的な目標である。

また、上述の「核爆弾」を弾頭に切り替える事により誕生する「核誘導弾」は戦術的にも戦略的にも大きな軍事的優位性を生み出すと見られている。

・超長距離核誘導弾

上記の2つの兵器が完遂されて初めて生まれる究極兵器である。超威力の核爆弾を積み、何万kmと離れた敵国を攻撃する。

・ジェット戦闘機

ジェットエンジンを積んだ戦闘機である。その制空性能は従来のレシプロ戦闘機と比べて段違いに高く、これにより我が軍の制空権はより強固なものになると予想されている。

・新型潜水艦

航続距離や速力だけでなく、各種設備内装の改善や高い隠蔽性能の獲得を目指す。これと並行して誘導魚雷の開発もなされる。

これに核ミサイルを搭載し、敵国近海から核攻撃を行う構想も現在検討中。

・人工衛星による地上監体制

誘導弾の技術が高まれば、人工衛星を宇宙空間に送ること自体は比較的容易であろうとの見方がされている。だが宇宙空間は全く未知の分野であるため、これの実用化には更に長い年月が必要。

第3段階『天ノ破城槌作戦』

上述の「超長距離核誘導弾」を数十発同時、それを複数回繰り返す事による日本国本土に対しての戦略的奇襲作戦。

数本では比較的容易に迎撃される可能性を踏まえての、数十発一斉発射、波状攻撃である。幾度にも渡る核攻撃で日本国のあらゆる分野に大打撃を与え、その後に士気が大幅に下がった日本軍の残存戦力を一気に叩き、本土を占領するのが望ましいと思われる。

第4段階 『夜明けの帝国作戦』

先日のアルー攻防戦における帝国軍の敗北とその後起こったバルクルス基地陥落は、ムーが単独で成し得たのではなく、日本国による大規模な軍事的支援があったからだと思われる。

日本国さえ降伏させてしまえば、新世界の住人に「第二文明圏」と呼ばれる大陸付近の平定は容易い。神聖ミリシアル帝国も、日本がいなければ金魚のいなくなった金魚の糞に等しい。その後の「第三文明圏」と呼ばれる東側諸国も我が帝国の手によれば征服するのは非常に容易である。

今はまだ空想段階に過ぎないが、これらの作戦を総称して『グラ・バルカス世界帝国化作戦』と名付ける。

グラ・バルカス帝国編Ⅱ

67話：最悪の序章

過去にたった一発の銃弾が数千万の犠牲を産み出す大戦を引き起こした事象のように、ただ1人のヒトの死が世界の命運を大きく変える事は十分に有り得る。しかし、それをどれだけ危惧したとて未来がどうなるのか誰にもわからない以上、いかな賢者でもこれを回避するのは難しい。

人類史とは闘争の歴史だと誰かが言った。いくら技術が進もうと、人間は理性を欠いた獣なのだ。

憎悪が更なる憎悪を呼ぶこの世界では、一度でも闘争の口火が切られた途端に人は剣を、銃を手に取る。時にそれは、万の命を瞬時に蒸発させる核攻撃のボタンだったりするのかもしれない――

グラ・バルカス帝国

それは西の果てに突如として現れた軍事大国である。彼らはその高い技術力と軍事力を以て新世界の列強を含む周辺諸国の地を瞬く間に制圧、全土を配下に収め、遂には全世界に対し宣戦布告を行った。その名は今や「敵国」の代名詞として語られており、軍事力に乏しい小国にとっては「邪神にも等しい大いなる脅威」の意味すら纏っている。

「そんな国の第一皇太子が殺されたらしい」

とある港町の酒場で誰かが言った。列強序列一位とされている神聖ミリシアル帝国の情報部ですらまだ確認できていない噂話は、これを機に全世界に流布される事となる。

「誰にだ？」

「それはッ――」

別の人がそう聞くと、商人らしき格好の男は冷や汗を垂らして俯

き、沈黙した。酒場に来ている誰もが固唾を飲んで彼の返答を待つ。室内の温度が徐々に下がっているような気分がした。

「——日本国だ……！」

その日、帝国の首都は恐ろしい雰囲気に包まれていた。軍楽隊の演奏する音楽はどこかおどろおどろしい雰囲気を纏っており、早朝から駆けつけた大勢の民の目は憎悪の色に満ちていた。

帝王陛下の住まうニヴルズ城。そして、そこに設置された帝王陛下本人が直々に重大発表を行うはずの場に現れたのは、陛下グラルークスではなく帝王府長官であるカーツ氏。

直後にざわめく民衆。しかし、カーツはそれを意に介さずに懐から紙を取り出した。

次に彼の口から出たのは、皇太子殿下死去に対するお悔やみの言葉。それから何に代えても尊い殿下の命を弄び、終いには虐殺した日本国に対する恨み辛み。

「日本国はあろうことか、グラカバル殿下を拷問の末に殺害し、その遺体をワイバーンの餌として消費した」

カーツ氏の言葉が翌日の新聞に載せられた後、全人口の怒りの矛先は一瞬にして極東に向けられ、帝国の世論は前例がない程に過激化、極右化が進む。「憎き日本国討つべし」の標語の下に経済は即座に総動員体制へと移行し、あらゆる軍事物資が民間の工場で製造され始め、日本国懲罰部隊はまさに飛ぶ鳥を落とす勢いで出撃準備を終えた。

『皇太子殿下の仇を討つべし』

『黄色い猿共を滅ぼすべく行って参ります。』

『蛮族の世界を征服せよ!!』

『新世界に冠たる我が祖国!』

国威発揚だけでなく、対外に敵意を向けるべく作られたポスターが町中の至る所に貼られた結果、徴兵制を敷いているのかと誤解される

程に集まった志願兵により、帝国軍は海だけでなく陸空も大幅な拡充がなされる。

しかし「日本国懲罰艦隊」に配属された臣民は数字上はかなりの数になるにも関わらず、何故かその部隊に配属された知り合いが全く一人もいないという新兵が後を絶たず、帝国軍内ではしばらくの間、あの噂が広まった。

「今度の日本懲罰艦隊は敵の実力を知るための生贄なのではないか」「もしかしたら数年後に第二次、第三次もあるのではないか」と。そして「知り合いの受刑者数人と急に面談が出来なくなつた」と言う兵士もチラホラ見かけられた。

新聞では連日のように懲罰艦隊に関する情報が大見出しを飾り、出撃までの日数はまるでロケット発射のカウントダウンのように零へと近づく。

そしてついに「日本国懲罰艦隊」が出撃する日、カーツ氏を頭領とする臨時総裁政府は国内外に向けて大々的に「皇太子殿下を殺害した日本国を懲罰する」と宣言し、それと同時に全国の港から力強く重厚な汽笛が鳴り響いた。

「日本国懲罰艦隊、今日この日をもって抜錨す!!」

艦隊旗艦オリオン級戦艦の4番艦『アルニールム』の艦橋で退役寸前の老人が叫ぶ。旗艦を含めてほとんどが旧式の戦艦、それも数が少ない航空母艦以外の艦の乗組員はほとんどが囚人、退役将校もしくはそれに近しい歳の老将校である。誰の目にも今艦隊が生贄なのは明白ではあつた。

だが、その総数は約500隻。乗組員の質が多少悪かろうが、ただ敵に砲を撃っているだけで勝ててしまえそうな大艦隊だ。日本国の実力がきちんと報告通りであれば、数の暴力で何とか勝てそうな気もしなくもなかつた。

艦隊司令であるロージンは半分白くなつてしまった頭を掻きむしりながら、遠くの海を見つめる。

「日本国…と言つたか。はてさて、どのような相手じゃるか…」

艦隊の遙か前方には、どうにも怪しい色をした積乱雲がこちらを待

ち構えるように居座っていた。

「ごひゃ……総数500隻だと!??大艦隊ではないか!」

「それよりもあの事故の方はどうする!??敵国とは言え、一応謝罪しておくべきか!??」

一方、日本では人工衛星が捉えた前例の無い数の敵大艦隊の襲来、そして事故とは言え敵国の皇太子を殺害してしまった事実の両方をどう処理するかで政府は右往左往していた。技術が進み、ほぼ全ての日本人が人間社会のありとあらゆる分野を「人間の脳活動を補助する」事で支えるサポートチップを脳に埋め込んだとは言え、「人間の脳」は所詮は「人間の脳」であつたのだ。

「皇太子を死亡させてしまった事は戦後で良いだろう! 国を纏める人間が敵によつて殺されるなんて戦争中ならよくある事だ!」

「そのよくある事が最後に起こつたのはいつだ!??少なくとも数百年は起こつてないぞ!」

「それは地球の話だろう! まず敵艦隊だ! 対艦ミサイルの数は足りるのかね!??」

政府のお偉方による会議は紛糾している。おまけに紛糾しているのは政府だけではないらしい。今まで数多くの軍事的苦難を難なく乗り越え、今や多少の事では動揺すらしない日本国民も、前代未聞とも言える敵の大艦隊——おまけにパーパルディアのような中世レベルの木造戦闘艦ではなく、主砲弾や爆弾が直撃すれば現代日本艦でさえ無事では済まないレベルの敵である——に国中がどこかソワソワとしている雰囲気を感じ取っていた。

「装甲の薄い艦艇と潜水艦なら小型無人機による飽和攻撃で事足りるでしょう。分析結果によると重装甲の艦は20程度、対艦誘導弾の数は十二分に足りるはずです」

防衛大臣の言葉に、会議出席者らはホッと一息つく。だが当の防衛大臣はと言うと、彼はやや苦々しい顔で「ですが」と続けた。

「ご存知の通り日本は、来るべき魔法帝国戦とその戦後を見据えて、たった1隻の『次世代型護衛艦』に年間予算の5%近くを当てています。それ故に過剰な出費は避けるべきでしょう。幸いにも相手は骨董品艦隊ですから、なるべく安価で撃退できるように鋭意努めるつもりです」

また改造人間の出番か、と皆が思うも誰も口には出さなかった。実際にはそれが最も安価かつミサイル乱射の次に効果的な手法であるからだ。

そして会議はしばしの間、雑談タイムへと移行する。

「例の『宇宙戦艦計画』か……。あれはもはや次々々々世代くらいは行きそうな勢いだかな」

「既存の最新鋭兵器に加えて目下研究開発中の反物質エンジンに大規模重力制御装置、粒子ビーム砲に各種防御用バリア装置だったっけか？ 旧世界でも英仏印中露米とニュートン家が似たような兵器を保有していたが、こいつはそれすらも超える代物になるぞ」

「技術的にはとづくに実現可能なのに、余りにも高価過ぎて大量生産が出来ない事が確定している技術……。まさか生きているうちに純国産の物を拜めるなんて素晴らしいね。新世界様様だよ」

もちろんそれらも全部、日本国を内外から縛る鎖がほぼ全て解かれ、歴史的に類を見ない程の超好景気に加えてクイア王国とパールディア皇国に存在する大量の地下資源を日本がほぼ単独で独占できている状態が織り成す産物である。

「さて、話を戻しますが――」

会議は夜遅くまで続き、とりあえずは敵艦隊迎撃に全力で取り組む事が決定した。